

---

# Magius!

高郷 葱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Magius!

### 【コード】

N8581P

### 【作者名】

高郷 葱

### 【あらすじ】

その日、一人の少年が死ぬ… 筈だった。

殺された筈の少年、藤谷誠はひょんなことから『生徒会』にスカウトされる。

一般公募をしない、謎だらけな生徒会に幼馴染みの高槻楓と共に入ることとなった彼は知る。

生徒会の裏の姿、そして裏の生徒会が帯びる『役割』を……

螺旋を描く物語に今最後の歯車が、埋め込まれる

## # 1 1 (前書き)

はじめまして、初投稿の高郷葱たかさとおおいです。

『ネギ』ではないのでご注意ください…

この小説は自分が大学受験の年に現実逃避の為に書いていた物の書き直し版です。

データがロストしているので一から書き直しも同然ですが、完結目指して頑張りますのでよろしければお付き合ってください。

「危ない!？」

四月…それも聖奏学園高等部の入学式から一週間しかたっていないその日、俺は突然襲い掛かって来た謎の男から楓を庇って殺された。胸を突き破ったその『男』の指先が背中を割いた感覚は有った。

おそらく、即死。

楓は…無事だろうか……………

死んだ後って、どんなふうになっているんだろうか…

そんなことを『考えて』いたら物凄い衝撃が外から加えられて俺は強制的に『覚醒』させられたのだった

\* \* \*

恐る恐る目を開けてみたら、何のことはなく数十分前まで翌日の健康診断の準備を手伝わされていた保健室だった。

……………状況がよく分からない。

とりあえず確認しよう。

俺は藤谷誠<sup>つじやまじつ</sup>。つい一週間前にこの学校、私立聖奏学園の高等部に入学した一年生。

ついでに多数の背後騒霊持ち。

今いる場所はその聖奏学園高等部の保健室。

…確か、下校途中の路上で俺は胴体貫かれて死んだ筈じゃ？

再び思考の海にもぐりこみそうになった時、突如として視界のど真ん中に現れた医療用の鉄をなんとかかわして…始めて自分以外の誰かが保健室に居る事に気がついた。

「ふう。やっと起きた。」

なんだこの人。人を殺しかけておいて達成感満々な表情…あれ？俺って路上で死んでなかったっけ？

「さて、ここが何処で自分が誰か、判る？」

「…一応……」

自信はないが、その人の言いたいことは解る。

「よろしい。そんじゃ、気をつけて帰りなさいよ」

そう言って、声の主 女の人だった は保健室を出てゆこうとする

その声には少しだけ聞き覚えがあった。

確か、入学式の時の在校生代表の祝辞をやった、生徒会長の……  
…なんて名前だったけな…

ばたん

俺が思考を空回りさせている間に会長殿はいなくなり、その少し後に楓 幼馴染の高槻楓たかつかへてが血相を変えて飛び込んできてふと何かに気付き、妙に『何時も通り』を取り繕っていた。

とりあえず『さっさと帰れ』的な事を言われたのでさっさと楓を送って帰る事にする。

あの『殺人鬼（仮）』がまた出るかもしれないし、何が起こったのか聞きたいからな。

…けれども、楓の家まで送る間、気絶している（？）間に何があったのか尋ねてみたが楓は『な、何のことかな？』と知ってるのバレバレな態度ではぐらかしてきて何も言おうとしなかった。

\* \* \*

さて、状況を確認しよう。

俺は楓を家まで送り届け、自分の家に帰る途中だ。

その途中の一キロ弱の間に、犬を飼っている家はいくつかあるがその大抵は柴犬やゴールデンレトリバーのような中型犬が大人しい大型犬であって…

今現在、俺に襲いかかって来ている『地獄の番犬かよ』と突っ込みを入れたいくらいに真っ黒でドーベルマンを一回りでかくしたような犬(?)なんて居る筈無いのである。

「どーなってんだよ！ 一度殺される！ケルベロス(仮)には襲われる！背後霊は全員が存在感が増えて騒霊にクラスアップする！なんだ！？今日は厄日か！？」

とりあえず、全速力で逃げながらどうするべきかを考える。

「コマンド？」

たたかう

にげる

あきらめる」

…戦うなんてバカげた選択肢を選ぶ気はコレっぽっちもない事は確かだ。

あんなとと戦うなら命がダース単位で必要になる…というか、そもそもで不可能だし。

それにしても…まだそんなに遅くないのになんでこんなに人気が無いんだ？

住宅地のど真ん中だぞ!?

「ぐるぐる……」

「げっ！前から来やがった！」

後ろから追いかけてきた二匹に加えてさらに一匹が逃げる進行方向の闇からぬるり、と現れた。

アレの瞬発力の高さはさつきから追いかけて把握済み。横をすり抜けるのは難しい。

けれども、人間は急には止まれないもので俺はどうしてもそのケルベロス（仮）に突っ込んでいつてしまい

「うわっ!?!」

案の定、正面からケルベロス（仮）に突き倒されてしまう

こうなつたら俺に出来ることは蹴り上げることぐらいだが、生物共通の弱点『腹』をさらけ出している時点で『詰み』だ

ふと、明日の新聞がニュースが思い浮かんだ

『男子高校生、犬に襲われ死亡』

きつとグロすぎて細かい死に様はのらないだろうけど。

…「冗談じゃない。」

そう思ったなら自然と左手がケルベロス（仮）の顎の下に添えられていた

「!？」

自分でも何をやるうとしていないのかわからない。  
盾にするなら利き手じゃない右手を出すべきだ。

「ッ！」

目の前で掌から発生した銀色の閃光にケルベロス（仮）の頭が…いや上半身が呑み込まれる。

自分でも何がなんだかよくわからない。

『魔法』とでも思いこむ方が精神の健康的に良さそうなワケの解らない力。

けれども、これで形勢が逆転できる。

銀色の光は数秒間猛威をふるった後そのまま光の粒子となって散ってゆき、その閃光に呑まれていた部分が消し飛んだケルベロス（仮）の亡骸は塵となって散ってゆく。

新手の一匹が消えたことで逃げ道ができた。

けれども俺は逃げることよりも散々追いかけてまわしてくれた『犬ッ  
コロ』に逆襲しかえしすることに、決めた。

銀色の光が掌から発生した時の感覚は『なんとなく』だが覚えてる。勢いに任せて『犬ツコロ』の胴体に手を当てる。

掌から『何かを押し出すような感覚』と共に膨れ上がる銀色の閃光。悲鳴も断末魔もなく、三匹のケルベロス（仮）改め黒い犬ツコロは全て塵と消えて行った。

「これで終わりか？」

けれども、なんとなく違和感みたいのが今だにまとわりついてきている

がさり

すぐ横の生垣から音がして慌てて振り向いたらさっきまでのヤツより一回りは大きい、熊と言った方が納得できるようなサイズの狼みたいなのが飛び出してきた

「親玉かつ！」

跳びかかって来たソレをなんとか避けて背後から手を向ける。

触れてなくても、三十センチくらいなら問題はない筈…！

気合いとイメージを込めて左手から絞り出された銀色の閃光は熊モドキに直径十センチほどの風穴をどてっばらに開けていた。

けれども、それまでの『犬ツコロ』とは違い、今回の熊モドキは塵

になつたりしないで、逃げだしてゆく。

追いかけるべきなのだろうけど、足腰から力が抜けてその場にへたり込む。

その時になって、ようやく気がついた。

「…足音？」

少なくとも二人くらいが走る足音が無音の世界に響いてくる

「奴らはッ!？」

曲がり角から現れたのは白地に蒼いラインの入ったセーラー服に紺のタイというデザイン…聖奏の高等部女子が着用する制服を着た、シヨートカットの女の子だった。

物騒なことに抜き身の日本刀を片手に町中を走って来たらしい。

「……………」

俺の事は意識の外に置いていいのか、まったく気に掛けずに辺りをうかがう少女。

「おっかしーな。このあたりでハデな魔力反応が有ったんだけど…

……………」

そう呟いてからようやくと俺の事に意識が回ったらしい

「梨紗、状況は？」

後からもう一人、加わったのだがその声には聞き覚えが合った。

「えっと………<sup>ヤッ</sup>幻魔には逃げられました。かなりのダメージを受けてるのは確かです。で、この子……」

先に来ていた少女は後から来た人に報告をする

そうしたら後から来たセミロングの何処となく偉そうな感じのする少女：聖奏の高等部生徒会会長はあたりに視線をやってから俺の方に向き

「まったく、一日に二度も厄介事におなじ生徒が絡んでるなんてね…君、クラスと名前」

会長はそう言った。

「…男子部一年三組の藤谷です」

「一の三の藤谷ね。明日の昼休み、生徒会室に出頭すること。いいわね？」

「…？はい」

生徒会室に？

何のためだ？

「あと、このことは他言無用よ。まあ、信じてもらえるとは思えないけど」

「確かに、こんな夢物語みたいな事、直接体験したりしなければ俺だって信じないだろうさ。」

俺が首を縦に振ったら会長は俺から興味を失ったのかどこからかトランシーバーを引っ張り出してきた

「凜、結界の解除をお願い。啓作は凜と合流ポイントに。」

俺は訳が全く分からなくて

「あの…」

声をかけようとしたらその時にはもう会長や帯刀少女は姿を消していた。

住宅街には灯りが戻り人気も感じられる。

「…一体、なんだったんだ？」

俺は状況が全く分からないのを、『明日生徒会室で聞けばいいか。』と居り合いをつけて帰宅することにした。

なんせ、あの『化け物』との戦闘で随分と体力を消費したようでも、たたくたになっただけだから。

家に帰って、暇な時間に『何が起こっているのか』を考えてみたのだけれど、結局答えは出なかった。

そっぴゃ、明日は昼休みと放課後、生徒会室だったな

そんなことを考えつつ、気がついたら意識は夢の中だった。

…笑えないことに夢の中でもケルベロス（笑）に追いかけていられたが

# 1 2

あさ、おきたらへやになんかいた。

訂正。

朝、起きたら空中に中学生くらいの子が漂って寝ていた。  
ご丁寧にオレンジのパジャマを着ている、ポブカットで中々かわいらしい。

…が、問題はそこじゃなくてその漂う女の子(らしきもの)には見

覚えがある。

……俺の背後騷霊ズの一人だ。

遂に『実体』を持ちやがったのか？

……実体を持つ幽霊って、幽霊に分類出来るんだろうか…

とりあえず、俺は見なかったことにして学校に行く支度をし始める事にした。

俺は一人暮らししてるから、朝飯から弁当ほか家事一切は自分でやらなきゃならないから、やるべきことは少なくない。

ま、家事は得意だから問題はないんだけどな。

『…んにゃ  
』

……面倒だし気付かれる前の離脱を脳内会議で決定。

ガラガラガラ…かたっ

俺は少々慌てて部屋（畳間だ）から離脱し襖を閉じる

『んにゃー……おおっ！？実体に戻った！？これもしかしてマナちゃん完全復活！？いやっほーい あれ？なんか魔力の供給ラインが通ってる？ってことはあたし精霊じゃなくて使い魔化した？』

なんか物凄く陽気な声が部屋から聞こえてきて、頭が痛くなった。

「つか、事情を説明してくれ。背後騒霊が精霊とか使い魔とかって、そもそも『精霊』とか『使い魔』ってなんだよ……」

その少し後、着替えに戻らなきゃならない事に気付いた俺は諦めて部屋に突入した。

したら、『びくっ！』と擬音をわざわざ口で言ってくれた、霊の浮遊少女は俺の部屋のダンスを好き勝手に掘り返していた。

「……………えつと、きみが御主人<sup>マスター</sup>？」

俺は怒りでふるふると振るえる手を押さえつつ、その元幽霊の少女の襟首をつまんで部屋の外に放り出し、「ぎにゃっ!？」「さつさと着替える。」

壁に掛けてある聖奏の制服（一般的な学ランだ）に上着だけ残して着替え朝食と弁当を作るべく台所に向かう

「きゅー」

途中、廊下で目を回してる少女を見なかったことにして。

で、さつさと弁当とみそ汁を作りを終え、弁当の粗熱を取る間に朝食を

「いただきます」

「ずー

「ちよつとちよつとちよつとちよつと！あたしの扱い酷くない！？ネコみたいに『ばい』ってされたの初めてだよ！？」

丁度食べ始めた時、廊下で撃沈していた少女が『ぷんぷん』とか言いながら文句を言ってきた。  
投げ捨てた張本人が言うのも何だが、額と鼻の頭のところがちよつと赤くなってるから頭から床にダイブしたらしい。

「……………とりあえず、事情を説明してくれ。俺はごく普通の一般人なんだ。『精霊』とか『使い魔』とか言われても判らん」

「あるえ？まあ、あんだけ魔力ダダ漏れにしてるから変だなとか思いつつエネルギー補充にキミを使ってた訳だけど」

「おい」

「じゃ、自己紹介ね。あたし、元精霊でキミの魔力をちよるまかして完全ふツかーつを遂げた使い魔のマナリアミュネサリル。」

「あー、はいはい。マナね」

「物凄い省略！？でもなんかしっくりきた」

とりあえず俺は箸を休めずにその自称精霊で自称使い魔の自己紹介を聞くことにした。

「で、細かいところはあたしも知らんからどつかホン投げといて、実はあたしとキミの間に魔力の受け渡しをする回線ラインが出来てるんだよね。」

「…で？」

「つまり、あたしはキミから魔力を貰ってこの身体を維持してる訳。まあ精霊は精神エネルギーみたいなのを貰う訳なんだけど…とりあえず、そういう『主から魔力をもらって活動する』存在を使い魔って言うんだ」

「………とりあえず判ったことが一つ。」

「お前…説明、苦手だろ」

「……………うん」

頂垂れながら浮遊少女は肯定した。

「ごちそうさま。………とりあえず、お前が普通の人間じゃないって事は解った。なんかを持ってかれてるの感じるしな」

「はー、理解力の高いマスターでよかった。…あれ？マスター、何処行くの？」

さっさと流し台で軽くゆすいで使った茶碗やらを食器洗浄機に入れてスイッチを入れ、粗熱のとれた弁当を片手に部屋に戻ろうとした時に呼び止められた

「…学校だよ」

「ほう、学校。」

マナがオモチャを見つけたみたいに『ニヤリ』とした笑みを浮かべるので

「お前は留守番な。来たら面倒事が増える」  
とりあえず釘をさす。

そりゃもう、問答無用の情け容赦無しで。

「お前じゃなくてマナ！来ちゃダメってなんでよ！」

「…お前はうちの学校の生徒じゃないだろ？部外者は入れないの」

「だからお前じゃなくてマナって呼んで！大丈夫だよ。見えないようにになれるし」

そう言っただけで目の前から消えるマナ

一応、本当に見えないようになれるらしい。

この分だと、延々と続きそうな気がした。

遅刻は勘弁してほしいので妥協点に落ち着ける

「………わかったよ。ついてくる分には構わないがうるさくするなよ。  
あと騒ぎを起こすな」

「はい」

元気に返事だけが聞こえてきた。

…これ、マジモンの怪奇現象じゃないか？

とか思いつつ俺は部屋に戻って上着と鞆を拾い、学校に向かう事にした。

頭上で『へー』とか『ほー』とか『わきゃー』と言いながらなマナを放置して

\* \* \*

昼休み、俺は中央棟にある生徒会室に向かっていた。

うちの学校、聖奏学園はなんとも不思議な構造をしている。

まず、男子と女子が別だ。『女子高と男子高を無理矢理くっつけた構造をしている』と言えば判り易いだろうか。

そして、男子と女子で校舎が別になっていて、女子が本校舎、男子がボロい急造校舎。どっちも四階建てで下半分が中等部、上半分が高等部になっている。

その間に共用施設（職員室とか保健室、講堂、部室、図書室など）が入った中央棟があり一階と三階でそれぞれの校舎に繋がる渡り廊下がある。

おそらく、上空から見れば歪だが中央に箱の入った『H』字に見えるように校舎が配置されている筈だ。

ちなみに南側が正門とエントランス、北側には校庭があり、プールは存在しない。（そのせいで何人もの同級生が血涙を流してた）

ちなみに、生徒会室も中央棟最上階の六階に入っていて、そのフロアは用が無い限り（基本的に生徒会による呼び出しが無い限り）立ち入らないという暗黙の了解がある。

中央棟の屋上は基本的に立ち入り禁止だから用もないのに最上階に行くなんて事もないんだけど。

三階から六階まで階段を上り（エレベーターは運悪く下に行ってしまった）六階フロアに足を踏み入れた時、マナが不可視化を強制的に解除された。

「あれ？」

来る道すがら、マナからは『精霊』についての講釈を受けた。

言う事をうのみにすれば、精霊とは『意思を持つエネルギー』らしい。

その体は高密度のエネルギーの塊で、ちょっと薄くしてやれば人間の目には映らない。これが不可視化のからくりらしい。

実際、マナは精霊ではないが元は精霊なので大体一緒と考えていいらしい。

…それを考えると、この校舎の六階には『強制的にエネルギーを凝縮させる何か』が仕掛けてある事になる。

てか、一介の私立高校にそんなことする必要があるのか？

「……………あれ？」

そして俺からはどんどんと『何か』が吸い上げられてゆく。

なんでだ？

がつくり、と膝をつく

「あれ？マスター、かなり死にそうな顔してるけどだいじょーぶ？」

「……………大丈夫に見えたらお前の目は異常だよ」

「あ、そんだけ減らず口叩けるなら大丈夫だねー」

「……………んな訳あるか……………」

だんだんと酷くなる倦怠感。

なんとか背後を見ようとしたら背後騒霊ズがみんなしてうつすら実体化し始めていた。

ちーん

エレベータの到着音

「さてさて、例のヤツはどんなヤツ…って、おいおい」

男子部の先輩がエレベーターから出てきたところで驚いた

まあ、俺だってエレベーター降りてすぐに誰かうすぐまっつてれば驚

くと思う。

「お前、その背中のはどうしたんだ？」

「……………昔つから背後霊みたいのがいっぱい居たんですけどね、この階に入ったら皆して実体化する為に俺からいろんなもん引き上げてるみたいで」

「…ひい、ふう、みい……………随分と沢山いるな…とりあえず会長に連絡だな。もうちょい耐えとけ」

ずるずる、と見えない何かに引き摺られて生徒会室に放り込まれ、突然吸い上げが止まりなんとか死にかけの状況から復活することが出来た。

『ちっ…』

おい、そこの背後騒霊ズ、舌打ちスナ。

「いやー、まいったねー。確かあたしが十三柱目で現在最古参だから…何十柱いるんだろ…」

「いや、それ確実に干上がるから。」

マナの発言がすつごく不穏だ。

それって俺の知らない間に十二人も精霊が俺からいろんなモノ吸い上げて復活したってことでしょ？

「マスターの魔力は『透明』だから精霊も『自分を変える』事無くいけるんだよ。まあ、あたしは大分弱ってたから根本からマスター

の魔力で構成されたも同然だけど」

だから使い魔化しちゃったんだよー と朗らかに笑いながら言うマナ。

笑顔は可愛いのは認めるけど、かなり困る。

ガラッ

「あら、もう来てたの。まあ、いいわ。事情聴取させてもらっわよ。啓作、調書速記よろしくね」

大分復活してきたところで、生徒会長が現れた。

「ういっす。ワードでいいですよね」

「読めれば問題ないわ」

「了解」

「それじゃ、こっち座って。…正直に話してもらっわよ」

一瞬、会長の目が赤くなったような気がした。

『全てを包み隠さず喋る』と言われていたような気分になる…まあ嘘についても仕方ないしな。

こくり、と頷き、『啓作』という名前らしい男の先輩がワードの準備を終えたところで俺に対する事情聴取が始まった。

かくかくしかじか…で済ませてもらうが15分ほどの事情聴取が  
終わり、

「…つまり、『アレ』に深手を負わせたのは君ってことね。」

「…そうなるみたいです」

はあ…と湿気た溜め息をついた会長は

「啓作、喜びなさい。後輩、一人確保よ」

なんて事をおっしゃった

「珍しいこともあるもんですね。会長がスカウトだなんて。」

「幻魔の分体を一匹、完全消滅させかけた新人生を逃がす訳にはい  
かないでしょ。どちらにしろ『こちら側』に関わらざるを得ないん  
だから」

「それもそうっすね」

俺の意思は関係なく、俺の生徒会入りは決定されている。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！何の説明もなしに生徒会に入  
れだなんて…」

「『生徒会役員』以外に教える訳にはいかないからね。説明イコ」

ル拘束なのよ」

そう言われて俺は黙る。

むしろ、俺を襲った一連の出来事についての説明を受けるためにはこの『裏のある生徒会』に入る必要がある。

「それとも、今回の事は一切忘れた事にして、なんにも知らずに巻き込まれ続ける？」

そこまで言われて、俺には首を縦に振る以外の選択肢が残されていないことを悟り役員になることを承諾した（実際は強制だが）

「それじゃ、放課後にもう一度来てもらうわよ。色々やらなきゃならないことが有るからね」

「了解しました、会長」

昼休みの要件が済んだので教室に戻ろうと廊下に出た瞬間、一気に奪力されその場に倒れる俺。

「「「あ「「「」

会長と先輩とマナの声が被る。

「そーいや、すっかり忘れてたな。」

と、能天気な声が聞こえる。

「マスター、生きてるー？」

「ホント、常識外れね」

とか言いながら誰も助けしてくれないので、魔力を殆ど搾り取られ、何柱もの精霊が復活を遂げ、絞り粕となった俺は起き上がることができず、保健室に放り込まれた。

\* \* \*

魔力が多少回復し、起き上がれるようになった丁度その時、終業のチャイムが学校に鳴り響いた。

午後は完全にサボってしまった形になる。

……………実際、動けなかったんだから仕方ないんだが  
がらっ

「とーや、大丈夫?」

やや慌て気味なちよつとたれ目のショートカット少女 幼馴染の楓  
が現れた。

どうやら、俺が午後の授業に参加していない事を知って保健室に様子  
子を見に来たらしい。

とりあえず、大丈夫であることを伝えたら、二度ほど確認の為に詰め  
め寄ったのち、盛大に安堵のため息をついていた。

「それじゃあ、帰ろ」

「あ、悪い。生徒会長に呼びだされてんだ。そっちに行かなきゃならんから先に」

がらっ

「おーい、藤谷。鞆持ってきてやったぞ」

そこにタイミング悪くクラスメイトが現れた

度々ではあるが聖奏学園は男子部と女子部が分かれており、男子と女子が接点を持つことはあまりない。それ故に

「畜生！リア充め、爆発しろ！」

と、クラスメイトは俺の鞆を投げ捨て泣きながら戻って行った

「…なんなの？」

「まあ、僻みと誤解のコラボレーションによる精神ダメージってところか…」

とりあえず失速して床に落ちていた鞆を拾い上げ俺は生徒会室に向かう

・

・ ・ ・

「…なんで楓もついてくるんだ？」

「いいじゃないの。一遍倒れてるんだから、誰か一緒の方がいいでしょ」

あーじゃない、こーじゃない、と言い合っているうちに六階フロアまであと一歩というところに来てしまっていた。

昼休みの悪夢再びか

そんな思いがあって最後の一步を拒む俺の脚

「何やってんの？」

そう言いながら楓が六階フロアに足を踏み入れた時

「えっ!？」

「!？」

楓の左目の瞳が紅くなっていた。

その眼は…と問いかけようかと思った瞬間

「類は友を呼ぶと言うけれど、今年はなかなか幸先のいいスタートね」

背後に生徒会長がいた。

当然、楓の紅い瞳も見られている

「二人とも、生徒会室にいらっしやい。ああ、精霊の強制実体化は一時的に停止フリーズさせているから大丈夫よ」

そう言われて恐る恐る六階フロアに足を踏み入れる。

けれどもマナは実体化しないし、背後騒霊共の実体化も始まらない。

俺と楓は黙って会長について生徒会室に入った。

その時点で昼休みにいた男の先輩の他に、昨日の抜刀少女や比較的似通った顔つきの少女、あと元気澁刺そうなお団子娘にちっちゃい女の子という中々にバラエティーに富んだ面子がいた。

「みんな、揃ってるようね。簡単に自己紹介して、そのあと状況確認をするわよ」

「会長はトリでいいですよね」

「順番は任せるわ。」

「それじゃ啓作から時計回りで。」  
「と昨日の抜刀少女がその場を仕切る

「俺から?」

「文句ある？」

「いんや。了解了解、副会長殿。二年の氷室啓作だ。生徒会では会計を担当している」

少々投げやりに承諾した昼休みの男先輩はそういった。会計の氷室先輩が…

「で、あたしは副会長の霧島梨紗。同じく二年。」

「私は、生徒会役員じゃなくて化学部なんだけど、部長の霧島紗枝。やっぱり二年生よ。」

と抜刀少女とその隣の瓜二つ。どうやら双子みたいだ。

「渉外兼書記、二年の矢吹凜よ」

その次がお団子娘で最後は…

「元渉外で今は渉内の夏元ひかり。私と奈緒ちゃんは三年生。」  
一番小さくて幼い顔つきの人が最高学年だった

…「奈緒ちゃん」？

それって…もしかして…会長の名前？

「それじゃあ、私が最後ね。生徒会長、三年の佐伯奈緒。」

それにしてもギャップの激しい二人組がトップ層とは…

「さ、次はお前らの番だぞ」

そう言われて俺は少々ごもりながら

「一年の藤谷誠です」

「高槻楓です。とーや…じゃなかった。藤谷君とは幼馴染です」

楓は割とはきはきと自己紹介（と言っても名乗るだけ）を済ませます。

「以上二人が今日付けで生徒会役員に成ることになったわ。」

会長はそう言いながら俺と楓に徽章ケースを渡してきた。

「それを持っていれば六階の強制陣をスルーできるわ。携帯しときなさい。」

そう言われて俺と楓はいそいそと生徒手帳の表紙にその生徒会役員章を取りつける。

「それじゃあ、生徒会の裏側を教えてあげるわ。当然、もう逃がさないわよ」

そう言つて会長は俺と楓を連れて生徒会室の二つ隣にある生徒会資料室に足を踏み入れ、そこで『生徒会の裏の姿』についての説明を聞くことになった。

\* \* \*

唐突だが、我らが学校、聖奏学園の生徒会は睦斗市内のいくつかの学校と互助交流振興会…『他校とも交流を深めよう』という趣旨の『生徒会連合』という集まりに参加している。

この生徒会連合が主催になって学校対抗の体育祭が行われたり、他

校の文化祭の情報 came たりと学校間の交流が行われてきた。

そして学校同士で互いに助け合う事もあったので『互助会』と思っていたのだが、裏のある生徒会が加盟しているだけあってそっちの大本にも裏があった。

『睦斗学生術師連合』。

その発生は中々に歴史があり、一ページめが刻まれたのは今からおよそ60年前：

ちょうど大東亜戦争によつて流れた血がきっかけとなり地脈の変動が起こった結果それまでは何のことはない一地方都市だった睦斗市に地脈の集約点ができてしまった。

地脈というのは大地のエネルギーの流れみたいなもので、霊的・魔術的な力に変換し易い。

それを求めて魔術師や精霊が集まり今の睦斗市が出来上がったのだが、問題も発生した。

集約のしすぎで『異界からの侵入者』が容易に入り込めるようになってしまったのである。

この侵入者が『幻魔<sup>デモン</sup>』と呼ばれる異形の怪物（時々人型とかも）だ。

魔術師たちは基本的に自分に害が与えられない限り動かない。

それを見た魔術師の子供たちが独自に作り上げ、経験不足や練度不足を数で補う、対幻魔組織が生徒会連合の祖と言える。

で、今もこうやって廃業した魔術師から継がれた魔力持ちをスカウトし、精霊に協力を仰ぎ、異能の生徒を能力開発して、とあの手こ

の手で戦力を整え、活動を続けているらしい。

「さて、次は能力開発ね。高槻さんは遺伝系の先天性能力だから大丈夫だろうけど、藤谷君はつい昨日魔力が覚醒したド素人だから…」  
そういった会長は俺に『掌に魔力の球を作り出した状態で座禅』というなんとも禅宗の修行じみた命令をだしてきた。

昨日、楽に放出は出来たからそれをとどめるだけ…と思いきやその『球体にして留める』という部分がなかなか難しい。  
留めているように見せかけようと魔力をどンドン流して消耗する分を補うとうまく球体にならない。

ちなみに空気中に放出された魔力は背後騒霊がせつせとかき集めて自身の復活に使おうとしている。

で、手の方に注意が行き過ぎると座禅が崩れそうになる。

「なかなか苦戦してるわね」

「まあ、魔力球を消さずに同じ大きさに保てるだけ魔力を流し続けるってのもかなり無茶な真似ですけど」

そんな外野の声を無視して俺は『昨日どうやって放出する方法を知ったのか』を思い出してみた。

……ダメだ。完全に『成り行き』とか『偶然』のレベルだ。

それから四苦八苦しなから俺はなんとか球体状（ただし大分いびつ）に抑え込み、なめらかな球体にできるように家などで練習するよう言いつけられた。

\* \* \*

「なんか、大変なことになっちゃったね」

「そうだな。」

「それにしても、とーやの魔力、綺麗だったよ。透き通った銀色で」

「でしょー。マスターの魔力は純粹で混じりつけがないから精霊も大喜びなんだよ」

突如として現れた第三の声に俺たちが振り向くとなぜか制服っぽい服装のManaが実体化していた。

精霊は衣服とかは自分の一部を変化させているようなもんだから簡単に着替えられるとか言ってたけど…

突然の出現に楓は目を丸くさせている

「あ、えっと…あたし、Mana。元精霊の使い魔だよ」

にっこり、と笑いかけるManaにつられて楓も口元にやや笑みが浮かんでくる。

「高槻楓です。とーやとは幼馴染の」

「うん。知ってる。あたしはマスターが大体十歳くらいの頃から『そこ』にいたから」

『そこ』と言って俺の斜め上を指さすマナ。

…六年前から憑いてたのか、こいつは。

「マナ、とりあえずその『マスター』ってのは止めてくれ。人に聞かれたら何誤解されるか解らん」

「ん、りょーかい。とーや」

個人的には出来れば人前で実体化して欲しくないのが正直なところなんだけど

まあ、そこらへんは家に帰ってから相談するとしよう。

「あ、着いちゃった。それじゃ、また明日ね」

「おう」

「ばいばーい」

楓と別れ、適当に人がいなくなった瞬間を見計らってマナは再び不可視化し俺は一人で歩き始める。

大分軽くなってきた肩。

今日の修業で大分無駄に放出した魔力が最後の一押しになって少なくとも三柱ほどは野に帰った筈だ。

この精霊たちが全て復活を遂げて立ち去って行ったら俺はどう思うだろうか。

小さい頃からずっと居た『消えかけの存在』達の事を…

『今居るのが全部居なくなるころには次のが来てると思うよ』

俺の思考にマナが反応を返してきた。

…

「それも、そうだな」

小声で呟きポケットに手を入れて鍵を出す。

我が家に到着だ。

「ああ、マナ。」

「ん、なに？」

「姿って変えられるか？」

「できるよー」

「だったら、猫か何かなら外出る時に実体化しててもかまわないぞ」

「ん。」

その日から我が家に黒ネコが一匹追加された。

「藤谷、資料室から去年の会計資料持ってきてくれ。」  
「了解」

それから数日、俺はごく普通に生徒会の仕事をしていた。

何の事はない。

役職も振られていない俺は先輩の雑用として資料室へ行ったり来たり、図書室へ行ったり来たり、事務室に行ったり来たり…あとはお茶汲みといった仕事を割り振られている。

あとはそのうちに渉外の仕事を任される予定。

そんな感じだ。

俺は足早に生徒会資料保管室に取りに行き氷室先輩に届け、そろそろ会長が来る頃だろうからとポットの湯を補充すべく給湯室でお湯を沸かしに行く。

書類仕事とかはまだ回ってこないからそういった事くらいしか本当にやる事が無い。

こぼこぼこぼ…

「とーや、役員に招集掛けて。三十分後に会議開くわよ」

丁度沸いた湯をポットに移している時に会長が現れて招集をかける

よつに言ってきた。

「了解。今すぐ」

ばたん、とポットのふたを閉じ薬缶は給湯室に戻す。

で、そうしたら生徒会室に備えられているパソコンから生徒会役員宛の一斉送信で招集が掛った旨をメールで連絡する。

今居ないのは…楓と夏元先輩と霧島先輩に矢吹先輩か。

手早く連絡メールを送って俺は会議に必要なものを会長から聞いて準備を始める事にした。

\* \* \*

会議が始まったのはきっかり三十分後だった。ちゃんと全員が揃って会議が始まる。

「さて、と。新入役員の二人は大分『表』には慣れたみたいね」

「はい」

「なんとか」

俺は返事する傍らでおそらく『裏』に関することだろうと少し覚悟を決める。

「先週、藤谷君に痛手を負わされた個体の潜伏場所が判明したわ。強襲してヤツを潰すわよ。」

初めての『裏』の仕事。

「前線メンバーは藤谷君、梨紗。後衛に高槻さん。サポートとして凜、移動手段として啓作。いざという時の備えにひかりと私。…念の為のフルメンバーよ。」

「ごくり、と息をのむ。」

「なんせ、一度俺はその相手に殺された筈なのだから。」

「…それでも、今回は俺にも魔術がある。」

「無抵抗に殺された前回とは訳が違う。」

「行動開始は十七時。それまでに各自準備をしておいて」

「『了解』『了解』『了解』」

「行動開始時間まで残り時間は三十分余り…俺は特に準備と言っても何が必要なのか判らないのでとりあえず座禅を組んで気持ちを落ち着かせることにした。」

「\* \* \*」

「三十分後、氷室先輩の契約精霊である四脚獣型精霊のコンの背中に乗った俺達は再開発が決まった古い団地の屋上に降り立っていた。地上八階…七階建ての建物の屋上で、突入の瞬間を待つ。」

「凜」

「了解。『封』」

「屋上の丁度中央に立った矢吹先輩が呟くとちょうど団地一棟を覆う」

ように壁…封印結界が展開される。

「それでは…突入」

会長の『突入』の声に合わせて俺と霧島先輩が階段を駆け下り、その後ろを楓がついてくる。

最上階のフロアに足を踏み入れた瞬間、目前には黒い大型犬の姿

「いつけええ！」

俺と霧島先輩の隙間を通って焰弾が飛び目前に現れた哀れな獣を灼き払う

「コンのおッ！」

俺も掌に魔力を収束させ、『壁から刀を創った』霧島先輩と一緒に先手を取られて混乱する獣の群れを蹂躪する。

逃げる間も与えず、逃げる場所もない。

そんな状況で僅か一分足らずで目前に居た十数匹の大型犬モドキは黒い泥状のなにかに姿を変えた。

…といつても、俺の場合は純粹な魔力をぶつけて対消滅させてるから跡形も残らないが。

「行くわよ」

霧島先輩が全滅の確認と同時に走り出し俺達も後に続く。

「二人とも、中々頑張るじゃない」

「俺の場合は二度目ですから」

「あ、あはは。一応力の制御は覚えてから学校に入りましたから」

霧島先輩のほめ言葉に苦笑で返す俺たち。

そのまま階段を駆け降り、角を曲がろうとした瞬間

「キャウン!？」

突如の犬の悲鳴。

「はー、危機一髪ってヤツ?」

霧島先輩の傍らで実体化したマナが俺の魔力を使って壁を展開していた。

どうやらそれで曲がろうとした瞬間を狙ってきた個体を振り返りにしたらしい。

「むっ、この子デキるわね」

「えへへ」

ニヤリ、と笑う霧島先輩と能天気にはー、と笑うマナ

「何やってんですか、先輩。マナはもうチヨイ緊張感とTPOを気にしてくれ」

俺と楓は先輩とマナを追い越しつつフロアの黒犬を掃討しつつ居場所を探す。

具体的には一室一室、ドアを開けて確かめてゆく。

そしてそのフロアの一番端の部屋の前に来た時、血の匂いが部屋の中からじみ出てきていた。

「ここね。中はかなり酷い事になってると思うけど、覚悟はいい？」

黙って俺達は頷く。

これだけの『血の匂い』を前にしたら広がっているであろう惨状は見るまでもなく目に浮かぶ。

「さん、に、いち…突入！」

霧島先輩の声に合わせて俺が先頭でドアを開け、その直後に楓が焰弾を、俺も球形に整形した魔力を撃ち込む。

『キヤウツ!?!?』

『ギヤツ』

悲鳴、断末魔、呪詛…そう言ったモノが部屋からあふれてくる。

それでも肉の焦げる匂いはしてこないのだからなんとも不思議な気持ちになる。

「これで、終わった？」

楓がちよつとオドオドしながら爆炎がまだ残る方へと足を踏み入れようとして…

「ッ！楓、まだだ！」

慌てて振り返る楓に向かって伸びる黒い腕が突如生えてきた銀色の壁にめり込んで楓に届かずに止まる。

「！」

慌てて手の伸びてきた方向に焰弾を撃ち込む楓。

けれども黒い腕だけが千切れてその場に残り本体は窓から外に逃げて上に上がってゆく。

「上に逃げた！追いましょう」

屋上には会長や氷室先輩ほかの支援組が居る。  
急いで戻らないと…

けれども

「あー、まあ大丈夫だと思うよ。むしろコレで解決？」

そんなふうにする霧島先輩。

「とりあえず、被害の確認。一応ね」

そう言われて俺と楓は部屋の周囲に転がっていた何かの欠片を調べ

る作業に入る事になった。

作業開始からほどなく、上の方から聞き覚えの無い声による断末魔らしき叫びが聞こえてきた。

\* \* \*

五分後：

大体の後始末が終わった俺達が屋上待機組と合流したとき、突入した時と『殆ど』変っていなかった。

唯一代わっているのは丁度屋上のド真ん中に黒い影みたいのが釘付けにされていることだろうか。

そう、さっき取り逃がしたハズの相手がそこに縫い付けられていたのだ。

「お疲れ様。まあ、初出撃としては上々よ」

そう言いながら何か紋を描く会長。

「ギャッ！」

その瞬間、縫い付けられていた影が発火。みるみるうちに焼き払われて消えた。

「これで大物は出現を阻止できたから…ッ！」

会長のセリフに違和感を覚えつつも突然変わった『雰囲気』に反応してその場にいる全員が身構える。

「啓作！」

「了解！ひかり先輩、矢吹。」

「ええ」

「判ってる」

氷室先輩と夏元先輩、それに矢吹先輩の三人が素早くコンの背中に乗って距離を取る

三人の離脱と同時

「来るよ！」

マナの声と同時に屋上の地面が砕けて下の階からぶち抜きで『鬼』が出てきた。

どちらかと言えば西洋系の外見をした『ソレ』は

「大きい!?!」

「ざつと三メートル…手強いわよ」

佐伯会長は紋を宙に書き、霧島先輩は先ほど活躍した刀でもって唸喊してゆく。

さっきはこれでケリがついたけれど…

今度は佐伯会長の『発火』の紋は意味を為さず、霧島先輩の刀は中程からパキンという小気味のいい音と共に折れてしまった。

おそらく、楓の炎でもダメだと思う…となると

「でかくったって、基本は変わらない筈だっ！」

左手に体中から魔力を集中させる

「とーや!？」

「特攻!？」

驚きの声をあげる霧島先輩と楓

けれども

「決めてみせなさい。期待のルーキー君」  
まるで成功を確信したかのような会長の声

そんな声に背中を押されて俺は下半身が床下の鬼の胸板に左手を当て

「吹っ飛ばえッ！」

集めに集めた魔力を全部叩きつける

放出された俺の魔力は刀の切っ先を形作り鬼の胴体を貫き通す。

銀色の燐光を放ちながら、魔力で編まれた刀身が鬼の体を徐々に侵して、『消滅して』ゆく。

そして…刀身という形に押し込まれていた魔力が一拳に閃光となつて鬼を呑みこんでゆく…

「…ッ！だぁー」

どずん、とでも音がたちそうなくらい勢いよく俺はその場に座り込む。

鬼を消しとばす為に全力を注いだ結果、軽い魔力不足で貧血に近い症状が出ているだけだが。

「「とーやーッ！」「」

猛然と襲　　駆け寄つて来た楓とマナ。

座り込んだ俺を危うく轢きそうになりつつもなんとか急停止に成功して俺の肩を左右からそれぞれ片方ずつ掴んでくる。

「大丈夫!?!」

「んー、魔力切れ以外にダメージは…なさそうだね」

心配してくれるのは有り難いけど、今、両肩が物凄く痛い。

そして、視界の端で俺が鬼を消し飛ばすのに余分につき込んだ魔力

をかき集めて復活を遂げた精霊が飛んでいくのがふと視えた。

……あとなんにん(?) やしなえばいいんだろ

「やるじゃないの。大型の幻魔を初陣で討滅。大金星ね」

「これからは多少楽になりそうですね」

そんな俺達の様子をほほえましいと言わんばかりに暖かい視線で見守る会長他生徒会の面々。

矢吹先輩が結界を解除した時点で大穴があいている筈の屋上がなんの破損もない事を確認した後、俺達は生徒会室に戻って討滅した幻魔についての報告書作りをすることになったんだけど……

「それじゃ、折角だから最後までやってみなさい」

との会長のお言葉により俺がそれまでの資料を片手に一人でやることとなった。

……魔力を放出しまくって、かなり疲れてるんだけどなー

とりあえず、待っててくれるけど手伝う気は全くない楓とマナに小言を言われながら初めての仕事を終えた俺はその晩家事をする気力を失っていた。

まあ、やらねば夕飯抜きになるだけなので結局やらねばならないの  
だが…

## # 1 4 (後書き)

これにて第一話終了です。

だいたい3000文字〜4000文字程度になるように分けたのですが…

『一括の方がいい』というご意見ができれば一括して一話分丸々を投稿するようにしようと思います。

## #2 1 (前書き)

第二話です。

第一話を読んで判つてると思いますが、**戦闘描写**が苦手です…

生徒会裏の初仕事から一週間後

「とーや、そっちに行つたよ!」

「了解だ」

俺と楓は睦斗市立第六高校の生徒と共に人気のない市街を駆けまわっていた。

「だりやアアっ!」

魔力を収束させグローブ状にして殴り掛かり、魔力で覆われた拳に当たった場所を消し飛ばす。

前の時は剣状に収束できたけど、アレ以来うまく行ったことはなくホントに火事場の馬鹿力的なものでしかなかった。

今、俺たちが相手をしているのは幻魔デモンと呼ばれる異形の化け物(の大量生産版)だった。

∴世界をゆがませる原因となる異世界起源のモノを全て『幻魔デモン』と総称してしまうから、色々語弊は出る。

とりあえず、前回相手をしたような手強さはないが数の多さが中々に厄介なヤツらだ。

そのため第六高校の魔術師の張った結界の中には何十もの小型(体長1m位)の中途半端な人型の一つ目小鬼 通称『ゴブリン』が点

在していてそれと各所で戦闘を繰り広げられていた。

聖奏学園に寄せられた増援要請に応え、俺と楓が戦闘経験を積むべく派遣されてこうして戦っているのだ。

…といつても、攻撃範囲の関係で楓がまとめて焼き払い俺が残ったのを始末する。という構図が出来て居る訳だが。

「にゃーっはっはっは。くらえい！」

マナもマナで猫娘よろしく人型のままツメを伸ばしてばっさばっさと切り刻む。

この前から普段はネコの姿になってもらっているので大分ネコ化してきているようだ。

マナが受けたダメージは俺の魔力を消費することで瞬時に回復しノーダメージになっているが正直ムダにダメージを受けるのは止めて欲しい。

ああ、俺の魔力が（無駄に）消費されてゆく。

とりあえず、マナによる無駄遣いが戦闘に響かないことを祈りつつ、最後の一匹を殴り倒す。

無言で消えてゆくゴブリンを見届けつつ周囲を警戒。足音や気配が味方のもの以外がないことを確認する。

「…これでこのあたりは終わりか？」

ピロロロ……

「はい、高槻です。あ、吉川会長。」

不意に楓の携帯電話が鳴る。

相手は睦斗六高の生徒会長のようだ。

「はい。了解しました。とーや、隣の区画が苦戦してるみたい。」

「救援だな。行くぞ、マナ」

「りょーかい」

猫に戻ったマナを肩に乗せ、俺と楓は指定のあった隣の区画へと向かって走り出した。

\* \* \*

救援要請を送って来た区画は住宅地の真ん中にある路地の多い商店街だった。

比較的開けていたがその分数が多く、他地区からの合流が出来ずに苦戦させられていた。

そんな地区に三人で斬り込んでも効果は無さそうだが…

「楓、一気に行くぞ」

「了解」

盾にもなれる前衛のマナ、広域殲滅が可能な楓、一撃必殺が可能な俺という編成はザコ・大物関係なく叩きのめすことが可能になる。今回は楓の広域殲滅が威力を発揮したというわけだ。

なによりも、『群れの一部が崩れた』という事実だけでも十分に味方を勢いづかせることができる。

「セーの！」

楓の合図で雨あられと撃ちこんだ魔力球と焰弾は次々とゴブリンを焼き払い、消しとばし市街中央部への突入。

途中で出くわした小規模な群れにも同様の掃射を浴びせかけ吹き飛ばしてゆく。

このままなら俺たちだけで中央区画の制圧もできるんじゃないか…？

『きゃあああつ！』

そんなことを考えていたら悲鳴が聞こえてきた。

「悲鳴！」

俺たちと同じことを考えたのか、それとも雑魚掃討中に誤って敵陣奥深くまで踏み込んでしまったのか、味方が敵の中央部にいた。

先輩方から『幻魔関係の起こったことはその幻魔が消えればなかったことになる』と言われているが、精霊の消滅や魔術師の死亡はな

かったことにできないし、原因消滅による修正は『世界』に影響を与えるらしいので被害は最小限に抑えるにこしたことはない。

三人（正確には二人＋）で悲鳴の元に駆けつける。

現場は戦闘区域中心部を通るアーケード状になった商店街だった。

そこでは一人の女子と一柱の精霊が背後におそらく同じ部隊である仲間が倒れており逃げるわけにもいかないが正面切って戦うには辛いじゃ済まない…という状況に置かれていた。

精霊のほうが主人である少女の前に立ちはだかり盾になっていたが、かなりの消耗具合だ。

「そこの二人！伏せろ！」

俺が叫ぶとその二人（正しくは一人と一柱）は伏せて防御態勢を取る。

「マナちゃん！」

「はい。いつくよー、かえちゃん」

マナが楓を上に向けて上げ、空中から焰弾の雨。

不意を突くうえに意表を突く攻撃方法にもとよりそれほど知性のある幻魔ではないゴブリンは慌てふためくだけで次々と灼かれてゆく。

「あ、とーや。キャッチよろしく」

討ち洩らしを始末しに飛び出すマナがすれ違い際にそう言ってきた。上を見上げれば楓は着地する気皆無な様子で背中から落下してくる。

「ったく」

俺は落下するであろう場所で両腕で受け止める準備をする。

受け止め損ねるか、下手な受け止め方をすれば大怪我だが……

「つとー！」

全身を使って落下の衝撃を和らげ楓を受け止める。

「ナイスキャッチ」

楓はそう言いつつ俺の腕の上で所謂『お姫様だっこ』状態のまま焰弾を撃つ

それもゴルフボール以下の小ささの焰弾をマシンガンよろしく連射だ。

火力は言うまでもなく。

マナによってある程度密集させられていたゴブリンは次々と撃ち抜かれ消滅していった。

「ふっ」

最後の一匹の消滅を確認したところで俺は（残念そうな表情をする）楓を降ろし探査の術式を起動させる。

会長に貰った『術式の書いてある短冊』に魔力を流すだけだが、これによって狩り残しや新たに出現しないかが確認できる。

「っ！」

ちょうど結界の中心である俺たちのいる場所から『巨大な何か』が出現してくるのを探知した。

「楓！マナ！デカいのが来る！」

『デカいの』というのは何もサイズの事ではない。大抵の幻魔は保有魔力量が強さに比例している。つまり、魔力量の多い幻魔ほど強いという事だ。

地面にできた暗い影のような穴から湧いて出てきたのは身長こそ一般的な大柄な男程度だったが、翼と鎌爪を持つワシ頭だった。

「来るぞ！」

翼を広げ空に飛び上がったワシ男は鋭いかぎづめを武器に俺たちに向かって急降下してきた。

高度的には俺ではなく楓とマナ、あとは生き残りの少女が狙われているのだろう。

「くそっ！」

俺は過剰なまでの魔力を放出して少しでも広く厚く魔力を展開する。イメージは壁だ。

びきっ！

硝子が割れるような音を立てて俺の障壁とワシ男が衝突した。

俺の防壁は貫通直前まで抜かれたが、相手も貫通までは至らずに鉤爪を壁にめり込ませている。初めて成功させたわりにはいい出来だと個人的には思う。

「っしやあ！」

飛べない鳥はただの獲物だ。

防御の為に展開していた壁の制御を手放すと半分めりこんだワシ男と対消滅を始める。

おそらく、この一体を倒せば今回はネタ切れになるだろうし、最悪の場合でも他の地区に展開している第六高校の面々が集結して対応してくれる筈だ。

ぶちっ

嫌な音を立ててワシ男は俺の魔力に吞まれかけていた腕と片翼を引き千切って強引に脱出を果たす。

「逃がさないよ！」

「援護、ヨロシクね」

楓をマナが前に出て追撃をかける。

さらに近づいてくる沢山の足音。  
おそらく、他地区から集結しつつある第六高校の面々だろう。

両腕と片翼を失って機動力と攻撃力を大幅に殺がれているワシ男は  
マナと楓相手に苦戦している。

すぐそこまで足音が来ているから、すぐに…

そう思ったら、路地で何かが光った様に見える

「楓！マナ！」

丁度、その光った位置がワシ男をはさんで真正面だったので俺は二人の前、ワシ男の目前に飛び込んで最大出力で防壁を張った。

さっきの防壁展開で大分魔力を使ってしまったているが、なんとか絞り出す。

流石、二度目。さっきよりは安定している。

楓とマナの前に出た俺の目前に銀色に輝く壁が出来上がると、同時

「撃て」

無感情な声と同時に路地から一斉射撃が始まった。

けたたましい銃声をまきちらしながら、次々とワシ男に穴を穿つ。  
ついでに俺の防壁をがりがりと削りながら。

「くそっ！こつちの事はお構いなしかよ！」

その、第六高校の魔術師たちにしては奇妙な攻撃はワシ男が塵と消えるまで続けられた。

銃撃が止むと同時に俺の魔力も限界を迎えたのか防壁が光の粒子となつて消えてゆく。

「ぜえ…ぜえ…なんなんだよ、一体！」

かなりの魔力を防壁維持に消費して疲労困憊した俺はその場に座り込む。

幸い、幻魔の出現はもう終了したようで、今は第六高校の事後処理部隊が修復作業と負傷者の救護を行っている筈だ。

「楓とマナは無事だな？後ろの連中は？」

「私らは大丈夫。向こうも…ッ！」

楓が行き成り前に飛び出したかと思うと炎の柱が立った。着地が上手くいかず盛大に転びながらも楓は焰を放つ。

じゅっ…

そんな何かが溶けたり、蒸発したりするときの音がした。

一体何が溶けたのか。

それは楓が作り出した火柱の明りに照らされた路地を見てよく分か

った。

鉛弾だ。

そしてそれを撃ちだすのに使われたのはどう見ても銃刀法違反なアサルトライフル。

そしてソレを持っているのは白いコートを着た、まるで宗教団体のような集団だった。

そいつらはその後何かしてくることもなく、俺たちを一瞥してその場を立ち去っていく。

「…何だったんだ」

俺の眩きには誰も応えてくれない。  
それどころか

「痛っ…」

楓が起き上がろうとしてその場に崩れる

「どうした？」

俺が楓の痛がる場所を確認すると少々腫れていた。  
どうやら、俺を庇った時に足首をひねったようだ。

「歩けそうか？」

「ちよっと…無理っぽいかな」

大分腫れているから確かに、無理に歩くのは良くないだろう。

「しゃーない。運ぶから暴れるなよ」

そう前置きしてから俺は楓を再び抱き上げた。

背負う訳にはいけないので当然のごとくお姫様だっこだ。

「だ、大丈夫ですかッ!？」

慌てた様子の声がかかって俺たちは声の主の方を向く。

声の主はさっきの立ちはだかっていた少女だった。

「大丈夫。ちょっと足をひねっただけだから。あなた達は?」

「はい。みんな怪我こそしてますけど、大丈夫です。いま連絡して救護を呼んでもらいました」

「そう。よかった、手遅れじゃなくて」

ほっとした様子で胸をなでおろす楓。

「それにしても、お強いんですね。あ、私は睦斗第六高校、一年で白澄って言います。」

「私たちは聖奏学園の高槻楓と」

「藤谷誠だ。学年は同じ一年生。そっちのネコ娘はどういう訳か俺に取りついてる自称使い魔」

「え、同級生?」

「だから変に敬語とか使われてもこっちが困るんだけど…」

「ええつとと、てつきり上級生かと…それじゃあ遠慮なく。ありが

とう。助かったわ。二人とも魔術師？」

「俺は『新米の』ってつくがな」

「私は先天性。といっても、大雑把過ぎて応用が効かないんだけど。白澄さんは？」

「私は精霊と契約してるの。あんまり戦闘向きじゃないんだけど…  
リズ」

彼女が呼ぶと先ほど彼女の盾となっていた女性が現れる。

俺たちもマナで見慣れていなければ『幽霊』と思ったかもしれないな。

「なるほど。まあ、これから同じルーキー同士、頑張ろっね」

「ええ」

その少し後、救護班（応急手当の心得や治癒・回復系の魔術や技能を持っている技能集団）が到着し、楓を引き渡した後、他の負傷者回収を手伝うこととなった。

「そういえば藤谷くんって、高槻さんと付き合ってるの？」

班員ほぼ全員がダウンしている白澄の手伝いで怪我の様子を見ていたら白澄がそんなことを言ってきた。

「いや、特別付き合ってるとかそういう訳じゃないぞ。」

幼馴染みだからお互いに恥じらいと遠慮がなくなっているだけだ、  
と思うのだが…

「ふーん」

なんだか生温かい視線を送られる。

「……………なんだよ」

「いや、お似合いだなんて」

「なんだそりゃ」

それから怪我の度合いが酷い人から順番に救護所となった場所へ運ぶのだが、その間ずっと白澄にこの手の話題で弄られ続ける羽目になった。

ちなみに、帰りは楓をおぶって送っていくことになり、色々混じった視線を第六高校の面々から向けられた。

# 2 2 (前書き)

話の流れと長さ故、ちよつと短かめ…

「報告書は読ませてもらったわ。書式も問題ないし、特に大きな問題があった訳でもなさそうだからこのまま受理するわね。楓ちゃんはお大事に。」

翌日の放課後、生徒会室で俺たちは報告をしていた。

といっても、一定の書式の報告書にどんな幻魔が出現し、どう対応したのか、被害はどれだけかを記入して提出するだけだが。

「で、最後のこの一行：白コート集団による銃撃なんだけど……………」

佐伯会長は言葉を躊躇うかのように切るが、一呼吸おいて

「……………あれも睦斗市の対魔集団の一つなのよ。『学生連合実動処  
理執行部』：古くからある、魔術師や異能者以外の一般人で構成さ  
れるグループなの。」

その名前は過去の資料を見ると度々見る事があった。

その多くが喧嘩や対立なのだが、一、三は協力をしたという記述もある。

「うちら『術師連合』とは敵対こそしないし、目的は一緒なんだけ  
ど仲が悪いというか、向こうが一方的に魔術師を目の敵にしている  
というか……………」

どういふべきか、迷っているようにも見える会長は

「…元は一時期に魔術師以外の生徒の戦力化をしようとして睦斗学院を中心に結成された組織なんだけど、結局喧嘩別れしてね」

おそらく、結成間もなく装備も戦法の確立もできていない彼らが足手纏いになってしまい、それ故に不要とされたから喧嘩が起こったんだろう。

「まあ、そういう連中もいるって事だけ記憶の片隅に留めておいて『うちの生徒が誤射された』って苦情は叩きつけておくから」

物凄くイイ笑顔で会長はそう言い、俺たちの報告は終了。

そのすぐ後にそれぞれ先輩から仕事を言いつけられて俺たちは表の生徒会の仕事に駆けまわることとなった。

\* \* \*

数日後…

「今月に入って三件。これはそろそろこっちも堪忍しきれないわね」

「そうね。」

「幸い、ケガ人で済んでいるからまだ良いが…」

佐伯会長の声に細面の少女とガタイのいい青年がそれぞれに応えた。

聖奏学園の生徒会応接室で佐伯会長ほか、三校の市立高校の生徒会長が会議を開いていた。

集まっているのは第六高校の吉川会長と第四高校の有沢会長、それと第三高校の藤堂会長。

『学生術師連合』を構成する高校の生徒会長たちだ。

ちなみに俺は報告者兼速記役として参加している。

「苦情の方も何処吹く風だし…ここらで一発『ガツン』とやるべきかね」

佐伯会長がさらっと物騒な事を言うが、俺としても一発殴ってやりたいと思う。

危うく撃ち殺されかけたんだ。それぐらい構わないだろう。

それに、あの後に出動があつた時も同様に幻魔ごと撃たれるなどしている。

「…だが、執行部の連中に助けられている面があるのも事実だ。…

…適性のある者で、戦闘向きなのは限られているからな」

「魔術師や異能者、精霊契約者は才能に左右されますからね」

「魔力量にも個人差があり適性もバラバラ。戦力化としては向こうの方が効率的よね」

だが、会長たちは利点と欠点を比べて唸り、黙り込んで考え始めた。

カチカチ、と時計の音だけが響く。

「…一度、殴り合いしに行くか」

ぼつり、と藤堂会長が呟く。

内容は物騒だが…

「そうね。書面通知も限界があるし…」

「一度、喧嘩しておくべきかもしれないわね」

それに同調する他の会長たち。

方針は『一度、面と向かって喧嘩をする』になりつつある。

「それじゃ、日時のすり合わせはお互いに手空きの日を確認後ってことでいいわね」

その一言が合図となり、会議は終了。

日時のすり合わせはメールにて、という取り決めが為され、それぞれの学校に戻って行った。

「さて、喧嘩の準備を始めるとしますかね」

生徒会室に入って開口一番の会長の言葉に俺たちは苦笑するしかなかった。

殴り込みの日時が決まったのは三日後。

決行は日時決定の日から一週間後の週末…土曜日に決まった。

\* \* \*

殴り込みをかけることが決まってからの毎日は俺に地獄のような訓練が課されるようになった。

具体的にはこの間の出動で使った『防壁展開』を使いこなせるようにする訓練だ。

方法は…

「やあつ」

「ほらほら、耐えないと黒焦げになるわよ」

楓の焔に炙られ続ける事だった。

これが難しく焔弾だけでなく熱も防がなきゃならない。

手加減してくれているとはいえ、喰らえば火傷は確定。

………楓が手加減に失敗して二、三度致死ギリギリの大火傷して夏元先輩に治療してもらったのは『イイ』トラウマだ。

「でいやああああ!」

そして最近紗枝先輩が不意に剣戟を加えてくるようになった。

ぎゃん、と音と火花を散らし展開した防壁が刀を受け止める。

「ふう。」

なんとか防御成功。

タイミング良く防がないと第二撃で切り殺されかける事もある。

………首の皮つて、意外と丈夫でなんとか繋がるもんなんだよね。

頸動脈をギリギリで避けてくれるからなんだけど

これでも五回くらい、夏元先輩のお世話になりました。<sup>マル</sup>

頸動脈も一、二度あったし……………

これらのイジメにしか思えない訓練は全て対執行部戦における対策  
だったりする。

まあ、銃撃の雨対策の壁役の為の訓練な訳なんだが。

なんというか…人間塹壕？

「…こんなものでいいかしらね。真っ向から遣らないで済むにこし  
たことは無いけど。楓ちゃん、最後に一発」

…っえ

「とーや、行くよオ！」

完全に手加減なしの一撃なのがパツと見の火球の大きさと判る。

「くっ」

梨紗先輩の刀を受け止めていた障壁を消し、全部を正面に向ける。

梨紗先輩も巻き添えを避けるために離れ行く。

「そおおおおおれえッ！」

俺の身長より大きな…二メートルくらいありそうな巨大な焰球が迫って来る

「こんちくしょーッ！」

出し惜しみなしで全力を注ぎこむ。

「わお」

魔力障壁が銀色の壁となるほどの密度に圧縮されぶつかって来る焰球を受け止める。

焰球が消える時には俺も魔力を使い果たす直前にまで追い込まれていた。

………まあ、数時間焰を防ぎ続けていればそうなると思うぞ、普通。

「よし、合格。」

耐えきつた俺に会長が軽く言う。

「それじゃあ、明日は休息、明後日が本番だから体調を万全にね。ちよつど土曜日だし、ゆっくり寝ておきなさい」

『明後日』

その日の為の拷も…特訓だ。

それでもやって来る『表』の雑用は済ませねばならず最終下校時刻を三十分ほど過ぎてようやく帰路につくことができたのだった。

……………ゆっくり休めていったのに。

## # 2 3 (前書き)

今回から『三人称の部分』が時々出てきますが、その部分は主人公がその場に居ない時なのでお間違えないよう…

# 2 3

「おはようございます」

翌朝、午前九時。

俺は生徒会室に、いつも通りの制服でやってきた。

「あら、昼過ぎに来ると思ってたけど、随分と早いわね」

意外そうに言う会長。

他の面々はまだ誰も居ない。

「これでもいつもより二時間寝坊してるんですけどね。とりあえずお湯を沸かしておきます」

そう言っただ俺は給湯室へ行き、水の並々と入った薬缶をカセットコンロに掛ける。

普通、火を使う機器って学校内じゃ忌避されるんじゃない？と最初は思ったが問題なく使えるので遠慮なく使わせてもらっている。

お茶汲みが俺の仕事の一つになっているのはなんとなく釈然としなるところがあるが…

まあ、茶坊主スキルが一番高いのが俺なので仕方ない

「さて、他の物の用意は…っ」と

茶筒の茶葉が切れていたりと出鼻を挫かれたが他の役員が揃う頃には全員分の煎茶が各自のデスクの上で湯気をあげていた。

さて、休みの日にも関わらず昼前には集合を果たした俺たちは一体何の為に集まったのか。

それは『明日の準備』の為である。

ホワイトボードには簡単な戦略図が描かれ最前線、中衛ライン、後衛ライン、非戦闘ラインといくつかの領域に分けられている。それは戦闘になった時の配置図だった。

ちなみに梨紗先輩と楓は最前線、俺は最前線ラインの少し前。

「だいたいこんな感じかしらね。作戦としては藤谷くんの魔力が保つ限り防壁を展開しつつ前進。相手が味方撃ちせざるを得ない距離まで迫ったら殴り合いを始める。……言わなくても判ると思うけどこの作戦の肝は」

「わかってます。俺の展開する防壁の強度と時間にある……でしょ？」

「ええ。昨日までの拷……訓練通りに行けば問題ないと思うけど……」

……いまこの人『拷問』って言いかけたよ確実に。

「大丈夫だと思いますよ。拷問じみた特訓もクリアできた訳だし、とーやは昔から本番に強いタイプだし。ね？」

楓がなんだか問題発言な気がするセリフで後押ししてくれた。

「まあ、ダメならダメで手は用意してあるけど……一苦勞なのよね」

それは『絶対に成功させる』という意味の脅しとも激励とも取れた。

「さて、この配置概要をメールで三人に転送。大体の配置図が出来たら送ってもらうように。お願い」

「了解」

氷室先輩が席を立ち、パソコンの電源を入れたと同時に

P r u r u r u ……

電話が鳴る。

「はい、聖奏学園生徒会……あら、佐織。どうしたの？………  
…！」

どうやら会長の知り合いらしいが、だんだんと険しくなる会長の顔。  
そして

「睦斗学院が襲われてる!？」

ガタッ!

そのセリフに生徒会室に集っていた全員が椅子を蹴って立ち上がった。  
ていた。

省エネモードとして子猫姿で、氷室先輩のこれまた省エネの為の子狐姿のコンと一緒に寝ていたマナもむくり、と上体を起こす。

「わかったわ。信乃と藤堂君にも連絡を回して。ウチは今すぐ全員出すわ。ウチが一番戦闘向けな編成になっているから…ええ。お願い」

ガチャ、と受話器が置かれるときには俺たちは既に部屋を飛び出す準備を終えていた。

「大体の話しは解ると思うけど…睦斗学院が襲撃を受けてるわ。おそらく、幻魔<sup>デモン</sup>の出現地点になった為。ウチは先行して結界と負傷者救護、応戦に回るわよ」

『了解』

一斉に生徒会室を飛び出し、屋上への階段を駆け上がる。

無人になった生徒会室では人数分の湯のみが湯気をあげ、起動が終わりログイン待ちのパソコンがパスワード入力画面で虚しくカーソルを点滅させていた。

\* \* \*

それは突然のことだった。

『術師連合』から申し入れられた会談を翌日に控えたこの日、おそらく決裂の際に実力行使が予想されたため、『処理執行部』の中核要員はそれをどう打ち破るかの協議の為に睦斗学院に集まった。

集まって会議を始めようとした時、校庭で破砕音がしたため外に出たら、『幻魔』の大群が校庭を蹂躪していた。

「藤澤会長！」

「うるたえるな！ 救援要請は出したんだろう！」

「は、はい！」

執行部総長、藤澤惣一は現れた『幻魔』を睨みつける。

人を小馬鹿にしたような、道化師の姿をした『幻魔』

傍らで風を操り道化師に至る道を切り開こうと攻撃を続けている翡翠色の衣をまとった貴婦人のような女性は惣一の契約精霊、ヒスイだ。

…大半が聖奏学園を初めとする『術師連合』に流れてしまったため我々執行部……『睦斗学生連合実働処理執行部』には精霊契約者や術師は殆ど居ない。  
そもそも『執行部』が『魔術師ではない者が幻魔と戦う為』に作られた組織である為、術師を戦力に組み入れるには抵抗がある。  
…だが、背に腹は代えられない。そう思っているも『伝統』が再編を阻んでしまう。

魔術師ならば残弾を気にせず戦えるのに…惣一がそう思うのは愛用の64式小銃（自衛隊でも使われている）の残弾も、残敵の数からすると心許無いからだろうか。

「ッ！」

バキ、と木の割れるような音がして惣一がその方向に振り返るとヒスイによって迎撃された道化師の操る『人形』が砕けていた

「済まない」

礼を言いつつ、狙撃の手を止める事は無い。

飛びかかって来る人形の残りも脆いであろう部位を狙った予測射撃で少しでも勢いが減れば味方への被害は抑えられる

だが、数が多いと迎撃も間に合わない。

「会長！」

「くっ！」

そして、惣一が『こうされたら厄介』と思っていた通り、数十体が一斉に飛びかかって来た。

『やらせない』

ヒスイが迎撃するが焼け石に水に過ぎない。

それどころか過剰放出のせいでヒスイは自身の維持すらままならない。

ここまでか…

そう思った時、目の前に銀色の壁が現れぶつかった人形を一気に『

消し飛ばした』

俺は着地の衝撃を地面に手をついて殺し、そのまま防壁を展開させた。

勢いよくぶつかって来た人形は壁の表面を壊し、まだ壁として整形していない魔力に突っ込んで消滅していった。

…本当にギリギリだった。

佐伯会長にコンの背中から突き落とされ、防衛線を作る執行部の前に着地した時本気で死ぬかと思った。

壁の展開が間に合ったのも、軟着陸できたのも本当に幸運だ。

「さて、人間塹壕役を全うしますかね」

「君はっ!?!」

背後から驚いたような声上がる。

「聖奏学園生徒会の藤谷です。救援に来ました。……壁役やるんで反撃の準備お願いします」

俺には『下がってる』とは言えなかった。

俺たちが来るまでの数十分間、これといって目立った被害を出さずに抑え込んでいたのも彼らなのだから。

「救護は負傷者の回収！戦闘班は壁の内側でいつでも出れるようにして！」

背後からよく通る指令が飛ぶ。

「佐伯奈緒ッ……」

「ほら、絡んでる暇あるならそっちの連中も立て直させなさいよ。  
このままだと、『術師<sup>ウチラ</sup>連合』が手柄全部かつ攫うわよ」

「言われなくとも！」

ざわめく背後。

壁の向こう側では楓やマナ、梨紗先輩を始めとした術師連合の戦闘班が人形との乱戦を繰り広げていた。

一部の動ける、怪我の少ない処理執行部員も後衛組の術師と一緒に  
なって援護射撃を行っていた。

一撃一撃が銃弾とは比べ物にならない威力を持つ魔術師たちは圧倒  
的だった。

数人で一組になり、人形を次々と駆逐してゆく。

それでも執行部員たちも負けておらず、数人で集中砲火をかけて一  
体一体を丁寧に潰してゆく。

一番遠くでは梨紗先輩の率いるチーム（楓とマナがチーム員だ）が  
本命に襲いかかるところだった。

楓の焔が道化師の周辺に控えていた人形を焼き払い、梨紗先輩とマナが一気に飛びかかる。

到底よけきれぬものではなく、腹を貫通される道化師。

これではお終いか。

そう思ったがかなりの距離があつたのにニヤリ、と腹を貫かれた道化師の顔が歪んだ笑いを浮かべたのが見えた。

不意に道化師を中心に広がる黒い魔方陣。

慌てて離れる楓たちはギリギリで魔方陣が発する黒い光から逃げ切る。

「な、何ごとだ!？」

黒い光が消えるとそこには黒い闇の塊があつた。

背筋に『ぞくり』と悪寒が走る。

ぎよろり、と紅い目が開く。

生理的嫌悪を呼ぶ、異形。

理解の範疇の外側にいる、化け物。

『ソレ』は獲物を求めるかのように触手を伸ばす。

「みんな、撤退　ッぐ」

「梨紗先輩　ッ」

一番近い場所に居た楓と梨紗先輩の首に、触手状に伸びてきた闇が絡みつき、締め上げてきた。

「リサ、カエちゃん！」

マナが二人を助けに触手の切断を試みるがマナをめがけて伸びてくる触手の対応で手いっぱいになる。

二人が苦しさに耐えかねて意識を失いそうになった時、ずしゃつ、と音をたてて闇が散らされた。

二人を拘束する触手が半ばから消し飛び解放される。

「けほっ……」

二人は苦しそうな表情を浮かべながらも先に逃げた面々の援護を受けながら下がってゆく。

「ヒスイ！」

「すみません、マスター…もう、限界みたいですよ…」

すぐ背後で、そんなやり取りが聞こえた。

振り向くと翡翠色の女性（ヒスイというらしい）が燐光を散らしてその姿を薄くしていくところだった。

マナから聞いたことだが知っている。

精霊の死とは光となって消える事であると。

彼女は身を挺して二人を助けてくれたのだ。

燐光が消える直前、ちらり、と彼女がこちらを見た気がするが今は気にしない。

どうせ、消滅寸前の精霊が大量に憑りついている俺がすぐそばに居るのだ。完全消滅せずにそのうち復活できる。

ふと、気が逸れていたことに気付いて壁の向こう側に視線を戻すとこちらもピンチになっていた。

触手は魔方阵から数メートルのところまでしか伸びてきていないが先の部分から闇色の魔力弾を打ち出してきていた。

それをなんとか迎撃しているが、前衛組はかなりの出血を強いられていた。

せめて、障害物があれば…

そう思い立ったと同時に、閃いた。

障害物なら作れるじゃないか。

今、展開してる魔力防壁だつてつきつめれば魔力で作られた壁だ。

それをいくつも展開できれば十分。

障壁の遠隔発生最大の記録は今のところ十五センチ先。

数メートル以上離れての展開は今までできないでいたが…挑戦する価値はある。

「すう…はあ…」

大きく息を吸い、ゆっくりとはく

一週間の火あぶり拷問の防御で判ったのは、俺の『魔術』はイメージが重要だということだ。

イメージという鑄型に魔力を注いでやり、俺の魔術は発動する。

なら、俺が出来ると思じて『イメージ』をすれば行けるのではないか。

.....

イメージするのは壁。

モノリスでも厚切り羊羹でも構わないが、とにかく壁だ。

それを今展開している前衛組の前に。

銀色のモノリスが立つ校庭を強くイメージし地面に魔力を流す。

「ッ!? 藤谷くん？」

佐伯会長の慌てた声。

集中の為に閉じていた瞼を開くと銀色の壁が校庭に何本もつきたてられていた。

目前に展開してあった壁もところどころに通り道のある障害物に変わっている。

「できた？」

大量の魔力を消費したのは解るが流れ出る魔力がまったく感じられない

まるで、『魔力で編まれた壁』を作り出し自立させてしまったみたい。

試しに壁に触るとそれはすでに実体のある物質のようだった。

…今ならば、初めての幻魔討滅のときの大太刀が作れるのではないだろうか。

そう思って、あの太刀をイメージし魔力を流し込む。

カチャ…

手に重さのある何かが握りこまれる感触。

手に握られていたのはまるで本物のような太刀だった。

全てが銀光で出来た太刀は驚くほど手に馴染む。

「なんだかなあ」

そう呟きたくなる。

魔力で編んで物質化したと思われる壁は魔力弾をはじいている。と、言う事は俺が作り出した『モノ』は魔力と物質の両方の属性を持っているのではないだろうか。

試してみる価値はある。

太刀が効かなければ至近距離から残る魔力をそのまま叩きつけて吹き飛ばせばいい。

やるとしますか。

覚悟を決めて俺は走り出す。

目指すは、闇の塊。

「とーや!？」

俺の展開した壁の一枚では楓がもたれかかって苦しそうな表情を浮かべていた。

「とーや、キツチリ決めてきてよ」

壁を通り過ぎるとき、その声が聞こえた。

「…任せとけて」

強がりでも、希望的観測でもなくそんな返事が出た。

「みんな、援護して!」

梨紗先輩の声。

触手が俺に襲いかかるが壁を盾にした状態での魔力弾や銃弾に阻まれてはじかれる。

それをくぐり抜けた触手は俺が刀で切りはらう。

案の定、魔力で編まれた刀は闇を切り裂いた。

一気に迫り俺は闇の塊の二つの紅い目の間に刀をつきたてる。

手ごたえは無いが、確かに刺さっていた。

「さて…吹き飛べッ！」

イメージという型に込められた魔力にさらに魔力を継ぎ足す。

結果として起こるのは、型の破壊と中身の暴発だ。

刺さった刀が銀光に還元され、闇を内側から食い荒らす。

『闇が銀色の光に吞まれてく……』

そんな誰かの呟きが聞こえた。

といても、俺は自身が引き起こした魔力の暴発を防壁で防ぐのに手いっぱいになっているが

数秒後、光の暴力に耐え抜いた壁を『風船から空気を抜くイメージ』で消滅させると闇が居た場所にはズタズタにされた道化師の残骸が塵と消えていくところだった。

それに連動してか、数体残っていた人形も塵に還ってゆく。

誰もが固唾をのんで塵と消えてゆくのを見守り、最後の一片が消え去った時、誰からともなく歓声があがった。

その歓声が引き金となり、緊張の糸がぷつりと切れた俺は急激な睡眠に襲われた。

おそらく、魔力の過剰放出が原因……

落ち行く意識が記憶する最後の光景は楓とマナを先頭に駆け寄って来る聖奏生徒会のみんなだった。

\* \* \*

目を覚ました時、そこは入学からまだ一月弱しか経ってないのに何  
度もお世話になっていている聖奏学園の保健室だった。

「あ、目え醒めた？」

マナが顔を覗きこんでくる。

当然のことながら無傷だ。

「ちょっと待ってて。いまナオたちを呼んでくるから。カエちゃん  
は隣ね」

保健室から出てゆくマナ。

『隣ね』と言われてみると俺が寝かされている右端ていせいのベッドの隣の  
隣には楓が寝かされていた。  
さらにその奥には夏元先輩の姿もある。

二人とも目立った怪我はないが疲労の色が見えていた。

「……………さて、アンタが完全には消滅きえしてないって、あの会長さん  
に何時伝えるかね」

眩きながら見上げると困った様な表情を浮かべる精霊の残滓が一柱。

その少し後、楓が目を覚ますのと会長たちが保健室に現れるのはほぼ同時で、両方から『何故あんな真似が出来たのか』と問い詰められることになった。

……『イメージという鑄型に魔力を流し込んで固定しただけ』としか言えないがそれを聞いた会長は『あり得ない』と呟いた。

## # 2 4 (後書き)

これにて第二話終了です。

第三話は………プロットは完成済みなんですけどね。

まだ、文章化が………

ついでに、大学が7日から始まるのでそのあたりからスカイタートル(試作型)並、もしくはそれ以下の更新速度になると思われます。

#3 1 (前書き)

お待たせしました。第三話です。

今回は難産でした。

睦斗市内にある学生対魔組織が総出となった『睦斗学院襲撃事件』から一週間弱が経った。

『別に襲撃された訳じゃなくて偶然、出現地点が睦斗学院なだけだったんだけど』とはツッコんではいけない。

これをきっかけにお互いに悪しき伝統を打破するきっかけにしようという意味が入っている（とお互いのトップは言っていた）のだから。

それはともかく

俺は矢吹先輩と組んで関係各位への事情説明などの報告に回っていた。

と、いつても睦斗警察と睦斗市役所の二か所だけな訳だが。

「市、警察への説明と報告、終わりました」

何故俺が、というと渉外担当を俺が引き継ぐと先輩方の中では内定しているらしく顔通しをする意味だとか。

「御苦労さま。問題は？」

「特にありませんでした。とーやがしつかりと説明してくれたし、質問にも『答えて平気な範囲』で答えてましたから」

… 矢吹先輩はこう言うが実際は丸投げだった。

到着前に大体の説明する内容と『教えてはいけない境界線』を教えられ、紹介ののちに説明が丸投げにされたのだ。

大事なことなので三度言うが、入学してやっと一ヶ月経ったばかりの一年生に説明を丸投げしたのだ。

相手の担当者も『触れてはいけない境界線』をわきまえてくれてい  
るらしく無事終了となったから良かったが…

「それじゃあ、これでこの件は終わりね。明日から連休だし、溜ま  
ってる仕事があれば上がっていいわよ」

と、会長。

まあ、過ぎた事だしぐちぐち言っても仕方ない。

それにそのうち俺が一人でいくようになるのだからいい練習だ。

会長の言う通り上がらせてもらおうとしよう。

…が、そうは問屋が卸してくれなかった。

「藤谷、いいところに居た。資料探し手伝ってくれ」

と、氷室先輩に捕まり資料室へ連行。

表の会計関連資料ファイルを一冊、裏の資料に混ぜてしまったらしく、それを見つけるのに定時…午後六時までかかった。

ちなみに発見場所は氷室先輩のデスクの上。

諦めて連休明けにもう一度探そうと生徒会室に戻って来た時のことである。

\* \* \*

「まあ、見つかったんだからいいじゃない。そのおかげで一緒に帰れるんだし」

これは俺がファイル紛失疑惑の顛末を話した時の楓の反応だ。

「それより明日からのゴールデンウィーク、どうするの?」

『ゴールデンウィーク』

五月初めにくる三日連続の祝日と前後の土日、祝日を合わせた大型連休。

今回は三日から始まり五日まで祝日、そこに学校側が休校にした土曜日と元々休みの日曜日がくっついて五連休となる。

俺たち一年生にとっては同級生の中から見つけた『気の合うヤツ』を友人へと昇華させる時期でもあるが…

「んー、とりあえずは片づけと常備菜作りしないな。」

俺はクラスの連中から『幼馴染みの女子と仲がいい』というだけで白眼視されている。

その為、友人といえる友人は中学時代以前からの連中だけで、その

連中は総じて学校の反対側、そして家族旅行などの予定で埋まっていた。

なので『友人とくへ』系イベントは一切フラグが立っていない。

んなわけで、訳有つて一人暮らし中の俺としては普段は出来ない家の中の事をする予定だ。

あとは魔術の練習。

「むー」

前に回り込むようにして行く手を塞ぎ、腰に手を当てて睨むようにしてくる楓。

身長差が二十センチ近くあるからどうしても見上げてくるような姿勢になるが妙に迫力がある。

「…なんだよ」

そう返すと、突然笑顔になる。

「それじゃ、さ。休みの後ろの方でどっか行こ。はいこれ決定。詳しい予定はあとでメールでもするから予定は開けておいてね。」

『約束だからね』と念を押してくる楓は家の側まで来たら『じゃ』の一言で小走りしながら玄関へと向かっていく。

『…見事に押し切られたね』

見送ると、傍らの黒ネコが話しかけてきた。

『話しかけてきた』と、いつでも声に出して喋ってる訳ではない。どちらかと言えば『思念通話』とでも言うべきもので、精霊と契約主の繋がりを利用した意思疎通の方法らしい。

「……………あの勢いには抗い難いモノがあるんだよ」

おそらく、楓の頭の中ではあの口約束は確約であり契約並の重さになってる筈だ。

それを破ったなら……………思い出しただけで寒気がしてきた。

『…とーや？』

「いや、ちょっとばかり過去の惨劇を振りかえってただけだ。帰るぞ」

「んにゃ」

そして俺は歩き出し、五日間全部を使う予定で立てていた大掃除をどう四日に振り分けるかの案を練り始めた。

\* \* \*

「5月3日 GW 1日目」

ピロロロロ…

GW初日の朝、俺は携帯電話の着信音で目を覚ますことになった。

「だれだ…」

まだ寝ぼけ気味の頭を強制的に覚醒に持っていきつつ、時計に目を

やる。

現在時刻、午前六時。

いつもよりは一時間ちかく寝坊してるが休みの日なのでもう一時間位の寝坊は許されると思っていたが…。

顔をパンパンと叩いて無理矢理、目を覚まさせる。

『早く取れ』と言わんばかりの携帯電話を取り

「はい、藤谷です」

『朝早くにごめんなさいね。急な話でこっちもてんてこ舞いになってるのよ』

「…どうしたんですか？会長」

電話の相手は佐伯会長。どうやら急用みたいだ。

『伯母が喫茶店を営んでいるのだけど、昨日の夜に『バイトが休んで人が足りない』って泣きついてきてね…最初は私が行く予定だったのだけど、私の方にも外せない用事が入ってしまって』

「で、俺に…ですか」

『ええ、頼まれてもらえるかしら。』

「それって、今日だけですか？」

『今日と明日よ。』

セーフだ。

楓から『この日は開けとけ』と指定されたのは五月五日 明後日。

「わかりました。引き受けますよ」

『助かるわ。とりあえず身一つでも大丈夫なように用意はして置いてもらうから。詳しい場所とかは今からメールで送るわ。それじゃあ、お願いね』

ぷつ、と電話が切れて数秒後にはメールが届く。

生徒会関係者全員の携帯電話の番号とアドレスを登録してあるのに未登録になっているのはパソコンが何かのアドレスだからだろう。

届いたメールに目を通す。

そこに書かれているのは店の名前と集合時間だ

場所は聖奏学園最寄駅である東睦斗駅のすぐにある『ウイステriste  
リアia トゥラリスtrellis』。

集合時間はわりと早く午前八時。

駐輪スペースなどは無いので徒歩で来るように…とのこと。

会長は身一つでいいと言っていたから制服はあったとしても店側で用意してくれている筈だ。

「…さて、遅刻しないように行かないとな」

家から駅までの時間を思い出しながら身支度にかけられる時間を計算する

「…まあ、いつも通りの朝にはできるか」

最近『食事』に目覚めたマナの方も合わせて朝食と、簡単な昼食を作り置く。

食事も含めた身支度が終わったのは七時ちょっと過ぎ。

十分間に合う時間だった。

### #3 2 (前書き)

今回、主人公の特技の一つが…？

そこはレストランと喫茶店の中間くらいの規模の小洒落た店だった。

英語で藤棚を意味するその店は聖奏学園最寄駅にほど近い商店街の一角にある。

その店の前に俺が立ったのは予定の時間の十分前だった。

「Wisteria trellis…ここだ」

おそらくあつてると思われる読み方で声に出してみる。

スペルも一緒だし、地図で指定された場所の周囲の条件にもあっている。

『さて、あと十分をどう潰そうか』と店の外装を眺めていたら内側からドアが開いた。

「君、何の用？店開きまでまだ時間があるわよ」

何処となく佐伯会長に似た、女性だった。

おそらく、会長の言っていた『伯母』なのだろう。

「えっと、会ちよ…佐伯先輩に代理を頼ま」

「ああ、キミが奈緒ちゃんの言ってた後輩くんね」

思いつきり遮られたがどうやら話は通っているらしい。

「入って。バックヤードに案内するからついてきて」

手招きするその人に案内されるまま『staff only』と書かれたパネルの張られたドアの向こう側へ。

「そつえば、まだ名前聞いてなかったわね。あたしは佐伯悠里。」

「藤谷誠です。」

「それじゃ、今日明日の二日間だけどよろしくね。で、早速だけど……」

悠里さんが備え付けロッカーの右端から二番目にあるネームプレートの入っていないところから一つの紙袋を引っ張り出す。

「制服に着替えて、準備してもらおうわよ。」

紙袋から出てきたのは所謂エプロンドレスだった。

「知ってると思うけどウチはフロアスタッフは女の子しか取ってないから。」

「……………え？」

「可愛いでしょ。これがウチの店の制服。」

「……………本気ですか？」

「ええ。話は『全部』奈緒ちゃんから聞いてるわ。」

ポン、と肩に手を置いて反対側の手で一枚の写真を見せてくる。

「ね、橋高統夜ちゃん」

その写真は雑誌か何かの切りぬきではなく、印画紙に現像された本物の写真だった。

そして写っているのは何やら着飾った少女だ。

顔立ちは整っており美少女に分類されるだろう。

なめらかな絹布を思わせる肌。背中に伸びる長い髪が大人しそうな『深窓の令嬢』のような雰囲気を出している。

……………実はその少女は俺である。

色々誤解して欲しくないから弁解させてもらおうと、これには深い訳があるのだ。

俺は警察官の父、藤谷成悟とファッションデザイナーの母、結城和葉の間に生まれた。

親父は俺が小学生になってすぐくらいに殉職してしまい、母さんとはある野望を頓挫させることになった。

『自分がデザインして作り上げた服を娘に着せたい』

その願いを叶えたくても母親はファッションデザイナー『ゆうきかずは』として名が大分売れている為に仕事も多く再婚相手を見つかるヒマもなかった。

そこで目をつけられたのが俺だ。

当時の俺は線も細いし身長も低かったし、今でこそ敵つくは無いがやや中性的と取れる程度の顔つきも当時は重度の母親似で完全な女顔だった。

結果、俺を女装させて『擬似娘』として扱うようにしたのだ。

当時の俺は負担をかけまいと『良い子』でいるようにしてしまった為、その歪んだ願いも聞き入れてしまった。

『何かおかしいぞ』と思った時にはすでに女装した俺はファッション誌の上に『ゆうきかずは専属ファッションモデル 橘高統夜』として写真が出てしまっており引っ込みがつかなくなってしまった。急に消える事も出来ずにずるずると中学時代まで為されるがまま。完成前であつてもイメージ用に着せられたりと日常的に女装させられ続けた。

それに終止符を打ったのが中三の冬の再婚だった。

俺は再婚相手の家族（その男性には娘が居た）と共謀し本来は四人で越す予定だった家に今は一人で暮らさせてもらっている。

：義理の妹の小学校の転校を取り辞めて引越しを延期してもらったのだ。

おかげで日常的な女装の強要から離れることが出来たのだ。

一人暮らしに当たっての家事能力は親父を亡くした頃から培って来ているので問題は無い。

だが、『何故この人がそのことを？』と思い、ふと会長やこの人の苗字を思い出した。

『佐伯』

何処にでもいそうな苗字だが、有名な苗字でもある。

睦斗市一帯を根拠地とし、幅広い事業を展開する一大グループ、その長に立つ一族の苗字も『佐伯』なのだ。

オマケに母親の事実上の雇用主であり、写真が掲載される雑誌の出版元は『佐伯出版』だ。

この人が：会長の一族がその『佐伯』の一門ならあり得ない話じゃない。

「あ、安心して。補正下着とか、パットとか、ウィッグとか、化粧品も一通り用意してあるわよ」

「全く安心できませんよ!」

だが、引き受けてしまった手前今更『帰ります』とは言わせてもらえないだろう。

「…はあ。判りました。観念します。」

「物解りが良くて助かるわ。それじゃあ、着替え終わったらフロアの方に」

そう言つて、悠里さんは更衣室兼待機室を出てゆく。

「……………しゃーないか」

いろんなものを恨みながら、俺は着替えを始めることにした。

\* \* \* 「変身中」 \* \* \*

「…よく化けたものね」

控室から出た俺を迎えたのは悠里さんの関心したような声だった。視線は頭の方からつま先へと降りて、ふたたび上がってくる。

幼少から女装させられ続けた結果、俺は『化け方』を体で覚えてし

まっていた。

「はい、名札。」

そう言っただけで差し出された名札には『橙屋真琴』という文字。

確かに『とうやまこと』と読むがこの『真琴』は主に女の名前として使われるものだ。

まあ、この格好じゃその方がいい訳だが…

一応『研修中』という免罪符<sup>シール</sup>が名前の下に貼ってある。

「それじゃあ、お願いね」

俺は顔見知りがないことを願いつつ『はい』と務めて高めの声で答えた。

「…にしても、ホント完成度高いわねー。化粧っ気殆どないように見えるし、胸も不自然さが無いし、しぐさもちゃんと女の子っぽいし」

「…まあ、」

嫌な慣れだが俺は女装慣れしている。

歌舞伎の女形をやっている人に弟子入りさせられそうになったことすら、ある。

…その時は『体験』ということでお茶を濁してもらい解放してもらったが

「これだったらモテるんじゃないの？男の子に」

「…勘弁してください」

そんな俺の精神耐久度をガリガリと削るような話が続く中、俺にとつての救世主が現れた。

「悠ねえ、おはよー。」

これまた佐伯先輩によく似た少女が店にやってきたのである。

「あら、遙ちゃん。今日は早くからごめんなさいね」

「こつちも予定空いちゃってたから丁度よかつたかな。えっと、その娘は……もしかして姉さんが差し出した生贄<sup>だいら</sup>？」

まあ、見慣れぬ人間が居れば気になるのは当然か。

…一部気になるニュアンスの単語があつたが

「そつよ。橙屋真琴さん。」

「よ、よろしくお願いします…」

不自然さがないように気遣う。

声の調は高めに安定してきた。

「えっと、佐伯遙よ。よろしく。判らないこととかあつたら、遠慮なく聞いて」

「う、うん。お願いするよ」

「それじゃあ、着替えてくる」

そう言つて佐伯（妹）は控室に入つてゆく。

一応、俺の私物（というか服）は端から二番目のロッカーにしつかりと隠してあるので問題は無い筈だ。

「それじゃあ、お仕事の簡単なレクチャーをしておくわね」

それから簡単な説明と注意事項、悠里さんと着替え終わった佐伯（妹）を相手にした接客練習。

大体の調子を掴む頃には他の店員さんたちも大体集まり開店用意はほぼ終了していた。

「それではみなさん。今日も一日張り切つて行きましょー！」

「「「「はい！」「」「」」

ドアにかけられた『close』の掛札がひっくり返され『open』になる。

さて、バレないようにしつつ頑張るとしますか。

カラン

「いらっしやいませ、Wisteria trellisへようこそ。」

現れた客を出迎え、人数を把握し、最適な席へ案内し、注文を取り、  
出来上がった料理を運ぶ。

そして客が席をたったら会計、見送り。それと並行して片づけ。

それが今日やるべきことだ。

愛想笑いを振りまきつつ、拷問に等しい時間が過ぎるのを忙しさの  
中に身を置くことでなんとか気にしないようにすることにした。

その日の『Wisteria trellis』は大盛況だった。

普段の休日よりも倍近い客入りで中々にない出来事だ。

スタッフは嬉しい悲鳴をあげながら応客にまわる。

ふと手が開いた数瞬、遙はこの混雑の原因になっていると思しき少女に視線をやる。

『橙屋真琴』

遙の姉、奈緒が紹介したという『生贄<sup>だいら</sup>』。

同年代の同性の中では比較的背の高い部類に入る遙より十センチ以上高い身長を持つ、美少女。

ハスキーな声は彼女の女らしさと『雄々しさ』の同居した性格を端的に表すかのようなだと遙は思う。

仕事も初めてだというのに怖気づいたりせず動き回れるほどに順応している。

そしてそんな彼女が『橘高統夜』に似ているから、その噂を聞きつけて客が集まっている。

そんな彼女が、『なんでも出来る姉』の姿と重なって自分が抱くコンプレックスをズキズキと痛ませていた。

カラン

ふと、背後でドアの開く音がした。

ふと思考の海から脱出し頭を切り替える。

「いらっしやいませウイステ きゃっ」

遙の客を迎える定型文は悲鳴によって中断させられた。

「動くなよ！」

抱え込まれ、ごり、と即頭部に当てられた冷たく硬い感触に遙は息をのんだ。

\* \* \*

『動くな』

その単語が聞こえた時、俺は店の奥、厨房の側で運ぶ料理を受け取りに来ていた。

客が『強盗だ！』『銃を持ってるぞ！』と騒ぐので大体の状況は把握できた。

物影からこっそりと伺うと佐伯（妹）が人質にされている。

『別にアンタらをどうこうしようって訳じゃない。ここに居る『橘高統夜』に会わせてくれればそれでいい』

ズツコケそうになるのをなんとか堪えて男の持っている『モノ』を観察する。

手に握られているのはごつい回転式リボルバーの拳銃だ。

装弾数は…おそらく六発。

…俺だって男の端くれ、銃や刀剣にあこがれを持った時期はあるし、好きで調べた事もある。

なんで銃は警察と自衛隊（あと例外の執行部）だけの物である日本であんな物が？

ばぁん。

『「ちやちやうるせえぞ！ さっさと出せ！」』

いきり立った男が天井に向けて発砲した。

撃鉄を引いている様子は無かったからおそらくダブルアクション方式かな、と当たりをつける。

……………これは、ちょっと腹をくくる必要があるかな。

俺が表に出ようとすると側にいた悠里さんが腕を掴んで止めてきた。

「出ちゃダメよ。今、警察を呼んだから…」

「大丈夫。勝算あり、です」

それなりに荒事は経験してますから、とか『最悪の場合は制服の内

側に防壁を張ればいい』なんて考えてるなんて、言える訳がない。

するり、と抜けて俺はフロアに入る。

物音に気付いたのか、再び銃を佐伯（妹）に向けている男がこっちを向いた。

「おお、やっぱり噂は本当だったんだ。………ここに、きてもらえないかな」

何の噂か知らないが、とりあえず『犯罪者とテロリストに譲歩しない』は国際常識だ。

「その前に彼女を放してください。」

要求を呑んだら、こちらも要求を呑む。

先に要求を突き付けた側に対するカードのぶつけ方だ。

「こっちに来てくれたら放してあげるよ」

………

俺は黙って数歩だけ近づく

「近づきましたよ。残りは放してくれてからです」

幻魔なら交渉もへつたくれもなく即殺し合いになる。

そういう意味では気分的に少し楽だった。

「…どうして」

男が呟きだす

「どうして、君は……………」

哀しそうな声をあげる男。

「残念だよ……………」

銃口が俺に向けられた。

銃口の向きからして、狙いは左胸…心臓だろう。

目には狂気の色が見え、リボルバーの残弾は三発。

『思い通りにならないから、殺す』ってか？

冗談じゃない。

佐伯（妹）は惨劇を予想してか目をぎゅっと閉じている。

男が引き金を引く指に力を入れようとしたのが見えたと同時に、俺は床を盛大に蹴っていた。

ぱあん

だん！

銃声と踏切った時の音が重なる。

肩をかすめた弾丸が床に突き刺さる音で勢いづけ、足払いをかける。

ついでに抱え込まれるようにして押さえられていた佐伯（妹）の手を引き倒れ込む男から引き剥がす。

痛かったようで顔をしかめるが、この場合は容赦してほしい

「ッ!？」

「さて、歯ア食いしばれッ！」

腹を無防備に見せる男の鳩尾を狙って、全力で拳を叩きこむ。

おそらく、幻魔を殴る時以上に力が入っていただろう。

ど!っ!

鈍い、それでもって痛々しい音がフロアに響いた。

「あ……………」

その一撃が極まったらしく男は意識を失ってそのまま動かなくなっ  
た。

「店長!ロープロープ!」

フロアの誰かが叫ぶと同時、

カラン

「警察だ!…って、あれ?」

制服警官が数人飛び込んできた。しつかりと火器装備の相手に対する装備を用意してきているが、手が居なくて困惑する。

スタッフの一人がちよいちよい、としたを指さし、ようやく床で伸びている犯人の姿を見つけた彼らは拍子抜けしつつも銃の押収と犯人の拘束をする。

そんな様子を脇目に俺は無理矢理引っ張ってしまい床にへたり込んでいる佐伯（妹）に手を差し伸べた。

「大丈夫か？」

「う、うん……………」

手を取ってなんとか立ちあがるも腰が抜けているのか、膝が笑っているのか、バランスを崩す佐伯（妹）。

流石に腕だけで受け止めきれそうにないので抱きとめる。

この際、バレるとかバレないとかは気にしないでおく。

ほぼ確実に俺が（間接的ではあるが）原因になったのだから。

「店長、バックヤード開けてもらっていいですか？」

「いいわよ。あちらさんも事情とか聞きたいみたいだし、二人とも一度下がって」

悠里さんのお墨付きをもらい、俺はマトモに歩けなくなった佐伯（妹）に手をかきつつ更衣室兼待機室バックヤードに引っ込む。

同行するのは店長の悠里さんと事情聴取にあたる警察官が一人。

店の方は残ったスタッフが客と一緒にになってざわめきながらも営業が続けられた。

\* \* \*

「「ええええええええええええ！？」」

控室のさらに奥、店長である悠里さんの自宅部分のリビングは聴取の為に来た警官と佐伯（妹）の二人分の驚愕の声があふれていた。

予想はしていた俺と悠里さんは耳を塞いで二人が落ち着きを取り戻すまで待つ。

何故二人がこんなに驚いているかというと、俺がなんとか『隠していたもの』をさらけ出したからだ。

具体的に言うと性別について。

最初はウィッグを外しただけでは信じてもらえず生徒手帳（性別もしっかり明記されてる公的な身分証明だ）を見せたりもした。

その結果がああ悲鳴に近い叫びなのだ…

「文句はお宅の姉に言ってくれ。俺だって、ここに来るまでこんななんて予想もしてなかったんだ」

あくまで、『偶然似てしまった』を装う。

「ま、まあ、それならあの犯人を一撃でのしたのも納得、かな」

警官は苦笑いしながら調書を眺める。

大体の状況はもう説明を済ませてしまつて、最後に当事者の確認の段階で黙っていた部分を開示したのだから調書の取り直しになりかねない。

「とりあえず、最後の部分はオフレコつて事にしておくから。流石にやり直しは面倒事になりそうだ」

苦笑を微笑にかえて警官は調書を仕舞う。

「それでは、失礼します。」

そのまま表に出ないで退出してゆく警官を見送ると半ば放心していた佐伯（妹）が我を取り戻し

「悠里姉さん！知ってたの!?!」

と悠里さんに詰めよる

「まあ、ね。奈緒ちゃんからも事前に伝えられていたわよ。まあ、ここまで『彼女』に似るとは予想外だったけど。」

と、嘘をつく悠里さん。

実際は『俺』が女装させられた結果が『橘高統夜』であると知って

逃がさなかったのだが、それを佐伯（妹）には今教える気はないよ  
うだ。

「じゃ、じゃあずっと演技してたの！？完璧に女の子だと思ったわ  
よ!？」

「まあ、それなりに気を使ってはいたし、意識して演技はしてた  
けどな」

コレも嘘。

女装中はほぼ無意識にああなる。

……幼少期からの調教（訓練）の成果、とでもいえば良いのだろうか。  
される側としてはたまったもんじゃなかったが。

「頼むから女装趣味とか言わないでくれよ。俺だって好き好んでや  
ってるわけじゃないんだからさ」

自分で言っつて、なんか物凄く哀しくなった。  
好き好んでやってる訳じゃなかったけど、『これは変だ』と自覚す  
るまでに六年以上かかったからなあ……

「い、言わないわよ…何落ち込んでるの？」

「いや、自爆しただけだよ…」

我ながら見事な自爆だ。

「…とりあえず、この後はどうしましょうかね。二人とも今日は上  
がらせるのが一番なんだけど…」

ブルブル、と内線が鳴り、悠里さんがスピーカーモードに切り替える

『店長！人手が足りません！早く、早く増援を…次、三番に持つて…！…お願いですから、増援を…』

厨房前で練り広げられる喧騒の生ライブ。

本気で忙しそうだ。

「…とりあえず、俺はフロアに出ますよ。」

一度は外したウィッグをつけ直し控室から持つてきていた生徒手帳は控室のロッカーに私物と共に再度封印。

「遙ちゃんは…今日は帰ってもらってもいいわよ？」

「わ、私も出ます。」

抜けた腰も戻った様でよどみなく立ちあがる。

「元々、スタッフが足りないからヘルプ要請だしたんでしょう？あたし等が抜けたら完全に人手不足じゃない」

俺らを眺め呆れたふうに溜め息をついた悠里さんは軽く目を瞑り、

「それじゃあ、二人とも。閉店まで、休めないと思ってよ？」

目の色を仕事人のそれに切り替えた悠里さんはそう宣言する。

「望むところですよ」

「任せて」

その後、本当に閉店で最後の客を送り出すまで休憩どころか立ち止まるヒマすらあまりなかったのだが、それはまあ、嬉しい悲鳴だ。

「……………」ありがとうございます……………」

最後の客を全員で送り出し懸看板を『close』に改める。

「はあ…すごい混みようだった」

「もうクタクタ」

「一大事件もあつたし、ねえ」

そんなふう言いながら近場の椅子にもたれかかる他のスタッフたち。

そんな中で俺は一人、まだ残っている片づけを進める。

「橙屋さん、まだ平気なんだ。パワフルねえ」

誰かがそう言うのを聞いて、佐伯（妹）が苦笑いを浮かべるのが見えた。

…まあ、現役男子高校生のスタミナはわりとバカにならない。  
オマケに俺は町中を走りまわっての戦闘やら校庭中を駆け回る戦闘  
やら、と普通じゃない経験も積んでいる。

「度胸もあるし、なんか判らないけど強いし」

「それになんだか男勝りっぽいところもあるよね」

「きつと学校だと『お姉さま』て寄って来る後輩とかいるんじゃないの？」

そんな会話が聞こえてくるが俺は務めて聞き流すようにする。

「なんか好き勝手言われてるぞ？」

と厨房からコック長のおじさんが言ってくるが俺は苦笑をうかべて

「まあ、妄想させるだけさせときます。止めても無駄でしょうから」

「ははは、違くない。が、それは尻に敷かれた男の考え方だぞ」

わはは、と笑うコック長。

そんなセリフにちょっとだけ安心できてしまった俺がいる。

「こら、そこ。臨時バイトの橙屋さんに全部任せる気！」

悠里さんが見かねて発破をかけて動き出した彼女たち。

視線がなんとなく、怖かった。

「それでは、今日一日ご苦労様でした。色々トラブルもありましたが、無事で何よりでした。」

全ての片づけが終わったところで悠里さんが解散前の声かけをする。

「臨時アルバイトの二人は本当にご苦労さま。また明日もあるけれども、頑張って頂戴。それではお疲れ様でした。」

「……お疲れ様でした!」「……」

めいめいに散って帰路につく他のスタッフ。

一方で他の人と一緒に着替える訳にはいかない俺はまだ制服のままだ。

「さて、俺も着替えると…?」

こんこん、とノックする人影。

悠里さんがドアを開けに行く。

「お疲れ様。二人ともどうだった?」

「会長！」

「姉さん！」

現れたのは今回に限っては諸悪の根源と言ってもいい佐伯会長。

「二人とも頑張ってくれたわよ。とくに藤谷くんのほうは、『彼女に似てる』から。それにいい警備員ガードマンがわりになってくれたし、正式にアルバイトとして雇いたいわね」

「生徒会の方に影響の出ない程度…土日くらいなら良いんじゃないかしら？」

「……………勘弁してください」

溜め息をつきながら、俺は着替えの為に控室に逃げ込むことにした。

着替え終わって、化粧（もちろん、化粧していないようにしか見えないようにしたモノ）を落して出たら

『あ、普通に男だ』

と言われて嬉しいやら哀しいやら、なんだか判らない入り混じった感情に襲われた俺だった。

### #3 3 (後書き)

現在の主人公(誠)は一般人<誠<人外の化け物、って感じですが。銃に対しては…まあ、マシンガンで撃たれる経験が生かされたってことで。

### #3 4 (前書き)

今回はほぼ設定消化です。

が、どうしても必要な回でもあるんですけど..

「5月5日 GW三日目」

『橘高統夜似少女が強盗を鉄拳で撃退した』という話が広まった為に一日目以上に混雑したが、特にコレと言った事件もなく二日目は終わった。

代償として俺は精神力の殆どを消費してしまったが…

なので、愛想笑いやし過ぎでひきつる表情筋を休め、女に見せるために無理をさせた体を労り、消費しまくった精神力を回復させるべく、『ギリギリまで寝てやる』と定時起きた後に二度寝三度寝を敢行したのだが…

ピンポーン、ピンポーン

まるで『そんな怠惰は赦さない』と言わんばかりに鳴り響く呼び鈴。

ちなみに現在時刻は午前六時。

普通の訪問客が来るような時間じゃない。

「誰だよ……………」

やっとまどろんできたのに呼び鈴で完全に目が覚めてしまった俺は寝る事を諦めて起き上がる。

インターフォンの設置されている玄関に出て画面を覗き、俺は絶望した。

『やつほー、誠。元気してる？』

巨大な段ボールを抱えた人懐こい笑みを浮かべる女性と、何やら金属製のケースを抱え、苦笑いする男性の姿がそこにあった。

ガチャガチャ、という音が少しして、ガチャンと鍵が開けられてゆく。

『いつの間に合鍵を？』と思っただが、本来ならこの家に四人で住む予定だったのだ。

合鍵はむしろ持っていて当然と言える。

上下二つの鍵が解除され、最後の砦チェーンロックに全てがかかる。びいん、と突っ張って開くことを拒むチェーンロックだったが、不意に入ってきた金属製の『ソレ』を見て俺は青ざめた。

「わかった！今開けるから！」

流石に金属バサミでチェーンロックを切断されてはたまらない。

敗北宣言と共に俺はチェーンロックを解除する。

解除と同時にドアから離れるとドアの解放に必要なスペースから逃げ切った直後にドアが開いた。

「おっはよー！早速だけど撮影始めるよ。準備してるから朝ごはんの用意ヨロ。準備が終わったら撮影室に呼びに来てね。撮影室は玄関のつきあたりね」

言いたいだけ言って、すぐに行動を開始するこの女性こそが巷で名が知られているファッションデザイナー『ゆうきかずは』にして再婚で苗字が変わり『遠野』になった俺の実の母『藤谷和葉』その人である。

追隨する男性は再婚相手…俺にとっては血のつながらない父親になる人はカメラマンの遠野純一さん。

彼も苦笑いしながら『楽しみにしてるよ』と言ってくる。

「はあ…」

俺は盛大な溜め息をついた後にちよつと寄り道をしてから台所に、四人分の朝食を作りに行くことにした。

\* \* \*

高槻楓は怒っていた。

『五月五日は開けておいてね』と念を押したにも関わらず完全にすっぱかされ、おまけに『ごめんなさい』のメール一通以外全く連絡も取れない幼馴染みに対して、物凄く怒っていた。

それこそ、周囲に居る動物がびっくりして逃げ、道行く人が道を譲る位に。

「うー」

折角、色々頑張ったのに。

折角、色々準備したのに。

折角…、折角…、折角…、

なんだか自分がバカにされているみたいな気分になって、楓はそれを誠にぶつけるべく、待ち合わせ場所から家に向かって直行していた。

で、門扉の前に着いた時。

「あれ？」

マナが黒ネコの姿のまま塀の上で昼寝をしているのを見つけた。

「やー、マナちゃん。とーやは？」

「うにやう」

「え？お客さん？…ふーん」

傍から見ればネコと喋っているだけだが実際は思念通話的なもので普通に会話していたりする。

「…まあ、入ってみれば判るか。マナちゃんはどつする？」

「うにゃ」

「そっか。」

そのまま昼寝を続けるというマナをそのままに進んだ楓はドアの傍らにあるインターホンを押す。

ぴんぽーん

『はい、どちらさま？』

思いがけず、女の人の声だった。

楓にも聞き覚えがある声だが、疑問も生じる。

「えっと、高槻です。ま『ああ、楓ちゃん？いま開けるわ』…あれえ？」

なんでかインターホンの向こう側で『止めてくれ！』とか叫ぶ声、それも誠の声が聞こえた気がして楓は首をかしげる。

おまけに『家に居るなら電話出る！』という怒りも再燃しふつつと再沸騰が始まる。

『かえでのいかりのボルテージがあがった』  
そうコメントが表示されてもおかしくないくらいに。

「久しぶりね。三か月ぶりくらいかしら。」

「あれ？和葉おばさん？」

その背後に逃げようとして逃げ切れなかった『誰か』が居た。  
外からだとちょうど影で顔は見えないが着ているものとかでたぶん  
女性だろう、と楓はあたりをつけた。

「誠に用があるの？」

「えっと、今日一緒に出かける約束したんですけど…」

楓の中でふつつつと燃え広がる怒りの炎は

「ちょっと、誠！女の子との約束をすっぱかしたって言うの！？」

「朝の六時半に突然来て、『撮影するから朝飯用意しとけ』、で朝  
飯食いながら『昼用の分作っとけ』、昼飯の用意が終わったら即拘  
束：なんて事して人の話を全く聞かなかった人のセリフか！」

憤慨して怒るその『女の人』は言うてから『あ、マズイ』と後ずさ  
った。

「えつと…とーや？」

「……………とりあえず、上がってくれ」

誠の敗北宣言ともとれるセリフに、楓はマナを呼んでから一緒に従った。

\* \* \*

「へー、びつくりだよ」

大体の説明を終えたところで楓はそんな感想を言ってきた。

まあ、『びつくり』で済んでしまうところが大分『定規のズレ』が大きくなってきた証拠なのだが。

「まさか、とーやがあの人気モデルだとはねえ」

「頼むから秘密にしておいてくれ。場合によっては俺が殺される」  
社会的、生物的、その他いろんな方面で殺されかねない。

……………ウチのクラスの連中のにあり得そうな対応が「『俺を女にする』という選択肢を選ぶ」なのが一番怖い。  
朝起きたら『おはよう。改造は無事終了した。』的な定型文はご免被りたい。

「まあ、次回分の撮影はもう終わったから、今から出かけたら？」

とか言ってくる母さん。

「…全ての元凶のセリフかよ」

「お昼時はちよつと過ぎちゃってるけど、二人で食べに行ったら？  
誠はどうだか知らないけど楓ちゃんは外食、あまりしないでしょ？」  
上、仕事にのめり込んで家事を全部俺（当時小学生）に任せただ人の  
セリフな。

当然、俺も外食は滅多にせず自炊だ。

「まあ、そうですね」

「それじゃ、軍資金はだしたげるから二人で行っておいで。」

俺はちら、と楓の表情をうかがう。

目を輝かせてる……………完全に行く気満々のようだ。

「…OK、判った。判ったから身支度をさせてくれ」

俺は今日何度目になるか判らない溜め息をついてから自分の部屋に  
戻らせてもらう。

いつも通りの私服に着替えた俺は『行きたい店がある』という楓に  
引っ張られて家を出発することになる。

塀の上に戻り、欠伸するマナだけが見送りだった。

\* \* \*

『行ってみたいお店があるんだ』

そう言われて付いて行った先にあった店の店名を見て、俺は愕然とした。してしまった。

『ウイステリア Wisteria トゥラリス trellis』

昨日まで俺が臨時バイトに入っていた店だった。

「あれ？とーや、どうしたの？」

「いや…どうしてこの店を？」

「んー、噂で『橘高統夜』そっくりの娘がいるって話だったから、面白そうだなーって」

店の外までかなりの人数が並んでいる状況で『それ、俺』と言う勇氣は俺には無かった。

「とりあえず、並ぶか？」

なんとなく『ちらちら』とこちらをうかがうような視線を感じるが、おそらく俺が楓といえるからだろう。

そう判断し、列の最後尾に並んだと同時に、口を押さえられ路地に引き摺りこまれた。

「ふー。即戦力、確保」

俺は『もがもが』、としか言えないが抗議の声をあげる。

声で誰が犯人かは検討がつく。

流石に昨日まで聞いていた店長の声を忘れるほど鳥頭じゃない。

「さて、今日も臨時バイトやってもらうよ。この混雑の火付け役サ  
ン？」

そのまま俺ははずると引き摺られ、路地側の入り口から店内へと  
拘束されることとなった。

着替えさせられている間に店長が

「この間の押し入り強盗、精神鑑定の結果『正気を失っていた』つ  
てことになったそうよ」  
なんて『何かのフラグじゃないだろうか』と思うような情報をくれ  
た。

\* \* \*

「あれ？とーやが消えた？」

楓は突然いなくなった相方をきよるきよる、と探していた。

「あれ？楓じゃない。一人でどうしたの？」

そんな楓に声をかける少女が一人。

「あ、遙。珍しいね。こんなところで」

同じクラスの友人、佐伯遙だった。

「んと、昨日までここで臨時バイト頼まれててね。ちょっと様子見。楓は？」

「えっと、と…幼馴染みと遅いお昼食べに」

『名前を出しても判らないだろう』と思い楓はあえて『幼馴染み』という単語を使ったが、

遙はそれを聞き、にやりと笑い

「そーか、そーか。彼氏と来たのか。で、その当の彼氏は？」

そう、深読みして肩をポンポン、と叩く

「そんなんじゃないって。まだ外堀埋めてる最中。それがさっき忽然と消えちゃって」

そんな遙に隠しもせず現状を語る楓。

遙は触れて惚気られても困るのであえて触れないことにした。

「不思議な事もあるもんだね。よかつたら一緒に入る？戻ってきたら私は出るからさ。」

「うーん、お願いするね。一人で入るのって、なんか躊躇っちゃうんだよね」

「あ、判る。」

それから少々、二人で取りとめない話をしていると順番が回って来た。

席に案内された二人が注文を終えたところで突然店内がざわめき始める。

「なんだろ」

周囲の客の視線を追うとバックヤードと表の境目あたりで二人のウイトレスがなにやら話しあっている。

「ねえ、遙。」

「なに？」

「ウワサの人って『あの人』？」

楓が『アレアレ』と指さす方向を見て遙は『ああ』と納得顔になる。

「ああ、『例の』ね。そうよ」

へえ、と感心したような声をあげまじまじ、と眺める楓

「なんか、プロっぽいね」

なんのプロだよ、と突っ込みをいれつつ、

「まあ、ああ見えて腕も立つ見たいだし…この間の押し入り強盗、片づけたのもか…彼女だし」

危うく『彼』と言いそうになった遙は内心で冷や汗をかいていた。

「へえー。『天は二物を与えず』って言うけど、例外もいるもんだね」

「意外と、生活破綻者だったりして」

「あははは、有りそう」

「そういやさ、楓の『幼馴染み』とやらはどんなヤツ？」

「うんとねえ」

遙は話をそらせた事でホツとし、半ば惚気話を聞きつつ料理が来るのを待った。

だが、お互いに知らない。

(ホンモノの『橘高統夜』が幼馴染みの『藤谷誠』だなんて)

(あの『橘高統夜似少女』が本当は男で『藤谷誠』って名前なんだって)

( ) (言える訳ないよね )

お互いに『言っではいけない』と思っている部分に居る人物が同一人物であることを。

(……………)

傍らを通り過ぎでもまったく気付かれないことに誠は溜め息半分、安心半分だった。

結局、楓と遙が『食後のお茶』まで終わらせ、『いい加減出ようか』となっても誠は戻って来ることは無かった。

まあ、悠里店長に閉店前に逃がす気が全く無かったから、だが。

「さて、また埋め合わせさせないと」  
「それじゃ、その時はあたしも呼んでもらおうかな？評価したげるから」

「……………」  
気付かれないままの誠は笑顔で送り出しながら内心で滝のような涙を流していた。

### #3 4 (後書き)

これにて『ユールデンウィーク魔の五連休編』前編の終了ですが、まだ第三話は続きますよ？

「五月六日 GW4日目」

『いい？明後日！明後日に突然いなくなった埋め合わせをしてもらうからね！』

そんな留守電を聞いたのは四日目の朝のことだった。

一日中動き回りながら、食事は夕飯一回（料理する気力が底をついていたからカップ麺で妥協した）なんていう不健康な生活に俺は『今日はもう一日何が有っても動くものか！』

と懲りずに、『二度寝二度寝当たり前、怠惰上等』という憧れ（？）の墮落生活を今日こそ……

そう決意し、二度寝を執行しようとした数分後、携帯電話にメールが届いた。

「このパターンは……………」

ここまでの三日間、朝すぐに連絡があった時というと全て『用事があるからすぐ動け』という連絡だった。

『二度あることは二度ある』

そのことわざが頭をよぎる。

『無視してしまえ』という気持ちも罪悪感に負けて俺は携帯電話を開く。

『差出人：聖奏学園生徒会　タイトル：緊急招集』

無視しなくてよかった。

本気でそう思った。

メールの内容を見ると集合時間と俺宛の伝言。

「九時に学校集合か。」

まだ二時間ほどあるが、伝言によると『睦斗警察でここ数日の事件ファイルの写しを貰って来い』という指示が出ている。

「二度寝はマズイな。これは」

クローゼットにかけてある制服を出しておきマナを起こす。

生徒会アドレスから来た連絡で『緊急』となると心当たりはただ一つ。

「『裏』の事件、か」

まったく、休む暇のない連休だ。

そう、何度目か判らない溜め息をつきつつ俺は支度を急いだ。

\* \* \*

「休みに悪いわね」

『緊急事態、なんでしょ？』

『なら、仕方ないわよ』

生徒会室には聖奏生徒会の面々以外にも、第六高校の吉川会長、第四高校の有沢会長、第三高校の藤堂会長、それに睦斗学院の藤澤会長が画像通信（インターネットを利用して）で集まっていた。

「早速だけど、本題に入らせてもらっわ。…睦斗市に魔術師が侵入したわ。目的はおそらく魔法へ至る為の『儀式魔術』の実行。我々はこの阻止に当たります。」

佐伯会長の断固とした態度に俺たちは息を呑む。

『すまんが、質問だ。何故儀式を行わせてはならないんだ？それに何故わざわざ片田舎である睦斗市でやる必要があるんだ？』

そんな中でこの場に居る唯一の『魔術師関係者』ではない藤澤会長が疑問の声をあげた。

「…それじゃあ、説明するわ。先ず、概念として『霊地』って言うものについて。」

佐伯会長が何やらペンで線が数本書かれたこの地方の地図をカメラに向けた。

「この赤い線と青い線、どっちも地脈っていう『力』の流れているラインなんだけど、丁度この交点に睦斗市があるの。」

ペン先で指す地点には確かに『睦斗市』という文字。

「こつやって『地脈が交差している場所』は魔力や霊力っていうた『力』が集まり易いのよ。だから、睦斗市には化け物の出現率も高いし精霊がいる率も高いの。…こついう場所を『霊地』って言うんだけど…」

佐伯会長は地図のページを変え、日本地図を開く。

そこには『赤い点』が沢山あった。

「当然、ここ以外にも沢山あるわ。日光とか出雲とか、京都や東京もね。当然、日本以外にも世界中にある。」

そんな中でただ一つだけある『黒い点』を佐伯会長は指す。

「そんな霊地の中で唯一つ、他にない特徴を持った霊地があるの。」

『それは?』

「睦斗。ここは地殻エネルギーが潤沢にあり、なおかつ地脈の交差点。更に百年くらい前の地震で起こった断層で力が『溜まり易い』の。どう?大量の魔力を使う儀式をやるには持ってこいでしょ。まあ、そうポンポンバカでかい魔力を使う儀式をされると霊地に悪影響を与えちゃうし、『魔術の秘匿』が出来ないから取り締まる『管

理組織』がある訳だけど…」

ただし、それは魔術師に限らず『陰陽師』だったり『神主』だったり『法師』だったりと色々だが。

それを知った時俺は『事実は小説より奇なり』という言葉が本当だと改めて思わされた。

ちなみに睦斗市に関しては俺たち『学生術師連合』とOB・OG会が管理に当たっている。

…と言っても、俺が関わることになったのは今回が初めてだが。

『で、その特徴とやらは何なんだ？』

「世界の壁が薄いのが。『脆い』と言い換えてもいいかもしれないわね」

『世界の壁！？』

突拍子もない話で藤澤会長が裏返りかけた声をあげる。

「そう。その外側に何が有って、壁が壊れると何が起こるかは『やってみないと判らない』けど、『取り返しがつかないことになる』のは確かよ。」

ごくくり、と息を呑む音。

「昔、睦斗市で儀式を行った『魔術師』が居ただけけど、その時は『異次元の存在』と思われる怪物が大量に流入してきて大惨事になりかけたわ。」

『！』

「それは戦後すぐだったから被害はそれほど多くなかった。けどそれ以来このあたりでは『幻魔』と呼ばれる怪物が現れるようになったわ。だから術師連合が出来て、儀式をやるうとする術師を拷問レベルの袋叩きに遭わせたり怪物の処理をするようになったんだけど」

『そうだったのか………』

「判ってもらえたようね。事の重大さが。」

『ああ。だが、どうするんだ？』

「今から各校に指定するポイントに監視を配置してもらっわ。各地点に必ず魔術師か精霊が一人は居て、単独行動ではない事が必須条件。」

『…つまり、術師と武装生徒の混成部隊ってことか』

『交代要員の確保もしないといけないわね』

考えるように顎に手を添える会長方

「術師連合OB会にも要請を出して人を集めます。それと並行して<sup>ウチ</sup>聖奏で関係各位への事情説明と情報収集。判り次第遊撃戦力に連絡を回すわ」

『『『『『了解』』』』』

「それでは、この場は解散ね。担当してもらおう指定ポイントは会長宛のメールで送るわ。執行部に関しては一括して藤澤会長に送ります。班構成、よろしく。あと監視担当の責任者は担当地区の生徒会長に一任します。執行部は対魔術師戦のスキルを得る為の実戦訓練だと思ってください」

『ああ』

『任されたわ』

『了解』

『不本意だが、了解した。次からは足手纏いと言わせないつもりだ』  
それぞれで言って通信が切れる。

ふう、と一息ついた佐伯会長は席を立ち、

「凜と梨紗で市役所を初めとする関係各位に連絡」

「はい」「了解」

「氷室君は各校へメールで指定ポイントを送って。」

「ういっす」

「藤谷くんと楓ちゃんはここ一週間の事件事故から『魔術に関わり  
のありそうな件』をピックアップして地図上<sup>マッピング</sup>に記入。」

「了解です」「はい」

「さあ、怖い物知らずの術師<sup>バカ</sup>を懲らしめに行くわよ」

会長の声を受けて氷室先輩はパソコンに向かい、矢吹先輩と梨紗先輩は荷物をまとめて出かける支度を始める。

俺と楓は会長に渡された地図と今朝受け取って来た資料をデスクに広げ作業を始める準備をした。

\* \* \*

「うーん、これは…」

「見事に散らばってるね」

二人で魔術に関わりのありそうな事件 たとえば俺が遭遇したウィステリアでの『犯人が錯乱していた』などの発生場所をピックアップしてみたが市街全体に散らばってしまった。

事件全体は黒い中抜き丸、魔術関連はその中を赤く塗りつぶしたのだが、塗りつぶされた は到る所にあり共通点など見出すことはできなかった。

「ここから共通点を見出すのは一苦労…」

俺は調書のコピーを見て『もうひとつマッピングできる要素』を見つけた。

「楓、事件事故の犯人の現住所をマッピングしてみよう」

「え？」

「手掛かりになるかもしれない」

マッピング作業中、ふと『またか』と思ったことを思い出した。

それは犯人や事故を起こした人物の現住所。

もしかすると、そこから何か見つかるかもしれない…

そう思つて青い点を書き込み始めたら、見事に『ある数か所』に集中した。

いくつか例外的に飛んでいるのもあるが、十分に無視できる『誤差』だ

「会長！」

「何か判つたの？」

会長が俺と楓の間から地図を覗きこむ。

「この黒ぶち赤マルと青マルは？」

「黒ぶちが事件全体、黒ぶちの赤マルが魔術関連と疑われる件、青マルは原因となつた人の現住所です」

楓が説明すると『なるほどね』と呟く会長。

「二人でこのポイントを回って、周辺にある『地脈の澱み』を片っ端から『監視の目』を配置して来て」

会長がA7版のノートを投げってくる。

開くと中にはびっしりとルーン文字と何やらアルファベットやらギリシャ文字やら、よく分からない文字で式が書かれていた。

「そのの1ページ目が探査、8ページ目が監視用、9ページ目が認識障害で次は結界。基本は探査符と同じよ。」

それは『プログラム式』と呼ばれるルーンをベースにした『魔力を流すことで誰でも使える魔術』の方式の術式集だった。

「了解しました。」

ちら、と楓の方に視線をやると既に席を立ち鞆を用意している

「緊急連絡は私の携帯電話に。部室の電話を使うよりも確実よ」

「それじゃ、連絡しないで済むことを願いますよ」

「頑張つて来いよ」

「それじゃ、いつてきます」

地図は楓の鞆へ、術式集は俺の制服の内ポケットへ仕舞い出発した。

\* \* \*

「これで終わりだね。」

出発から一時間、地図上で青マルの集中している地区の『魔力溜ま

り』全てに認識障害をかけた監視術式が設置し終わった。

「ああ……………」

俺はなんとなくだが『気持ち悪さ』が付きまどっていた。

「どうしたの、とーや」

「いや、なんだか『狭すぎる』『気がしてな」

「狭すぎる？」

そう、青マル集中エリア付近といってもそれほど広い範囲では無い。

「まるで『このあたりで実験をやる』と言わんばかりだろ？」

俺は思い立って携帯電話を取り出し佐伯会長に電話をかける。

『どうしたの、何か問題が？』

「いえ、ちょっと気になったことが有って」

『気になったこと？』

「青マルエリアが狭すぎるんですよ。だから他の地区の魔力溜まりにも監視を配置しようと思います。良いですよね？」

『まあ、維持に使う魔力が持てば…だけど』

「それじゃあ、『念の為』に廻ります。楓はどうします？」

『今のところ、本部は問題なし。楓ちゃんの判断に任せるわ』

「了解」

電話を切ってポケットに戻すと楓が寄って来る

「どうだった?」

「こっちに任せるってさ。楓はどうする?学校に戻るか?」

「行くよ」

「わかった。それじゃ市内巡りだ」

それから市内全部の『魔力溜まり』をめぐり監視術式を仕掛けてゆく。

全てに配置が終わったのはもう日が暮れそうな六時近くのことだった。

### #3 6 (前書き)

これで『魔の五連休』はあと一日残ってますけど終わりです。  
残る一日は『魔の五連休 事後処理編』ってところでしょかね。

「まったく、無茶苦茶ね。」

学校に戻って一番最初の声が会長のそれだった。

生徒会室の壁に貼られた地図には銀色に光る点がかなりの数ある。

それは俺が配置して廻った監視術式の反応なのだろう。

「まあ、全部に配置できたのは有り難いわね。…後は動きを見せるまで待機、ね。」

「他の学校の面々も俺が監視術式の配置が出来た時点で近場の拠点到に引き上げて休憩中だそうです」

拠点というのは学校だったり、公園だったりするのだが…

「ところで、夜まで拘束しちゃって構わないんですか？」

俺はふと疑問に思ったことを聞いてみた

「大丈夫よ。その為の『生徒会活動』だもの」

「なるほど」

生徒会での活動で突然の呼び出しがあった、厄介な件なのでヒマがかかった。という流れなのだ。

「それに、生徒会役員になる魔術師系生徒の親も基本的には元学生術師連合関係者よ。」

だから、学生術師連合は成り立っているという訳なのか。

「もとより関係者って事ですか」

「そういうことよ。…さて、この騒ぎの為のダミーイベントの企画も作っておかないと」

そう言いながら執務机に戻る会長を俺は苦笑いして見送った。

\* \* \*

事態が動いたのは時計が午後八時を指した頃だった。

突然地図上にあつた『監視用』の術式の反応が消えたのだ。

それもいくつも同時に。

青マルエリアが盛大に消えているがそれ以外にも数か所、消えている。

「ここまで分散して消えるとはね…各校で担当域の確認を。フォロ―は聖奏と睦斗学院で行うわ。連絡を怠らないで」

『判ったわ。』

『中々周到ね』

『了解した』

『第一、第二、第五へは出勤をかけたぞ。』

一気にあわただしくなる室内。

そんな中で楓がただ一人、地図を睨んでいた。

「どうした？」

「……………なんか引つかかるんだよね」

「んにゃ？どれどれ」

「何処がだ？」

マナと俺も地図を見る。

消えているのは睦斗市全体のうち睦斗中央駅のある中央、住宅地になっっている北部から東北部、繁華街が広がる西部

「……………南東部が空白地帯になってるな」

空白地帯といっても監視の術式が消されていないだけだ。

「……………乗せられたみたいね」

背後から会長が言った。

「乗せられたって……………」

「信乃、佐織、藤堂君、惣一、各地点の確認が終わったら監視役以外の動ける人数を南東側へ回して。ウチらで探すけど、確実に人手

不足よ。氷室君は梨紗と藤谷くん、楓ちゃんの三人と先行して。凜は大規模結界の用意をしておいて。氷室君が戻ってきたら現場へ。ひかりも、ちょっと覚悟お願い。」

その直後、南東側の監視点が円形に消えた。

「来たわ、一刻を争うわよ！」

「行くぞ！梨紗、藤谷、高槻！」

生徒会室を駆け出す氷室先輩について俺たちは駆け出し、屋上からコンの背中に乗って監視が消された地点の中心へと急いだ。

\* \* \*

「先輩、あそこです！」

俺がコンの背中から指さした地点は中心からは少し離れた公園だった。

「あそこに何が有るんだ！？」

「大昔に、一度空いた穴が有る筈なんです。俺も、資料を見てなかったらただの『大きな魔力溜まり』としか思わなかったと思います」

つまり、特大の魔力溜まりと思って内壁に穴を開け魔力を取りだそうとしたら外壁に「穴が開く」危険性のある場所。

俺も詳しいことを理解している訳ではないが、とりあえず『触れる

な危険』なのは確かだ。

「……………何も無いぞ？」

少し高度を落したが何もなくて訝しむ氷室先輩。

「認識障害か、あるいは結界の一種か…俺、飛び込んでみます」  
思い付く『理由』を挙げてみる。

佐伯会長ならばもつと的確に多くの種類を出してくれるだろうが、俺の知識ではそんなものだ。

「とーや!？」

「会長が言ってたろ。『一刻を争う』ってさ。」

それで『むう…』と唸る楓。

頭では納得しているが、感情が納得していない。そんな表情だ

まあ、わりと直情型だからなあ…

「大丈夫だ。任せとけ」

そう言ったら楓は泣きそうな顔をこっちに向け、瞬時に表情を切り替えて

「すー、はー」

大きく深呼吸、そのちに巨大な火球を発生させて『目標地点』に

叩きつけた。

が、途中で飛散する火球。

「結界か…」

「まだまだッ！」

続いて二発目、三発目を撃ち込む楓。

「氷室先輩、降りますから高度の維持、お願いします」

「おい！」

氷室先輩の制止を振り切って俺はコンの背中から飛び降りる。

今飛んでいる場所は地上十数メートル。

普通ならただじゃ済まないが魔術師には『その程度』の距離の落下を軟着陸にすることは可能だ。

術式集に魔力を流し、軟着陸。

魔力で形成した刀を結界につきたてる。

「結界つてのは、精密な術式だ。だから、力技の干渉には、弱い」

例外は矢吹先輩のような『異能』による結界だが、それでも破壊する方法が無いわけではないらしい。

俺はつきたてた刀から魔力を流し込み、術式に過負荷を与えてほころびを作る。

そのほころびに魔力が入り込み、術式に深刻なダメージを与えてゆく。

パキン

そんな、アクリルやプラスチックが割れるような安っぽい音を立てて結界が壊れた。

それと同時に、見覚えのある結界が辺り一面を覆う。

どうやら、結界の破壊と同時に矢吹先輩みかたが誰かが新しく張り直したようだ。

「ッ！」

結界の中では、既に公園の砂に描かれた魔方陣がまばゆい輝きを放っていた。

その中心に居るスーツ姿の男は結界の破壊に驚くが術式の阻止は不可能だろうという余裕か、笑みを浮かべている。

むしように腹が立つ。

思い切り地面を蹴って刀を振り被る。

「ッ！？」

驚愕に歪む、魔術師の顔。

容赦なく叩きこんだ一撃は目測通り腹を強打し魔方陣の外へと吹き飛ばす。

地面を転がる魔術師の男はそのまま起きあがってこなかった。

…気絶しているのだろうか。

だとすればなんて軟弱な……………

その時、魔方陣が輝きを失うどころか異常な輝き方をしていることに気がついた。

原因を探してみると、すぐに判った。

最初に踏み込んだ時と、吹っ飛ばされた魔術師が転がった時。その二回で精密に作られていた魔方陣を完全に壊してしまったようだ。

つまり

「暴走かよ……」

制御者を失い、従うべき術式を失った魔力が、暴発しようとしているのだ。

逃げるべきか、数瞬の迷いのうちに周囲に壁が再生してきた。

「ッ！」

壁が出来上がる直前にあの魔術師が吐血しながら起き上っていた。

「くそ……」

完全に壁に覆われた状態で俺は悪態をつく。

地脈から吸い上げられた魔力が渦巻くこの場所では精密な魔力の運用はできない。

俺が使う『魔力の物質化』だって、『イメージという型を壊さない程度』に注ぐ魔力を手加減しないと成立しないものだ。

足元からまきあがる魔力の奔流がまるで風のように感じる。

「…そうだ！」

その時に思いだした。

俺には沢山の精霊の残滓が取りついている。

そいつらに魔力を吸収させれば？

だが、その為には俺の体を通る必要がある。

「……………大丈夫だ。約束もした。大丈夫だ」  
持っしてくれよ。

そう祈りながら俺は大気中の魔力を吸い上げて自分の魔力にかぶせて使う術式を起動させた。

「グッ…」

みるみるまに巨大化する魔力球。

それと同時に幾柱もの精霊が力を取り戻して元の姿へと戻ってゆく。

「こんちくしょう、負けて、やるかよ！」

それを最後に、俺の意識は銀白の光に包まれた。

\* \* \*

「とーやあッ！」

楓は悲鳴のような声をあげて、光の暴風が渦巻く結界の中に居る幼馴染みを呼ぶ。

結界のすぐ傍らには口元に血がついたスーツ姿の男…今回の元凶となつた魔術師の姿。

『あんな場所で、自分の逃げ場をなくすような真似をするとーやじやない。だとすれば?』

その答えを楓は言葉ではなく手に巨大な火球で出す。

魔術の事はまったく判らないけど、最後の悪あがきをしたんだろう。そう思った楓はニヤケ顔で魔力が中を蹂躪する結界を見る魔術師にむかって巨大な火球を叩きつけようとした。

叩きつけようとして、梨紗に止められた。

「梨紗先輩！なんで止めるんですか」

楓は自分が涙目になっていることに気付かないまま声をあげる。

制御が甘くなつた火球は勢いを失って消える。

「それ、直撃させたら人間は跡形もないわ。たとえ魔術師でも、致命傷は避けられない。『それ』をやって藤谷くんは喜ぶのかしらね」

「…っ」

楓は息を呑んだ

「それに、アイツは『大丈夫だ』って言ったんだろ？信じてやるのが筋だと思うがな。コン、やってしまえ」

ふぎゆる、とコンに踏まれて止めを刺された魔術師はその場にぐったりと倒れ込む。

だが、『致命的な一撃』ではないのである程度時間が立てば復活するだろう。

その後で、術師連合による拷問が待っているのだが。

「大丈夫だよ。マスターの接点はライン切れてない。」

Manaがそう言いながら魔術師の頭を踏みつける。

普段『とーや』と呼ぶManaがあえて『マスター』という単語を使ったのは『魔術師と使い魔』という関係が維持されていることを語る為だった。

それが一応なりと無事であることを証明している。

「とーや……………」

『大丈夫』っていったんだから、信じてるんだから帰って来て。

祈らずにはいられない楓だった。

そして、結界の中を満たしていた魔力の奔流が散ると魔力の漏出を防いでいた結界が役割を終えたと言わんばかりに消滅する。

その中にあるのは小さな半円の結界。

半透明なそれからは中に人が横たわっている様子がシルエットで見取れた。

下手人の拘束、護送を執行部に任せた魔術師たちはその半透明の結界の解除を試みていた。

だが、堅牢なそれは中々に解除や破壊が出来ず、ただ補助系術師のプライドに傷をつけてゆくだけだ。

手詰まりになって一斉攻撃でもしかけてみようか、なんて話が上がったころ、楓がふらふらと結界に近づいた。

「ねえ、とーや。いつまでサボってるつもり？はやく出てきてよ」

ポツリポツリ、と眩き始める。

「…早く出てきて、皆を安心させてよ、とーやっ!」

だん!と楓の握りこぶしが結界の表面を叩く。

その時だった。

ぴし、と音がしてその場に居る全員が結界の方を見る。

よくよく見ると結界にヒビが入っていた。

ヒビがだんだんと広がると周囲からもやれ『英雄の御帰還だ』とか  
『ヒーローインタブューの用意しとけ』とか、『女子を泣かせると  
はけしからん。袋叩きの用意だ』とかの聲がし始める。

カシャン、と硝子の碎け散るような音をたてて結界が割れ、その場  
に居た全員が目を疑い、開いた口が閉じられなくなった。

#3 6 (後書き)

な、長かった……

前編15、190文字+後編8、251文字〓合計23、441文字

#1が14、000位、#2が11、000位だから単純に倍近い

文字数……

伏線と趣味を混ぜたのがいけなかったのかなあ……

あと、イツノマニPV1000トッパシテタンダロ……

### #3 7 (前書き)

当初は#4に回す予定でしたが流れ的にこっちの方がいいと判断してこっちに入れます。

『魔の五連休』最終日です。

『そこ』は異様な『場所』だった。

いや、『場所』という概念を当てはめる事すら躊躇われるような…  
むしろ『空間』とでも言えばいいのだろうか。

どちらが上でどちらが下か判らない…いや、そもそもで上下という  
概念の存在すら疑わしい、何もない『そこ』

そんな『ところ』に『それ』は漂っていた。

「……………多少の異差はあれこそ結果は同じ、か」

『それ』の傍らには虚無の空間に似つかわしくない、一人の少女の  
姿。

「それにしても、無茶をするわね」

見た目に反して尊大な雰囲気と態度を取るその少女は『それ』に手  
を触れる。

「『あの時』もそうだけど、ホント力技ね」

触れた手から広がる光が『それ』を包む

「さて、細工は終了。元の場所いるべきところに戻りなさい。へっぽこ『魔法使い』  
クン」

とん、と軽く押された『それ』はどこかへと漂ってゆく

押した少女の姿はもう、なかった。

\* - \* - \* - \* - \*

半円球の結界が割れた時、その場に居た全員の視界に『白いナニカ』が飛び込んできた。

それが『何なのか』を理性を持った知性が判断する前に

「男子は全員、後ろを向きなさい！」

奈緒のよく通る声が辺りに広まり、一斉に背を向ける男子たち。

この場で奈緒に逆らえる者などいない。

いれば女子によって袋叩きにされ魂に恐怖を刻みこまれるような目に遭うだろう。

だが、奈緒は何故そんな命令を出したのか。

それは結界の中身にあった。

結界に包まれていたのは胎児のように膝を抱えて横たわる、全裸の少女だったのだ。

「…なんで？」

一方で楓はそんな少女を目の前にして絶望に近い感情を味わっていた。

「どっして…」

本当なら結界から『参った参った』と苦笑いしながら誠が出てくる筈なのに

そんな思いが楓の頭の中を巡り続ける。

「撤収準備よ！氷室君、悪いけど学ラン借りるわ」

奈緒が啓作から上着の学ランを剥いで横たわる少女にかける。

「奈緒、事後処理は第六がやっておくわ。」  
第六高校生徒会長の吉川信乃が奈緒の肩をポン、と叩く。

信乃には、奈緒が無理をしているように、無理に感情を押し殺しているように見えていた。

まあ、当然だろう。と信乃は思う。  
なんせ、目の前で自分の後輩ぶかが誰だか判らない少女に変わってしまったのだ。

取り乱さないだけマシ、と言つのも酷なくらいだ。

「…頼むわ、信乃。何かあったら連絡を頂戴」

「判ってるわよ」

素直に申し出を呑んだことから信乃は予想を確信に変えた。

『奈緒は、かなり参っている』と

「さあ、さつさと隠蔽して撤収するわよ！」

信乃の、奈緒とはまた別の意味でよく通る声が結界で覆われて人気を失った公園を駆け巡った。

\* \* \*

「5月7日 GW5日目」

楓はじい、とベッドに寝かされた少女を見つめていた。

昨夜はショックで我を忘れていたが落ち着いてみると『なんかとーやに似てる』と思えてきたのだ。

楓とそれほど大きくは差のない身長などは別として、顔立ちも面影があるし、髪の色も一緒に髪型も殆ど一緒だ。

……『断崖絶壁』と評せる胸は同じ女性として同情をおぼえてしまったようだ。

そして何よりマナが『判断しかねている』事が希望と絶望を要り混ぜたような感情を楓に抱かせていた。

コンコン、と部屋のドアがノックされ、その後に楓の友人、遙が入室してきた。

『あれ？おかしいな。』と思いつつも『昨日は佐伯会長に泊めてもらったんだっけ』と思り返す。

「楓、ご飯持ってきたよ」

「あ、…ごめん。心配かけちゃって」

「あ、いーのいーの。家んちは土日でもムダに早いから。…その人？」

『五時朝食はあり得ないでしょ』なんて言いながら部屋にある机にトレーを置く

「…うん」

楓は力なく頷いた。

遙も楓と並んで一向に目を覚まそうとしない少女を眺める。

笑ったら可愛いだろっな、なんて思って、笑顔を想像したらちょっとドキッとした。

「ホント、生きてるのが死んでるのか判らないわね。」

遙の言う通り、少女には生气と呼ばれるソレが欠如しているように見える。

だが、規則正しく上下する胸が生命活動は行われていることを証明している。

「…楓、ちょっと触ってみたら？」

「え？」

「何かショックを与えたら起きるかもしれないし…」

「うっ…うん」

遙に促されるがままに毛布の下に埋まっていた手を握ってみる。

その時だった。

病的なまでに白かった顔色にすう、と朱がさした。

「あっ！」

遙の声で楓が顔を見た時、目がうつすらと開きかけていた。

\* \* \*

………俺は、どうなったんだ？

まるで幽霊にでもなってしまったかのような『感覚の無さ』に俺は寒気がした。

冗談じゃない。

俺は楓に『大丈夫、ちゃんと戻って来る』と約束してしまったのだ。

楓との約束は破る訳にはいかない。

ふと、誰かに呼ばれているような気がした。

同時に体中にくすぐったさと手に触れる暖かく柔らかい感触がやっ

て来る。

うすらばやけた視界と、かすかに聞こえるようになってきた音。

これは…2人分の声か？

ああ、起きなきや。

皆を待たせてるだろうから…

そして、ようやく意識が覚醒に辿り着いた。

\* \* \*

やっとはっきりしてきた視界には見慣れた顔と、見知った顔とまったく見覚えのない天井が映っていた。

全身が違和感だらけで、なんだか自分が自分じゃないみたいな感覚。だが、はっきりと『俺は藤谷誠である』と言える。

マナとのラインも生きてるし、何よりも『何か』がそう教えてくれる。

「…楓、それに佐伯さん？」

違和感に一つ追加、喉の調子もかなりおかしいらしい。声のオクターブが二つ近くは高くなっている。

ようやくはつきりしてきた視界に映る二人は揃って驚いていた。

「まさか…とーやなの？」

「それ以外の誰に見えるんだよ」

まわりつく違和感が酷くなる。

「ちょっと待ってて、姉さん呼んでくる」

佐伯（妹）が慌てて部屋を飛び出してゆく。

「何なんだ？」

「鏡…じゃ判らないか。」

そう言っつて楓は握っていた俺の手を俺に見せてきた。

まるで、小さい子供か女の子のようなか細い指だった。

でも、確かに握られている感覚があるからソレは俺の手なのだ。

「あれ？」

違和感が更に強まる。

「…あのね、佐伯先輩も一緒に確かめたんだけどね……………」

楓は言いにくいのかかなり躊躇った後

「女の子、なんだよ」

「はあああ!?!」

俺は余りの突拍子もない宣告に間の抜けた声を挙げた。

だが、そう考えれば体中の違和感も、この高い声も、細くなった指や腕にも納得がいく。

そして、原因となり得るものに心当たりも残念ながら、ある。

「ははは、冗談キツイな」

その少し後、佐伯会長が現れ俺に二、三質問をしてきた。

それらに即答したら『やっぱり、藤谷くんとか考えられない……』とか呟きだす

「どつしたんですか?」

その問の答えはさっきの楓による宣告と同じく

「藤谷くん、あなたはどうかやら女の子になってしまったみたいね」

そ、言うものだった。

流石に二度目なので取り乱しはしないで済んだ。

「どついつ事なんですか?」

「考えられるのは、あの時の魔力で別次元の『藤谷誠』である存在

と肉体が入れ替わったか、あるいは…」

ごくり、と楓と佐伯（妹）が息を呑む

「膨大な魔力を受け入れるために、体に変化したか」

「…なんですかそれ」

本気でそう思ったが会長は真面目な顔で

「魔力は性別で特性が違うのよ。男性は瞬間放出量が大きく、女性は最大魔力量が大きくなっていうね。藤谷くんの場合は膨大な魔力を体に入れてしまったから、体が崩壊するのを防ぐために体を作り替えた可能性があるの。」

ちら、と斜め上を見る会長

「そこに居る、精霊たちがね」

会長が言うには俺が消えると俺を頼りにして存在している精霊たちも消滅するしかない。となると、何が何でも生き延びさせようとする。その方法として精霊の力を使い、俺の性別を変えた（具体的にどうやるのかは知らないが）とか。

「まあ、いいわ。藤谷くんが姿かたちは別として、無事で」

皆にも伝えないとね

そう言って退出していった会長。

その直後に楓が気付いた

「あ、そういえば服はどうする？」

「服？」

「うん。背も縮んでるし、全裸で町中に出る訳にはいかないでしょ」  
流石に、それは無理だ。

「背丈としては姉さんと同じくらい…だったら私のも大丈夫じゃないかな」

それから『着替え』を佐伯会長が持つてきてくれるまで、俺は二人によつて着せ替え人形にされる羽目になった。

\* \* \*

「…と言つ訳なのよ」

聖奏学園生徒会の面々と会長陣の前で説明を終えた佐伯会長が俺の横に座る。

今いる場所は佐伯家のリビングだ。

事情説明の為に集まった面々に大体のいきさつと考えられる原因を伝えた結果、沈黙が続いている。

そんな中、

「まあ、無事で何よりだ」  
と氷室先輩が言った。

「ところで学校はどうするつもりなの？」

そう聞いてきたのは第四高校の有沢会長だった。

「その件は大丈夫よ。体育さえ欠席させれば問題なくそのままで行けるわ」

「…は？」

思わず、俺と有沢会長の声が重なった。

性別が変わり身長が十センチ近く縮んだというのはかなりの問題な気がするのだが…

「男子部の生徒は俺みたいな例外を除けば殆ど女に飢えてるからな。クラスに女子つばいヤツがいると喜ぶだけで追及とかしないだろうな」

氷室先輩が付け加えてきた。

何その、全然嬉しくない情報。

「まあ、問題なしってことよ」

「なら良いが」

「いや、全然よくないですから！」

思わずツッコミを入れた俺。だが

「なら女子部に編入する？読みは一緒に別の字を使えるから簡単よ」

「うぐうっ」

そう言われると黙るしかない俺。

「とりあえず、今日一日で今の体に慣れときなさいよ」

その一言が解散の合図となり会長方や先輩方がそれぞれ帰宅の途につく。

そんな中で俺は

「さてとーや。リハビリがてら一緒に歩こ。具体的にはブティック巡りだけど」

「あ、楓。私も参加していい？」

「もちろん」

反論の余地もなく、楓と遥（名前で呼ぶようにと厳命された）の二人に連れ回されることが決定してしまっていた。

助け舟を出してくれる人は、誰一人としていなかった。

#3 7 (後書き)

前後合計23 , 441文字 + 最後の一日3 , 988文字 = 27 ,  
429文字

我ながら、よくここまでやったなあ…という感が

# 4 1 (前書き)

第四話です。

後に『魔の五連休』と呼ばれることになった連休が明けた月曜日の朝  
俺は致命的な事に気付いてしまった。

「…制服が、ない」

ついでに言うと、生徒手帳や携帯電話もない。

土曜日の対魔術師戦のときにきれいさっぱり吹き飛んでしまったからなのだが、すっかり忘れていた。

一応ズボンや夏服用、ワイシャツは着回し用の予備を使えばいいが  
上着の詰襟が無いのだ。

「困ったな…」

とりあえず、サイズの合わないスラックスとワイシャツを着ては置くが、袖も裾も余ってかなり不自然だった。

遅刻が確定する時間が刻一刻と迫る

「…仕方ない。不慮の事故で盛大に汚れたから洗ってるってことにしよう。」

結果、いい訳を考えておいて諦める事にした。

違和感だらけだろうなあ…

そう思いながらも何かあったら会長に泣きつこうと安易に考えて俺は学校へ行くことにした。

\* \* \*

家を出た時間がギリギリならば到着するのもギリギリだ。

俺は予鈴が鳴る直前に教室に飛び込むことになった。

「セーフ」

なんとか予鈴前に教室に辿り着いた俺だったが、俺の教室到着と同時に連休明けの朝の喧騒がぴたり、と止んだ。

視線が俺に集まり、物凄く居心地が悪い。

「な、なんだよ」

そう言いながらも『やっぱり、違和感だらけだよな』と思う。

これは確実に認識操作とかやってもらわないと。

そう会長に泣きつこうと決めた直後

『『『『『萌えの神様、ありがとうございます！』』』』』』』

クラスに居るほぼ全員が祈りをささげながらそう叫んだ。

「…は？」

俺としてはただ唾然とするだけだ。

『いやー、流石神様。判ってらっしゃる』

『藤谷には姉属性が合うと思ってたが、やっぱり妹も有りだな。』

『小さいと和むわあ』

『あの制服に着られてる感がたまらん』

『ビバ、ロリ属性持ち男の娘』

ざわめきだすクラスメイトたち。

内容が物凄く不穏だ。

というか、どんな神か知らないが、そんなロクでもなさそうな神はさっさと滅んでしまえばいいと思う。

「おーい、お前ら。欲望ダダ漏れな声が廊下まで響いてるぞ。藤谷、お前も早く席につけ」

担任の今松教諭（35歳、男性、独身の数学教師だ）が現れた。

「あ、はい」

さっきのクラスの連中もそうだったが、先生もなんの違和感もなく俺と認識しているらしい。

『声もイイ…』

『罵られたい』

『いや、そこはやっぱり見た目からして「お兄ちゃん」だろう』

『同意はするが、お前がやるな』

『気持ち悪い』

『地獄へ落ちろ』

『ひでえ』

そんなに俺は小さいのか？

ともかく、お前ら全員地獄へ落ちればいいんだ。

そんな黒い事考えながら俺は自分の席に着く。

「それじゃ、出席を取るぞ。赤居」

「ういっす」

「朝牧」

「はいッス」

「おい、景山。どうなってるんだ？」

出欠確認中に俺は比較的席が近い、中学からの友人(?)である景山に声をかけた。

こいつは外面はスポーツ少年にしか見えないが中学からずっと写真部のカメラ小僧。被写体に問題が少々有るが腕は確かなヤツだ。

が、

「うむ。ベストポジションだ。これなら…む、どうした？」

返事の代わりに何やら不謹慎というか、不穏な声が帰って来た。

「いや、なんでもない」

こいつに聞いてもきつと精神的にダメージを受けるような答えしか返って来そうにないので俺は状況把握を諦めた

「次、藤谷」

「はい」

『はわあ……………』

…だからなんだよその余韻に浸るみたいな声は

結局、俺が制服の上着（詰襟）を着ていないことも背が縮んだことも特に問題に上がることなく授業が始まった。

…それにしても、何故に今日は音読やら口頭回答に当てられる回数が多いんだ？

\* \* \*

「だはあ ああ…」

放課後、俺は逃げるようにして生徒会室に行き、自分のデスクに突っ伏した。

本当は昼休みの時点で行くつもりだったのだが、これといって召集もかかってなかった（というか、かかっても連絡手段がない）し、クラスの連中に拘束されていた為断念した。

くうう…

そういえば、昼飯も食わせてもらえなかった事を思い出す

「……………今、食うか」

会長ほか先輩方や楓はまだ来ていない。

さっきまで梨紗先輩がいたが呼び出しされて入れ違いで出て行ってしまった。

つまり、俺一人なわけである。

久々の一人という環境はなんとも居心地がよくて

「……………平和だなあ」

まったく休めなかった連休を思い出し、そんな言葉をつぶやいていた。

楓が授業を終えて生徒会室に来た時、なんか制服に着られた子が一生懸命に弁当を食べていた。

当然、その『着られている子』が誠であることや、身長的には楓と大差ない（むしろ縮んでも誠の方が数センチ差程だが大きい）ことは知っている。

だが、『制服に着られている』という状態が小ささを強調してくれてより小さく見えるのだ。

その小ささで弁当を頬張っている姿がなんとなく小動物を思い浮かばせて楓の頬を緩ませる。

「はあー、なんか癒されるなあ」

「庇護欲刺激されるわねえ」

「一年の連中が騒いでたのはコレか。まあ、二年生も結構騒いでたが」

だんだんと集まる二年生。

上から順番に梨紗、凜、啓作だ。

が、誰も生徒会室に入らず、開け放されたドアの外からこっそり様子をつかがっている。

「そういえば、さつき職員室に行ったけど男子部の一年で授業を持つてる先生でうわさになってたね。確か一の三の担当だったかな」

そこに三年のひかりも加わる。

生徒会のほぼ全員が外から生徒会室の中を眺めているというのも、なんとも不思議な光景だ。

「……………何やってるの、みんな」

そんな一団を人間形態で冷ややかに眺めるマナ。

「…いい加減入ったらどうですか、先輩」

そんな声が生徒会室の中から聞こえてきて、一行はすでに気づかれていた事を思い知った。

\* \* \*

何故か小動物とか、小さな子供を見るような視線を向けてくる先輩や楓たちに疑問を抱きつつ、俺は箸を置く。

どうやら身長と一緒にいろいろ縮んだみたいだ。

三分の一くらい残すことになったが、『味見味見』と楽しそうな先輩やら楓が持つて行ってってくれてしまったのでまあ、良しとしよう。食べ物を無駄にするヤツは後で後悔するような目に遭うというのが俺がばあちゃんから受け継いだ教えだ。

「そつえば、こんな写真が出回ってるぞ」

氷室先輩が数枚の写真を差し出してきた。

空になった弁当箱を返してくれた女子陣が写真を覗き込む。

「あ、かわいい」

俺は背後から潰されかけながらも自分で写真を見て絶句した。

被写体は一人の少年(?)だ。周囲との身長差や制服のワイシャツに着られている感が小柄さを強調している。

まくってある袖がいい例だ。

そして細身ではあるが、どちらかと言えば少年というよりも少女と言うべき体つきをしているようにも思える。

顔立ちはやや幼さが残っているようにも見えるが少しだけ凜々しさとか、そう言った要素が見え隠れして中性的な魅力とでも言えるものを持っている。

人によっては『某ファッションモデルの幼少期の写真じゃないか?』とか言いだしそうだ。

が、よくよく見て比べればこちらの方が全体的に丸みを帯びているように見えるし、『女の顔』に見せるための化粧が無い分、『作<sup>つく</sup>為<sup>わざ</sup>的な美<sup>り</sup>しさ』もなくなり、より少女らしく見えるだろう。

そんな少年のおそらく授業中だろうか教科書片手に黒板のやや上のあたりに書かれた問題に身長面で四苦八苦して書いている姿やら、音読のために起立しているところとか、休み時間にぼーっとしている様子とか。

めんどいからぶっちゃけると俺の盗撮写真だ。

撮られる側としては、俺なんか撮っても面白くないだろ、と思うのだが

「これが一セット五百円で取引されてるそうだ。」

写真を裏返してみると写真紙に印刷されている文字が。

『提供：聖奏学園写真部

景山写真 』

「景山あ！」

あの野郎：と俺は中学からの腐れ縁（「友人（？）」から格下げにした）に『がー』つ、と吠えてしまった。

「写真部で男子部一年三組の景山君ね。」

楓が財布の中身を改めながら聞き返してくる。

そして五百円玉を見つけ、それを握りしめ生徒会室を出ようとする。

そんな幼馴染の手を俺はつかみ

「…買いに行く気？」

怒りながらにっこりと笑って言ってやった。

「ゴメンナサイ」

素直に謝って来る楓の顔色はかなりの割合で恐怖が含まれていた。

まあ、怒り笑いほど怖い怒り方は無いらしいからな。

「高槻、それはお前にやるよ。処分される前に回収しとけ」

「あ、はい。ありがとうございます、氷室先輩」

俺が持っていた分やまだ机の上に放置されている写真をすばやく回収する楓。

「…ちっ」

俺としては全部裁断処分するつもりだったが、手の届かない場所に持っていかれてはどうしようもない。

渋々ながらも諦め鉢を引き出しに仕舞う。

205

「そっいや藤谷。お前、なんでワイシャツなんだ？詰襟ねじりはどうした」と氷室先輩が気付いたように言ってきた。

「こないだの事件の時に、吹き飛んじやいましたよ。だから今朝困って、コレにしたんです」

その時、俺もふと気付いた。

あの時、俺は制服と一緒にポケットに入れていた携帯電話やら生徒手帳やらを一緒に吹き飛ばされてしまった。

生徒手帳が無い。それは生徒会役員章が無いという事であり生徒会フロアに進入した時に『強制発動陣』に引っ掛かる筈なのだ。

だというのに、このフロアに足を踏み入れた時には何も起こらなかった。

前の時は取りついていた精霊たちが具現化する為に俺から必要な魔力を吸い上げて大変な事になったというのに。

それは、つまり……

『もう、取りついている消滅しかけの精霊は居ない』

みんな復活を遂げて去っていったのだろう。

よくよく考えればあれだけの魔力があったのだ。

俺の体に大量に流れ込んで収集がつかなくなるほどの量だ。十分完全復活に至れる量だろう。

むしろ、俺の体が耐えきれなくなるほどの魔力が残ったのだ。完全復活出来ていないハズが無い。

そう考えたら、永いこと身近に居た存在がいなくなったという思いが浮かび上がって来てちよっと『寂しい』と思ってしまった。

「とーや、どうかした？」

楓が心配そうに顔を覗きこんできた。  
急に黙ってしまったから心配してくれたようだ。

「あ、大丈夫。取りついていた精霊たちがいなくなったなって、思っただけ」

取り繕って顔を元に戻す。

戻そうとして変な顔になってしまったが。

困った、この身体になってから感情を押さえるのが苦手になって来たみたいだ

「あら、みんな揃ってる？」

佐伯会長が二人ほど見掛けない付き人を連れてきた。

男女一人づつだ。

二人は会長に連れられて俺たちの前に立たされた

「この二人が新たに生徒会役員に加わることになったわ。はい、二人とも自己紹介」

「えっと、あか城晶赤城晶うらです。よろしくお願いします」  
「しのだ まさと篠田雅人しのだ まさとです」

妙な時期に…と思ったがまだ入学して一ヶ月ほどしか経っていない

ことを思い出す。

入学早々の四月に生徒会の役員となった俺たちが異常なのだ。

まあ、その一ヶ月の間に修羅場を何度も経験したせいで、もう長いことこの生徒会に居たような気分になりつつあるが。

「二人とも一年生だから、しっかりと先輩やってあげてよ。それじゃあ、今度は現役役員から自己紹介。」

会長のセリフに従い、氷室先輩、梨紗先輩、矢吹先輩、夏元先輩が俺たちの時と同じように自己紹介をして俺たちに順番が回って来た。

「えっと、高槻楓です。私も今年の四月に入った一年生です」

「同じく、藤谷誠。」

俺は楓の自己紹介にのっかるようにして『以下略』にしてしまう事にした。

これで三年二人、二年が三人、一年が四人という人数構成になるのか。

「それじゃあ、後は適宜親睦を深めておいてね」

その一言で『生徒会室』から談話コーナー状態に戻る。

「えっと、高槻さん？同じ学年って言ってましたけど、何組なんですか？」

「私は三組。あ、よかったら私のことは名前呼びの敬語無しで。同

級生だし」

「それじゃあ、私も同じく。藤谷さんは…なんで男子の制服？」

と、赤城（新入生「女子」）が聞いてきた。

まあ、意味は判るし正しい意味では的を得た質問だ。

「…俺はおと「嘘だッ！」」

俺は途中で声を遮ってくれた赤城に怒りを込めた視線を送る。

「どう見ても女の子にしか見えないわよ。」

「色々あってこんなんだけど、まあそれは会長の説明を受けてから話すよ」

俺は諦め半分、この先に待つ労力の量の想像に軽い絶望を覚えて溜め息をつく

「そうそう。こんなかわいい子が女の子の善ないじゃないか」

そんなことを言う篠田（新入生「男」）

「それも違つと思つぞ」

氷室先輩がツツコミを入れる。

その時だった。

ピロロロロ…

誰かの携帯電話に連絡が入った。

その場に居たほぼ全員が自分の携帯電話を確認し、違う事にホツとする。

「ちよつとごめんなさい。 はい、佐伯です…はい。」

電話は会長の携帯宛だった。

「判りました。 それでは。 氷室君、各校に招集をかけて。 事後処理班総出で例の穴を再確認するわ」

「何が有ったんです？」

パソコンに向かい、メールソフトを起動させながら氷室先輩は尋ねる。

大体、このパターンだな

「例の穴の跡地から魔力反応が出たらしいの。 最悪の場合、穴が開くわよ」

「了解。 大至急招集をかけます。 ポイントはあそこですね」

氷室先輩と佐伯会長のやり取りを聞きながら、俺たちは出動の準備をする。

新入りの二人はどうすればいいのか判らなくてオロオロしてるだけだが。

そんな二人の肩をポン、と叩く佐伯先輩。

「丁度いいわ。二人は『私たち』がどんなことをやっているか生で見れるわよ。氷室君、現場に出てからの二人のお守、よろしくね」

「コンで上空遊覧が精々ですよ？」

「まあ、それも貴重な体験よ。説明も大分省けるわ」

「了解。ちょっと待ってるよ、二人とも。いま出る前の支度を終えるからな」

「梨紗、藤谷さんと楓ちゃんを連れて先発して。現場では護衛役をお願い」

「判りました。行くよ、二人とも」

「はい」

「了解」

その時、なんとなくだが胸騒ぎがする。

だが、それを振り払って先をゆく二人を追いかけた。

#### # 4 2 (後書き)

はい、今回は『少女化誠』の見た目を一応書きました。

実は『気持ち似てる』だけで『まんま』では無かったりするんですよ。

だって、化粧して作った顔とそのままの顔で同じって、あり得ないじゃないですか。

現場に到着した時、既に第六高校の事後処理班が結界による包囲を行い、現場の観測を行っていた。

少数の戦闘班が彼ら事後処理班の前で『不意の会敵』に備えている。

俺たち聖奏学園先発組もその前衛の一部に加わり警戒に当たるが計測班からは『高まったまま妙な安定を見せている』という不思議な声しか上がらない。

だが、今いるメンバーでは『何かして最悪の事態になった場合対処が出来ない』という理由で手を出せずに居た。

その間も俺の胸騒ぎはだんだんと大きくなってくる。

まるで、体の中で何かが遠吠えをしているような、そんな感覚だ。

到着からしばらくたち、後発組の先輩や第六高校以外の学校の事後処理班の集結が完了した頃には、『胸騒ぎ』なんてかわいい物ではなくなっていた。

鈍痛が体の中を響くような感覚と体の中の魔力が渦巻くような熱っぽい感覚が入り混じって『何か』を引き起こそうとしている。そんな気がした。

そして、時計の針が更に進んで日没を迎えた時

「グッ…！」

俺は突然の動悸に襲われその場にうずくまった。

「とーや！」

「藤谷くん!？」

すぐ近くで警戒に当たっていた二人が駆け寄って来るが俺には反応を返す余裕すらなく、ただ苦しさで戦っただけだった。

ワイシャツの心臓の辺りを握りしめ、体中を『熱いナニカ』が駆け巡る感覚と鼓動と同期してやってくる激痛に耐える。

「わっ！」

「きゃあ!！」

二人が『見えない壁』にでも跳ね飛ばされたかのように俺から遠ざかる。

実際、跳ね飛ばされたのだろう。

二人は尻もちをついているし、俺を中心として魔方陣らしき紋様が展開されていた。

「まさか、遅延発動するような術式でも仕掛　　!？」

そんな佐伯先輩の声も足元からまきあがる魔力の渦が立てる音に掻き消されてしまう。

一体、何が

『ぱちん』という甲高い、何かのはじけるような音が頭の中で響いたかと思っただら目の前が真っ白になった。

だけど、不思議と恐怖は無くただ『暖かいな』とだけ思った

\* \* \*

「……………お手上げよ。」

聖奏学園化学部　術師連合の技術部でもある彼らの長の霧島紗枝は溜め息について仲間たちに報告した。

「そつ……………」

あからさまに落胆する奈緒。

その周辺には悔しさに顔をゆがめる『探査』が得意な術師たちと苦虫を噛みつぶしたような顰めつらをする各校の会長たち。

彼らの前には一つの物体があった。

それは人間一人が入れるようなサイズの『繭』に見えた。

曇りのない銀糸で編まれたように見えるそれは月の光を浴びて神々しいまでの美しい輝きを放っているが、この場でそんな事を考えられる者はほとんど皆無だった。

何故か。

それはその『繭』が同僚である藤谷誠を呑みこんだ魔力の渦が消えた跡に残されていたものだからだ。

その繭の出現と同時に妙な高まりを見せていた魔力反応は一気に沈静化してしまっただが…

「ただ、一つ言えるのはこの塊は薄い膜の内側に膨大な魔力が渦巻いてるってこと。もしかすると本当に『繭』その物と言えるかも…」

繭と言うものは一般に昆虫の幼虫が成虫への変態をするために作る蛹の一種で、その中では幼虫の体を生存に必要な一部箇所を除いた全部を一度ドロドロに溶解させて再構成が行われていると言われる。その為、繭や蛹はちょっとしたダメージで中の虫は死んでしまうと言われている。

その為、紗枝の『繭そのもの』という言葉は重大な意味を秘めていた。

ぞくり、と嫌な予感がある場所に居る面々によぎる。

「でも、だからと言ってこの場所に放置するわけにはいかないし、

結界を張り続ける訳にも……………」

その時だった。

「え？」

繭が、魔方陣ごと浮かび上がったのだ。

ざわめく面々をよそに浮かび上がった繭の周囲に色とりどりの光が現れた。

「…精霊？」

誰かが呟く。

現れた精霊たちが何者なのか判る者はこの場に居なかった。が、誠が見れば一発で気付いただろう。

彼らは先日、魔力の奔流に吞まれるまで彼に憑いていた精霊たちである、と。

「あー！あの連中！」

「知ってるの？マナちゃん」

声をあげたマナに尋ねる楓。

繭が現れた時は卒倒しかけた彼女だが、『今度もきつと戻って来ると信じて毅然としている。』

「知ってるも何も。アレ、みんなこの間まで誠に寄生してた精霊だよ。一昨日から見なくなっただけど、ここに居たんだ。…ん、何なに？」

マナが何やら会話らしきものをする。

楓を初めとする異能者や魔術師には聞こえないが、元精霊のマナには聞こえるらしい。

「繭を運んでくれるって。場所を指定してくれば安全に、振動一つ与えずに」

その申し出は渡りに船だった。

簡単な協議の結果、藤谷家の『撮影室』に繭が運び込まれることになった。

これには、繭の中に居るであろう誠の家であること、楓がそう希望したこと、そして『誰も立ち入らない場所にできる事』が理由となった。

運び込まれた繭は輝きを放ち続ける。

その中に、まだ影は見えなかった。

\* \* \*

それから一週間、楓は帰りに誠の家に寄ってから帰るのが日課にな

っていた。

「ヒスイさん、様子はどうですか？」

安置所となった撮影室に入り、楓は付きっきりでいられない役員たちの代わりにマナと一緒に見守り続けている元精霊に話しかける。

彼女は元は睦斗学院の藤澤会長の契約精霊あじほしだった。

『襲撃事件』の一件の時に消滅の危機に瀕したが誠に依って生き長らえていたのだ。

そんな彼女が恩人の為とついてくれていた。

「時々、動いてるみたいですが…」

「まだ、羽化には時間がかかりそうだよ」

そういうヒスイとマナ。

三人で繭を見つめると光の中につっすらと胎児のように膝を抱える影が映っている。

部屋の片隅には七日の件で吹き飛んでしまった制服や生徒手帳、生徒会役員章などの持ち物と一緒に用意された携帯電話（バックアップがあつた電話帳は復旧できた）。

手にとって開いてみると（表向きは流行性の結膜炎出席停止中になっているので）彼の知り合いやクラスメイトからの見舞いのメールがかなりの数届いていた。

その時だった。

ピロロロロ...

「あっ」

誠の携帯電話が鳴り、思わず取ってしまった。

『ああ、やっとつながった。誠、聞こえてる？』

「和葉おばさま？」

『あれ、その声は楓ちゃん？どうして誠の携帯にかけて楓ちゃんが... まあいいわ。誠は今手が離せない？』

「あ、はい。ちょっと身動きが取れないみたいです」

決して、『繭』を見せる訳にはいかない。

そう思って楓は答えを選ぶ。

『ふーん。何やってるの？』

「え、えつと...」

その間に『たぶん繭にこもってます』なんて答えられるはずもなく、また良い答えも思い付かず、楓は言い淀む。

『まあ、いいわ。今、誠の家に居るんでしょ？ちょっとそのまま待ってて。これから行くから』

「えっ!？」

『今、誠の家に居ると知っている』『これから来る』『二つの意味で楓は声をあげてしまった』

『じゃ、待っててね』

ぷっ

「あ、あのッ……切られちゃった」

楓は頭を抱えなくなった。

(たぶん)一般人の和葉に『魔術師』や『精霊』といった『裏』を知られる訳にはいかない。

「ヒスイさん、認識障害とかできませんか？」

「私は『風』の精霊だから……できるとすれば結界で覆って入れなくすることぐらいしか……」

「何でもいいから、繭を見せないようにすればいいの」

「……判りました。やってみます」

楓は撮影室の外に出ると、撮影室をヒスイが結界で覆う。

「マナちゃんは猫になって、飼い猫のフリをお願い。」

「判った」

黒猫の姿になるマナ。

あとは最悪に供えるだけと記憶操作や認識阻害と言った術の専門家である奈緒に連絡を入れるがあいにく話中で、連絡が取れない。生徒会室に電話をかけたでも同じく『会長は留守』との事。

(どっしり)

いい案が見つからずに刻一刻と時間が進み、インターホンが鳴った時『気付かないで』と祈るばかりだった

「今、開けます」

マナと一緒に玄関に出て鍵を開ける。

「楓ちゃん、誠は？」

入って来るなり和葉はそうやってきた。

「えっと、今はこの子のご飯を買いに…」

苦しい嘘

だが、和葉は『ふーん』、というとしゃがんでマナに視線を合わせ

「かわいい子じゃない」

と頭を撫で始める。

マナもゴロゴロ、と喉を鳴らして気持ち良さそうに目を細める。

『よかった。気を逸らせた』

そう思った時、和葉は撫でる手と逆の手で空中に円を描く

するとマナの足元に空色の魔方陣らしきものが現れる

「えっ!？」

猫の姿を取っていたマナが強制的に人の姿に戻された。

「それに、優秀そうな使い魔ね」

楓は『使い魔の擬態を強制的に解除させた』事に、マナは『擬態を強制的に解除させられた』事に目を丸くする。

「さて、と」

靴を脱いで上がり、一周見まわした後、和葉は迷う事なく撮影室の方へと進んだ。

楓も追うと撮影室のドアの前に立った和葉が丁度ドアの鍵を解除しようとして、鍵が刺さらなくなっているところだった。

「中々強力な結界ね。これって誰が張ってるの？」

楓は答えない、いや驚きで答えられない。

「でも、この和葉さんを舐め過ぎじゃないかな？」

さっきと同じように宙にマルを書きその中に何やら紋を切る。

それから鍵を刺したら、何の抵抗もなく鍵が開けられた。

「結界が、あっさり破られた？」

もう、驚くしかなかった。

「さて、何を隠そうとしてるのやら…」

ノブをひねろうとした時、ドアの前にマナが飛び込み立ち塞がった。

「あら」

「ふーッ、」

猫みたいな威嚇の声を出すマナ。

だが、

「ずいぶんと主人思いなのね。大丈夫。私はあなたの御主人に害を  
与える気は無いわよ」

和葉はにこりと笑って頭を撫でる。

撫でられたマナは害意が無いことを察したのか、いつでも飛びかかれるように強張らせていた体の力を抜く

「通してもらえる?」

マナはコクリ、と頷いてドアの前から退く。

和葉はドアを開け、中を見てこう言った。

「楓ちゃん、知ってる限りのこと話してくれるわよね?」

その声には感情があまりこもっていなかった。

「ふーん。なるほどね」

リビングで緑茶を飲みながらとなった『説明』を聞き終えた和葉はまるで驚いている様子が無かった。

「あの…まったく驚かないんですね」

なので、楓も尋ねずにはいられない。

「これでも驚いてるわよ。誠が女の子になっちゃったり、繭にこもっちゃったりしてるんだもの」

和葉は楓が持っていた『少女になった誠』の写真を見ながら答える。

「でも、魔術とか言われたら普通信じないと思うんですけど…それに、マナちゃんの擬態を解除したり、ヒスイさん…精霊の張った結界を破ったり…」

『言外に一体何者?』と問う楓。

「使い魔に精霊とは随分とバラエティーに富んでるわね…まあ、私も関係者だし」

「関係者?」

聞き返す楓

「私も高校生の時、生徒会に居たからね。咲月が副会長で陽菜が会計、私が会長。」

「お母さんが？」

記憶が正しければ楓の母 高槻咲月は当時女子高だった聖奏学園の卒業生だ。

その同級生で会長となると…

「それって、全部知ってるってことですか…」

現在の奈緒のポジション。  
対魔組織のトップと言う事になる。

「まあ、最近の様子はOB会経由でしか聞いてないけど、魔術とかそこらへんはね。当事者だった訳だし」

そう言われて、楓は納得するしかなかった。

擬態や不可視化の強制解除の術式は聖奏学園の生徒会フロアに展開されている訳だし、結界破りはわりとポピュラーな部類に入る術式だ(と、魔術師組が言っていた)

それに生徒会に入った当初の説明で奈緒はこう言った

『魔力は遺伝し、魔術は継承される』

子供が魔術師ならば親もごくわずかな例外を除けばほぼ全てが魔術師だということだ。

「さてと。それじゃあ、引きこもりの息子の様子をゆっくりと見さ

せてもらいましょうか」

和葉は立ちあがると先ほどの撮影室へと向かってゆき、楓とマナがその後続いた。

分厚い扉を開き

「へえ、こりやまたすさまじい量の魔力ね」

繭を見ての第一声がそれだった。

ヒスイはさっきの会話を聞いていたらしくただ黙って見守るだけだ。

「繭の材質は…糸状にした魔力にしてはしっかり編まれてるわね。  
…誠の魔術特性は？」

「えっと物質化、だったはず…」

マナが答えると和葉は再び唸りだす

「この糸その物は魔力から作ったとして…中身は」

繭の中では相変わらず、胎児のように丸くなって浮かぶ影が時々動く程度だ。

「うーん…楓ちゃん、この状態になって何日経った？」

「一週間ですけど…」

「私の方でも知り合いの探査系を当たってみるわ。連絡先は楓ちゃんでもいいわよね」

「あ、はい。」

『探してみる』

ただ、そう言われているだけなのに、楓は物凄く安心感を覚えていた。

「誠！そんなところに何時までも引き籠っていると、楓ちゃんを他の男の子に取られちゃうわよ！」

「ちよ、和葉おばさま!？」

突然の事に真っ赤になる楓。

「さ、行きましょ」

楓の手を引いて部屋の外に出る和葉は手で中に居る二人も呼ぶ。

ドアをしっかりと閉めた後、和葉は三人の目を見つめる。

「…三人とも、誠をお願いね」

真剣な、子供を心配する親の顔になった和葉に楓は顔の熱っぽさも一気に吹っ飛ぶ。

「はい」

「うん」

「精一杯、やらせていただきます」

三人の反応に満足したのか、和葉は顔に笑みを戻してちら、と扉の向こう側を見つめるような視線を送る。

「それじゃあ、何かあったら連絡を頂戴ね。」

背中を向けて玄関へと向かう和葉を監視に戻るヒスイ以外の二人は見送りに出る。

そしてドアに手をかけた時、

「ああ、楓ちゃん」

思い出したように言いだす

「なんですか？」

「あの朴念仁が出てきたら『心配料だ』って言ってキスの一つでもしてもらっちゃいなさい。」

「ななな…何を…」

再び真っ赤になる楓。

マナが見た限りではさっきの『取られる宣告』のときよりも赤かった。

「まったく、あの人に似て色恋沙汰こいごとのに疎いんだから。そろそろ彼女の一人や二人紹介しに来なさいっての。ああ、あの子は基本的に『押し』に弱いから頑張っつてね。それじゃ」

言うだけ言ってから、ドアを閉めて去ってゆく和葉。

「うー…」

楓は頭がごつちやになって唸ることしかできなくなっていた。

けれども、『やってみようかな?』と頭の片隅で思った楓は急ぎ足で撮影室に安置された繭の元に向かう。

「カエデさん?」

様子を不審に思ったヒスイが呼ぶが楓は全く反応を返さず、散々深呼吸を繰り返した後

「とーや、ううん誠!散々皆を…私を心配させて…タダで済むと思ってるの!?!」

防音のなされた撮影室でなければ近所迷惑になりそうな大きさの声で繭に呼びかける。

「繭から出てきたらき……き、き………」

そこでたっぷり数秒間躊躇ってから

「き、キスしてくれるまで許さないから!」

言い終わってから、自分が何をしたのか気付いた楓は再び真っ赤になつて撮影室を飛び出していった。

その後、開け放たれた撮影室のドアの外からマナがびっくりした声が聞こえてきたからおそらく外に飛び出していったのだろう。

「あらあら」

…楓が飛び出していった直後、繭の中の影がもぞもぞと動き魔力の渦の渦巻く速度が上がったことに誰も気付いていなかった。

\* \* \*

『自分の幼馴染みの母親が第31代学生術師連合総長だった』

『自分の母親と友達（と先輩）の母親と幼馴染みの母親が同級生で学生当時親友で戦友だった』

『正気に戻って見たら物凄く恥ずかしい事を大声で言っていたことに気付き悶々としていた』

e t c . e t c .

そんなこんなで気がついたら放課後を迎え藤谷家の前まで来たのは良いのだが…

楓は玄関前のところで鍵を片手にフリーズしていた。

「どっしりよう…物凄く入りにくい」

昨日のあの『キ（以下略）』宣言を思い出してしまい鍵を開ける事を躊躇ってしまっつ。

「……………出直そうかな」

とりあえず、一度離れて落ち着こう。

そう思って振り返り、ふと不審な人影を見つけた。

ちよつと離れたところからこつちを窺っている。

パツと見の外見だとセーラー服を着ているように見える。

まあ、セーラー服は珍しい物ではない。なんせ聖奏が制服として採用している。

…他の市立はブレザーで睦斗学院は男子高なので市内唯一と言えるが。

つまり、あの不審人物が変装しているか、仮装して出歩くイタイ人でなければ聖奏学園の生徒と言ふ事になる。

楓は立ち去るフリをして角を曲がったところでこつそりと様子をうかがう。

その人物は誠の家の前で様子を窺って一度呼び鈴を押す。

が、反応が無い（鍵を持っている楓と和葉以外はマナが『関係者』であると認識しない限り反応を返さない事になっている）ので立ち去ろうと楓の隠れている側に歩きます。

楓が『不審人物』の顔を確認できたのはこの時だった。

「遙？」

予想外な人物に思わず声に出してしまった。

その為、相手も楓に気付く。

「え？楓？」

驚く遙。

「なんで楓がこっちに？楓の家はもうチヨイ学校寄りだよな」

「そういう遙こそ、逆方向じゃなかったっけ？」

互いに『ここに居る筈がない』という思いがあった。

「私は、幼馴染みの家がこの辺だから。　　遙は？」

「あたしは　バイト仲間が病気でるらしいから様子見に」

そう言うが楓は遙の声色からその『仲間』に恋心を抱いているのだろう。とあっさり見抜けてしまった。

顔を赤らめれば当然だがバレるものだ。

だが、なんか嫌な予感がして『その人の家は何処か』その問を出そうとしたが

ピロロロロ

楓の携帯電話が鳴って中断となった。

携帯電話に着信した電話の相手は『藤谷誠』と書かれていた。

「遙、ちょっとゴメン。事情説明はまた今度！」

遙は駆け出す

「え？ちよ、楓？」

何が何だか分からないがただ事ではないと察した遙も後を追った

\* \* \*

「マナちゃん！」

「あ、楓……」

楓が撮影室に飛び込んだ時、マナが誠の携帯電話を握りしめ涙目になっていた。

「ヒスイさん、何が？」

「判りません。ですが、つい先ほどから内側から光が溢れだしてきて……」

「とにかく、会長に連絡を……！」

マナから携帯電話を受け取り奈緒へ電話をかけようと電話帳を開いた時、

「か、楓？」

「遙……」

撮影室のドアが開いて恐る恐る遙が入って来た。

「カエデさん……」

ヒスイの声に振り向くと繭に割れ目が出来、そこから光が溢れ出てきていた。

「羽化が…遙っ！」

「え？きゃっ！」

楓が遙を突き飛ばし、庇うように覆いかぶさる

その直後、ヒスイが咄嗟に張った結界の中に繭から溢れだした光が  
充滿した。

.....

「っ、たたた：大丈夫？遙。」

暴力的なまでの光が収まり、楓は遙の上から退いた。

「うう、まだ目がチカチカする…何なの一体…」

「マナちゃんとヒスイさんは？」

とりあえず大丈夫な事を確認した楓は次に自分たち二人を庇ってくれたマナとヒスイを探し、二人とも一応無事そうな事を確認して、ようやく繭に目が行った。

微かな割れ目がゆっくりと繭全体に広がっていく。

「そ、そうだ！会長に連絡しないと！」

握りしめていた携帯電話を開き、電話帳にある『佐伯会長』のリストを開いて電話をかけたならその僅か五分後には新入りの一年二人を除く全員が揃った。

そして、全員が集まった事を確認したかのように、輝の入った繭が、砕けた。

繭に守られていた『ソレ』はまるで漆黒の衣を纏っているかのようだった。

「……………なにあれ」

「…誠？」

砕けた繭が光の欠片となって散る中、二人はただ呟くしかできなかった。

「マシツクサーキット チェック  
回路形成、確認……………形成完了確認、同調開始」

繭から出てきた『ソレ』は立つたまま恐る恐る見守る生徒会の面々の前で『呪文』のような事を呟き始めた。  
まるで生氣と呼べるものが無い瞳に一同は寒気を抱く。

いや、確かにそれは呪文だったのだろう。

「スイッチ チェック  
回路分岐点、形成確認。  
ヘルステック オールグリーヌキコーザールグリ  
身体状態…万全、術式正常稼働」

ただ淡々と、呟きのようなのに、まるで世界への宣言のように響く声が続がれる。

「ファイナライズ オルグリーン サーキットカローズ  
起動準備……………問題なし……………回路閉鎖」

そして、最後の言葉を紡ぎ終えた『ソレ』の瞳に輝きが戻り、操り糸が切れた人形のように倒れ込んだ。

「わっ」

一番近くに居た楓が慌てて抱き支える。

『ただいま』

『ソレ』に触れた時、楓にはそう聞こえた。

だから、こう言う。

「おかえり。」

そして、愛おしそうにぎゅっと抱きしめた。

#### # 4 4 (後書き)

今回はどちらかと言うとインターミッション的な物でした。

むしろフラグ立ての為の回になってしまった感が…

でも、この回をやらないと話が進められないんですよ。

## # 5 1 (前書き)

更新です。

今回、やっと主人公視点に戻れましたよ。

ついでに

読者の皆さまのおかげで10000ユニーク、100000PV達成しました。

達成企画として何やろう、何時入れよう、みたいのを考えてますので『是非これをやってくれ』というのが有りましたら感想か活動報告の『第五話投稿しました』まで。

ネタと本編の整合性次第で選び、UPを持って当選連絡とさせていただきます。

とか、言ってみる

真っ白だった世界が急に色を帯び始めた。

全身にしびれるような感覚が走り、だんだんと薄れてゆく

それはまるで、忘れてしまっていた『感覚』を取り戻しているかの  
ように。

『サーキット 回路形成、チェック 確認………オルグリン 形成完了確認、アクセス 同調開始』

全身に空気と何か細い糸状の物が触れる感触  
足にかかる自重と硬い床の感触

『スイッチ 回路分岐点、チェック 形成確認。 チェック 身体状態…オルグリーヌキコーザールグリ 万全、術式正常稼働』

『誰かが居る』

人の気配が六つか七つ…いや、八つか？。それ以外の気配もいくつ  
か。

彼らのモノだろう、息をのむ音が聞こえる。

『ファイナライズ 起動準備………オルグリン 問題なし…サーキットカローズ 回路閉鎖』

急速に靄が晴れ始める『世界』。

同時に全身の力が抜け、言うことをきかなくなる。

でも、これだけは…言わないと…

『俺』は散々待たせてしまったのだから

「ただいま」

聞こえたかどうかは全くわからない。

急速に落ちてゆく意識は外界からの情報を拒むかのようだ…

『お帰り』

そう聞こえたのと同時に温かい何かに包まれたような感覚を感じ、  
『俺』の意識は暗闇に包まれた。

\* \* \*

「ホント、何が何だか…」

「まあ、理解の範疇の外側に有るのは確かよ。」

『繭』の崩壊から数刻後、奈緒、遙、楓の三人は藤谷家の居間で『ある人物』の到着を待っていた。

その時間を使って『知ってしまった』遙に説明が行われていた。

説明をする奈緒としては『裏』と深いつながりのある佐伯家の人間だから、教えておく必要がある良い機会だという事だろう。

「まあ、それ以上に驚いた訳だけど…」

遥はあえて『何に驚いたか』を言わない。

それもまあ、当然だろう。

『惚れたかも』と思っただ相手が友人の『おきななしみ想い人』だと、誰が声を大にして言うのだろうか。

まあ、遥自身が何度も『吊り橋効果、吊り橋効果』と自分に言い聞かせて思い違いだと思いつい込もうとしているからもあるのだが。

「さて、和葉さんは私が待ってるから、遥はあの二人の所に行った  
らっ。」

「べ、べつにあたしは…。」

「吊り橋効果の思い込みなのか、本気なのか、はっきりさせて来な  
さいって言うてるの。まあ、友情と愛情は別物って言うし。」

「なな、な…。」

『何故把握してる！？』そう言いたいのが上手く口が回らない遥

それどころか

「何故知ってるかって？そりゃねえ。家の場所を聞いてきたらそり  
ゃそっ思っつわよ。」

あっさりと言いたいことを見抜かれ、理由まで返された。

「ほら、早く決めたら？」

「…わかった」

『何を言い合ってもこの姉には勝てない』そう悟った遙は戦略的撤退を選ぶしか無かった。

「楓、入るよ」

奈緒の元から離脱した遙は結局、楓とマナがつきそう『繭から出てきた少女(?)』の所へ行くことにした。

落ち込んでないだろうか、思いつめてないだろうか、

『自分だったらきつとそうなるであろう姿』の友人の姿を思いうかべ、どうやって慰めれば良いのか。

そう思いながらふすまを開けたら。

「マナちゃん、お疲れ様」  
「ゴロゴロ」

笑顔で黒猫と戯れていた

「…何やってんの？」

遙は思わず尋ねてしまった。

「んーと、まあ、付きつきりで様子を見ててくれたから撫でてるの。」

「あ、そう」

納得するしかないのでそうとしか答えられなかった。

「…心配したあたしがバカみたいじゃない」

そう呟きながら良い笑顔で黒猫<sup>マナ</sup>と戯れる楓のすぐ傍らに寝かされた少女に視線を移す。

なんというか、非の打ちどころを探す方が難しいような美少女と美女の間くらいの女性だった。

眠っている為詳しいところや性格は判らない。

すつきりと通った鼻筋とか、きりつと引き締まった唇とか、艶やかで正に『漆黑』と評するべきな、腰ほどまである長い黒髪とかに、同性の遙も僅かな時間だが見惚れてしまったほどだ。

そして視線を少しずらすと掛けられた毛布が突然隆起し、すぐにまた平坦に戻る。

「はあ…」

たわわに実った果実を思わせるその女性の象徴ともいえる部分…ぶつちやけると胸は見るたびに遙を鬱にさせた。

なんというか、純正品が模造品に負けてるような気になって。

それにしても…

「ホント、こうしてじっくり見てみると似てるわよね。橘高統夜と」  
それでも違うところはかなりある。

先ず、肌の色が統夜よりも彼女の方が色白ながらも日本人らしい色だ。

次に全体的にちょっと角ばったイメージがあるが、こちらは丸みを帯びている。

ついでに髪の毛もこちらの方が艶やかだし。まあ写真と実物の差はあるが…

顔つきだって、統夜はどこか中性的な魅力のある顔だが、この彼女は純粹に女性的な魅力のある顔だ。

僅かな差にしか見えないが、人物像を別人足らせるには十分。

それでも、初見でパツと見たイメージは『似ている』となるのだから。

「ま、当然じゃないの？本人だし。」

「ま、正しくはこうなる前の姿が、だけどね」  
何気に爆弾を投下したマナと楓。

「へー………えっ」  
余りに自然だったから流しそうになったがすんでのところで気付くことが出来た。

「本人って、どういう事？」

「んー、橘高統夜の正体が女装した誠って事？」

「……………」  
遙はパクパクと口は動くが声が出ない、なんて状況に初めて陥った。

「ついでに言えば和葉おばさま…誠のお母さんが『ゆづきかずは』だし」

楓は『ま、私もこの間知ったばかりなんだけどねー』と付け足すが遙はそれどころではなかった。

「最初は出来心だったんだけど、予想以上に似合っちゃって調子のつちゃったのよ」

そこに現れる第四の人物、誠の母、和葉。

「ふーん、随分とまた…」

和葉は布団に寝かされた少女を眺めて呟く。

「ワガママボディになった物ね。」

気持ち顔が引きつって見えるのはまあ、仕方ないと思う。

「ところで楓ちゃん、この朴念仁は何かしてくれただ？」

「えっと…繭から出てきた時に『ただいま』って…」

「ふーん。じゃあ、今から襲っちゃえ」

「「えっ!?!」」

爆弾発言に凍りつく遙と楓。

「幸い、相手は身動きとれないどころか意識もないんだし…ヤリたい放題できるわよ?」

何とも問題アリ、突っ込みどころ満載な和葉の発言だが、それに対する反応は予想外の所から来た。

「母さん。何、トンデモ発言、してんだよ」

\* \* \*

『ヤリたい放題、できるわよ』

覚醒しかけていた意識を完全に覚醒まで持っていたのは、そんな聞き覚えのある声による物凄く不穏なセリフだった。

「母さん、何トンデモ発言してんだよ」

慣れない体で、うまく動くか判らないが声はちゃんと出ていたようで一斉に四人分の気配が俺に近づいてきたのが判った。

ずっと寝てたせいか視界がうすらばやけているが知り合いの顔を見分ける程度なら造作もない程度には見える。

楓も遙も、母さんも、マナも、心配そうにこっちを見ている。

「…誠、本当に大丈夫なの?」

恐る恐る、と言った風に楓が尋ねてきた。

ずっと』とーや』という苗字を基にした渾名で呼んでくる楓に名前  
の呼び捨てで呼ばれるのはなんだか、新鮮だ。

「ああ、長いこと寝てみたいだが……」

それでも、不思議と悪くは無い。

「まあ、一週間以上繭の中に居た訳だけど……」

「また、心配かけたみたいだな」

それにしても、自分の声と言葉づかいの合わないこと合わないこと。  
どう考えても今の俺の声はやや高めな女声。口調は男言葉のままだ  
から違和感がかなりある。

「それじゃあ、ちよつと奈緒ちゃんを呼んでくるとしましょうか。  
行くわよ、遥ちゃん」

「え？ちよ……」

ずるずる、と引き摺られてゆく遥。  
マナも巻き添えを食って退出させられて部屋には俺と楓の二人だけ  
が取り残された。

「……本当に……心配したよ……」

俯く楓の声が震えていた。

「…楓、ちょっと起こしてくれないか？」

「う、うん…」

ちよつとづるんだ目になった楓の手を借りる。

正直言うとまだ体の調子がよく分からない。

ゆっくりと確認したいが、それは後回しだ。

俺にはやらなきゃならないことが一つ、ある。

起こすと言っても腕を引つ張る訳にはいけないので、当然背中側に手を入れる事になる。

コレが元の俺みたいに男ならひょいと片腕でもできるかもしれないが、楓みたいに普通の女の子の場合、両腕を使わないと難しい。

「よっ、よっ、よっ」と

そうになると、当然頭と頭が接近する。

肩に掛かる重量に少々哀しくなるが、それよりも…

「これでもいい？」

そう尋ねてきた楓の、至近距離にある頬に俺は唇を押しつけた。

「ッ!？」

僅かに触れる程度だったが、楓の側が一気に熱を持ったのが判った。

「ななななな…何を…!？」

慌てて後ずさった楓は耳まで真っ赤だった。

そういう俺もきつと赤い。『顔から火を吹く』と言われる所以がよくわかった。

「…言ったのは楓の方だろ。その…『キスしなきゃ許さない』って、恥ずかしさからやや小声になってしまったが、十分聞こえたみたいで楓は「あ」という微かな声をこぼした。

「聞こえて…たの？」

「…一応な。まあ、今は同性だからノーカウントって事でも…」

そう言ったら楓は顔の赤さが一気に引いていった。

「『今は同性』って…もしかして…自分の体の事…」

「ああ、判ってる。」

自分の体がどんな状態なのか、よく分かっている。

詳しい、細かい確認は取って無いが自分がどんな外見になっている

か位は理解している。

いや、不思議と理解させられているというべきか…

あとは『ころ』なる前から女になっていたから予想以上に抵抗が少ないのかもしれない。

「だが、俺は俺だ。どんな外見であろうと」

「…うん、そうだね！」

そういう楓の目じりには涙が溜まっていた。

その後、会長が母さんと遙、それにマナに連れられてやって来て、遙が楓にライバル宣言したり、楓がそれを受けて立ったり、母さんが目を輝かせてたり、会長が『女子部に転入する？』とか言い出したりというんなトラブルが起こった。

が、そんなあわただしい雰囲気は俺に『戻って来たんだな』という実感を持たせてくれた。

…さて、さしあたって考えなきゃならないことに専念してしまおう。

それはすなわち

『今日の夕飯、どうしよう』だが。

## # 5 1 (後書き)

【感想返信コーナー】  
りい様

感想ありがとうございます。

早めにコメントを返そうかと思いましたが、ネタばらしになってしまつので今日まで待たせてしまいました。

実際のところ、顔立ちとかのヒントは出しても基本的な部分は読者の皆さまのイメージです。

キャラクター像は読んでいらっしゃる方々の数だけある、と言う事で。

「ご心配をおかけしました。」

俺が目覚めてから二日後、俺は職員室に『完治証明書』の提出の為に学校に居た。

会長が『伝染性の結膜炎』という事にして診断書を学校側に受理させてくれていた為、欠席は全部出席停止扱いになっていた。

まあ、嬉しい限りであるが、それでも一週間弱、十日近く休んだことには変わりはない。

それなので先ず担任に完治報告とお礼を言いに行く事にしたのだ。

「まあ、元気になって何よりだ。…ところで藤谷、風邪でも引いてるのか？」

何故かそんな事を尋ねてくる今松先生（男子部一の三担任）  
うちのクラス

「いえ、至って健康ですけど」

「そうか…」

なんだか残念そうなのは気のせいだと思っておこう。

「それならいいんだ。ともかく、今日からまた頑張ってくれよ」

「はい、それでは失礼します」

職員室を後にする時、俺はちらりと鏡を見る。

鏡の向こう側から見返してくるのは、十数年間親しんだ『いつもの俺』だった。

たわわに実った胸も、腰まである長い髪の毛もない、いつも通りの姿。

…やっぱりコレが一番落ち着く。

HRと職員会議の間を狙った職員室訪問を終えた俺は自分の、ほぼ十日ぶりの教室に向かう。

吹っ飛んだ制服や各種所持品の再調達も無事にできたのでほぼ連休前の状態だ。

そんな状態で、俺は教室に入る。

そして、連休明けと同じくクラス中の注目を浴びた。

「…今度は何だ」

居心地の悪さにぶつきらぼつに尋ねたら

『マコトちゃん、カンバーク！』

他にも『俺たちは神に見放されたのか！？』とか『オアシスが…』とかのまるで悲劇の主人公のような悲鳴がいくつも上がっていた。

……とりあえず、こいつらの級友を辞めなくなった。

\* \* \*

「へえ、元に戻れたのか。どうやったんだ？」

放課後、居心地の悪い教室からさっさと離脱を果たした俺は生徒会室で氷室先輩と資料整理をしながら喋っていた。

「ええと、体の中にスイッチみたいなものがあったんですよ。」

「スイッチ？」

それは、体の状態を詳しく見るために全身に魔力をいきわたらせた時に発見した、一つの術式だった。

「まあ、モノのスイッチが有る訳じゃないんですけど…そのスイッチを切り替えたら元に戻れたんですよ。」

その術式は俺の心臓にあり、取り出したり、他人が見ようとする（まあその為には取りだす必要があるが）と俺が死ぬ。そして俺が死ぬと術式は消滅するようになってきている…らしい。

「性別の切り替えスイッチか？」

それだけなら常時男で居ればいいのだが…

「実は、魔術のスイッチでもあるみたいで、この姿だと魔術が一切

使えないんですよ。」

それは魔術師ではなく一般人化したという意味だ。

「ただ、スイッチを切り替えて女になれば使えるんですよ。」

そう言いながら、俺はシーソー型スイッチを切り替えるイメージをする。

ぱちり、と音が鳴ったような感覚と同時に、全身に封じ込められていた魔力が流れ出し体に変化が現れた。

背が縮み、髪が伸び、平坦だった体型に凹凸が生まれる。

それ以外にも微細な変化（顔つきとか、骨格とか）もあるがその辺は省略する。

「こんな感じですね。」

そういう声はいつもの俺の声ではなく、高い少女の声だ。

「ほお……。」

氷室先輩は関心した様子で俺をまじまじと眺める。

「この通り。」

掌に小さめの魔力球を発生させる。

男の時は全くできなかった事がいとも簡単に出来てしまう。

「まったく、便利なんだか不便なんだか……。」

そう言いながら再度スイッチを切り替えて元の姿に戻す。

「それはアレか。裏の仕事があると必ず女にならなきゃ戦力にならんってことか」

「まあ、そうなりますね。事務仕事や渉外なら問題は無いですけど。」

「今、男の姿でもある程度の自衛ができるようにいろいろとアイディアを練っている最中だったりする。」

「一番の問題の『魔力の供給』さえ何とかすれば問題はさほど多くないし大きくもない。」

「あとは、一回倒れるまで体を動かして、自分の限界と身体能力の限界とか、変わった重心やらリーチやらも把握しておかないと……」

それに、ちよつとかりでできることが増えたりもしたので、戦術に組み込む練習もしておきたい。」

「さて、藤谷。」

「なんですか？」

ポン、と手を肩に乗せてくる氷室先輩に俺はなんとなく『あ、巻き込まれた』と思った。」

そしてそれは

「体育祭の来賓への招待状作り、手伝え」

見事に当たった。」

「…了解」

苦笑いしながら自分のデスクについて渡された封筒（学校の名前が入った公用の物だ）に宛名と住所を書きいれる作業に加わった。

五月も半ば…、気がつけばあと一、二週間で五月が終わり体育祭のある六月を迎えようとしていた。

「…そうだ」

最後の一枚を書き終えた俺はふと、『いい方法』を思いついてそれを作る作業に入ってしまった。

\* \* \*

「いやー、だいぶ暗くなったな」

「そうですね」

俺と氷室先輩はだいぶ遅くなってきた日没を超え暗くなったころにようやく下校を始めたのだった。

「手紙書きに暇かかってた俺はともかくとして、お前は先に帰ってもよかつたんだぞ？」

「ちょうどよくアイディアが浮かんだんで、コレ作ってたんです」

そう言いながら俺は一枚の紙切れを見せる。

大きさと言えば名刺サイズくらいだ。

「何だそれ」

氷室先輩にその一枚を渡す。

その紙には文字が円をはじめとした記号が書き込まれていた。

「防御符、って所ですかね。まだ試作版もいいところで『数秒間障壁を張れる』程度です」

強度は不明で継続時間はほんの一撃分。実戦じゃ使い物にならないというのが現段階の評価だ。

「それでも、俺自身が張る障壁の延長とか強化とかには使えそうなので何枚か作ってみたんですけど」

用はその護符に魔力が供給され続けなければならないという事。それならば魔力を流し続ければ破壊されにくい障壁を張れる。

「ふーん。よくそんな事できるな」

「まあ、色々ありましたから」

それから分かれ道まで『攻撃用は作れないのか』とか『精霊の支援になるようなモノは無いのか』とか『移動手段になるようなのは無いのか』とか、色々なアイディアを出し合いながら歩いた

\* \* \*

そんでもって翌日。

放課後に生徒会室で昨日の護符を結界符に改造し、新しく『十分な強度の障壁を展開する』為の護符作りをしていたら

「ちよつといいかしら？」

と会長に呼ばれ、俺は隣の部屋に引き摺りこまれた。

「なんか用ですか？」

「ええ。あなたにしか頼めないと思って。」

最近働くようになってきた『危険』を知らせる勘が全力で警報を鳴らす。

「…嫌な予感しかしないんですけど」

『会長の頼みごと』にいい思い出の無い俺としてはぜひとも辞退したいのだが

「大丈夫よ。拘束されるのは一日だけだから」

このパターンは…

「…俺に何をさせたいんですか、今度は」

「人聞きが悪いわね。ちよつとお見合いの身代りをしてもらっただけよ。」

「お見合い？」

やっぱり、厄介事の押しつけだった。

「ええ。もつとも、私も遙もする気は全くないから断るつもりだったんだけど、ウチの叔父が妙に頑張ってくれちゃって」

「…で、なんで俺が会長の家のゴタゴタに巻き込まれなきゃならないんですか」

「お見合い写真にあなたの女装写真を送ったから」

「なッ!？」

なんてことしてくれたんだ、この人は

「なんとかして相手から断るように仕向けて頂戴」

「んな、無理難題を…」

「日時は今度の土曜日。金曜日までに準備はしておくからその日に家に来てもらっわよ。」

「…どうせ拒否権は無いんでしょう」

「もう引き返せないのは確かだね」

はあ…と湿気った溜め息をつく。

なんというか、この会長に付いている限り苦勞が絶えないような気

がしてならない。

「今さらですけど、生徒会に入ったこと後悔しましたよ」  
「そもそも『生徒会に入る』だって強制であって自主ではない。

「後悔って、『後に悔む』って書くのよ」

「判ってますよ。愚痴ぐらい言わせてください」

それくらい、巻き込まれる側の権利として認められてもいいと思う。

「それじゃあ、お願いね。」

それから先に戻った会長に続いて部屋に戻った俺は一心不乱に護符に魔改造を加えて色々な鬱憤とかをぶちまけることにした。

で、迎えてしまった金曜日。

「さて、始めましょうか。楓ちゃん、遥ちゃん。」

「はいッ！」

「楽しみですな」

「……………」

強制連行された佐伯会長の家（つーか、屋敷？）で俺は目を疑う光景に出会い、つい目をこすってしまった。

「あら、どうしたの？」

「……………現実逃避くらい、させてください」

物凄く『イイ笑顔』の母さん&楓&遥なんて居ない、見えない、聞こえない。

「さーて。かかれ、淑女共<sup>レディイス</sup>。獲物<sup>それ</sup>を祭壇<sup>へや</sup>まで連行せよ」

「」「」「」

うん、だから俺を拘束しようと飛びかかって来る二人も幻なんだよね？

足払いをかけられ、腕を押さえられて後ろへ引き摺られることにな

った俺はきつと虚ろな目をしてたと思う。

「んで、何を着せる気なんですか？会長」

更衣室として当てられた部屋に連行された俺は現実逃避を辞め向き合う事にした。

「和葉さん、お願いした物は…？」

「これね。奈緒ちゃんでも遥ちゃんでもイケるようにしたんだけど」

母さんが取りだしたのは風呂敷包み。

「わぁ…！」

「すごい…！」

開封されると同時、遥と楓が歓声を上げる。

「どつ？中々のモノでしょ」

母さんが用意した今回の衣装は淡い紅を基調にした振袖だった。

やや控えめなデザインなのは『会長や遥みたいな女性が着る』事を前提にしているからだろう。

たぶん、服の印象より中身の印象きまひとのが強くなるような配慮だと思っ  
着せられる俺としても、下手に体型が出たりしないし男性用の着物  
ともそれほど差は無いので有り難い。

「さーで、誠。着せ替えタイムよ。」

正面から母さん、左右から楓と遙がにじり寄って来る。

でもまあ、実を言っと…

「いや、着物とか振袖なら一人で着れるから。」

「は？」

「え？」

ぴし、と固まる楓と遙。

そんなに予想外なのか？

「ああ、そういえばお義母さんに教わったって言ってたわね。でも  
それって男性用の方法じゃなくて？」

「その時にはあちゃんの着付けの手伝いができるように両方教えて  
もらったんだよ。」

だから『手助けは要らん』と突っぱねる。

下手に任せると後が怖い。

「判ったわ。ただし、変なところがあったら手を出させてもらおうよ」

「へいへい。」

その後、着付け事態は問題なくできたが『ついだから』と撮影会に洒落込まれ、他に色々着せられる羽目になった事を追記しておく。遙も楓も、会長もかなり楽しそうだった。

\* \* \*

で、当日。

お見合い会場となった料亭の一室：急遽女性用控室にされた部屋で俺は精神的疲労でぐったりとしていた。

昨日、振袖なら一人で着られる事を証明したので付き添い人の中に『着付け師：遠野和葉』は居ない。それどころか、佐伯会長が『一生を共にするかもしれない相手だから腹を割った話がしたい』と親族を言いくるめて当人同士だけ、残りの親族は話が聞こえない程度に離れた部屋で別々に会う事にしてしまった。

つまり

「なんで俺が一对一で会長のお見合いの身代りなんかを……」

なんて状況な訳である。

まあ、佐伯家の方々は会長がお見合いをしようと思っ  
ているようだし、無関係な俺が出てくる為には一人（会長はすぐ隣の控室に潜む事  
にしたらしい）にする必要がある訳だし…

「で、あなたの設定なんだけど名前は宮野真<sup>みやのまこ</sup>心、私たちの再<sup>はとこ</sup>従姉妹。  
留学中だけとお見合いの為にイギリスから一時帰国して事にしてあ  
るわ。」

「…それ、会長が考えたんですか？」

「いえ、半分は遥が。残りの半分…宮野の叔父様がロンドンに居る  
のは事実よ。」

まあ、今更何を言っても仕方がない。

「はあ…ロンドンねえ…」

色々聞かれたらどうやって対処しようかな…

俺は色々諦め、ボ口を出さずに破談させる方法を考えながら『スイ  
ッチ』を切り替えて着替え始めた。

「あ、そうだ。会長、さらし巻くの手伝ってもらえませんか？」

「いいわよ」

流石にやったことのないコレばかりは手伝ってもらおう

物凄い力が込められて絞められ、かなり痛かった。

うらみがましい視線を送ったら

「和服は平らな方が似合っつて言っつでしよっつ。」  
と涼しい顔。

「…そうですね」

まあ、誰が悪いというわけでもない。強いて悪いとすれば俺を『こんな体』にしてくれた世界が悪い。  
と、言う事にして俺は着替えの手を進める事にした。

帯を結んで終了。最後に特殊メイクをちよちよと加えて顔の印象を変える。

こればかりは俺自身がバレにくくする為の自衛手段だ。  
印象が違えばいくら似ていても『別人』だと思わせる事が出来る。

最後に口の中で呟く程度の声で『私は宮野真心』と数度唱えて自己暗示。

暗示といっても、ちょっと思いこむ程度だが、やらないよりは安心感が違う。

最後に人物像をくみ上げて…

「準備はいい？」

よし、できた。

「ええ、奈緒姉さま」

尋ねる佐伯会長なまねえさんに澄まし顔でそう返したら顔がおもいつきり引き攣った。

その直後に『相手の方がお待ちです』と仲居さんに呼ばれ『俺わたし』は『会長ねえさん』に連れられて『お見合い会場』に足を踏み入れた。

踏み入れて、引き受けたさせられた事を恨み、後悔した。

「…なんで君が」

「あら、ご挨拶ね」

端っから喧嘩腰になる相手方の男性 睦斗学院の藤澤会長。

これは盛大に困った。

日常生活を送る上での『俺』は問題ないが、睦斗学院を含む執行部と共同作戦を行う事もある裏に携わらなければならぬ『女の俺わたし』は何度も顔を合わせる必要がある。

そのたびに言い寄られては精神が持たないし、最悪『宮野真心』 〓

『藤谷誠』がバシて殺されかねない。

「私はこの子の付き添い。すぐに退散させてもらっわ」

「ふん…」

「それじゃあ、ゆっくりとね」

佐伯会長ねえさんが退散し、残される俺わたしと藤澤会長。

「はじめまして、藤澤惣一です」

「…宮野真心です」

場の空気が重々しく押し掛かって来る。

さて、どうやって破談させようか。

いや、むしろ『作戦』の開始地点までどう誘導するか…

「最初に一つ、かなり失礼な事だとは存じますが自分にこの縁談を成立させる気は全くありません」

が、その一言に全てが正しい意味で水の泡と化した。

それ故に

「…どうして、ですか？」

つい、尋ねてしまった。

「…詳しくはお話しできないのですが、自分せいで犠牲になってしまった『ひと』が居るのです。彼女の為にも、まだ自分にはやらねばならない事があるのです」

答える藤澤会長。

その『犠牲になってしまったひと』というのがすぐに藤澤会長の相棒であったヒスイの事だとすぐに判った。

戦場を共に征く相棒を失うという事は家族を失うに等しい。無条件で信頼できる友はそうそう得られるものじゃない。

俺も幼いころに父親を亡くしてる。

だから、その気持ちは判らないでもない。

「その、犠牲にしてしまった人の為にも今はまだ色恋沙汰にうつつを抜かすわけにはいかない、と？」

「はい」

そして、俺のわりと失礼な問いに臆面もなく「はい」と答えられる藤澤会長は物凄く格好良く見えた。

想えば、俺だって父さんを亡くした後は『母さんを代わりに支えるんだ』と色々奔走した。

だから

「その気持ちは…少しですけど判ります」

つい、そう言ってしまった。

そして、それが全ての発端となる引き金を引いてしまったらしい

「…ッ！」

驚くような表情を浮かべた藤澤会長

「あ、昔の話ですから」

地雷を踏んだらしいと気付いた俺は慌てて『わたし何ともない』と言う風にふるまう…が

「宮野さん、いえ真心さん。あなたは強い人だ」

その反応を『わたし気を使っている』と見られてしまったのか相手の方が穏やかな笑みを浮かべてきた。

「もし、宜しければ…自分が、役割を無事終えられたら…その時に…」

少々恥ずかしそうにそう言ってくる藤澤会長。

もしかコレは、このパターンは…

『宮野真心に惚れた』？

もしかして抜けだすのが難しい泥沼にはまってしまったんじゃないか

そういう危惧を抱き、どうやって方向修正をすれば…

その時だった。

障子一枚挟んで背後にある庭園から殺気のようなモノを感じた『俺わたし』はテーブルを挟んで対面する藤澤会長を押し倒し、片手で袂に隠しておいた改良版『防御結界符』を殺気の方角に向けた

この『結界符』は鬱憤晴らしの為に汎用性を殺してまでして作り上げた性能向上版の一つだ。

特徴としては日本に古来からある呪術系…神道や陰陽師といった系統の術式を使用している事にある。

まあ、梵字の親戚とってもらえればいい。

パキン、という音と共に壁が現れ、障子を貫いて飛んできた『呪い』を受け止める。

確か、北欧系魔術の『ガンド』という呪いの一種だ。

本来は体調不良を引き起こす程度だが、障子を打ち抜いてきた事から物理的破壊力がある『フィンの一撃』と呼ばれる強力なヤツだと推定。

まあ、呪いには変わらないから無効化は容易だ。レジスト

「誰ッ！」

俺は声を張り上げる。

現れたのはローブを着こんだ『いかにも魔術師です』と言わんばかりの三人組だった。

「女を確保しろ。」

「男の方は」

「始末する」

「了解」

三人組が適度に散らばって俺と藤澤会長に向き合う

連中はどうやら俺がお目当てで藤澤会長は要らないらしい。

散らばったうちの一人が魔力を貯め始め、残りの二人が先ほどのガンド撃ちを続けてくる。

「くっ…！」

符を片手に防御を続ける左手をそのままに、右手で袂から追加の符を取りだす。

放たれてくる呪い（ガンド）のレジストを繰り返すうちに左で持つ

ていた符が崩れ出す。

どうやら、『紙』という物質にしておいた魔力まで食い荒らしたらしい。

すかさず右手の符を防御に使う。

はつきり言つて未成品の数々だ。どれがどれだけ頼りになるのか判った物ではない。

そして、『使える符』に当たるまで攻撃に転じる事が難しい。

ふと、視界の端に翡翠色の影が入った。

それと同時に、俺たちを襲う魔術師たちの背後に『良く知っている気配』が現れた。

…これならば

一番遠い位置にいて、長い詠唱を必要とするような魔術を使おうとする一人が詠唱をほぼ終えた時にやり、とそいつの顔が歪む

「いま！」

それと同時に俺は叫ぶ。

「ぐがつ」

直後に背後から何かで強打されたように大技撃ちの魔術師が倒され

た。

「なッ、師匠!？」

「何だ!？」

ガンド撃ちを連発していた二人が慌てる。

焦りがガンド撃ちを中断させ、その隙に俺は符の一枚を握りこんで  
『抜刀』する。

元々の物質化でできた刀をより完成された物へ。

俺の固有魔術だが符を握りこんでいるから符から発生させているよ  
うに見えるだろう。

「くっ、符術師め!」

慌てる一人を抜いた刀の峰で打倒しもう一人もそのままの勢いで殴  
り倒す。

「これで…ツキヤウ!」

終わったかと思ったら背後からの衝撃につんのめった。

ついでに本当に女みたいな悲鳴をあげてしまった。

まあ、勢いで出てしまったモノは仕方ない。

俺は刀を取り落とし、壁際に飛ばされた。

かなりの威力のガンド撃ち『フィンの一撃』だったらしい。  
一気に倦怠感に襲われる。

「真心さん！貴様ア！」

俺がなんとか撃たれた方向に体を向けると一番最初にヒスイに倒された筈の『師匠』と呼ばれていた魔術師と、俺が落した刀を握って立ちふさがる藤澤会長。

だが、藤澤会長が切りかかる前に、件の魔術師が吹っ飛ばされた拳銃、綺麗な放物線を描いて庭園の枯山水に配置された岩に顔面から激突し動かなくなった。

「危機一髪、ってところかしら？」

吹っ飛ばした張本人…佐伯会長が飛んだ方向と逆側から現れた。

「佐伯か」

油断なく佐伯会長に刀の切っ先を向ける藤澤会長…って、え？

「この一件、お前の差し金か」

その一言で藤澤会長が思っていることが大体判った。  
相手が魔術師だったとなると、確かに身近な魔術師集団が一番疑わしい。

「そんな事してどんな得があるのよ。第一、こいつらの狙いはこの

子。術師連合からすれば身内よ」

そんな藤澤会長に対して呆れ顔を向ける佐伯会長。

「まあ、大方の所は大体予想がつくけど…こいつ等は私たちが徹底的に調べ倒すわ。」

にやり、と笑う佐伯会長の顔を見るからにきつと手加減無しなんだろうなあ。

なんつーか『三名様精神崩壊コース入ります』的な

「さて、二人とも、回収お願い」

「はい」

「判りました」

そこに姿を現すマナとヒスイ。

スタンドアローン  
単独行動がある程度可能な二人を『藤谷誠』から借りてきた（と言  
う事にしてある）からだろうが…

「！」

「あ…」

おそらく、このためにこの二人だったんだろう。

藤澤会長とヒスイが互いの姿を見て動きを止めた。

一ヶ月ほど前に永久の離別を迎えた主従が、どうしたことが再び出会ったのだから。

「何故…」

「ウチの生徒会に消滅間際の精霊を引き寄せて回復させるという変な体質の子が居てね。」

簡単な説明を始める佐伯会長が視線と微妙な動作をしてくる。

今のうちに離脱してしまえ、と言う事だ。

こくり、と頷いて俺は足音を立てないようにしてその場をこっそりと離れた。

「そう…だったのか…ああ、真心さん、紹介を…あれ？」

「どうやら、嫌われたようね。まあ、当然だと思っけど」

襖一枚挟んだ反対側でそんな声が聞こえた。

まあ、お見合い中に昔付き合いのあった女性が現れて『相棒です』と紹介されたら怒るわな。

まあ、そんなこんなで『佐伯家と藤澤家の縁談』は見事に藤澤家方の不手際でポシャったのであった。

……これだったら、俺じゃなくて佐伯会長が出ても遙が出ても、同じだったんじゃないのか？  
なんて思ったが、会長に聞いたらきつと精神力をガリガリと削り取られるだろうなと思って止めておいた。

# 5 4 (後書き)

今回、『俺』と書いて『わたし』と読ませたり、誠が奈緒を『佐伯会長』と書いて『ねえさん』と読んだりするような呼び方をしているのは一重に自己暗示の結果です。

普通の人よりも効く暗示できちやいますからね。

『認識阻害』とか使える魔術師たちは

# 6 1 (前書き)

更新です。

「それじゃあ、行きますよ！」

元気のいい声で楓が宣言すると同時、その手には割と巨大な焰弾が形成され始める。

「それでは…お先に！」

篠田（俺がドタバタしてた頃に入った同級生の片割れ）が手元に魔力を集め拳銃よろしく打ち出す。

その様子は『ガンド撃ち』に似ているが全くの別物。撃ち出されているのは呪いではなく、篠田の持つ『水』の属性が乗せられた魔力弾だ。

マシンガンの如く連射される篠田の魔力弾攻撃に加え、楓の巨大な焰がただ一人、氷室先輩に襲いかかる。

ががががが…

と、堅い物に着弾する音。

「怖ええ！本気で殺されると思ったぞ！」

あれだけの集中砲火を受けながらも無傷の氷室先輩の手には名刺サイズのカードが一枚。

「次っ！」

「いくよ、啓作！」

佐伯会長の声に合わせて梨紗先輩が刀片手に切りかかる。

ちなみにあの刀は梨紗先輩が『造った』刀ではなく、俺が『創った』物。

それも勢いよく『何か』とぶつかって刀の方が折れる。

「それじゃ、ラスト！」

『ラスト』と呼ばれて俺はゆっくりと氷室先輩に近づき背後から首に腕を回す。

防御符は何の意味も為さずに俺は氷室先輩を拘束できた。

次はスイッチを切り替えて一般人からおんな魔術師に。  
梨紗先輩の視線が痛い。

首に突き付けてる指先に魔力を集めようとしたら勢いよく吹っ飛ばされた。

そんな様子を見て、佐伯会長は満足そうに頷き、

「テストは終了。みんな、お疲れ様」

そう宣言し、氷室先輩は脱力してその場にへたり込んだ。

\* \* \*

「だあああ…怖ええよお、前ら。俺に何か恨みでもあるのか!？」

生徒会室に戻った俺たちは氷室先輩にそう言われた。

「といつても、氷室先輩がやらないのなら梨紗先輩が紗枝先輩のどちらかにやつてもらうしかないんですよ?」

俺たちが氷室先輩に各種攻撃を仕掛けたのは仲間割れとか、そういう類のモノではない。

先ほど、氷室先輩が持っていたカード…前々から開発を進めていた『防御符』の完成版の実戦テストの為だ。

楓の『焰』、篠田の『魔力弾』、梨紗先輩の『斬撃』。

異能、魔術、物理攻撃の各種に耐えられるか、そして少々特殊な場合の効果はどうなるのか。

それらのテストの為に魔術師ではない氷室先輩が選ばれた。

正確には、最初は梨紗先輩がやるつもりだったみたいだけど氷室先輩が『梨紗にやらせるなら俺がやる』と名乗りを上げたのだが。

「大丈夫ですよ。何かあっても夏元先輩が待機してくれていたんですから」

宥める楓。

うん。俺も何度も殺されかけて治療してもらったなあ。

「それに俺、見ましたよ。藤谷が変身した時に顔がにやけたのと、篠田。」

その途端に

「それ、本当？」

梨紗先輩が修羅と化した。

「こつち来なさい」

「ちよ、誤解：いでででで」

耳を引つ張られて生徒会室から出てゆく二人。

「それにしても、変な体してるな。お前」

見送り、氷室先輩の悲鳴らしき声が聞こえてきた頃に一同関心を失って雑談に入る。

最初に話題を提供したのは篠田だった。

「なりたくてなった訳じゃないんだがな」

「えっと、魔術を使う時は女の子になっちゃうんだっけ？」

それに赤城（GW開け組の女子）が食いついてきた。

「あれ？アキラちゃんは見た事無かったっけ？」

楓が不思議そうにした。

まあ、楓や遥はなった直後の裸すら全部見てるから割と『馴染みのモノ』と化してる感があるんだろう。

「うん、私と篠田は出勤が掛かっても部室待機組だったから。修業

中で」

答える赤城。

実際、篠田も赤城もつい数日前（あの忌々しいお見合い事件のあった週末開けだ）に実戦投入決定となったばかりだ。  
必要なければ魔術師化しなかったから部室組に見せた事はまだなかった。

「そ。だから、今見せてよ」

とか言いだす赤城

「なんで態々…ッ！」

そんな事を、そう言いたかったが篠田が指をこちらに向けてきて魔力を集め始めたので慌てて魔術師化して篠田の撃ってきた魔力弾を振り払って打ち消す。

「これで一丁上がり」と

「何しやがる！」

といつても、大体理由は判っている。

俺を魔術師化させるためだけに撃ちやがったのだ、このバカは。

「うわあ…確かにこれは殺意沸くわ」

そして魔術師おんなになった俺を見て呟く赤城

「で、幾つなの？」

「何が」

突然尋ねられても主語が無いから俺にはよく分からないのだが…

「だから、スリーサイズとか身長とか体重とか」

「知らん。」

「というか、測りたくない。」

「隠す気？」

尚も追及を進めようとする赤城

「隠すも何も、測ったこと無いぞ」

「そう言えば引くと思ったら、逆に火がついてしまい

「よし、今すぐ測ろう。」

「は？」

俺は思わず間抜けな声を出してしまった。

「アキラちゃん、道具が無」大丈夫。「へ？」

道具が無いからまた今度、とでも言ってくれたのであろう楓も遮られる。

遮った張本人の赤城の手にはメジャー。

「今日、家庭科が有って持ってきてるから。」

しゅるしゅる、と三〇センチほど繰り出して縄でも持つかのように構える赤城。

「じゃあ、やるしかないか」

したら楓もあっさりと赤城の側につく。

更には氷室先輩への『O・SHI・O・KI』を終えて戻って来た梨紗先輩や、佐伯会長に呼ばれて来たらしい紗枝先輩、面白そうだから混ぜてと入って来た矢吹先輩が俺の敵になる。

ほぼ、生徒会室内に味方は居ない。

「それでは…ひん剥いちゃえ！」

副会長の梨紗先輩の号令のもと、六人が飛びかかって来る。

とりあえず、篠田は地面に叩きつけて沈めたが残りに取り押さえられた俺はイロイロいじられ、もてあそばれ、測られることになった。

その結果は『身長：165cm 体重：52kg 3S：85-56-88』という数値結果と計測に加わった女子たちの大半の心に深い傷を負わせることで終わった。

「何なのよ、その出鱈目な数字は！」

「俺のせいじゃないですよ！」

そのドタバタ騒ぎはちよつと席を外していた佐伯会長が戻って来るまで続き、原因(?)となった俺に『氷室先輩が復活したら生徒会室の鍵を閉めて帰る』という罰に近い任務が与えられる原因となった。

\* \* \*

「「なんであんな目に……」」

さっさと帰宅した他の面々に取り残された俺と氷室先輩は同時に  
おんなじことを言った。

氷室先輩が復活をしたのは女子陣が帰った三十分後だった。

「……お前は何をされたんだ？」

げんなりとした氷室先輩が尋ねてきた。

「えつと……魔術師状態の体を色々……」

それだけ言った時点で氷室先輩が止めてきた。

「……苦労したんだな」

ボツコボツにされた割に無傷に見えるのは手加減が上手だったから  
だろう。

「先輩ほどじゃないですよ」

ついでに俺は『魔術師』<sup>おんな</sup>の時は女子用の制服を着る事を約束させら  
れた。

「なんでウチの女衆はあんだけ強いのかね」

「まあ、元女子高って話ですからね」

取りとめもなく話ながら歩き、丁度分かれ道に到着し

『きゃあああああああああ！』

「悲鳴ッ！」

俺と氷室先輩が身構える。

「藤谷、先行してくれ。」

「それじゃあ、氷室先輩、コレお願いします」  
何枚かのカードをケースごと投げて渡す。

「何だコレは」

訝しむ氷室先輩

「結界符です。使い捨てですけど、位相変異結界を十分くらい張れます」

これは今日氷室先輩の復活待ちの間に作ったものだ。

「ん、任された！」

「お願いします！」

駆け出し、スイッチを切り替え、ついでに制服を『再構築』する。  
この再構築をしないと『イタイ目』に遭わされる呪いをかけられた  
為どうしてもやらざるを得ない。  
できないならまだいいのだが、『出来てしまっ』からやらざるを得  
ない。

「……やっぱり恥ずかしい……」

スカートをたなびかせて現場へと急いだ。

背後から広がって来る結界は氷室先輩が渡した結界符を発動させたのだらう。

角を曲がり、悲鳴の元へ

辿り着いた場所ではブロック塀に追い詰められたセーラー服の女子。聖奏の生徒だった。タイの色は臙脂、高校が紺だから中学部の生徒。ついでに変位結界の中に居られるという時点で魔術の素養があるのかもしれない。

「ひっ……」

そしてその周囲に居るのは……腐れ死体<sup>ゾンビ</sup>。どっちかと言うと動く骨格標本にも見えなくもないのも混ざっている。

確かに、アレに追いかけられたらトラウマ物だ。

少女に迫る動く死体共。

「やらせるかあッ！」

ポケットに詰めてあつた防護符を取りだし、『創った』短刀に刺して投げつける。

それが先頭の動く死体リビングデッドに刺さつて結界が展開。

本来『防御』の為に使うモノだが密着状態で発生させたため展開された場所から横に一行が切断される。

結界の新しい使い方のアイデアを頭の隅に入れておいてそのまま『創りだした』刀を振るつて死体どもを蹴散らす。

ちら、と少女の方に視線を回すと気絶して倒れている様子。とりあえず放つておいて構わないだろう。

数の多さが気にならないほど齒ごたえのない動く死体共リビングデッドはあつさりと蹴散せてしまった。

蹴散らせてしまったのだが、上半身と下半身に分けられてもまだ動き、骨の数本が切断されても動くこととする。

蹴散らせたが、倒せない。

「なら、消し飛ばすまで！」

刀と投げた短剣を消し、手に発生させた魔力球で消し飛ばす。それならば、絶対に生き残らない。

最後の一匹が消し飛んだの確認した俺は気絶している少女の顔を覗き込む。

幸い、傷もないようだし、恐怖で気絶しただけだろう。

「だからって言って、寝かせっぱなしはマズイよな。氷室先輩に丸投げするか。」

俺は携帯電話をポケットから引つ張り出して氷室先輩を呼びだし、説明をお願いして逃げる事にした。

が、

「…出ない」

気付いていないのか、居留守なのか電話に出ない。

「仕方ないか。君、大丈夫？」

後で大変な事になる予感はあるが、放置はもっと拙い事になる可能性がある。

「んん」

うつすらと目が開き始める

「…だれ？」

「顔色悪いけど、貧血？」

なるべく優しげな声で誘導を始める事にした。

突然、ハツとして

「あの、お化けは!？」

「お化け？」

何も知らない、何も見ていない  
そう演じる。

「えっと、動く骨格標本とか、腐りかけの人の形をした何かとか」

「そんなの、見てないよ？」

嘘。

俺が蹴散らして消し飛ばした。

「そんな………」

「ほら、立てる？」

手を貸して立ちあがらせる。

「まっすぐ家に帰って、一晩立てば大丈夫。忘れられるから」

優しく頭を撫でてあげる。

それで落ち着いてくれ。

「ね？」

「……………はい」

「帰れる？」

「大丈夫です」

「うん。それじゃあ、大丈夫みたいだね。まっすぐ帰るんだよ」

「あ、はい！」

俺は何気なく歩きだして一番最初の角を曲がって方向転換をする。

で、一つ目の路地を曲がって人気が無さそうな通りに入れたところでスイッチを切り体を元に戻す。

「で、氷室先輩は……」

携帯電話を開いてみたらメールが一通。

開いてみたら『目立ちそうだから先に行く。ケースは明日の生徒会室で返す』という内容。

「…先輩」

ああ、きつと面倒事が起こるだろうなあ……と頭を抱えつつ俺も帰路を歩いた。

## # 6 2 (前書き)

フラグって、立たせたら消化が当然ですよ？

そして翌日、

「中等部の生徒から人探しの依頼が来た？」

生徒会室に入った直後にそんな話を佐伯会長が持ってきた。

「そうなの。コレが探し人の特徴」

そう言って渡されたメモを俺が受け取り、その場に居た全員で覗きこむ。

「なになに、高等部の女子で、」

「髪の毛が腰くらいまであって、」

「物凄い美人で、胸が大きくて、」

「ついでに足も細そくて、優しい人？」

そしてそのメモの下には大体の人相描きが添えられていた。

「ちなみにその似顔絵は新聞部の似顔絵描き担当の子に描いてもらったから、かなりの精度の筈よ」

「これ、どう見ても…」

「だよなあ」

「うん。」

頷く面々。

俺もこの似顔絵の人物に心当たりがある

どころではない。

「どう見ても、魔術師状態の藤谷だよな」

「…で、藤谷くん。心当たりは？」

「昨日、幻魔の使い魔らしきリビングゲッドと交戦しました。報告書は今提出します。で、その時に襲われていた聖奏の中等部女子が気絶していたので起こして、簡単に『何も起きて無い』という暗示をかけて帰らせました。」

「…決まりね」

佐伯会長が会長デスクの引き出しから一枚の紙を引っ張り出してくる。

そして

「女子部行き、決定」

そんな、死刑宣告に等しい言葉を俺に突き付けた。

「な、何ですか!」

「まず、聖奏の女子制服を着ている姿を見られている。この時点でその人物は聖奏学園の在校生である必要があるの。もしくは似た服を着ているイタイ人。」

それは理解できる。

「でもね、聖奏の制服はちょっと特殊で『自作』が難しいの。だからあくまでも『似た服』でしかない。けれども今回の目撃情報だと

間違いなく聖奏の制服って証言がある。で、聖奏の制服はその『特殊な部分』がちよつとづつ違うから卒業生の線もなくなるの。判る？」

それは知らなかった。

俺が『再現』しているのは散々見慣れた楓らと同じ『今年度入学生』のものだ。

つまり

「女子部に在籍するか、在籍する予定の人物じゃないと、おかしいってこと。ウチの制服は学生証を見せないと買えないものってのも理由の一つね」

「…」

俺は何も言えない。

完全に反論する余地が無い。

「明日か明後日には設定を作っておくわ。とりあえず、覚悟だけは決めておきなさい。」

「…はい」

その翌日、担任が『交換留学生として推薦を受けている』と言って

来て『イギリスに二週間行く気はないか?』と尋ねてきた。

それが会長の偽装工作だと知っている俺は首を立てに振るしか無く、表向きは二週間の交換留学、裏というか、正確には二週間の女子部通いが決定した。

\* \* \*

『マグス王立学院バーミンガム校高等部一年 御剣唯奈』みつるき ゆいな

そして、その『御剣唯奈』なる少女は今日付けでこの聖奏学園女子高等部の一年三組に生徒会間交流の為の交換留学生として来ることが決まったらしい。

ちなみに、佐伯家とは遠縁の親戚になるらしくホームステイ先は佐伯家と言う事になっている。

代わりにイギリスに送られるのが男子部一年三組の『藤谷誠』という事になる。

男子と女子が交換という部分はちよつとした手違いであった、と窓口になった生徒会長佐伯奈緒は語る。

これが俺に与えられた新しい設定だった。

俺としては前にも名乗ったことのある『宮野真心』でもいいかと思つたのだがそうすると何処ぞの会長がうるさそうなので別の名前を名乗ることになった。

所属がバーミンガム校なのも、ロンドン在住という真心の設定を考慮した結果らしい。

幸い、英語は問題なく喋れるし、日本生まれ、幼少期に渡欧という設定故に日本語訛りの英語でも問題は無いとの事。

ちなみにこれらの設定は遥が基本部分を作り、会長が不足を補って作っただけらしい。

……と、言う訳で、いやどつという訳か　　俺は今、全校朝礼中の壇上に立たされていたりする。

「それでは、本人から一言」

それまで、佐伯姉妹が作り上げた設定を和風ダンブルドア（映画ノ賢者の石仕様）な学園長が公的な説明し俺に演壇前が明け渡された。講堂に集まる、中高六学年、男子部四クラス、女子部四クラスの八クラス：一クラス当たり四十人なので全部で二千人ちかい聖奏学園生の前に立たされる。

「えっと…御剣唯奈です。久しぶりの日本なのでいろいろと迷惑をかけてしまうかもしれませんが、二週間よろしくお願いします」

ぺこり、とお辞儀をすると盛大な拍手。  
普段の朝礼じゃ先ず見られない光景だった。

…普段の話関係だと確実に湿気たぺちぺち、という中学生によるお情けの拍手くらいしか鳴らないのに。

司会担当の先生が『御剣唯奈』の所属クラスが高等部一年三組であ

ると告げた後、いくつかの事務連絡を経て解散となり、少し待って廊下が無人になるのを待った俺は佐伯会長と女子部一年三組の担任である有坂先生に連れられて教室まで案内されることになった。

「ちょっと待っててね…」

一度教室に入って行った佐伯会長が二人ほど生徒を引き連れてきた。

「前に一度会ってるかもしれないけど、こちらが高槻楓さん」

「よろしくね」

「で、こちらが佐伯遥さん。」

「よろしく」

どついう訳か楓と遥が紹介される。

で、紹介された以上はこちらも名乗るしかない。

「み、御剣唯奈です」

幼馴染みと知り合いに改めて自己紹介というのもなんと変な気分だ。

まあ、今の俺は藤谷誠ではなく御剣唯奈なので必要といえば必要だけだ。

「高槻さんは生徒会役員、遥は言わなくてもいいわね。」

「ええ」

設定上、遠縁の親戚なので昔あったことがあるという事になっている。

「何か困ったらこの二人に相談して。二人もいい？」

「はい」

「了解です」

「高槻さん、佐伯さん、よろしく願いします」

軽くお辞儀をした後、自分の教室に戻る佐伯会長、教室内に戻る楓と遙を見送り、

「それじゃあ、教室に入りましょうか」

「はい」

有坂先生につき従い、教室のドアをくぐった。

その途端、男子部の時とはまた異質な視線が集まって来る。

「はい、さっきの朝礼で聞いたから判ると思うけど、交換留学生の御剣さんです。二週間という短い期間ですけど、仲良くしてあげてください」

有坂先生に促され教卓の前に立たされる。

また自己紹介か…

朝礼の時と違うのは壇上と教壇という点。

壇上だと数メートル離れている『在校生』が今や一メートルちょっとだ。

「えっと、イギリスのマグス王立学院バーミンガム校から来ました、御剣唯奈です。生まれは日本なので、どちらかと言うと留学というより帰郷なのですがイギリス暮らしがそれなりに長いので色々と迷惑をかけるかもしれませんが、よろしく願いします」

シン、とした教室に響く俺の声

「それじゃあ、御剣さんの席は…佐伯さんと高槻さんの間ね。」

有坂先生に指定された席に向かい、周囲の人に軽く挨拶をしておく。

当然、楓と遥にもするが、二人ともちよつと笑いを堪えている感があつた。

「よし、それじゃあ授業を始めるわよ。」

教室後ろの黒板に書かれた時間割表によると教科は国語、担当は担任である有坂先生らしい。

チヨークを片手に取った有坂先生は黒板に文字を書き始める。

一画目は『ノ』と『一』を合わせた文字。

カツ、カカカツ…と音を立てて描かれた文字は…

『自習』

「どうせ留学生が気になって授業に成らないだろうからね。他のクラスに迷惑をかけるんじゃないわよ」

そう言つて有坂先生は教室を出て

行こうとして、教室になだれ込んできた他クラス生に撥ねられた。

それと同時に、楓と遙を除くクラスの面々が俺の机の周囲に円陣を作るようにして集まって来る。

そのまま数人に引つ張られて椅子から立たされ、教室の中心に連行され…

「吊るし上げタイム」

一人がそう宣言した途端

「…………身胸日バ彼長向お本一氏こつ語ミいっ何き流したのせい  
暢ガ学んだム校子何けっつな力どててんッ何どどでプ時んうすいな  
なかギとのリコスるに?」「…………」

幾つもの質問が一気に飛び出して来る。

圧倒されたのと、混ぜって聞きとれないのとで答えようがない。

『せめて一人ずつ、』…：『そう言いたいが無遠慮にべたべたと触ってくる手やら何やらに』あうあう…：『』という何とも情けない声がこぼれるだけだ

「痛っ」

中にはそのままだともてあまし気味なので結っておいた髪の毛を引っ張る輩もいる。

いくら握りやすい馬の尻尾の形をしているからといって引っ張るのはやめてほしい。

もし相手が猫なら『教育的指導』という名の猫パンチ（爪アリ）が即刻叩きこまれるだろう。

さらには（一応）同性同士だからといって制服の内側に手を入れようとすると輩やら、胸を揉んでくる輩やらも多くはないが少なくともない。

俺を核にした人間団子は復活した有坂先生と、集結した各学年の担任団による『いい加減にしないで』という雷が落ちるまで核をもみくちやにし、軽いトラウマを植え付け続けた。

『女って男とは違う生き物なんだ』

そう、思った。

「つ、疲れた……………」

放課後、質問の嵐を降らせてくる女子部生徒たちもひとしきりの質問をして満足したのか日常に戻り始めていた。

休み時間ごとに有坂先生立会いの元で質問会が行われ、なんとかさばききつたのがつい先ほどの事。

「ごめんなさいね。ウチの子たちはゴシップとか好きで、珍しがって羽目を外してるだけだから、いつもはああじゃないんだけど…」

「まあ、それは、仕方ないと思います」

女子に漏れた情報はあつという間に一里先まで伝わる。

そう言われるのもあながちウソではない事を実感させられた。

「えっと、あの、お疲れみたいですけど、少しいいですか？」

ぐったりとしていたところに声が掛かった。

「ん？」

そこに居たのは中等部の生徒だった。

何処となく見覚えのある……

「ええっと、三日くらい前にお会いしましたよね。私が貧血で倒れて……」

思い出した

「あの時の、」

あの時、『死者』に襲われていた子か。

「あっ、あっ、えとと、とみさか しおん富坂紫音でいいです。あの時はありがとうございます  
ごじゃいました！」

慌てているのか、行き成り自己紹介を始め、噛みながら頭を下げてくる。

「いいよ。元気そうで何より」

俺はぺこり、と下がって来ている頭に手を乗せ、軽く撫でる。

富坂は撫でられるがままにしてくる。

横から『コレが撫でポか！』という微妙にメタい発言が聞こえてくるのは気のせいと言う事にしておこう。

「短い間だけど、よろしく」

「はいッ！」

それからもう一度、『ありがとうございます！』と元気よくお辞儀をして富坂は去って行った。

「えっと、どいう話の流れなの？」

有坂先生はまったく状況把握が出来ずにいる様子だった。

「えっと、交換留学が決まったすぐ後に、奈緒さんをお願いしてこつそりと学校の中を見させてもらったことがあつたんです。その時に……」

そんな穴だらけの説明で有坂先生は納得してくれたため、それ以上の説明の労苦を払う必要はなくてすんだ。

「さて、生徒会室に行くのでしょうか」

中央棟に入ったら、一目見ようと張っていたらしい男子部生徒の群れが壁となつて出現したのでそれをかき分け押し分け、やつこのことで生徒会室に辿り着いた時、俺はなんとも言えない疲労感に襲われて、借り受けている（ことになっている）『藤谷誠』のデスクに突っ伏したのだった。

「疲れてるな」

と氷室先輩

「……あの元気の塊の中に入れば氷室先輩もきつところなりますよ」  
演技疲れに気疲れに、あとは周囲に吸奪ドレインされたとかの様々な要因が重なった結果、精神的にも肉体的にもかなり疲れていた俺は突っ伏したまま、だんだんと重くなる瞼になんとか抗おうと必死だった。

\* \* \*

部室に来ておよそ十五分後

「すー……………すー……………」

誠：いや、唯奈は自分の腕を枕にして静かに寝息をたてていた。

「寝てるな」

「寝てるね」

そんな珍しい光景を前に、眺める啓作と梨紗は思わず同じことを言いながら確認してしまった。

「かわいい寝顔」

そう、ひかりが評するのは、普段のイメージからすればかなり幼く見える寝顔を晒しているからだろう。

「カメラ、カメラ、」

そう言いながら机を漁る凜。

探しているのは携帯電話だが、焦っているせいで鞆に入れてある事をすっかり失念している様子だ。

「どうする、起こして帰る？」

「もう少し、寝かせてあげていいんじゃないかな」

流れで一緒に生徒会室に来ていた遙と楓も、頬が緩むのを抑える事

が出来ないでいた。

「で、どうしてそんな怪我してるの」

「…生徒会役員だからって理由だよ」

そんな中で晶に手当てされる雅人は同級生から袋叩きにされたようだ。

それから少しして、帰宅するという遙が出てから十分余りが経った時…

びろろろろ

生徒会室の電話が鳴り一斉に、それこそ寝ていた唯奈も起きて電話機の方を向く。

「はい、聖奏学園生徒会………」

一番電話に近かった梨紗が取り、顔色がだんだんと暗くなる。

「わかりました。それでは……」

かちゃり、と電話機が置かれ梨紗の言葉を待つ一同

「第六高校のテリトリーで大量の『死者』<sup>アンデット</sup>が湧いたそうよ」

『死者』<sup>アンデット</sup>の一言を聞いた途端、初陣組（赤城と篠田）を除く全員が屋上に向かって走り出していた。

\* \* \*

佐伯遥は走っていた。

「どうなってるのよ！」

その身に襲いかかる、訳の判らないオカルトチックな現実から逃げたいが、中々に逃げさせてもらえないでいた。

「行き成り、人気は無くなるし、変なのが襲ってくるし…」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながらも走る足は止めない。

止めれば腐乱死体や骨のくせにやけに足の速いアンデットの群れに喰われてしまう。

手を前に突き出してるのろろ歩くのが清く正しい…って、それはゾンビだ。

何が違うのかはいまいちわからないものだが…

いくつか足音やらの声やは聞こえるので少し安心できるが…あんまり近くないのが悩みどころだ。

「あー、もう、なんでこんな目に」

だいぶ長いこと走っているが、ペースを維持できていることを不思議に思いつつ、『火事場の馬鹿力』ということにして後で考えることにした。

今は、とにかく逃げるのみ。

が、誤って土地勘のない路地の多い道に入り込み、自ら袋のねずみになり行ってしまったのはその十分ほど後の事だった。

「えっ」

正面には高くそびえるブロック塀、後ろからは骨と腐れ死体。

「あっちゃー、これって絶体絶命ってヤツ？」

だが、遥にはなんとなく無事で済むんじゃないかという予感があった。

前にも、絶体絶命のピンチから鮮やかに救ってくれた『アイツ』が居たから……………

壁に背中が当たる。

もう下がれないところまで下がった遥は息をのむ。

『早く来てくれ』

そう強く念じ、

アンデットたちが遙の眼と鼻の先にまで来た時、一枚のカードが遙の前のアスファルトに突き刺さり、伸ばしてきていたアンデットたちの腕が吹き飛んだ。

続いてくるのは特大火炎放射器から放たれたような炎。

ほかにも青みがかつた光が降り注ぎ、アンデットの群れに襲いかかる。

「~~~~~!」

呻き。悲鳴。絶叫。断末魔。

声にならないような声上がり、遙は思わず耳をふさぐ。

なのに

『アクセス 接続開始、コードサーチ 術式検索』

まるで体の内側から聞こえてくるかのような、声が聞こえた。

『死せる者よ、浄化の焔を以て汝を在るべき姿に還さん。』

その声は聖書を読み上げる聖職者のようであり、はたまた咎人を裁く裁判官のようであり…そのどちらでもない。

がががっ、とアンデットたちを取り囲むように奇妙なバランスの、まるで投げるのが目的のような柄の短い剣が地面に突き刺さる。

そして

『アーストウアース アッシュトウアッシュ  
ダストトウダスト  
土は土に、灰は灰に、塵は塵に』

その宣告と同時に、剣で囲まれた内側が業火に包まれた。

その燃え盛る炎は神々しいまでに綺麗だと遥は思った。

綺麗だと思つて、ふと燃え盛る炎の至近にいるのに全く熱くない事に気がついた。

「もしかして…これのおかげ？」

遥は地面に刺さるカードを手に取る。

なんとなく、『彼女』 その元となった『彼』を思い出させる銀色の光。

それが、遥が手に取った途端、少しばかり蒼を溶かしたかのように、空色に変わる。

「遥！」「え？」

直後、上から誰かが落ちてきて、焰の中から骨が飛び出してきて、

「かはあ…」

目の前の細い『ソレ』をざっくりと削り取って、飛び出してきた赤い滴が遥の頬に当たる。

鮮やか過ぎる『紅』

目の前に飛び込んできた人影が倒れ、炎を背中にした骨の指先が赤く染まっている事に気付

「あああああああ！！」

遥の絶叫が結界の中を振るわせた。

「何ごと！？」

「遥！」

その数メートル上空でコンの背中に乗って滞空し爆撃を仕掛けていた梨紗や楓には一瞬、何が起こったのか全く分からなかった。

なんせ、『唯奈に致命傷に近い傷を与えた骨』が空色の壁によって分断されていたのだ。

そして、いまこの場にいる魔術師で結界を張れるのは路地に赤い池をつくりながら倒れ伏す唯奈一人のみ。

凜の『封絶』は結界とは少々異なるものだし、新米組二人はまだ使う事が出来ない。

ひかりも回復専門だ。

そうになると、必然的に答えが限られてしまう。

『佐伯遥が、使用済の結界符を触媒にして結界を張っている』

「氷室くん、急いで降下。唯奈ちゃんの手当てをしないと！」

「りよ、了解！」

一早く冷静さを取り戻したひかりの指示で啓作はコンを地上に降りさせる。

地上に降りるや否や、ひかりは唯奈の元に飛びかからんばかりに向かい、梨紗が路地の外を警戒、晶と雅人は梨紗の援護の出来る場所に、恐る恐るながら移動する。

楓は遙の手を取ろうとして、結界に阻まれた。

「遙！もう大丈夫だから、これを解いて！」

「あ……」

見知った顔、見知った声が目前に現れて遙は脱力同然に結界を解き、その場へへたりこみそうになって楓に支えられた。

「ひかり先輩！」

「圧迫して止血して。直接止血、知ってるでしょ。早く！失血死させるつもり！？」

ひかりは啓作を使いつつ『能力』を使わずに魔術を使つての手当てを施してゆく。

それは『致命傷』であって『即死』では無いからだろう。

『即死』や『致命傷が原因の致死』が起こった時の為に『切り札』は温存する。

一見すれば小学生ほどに見えなくもない幼い容貌のひかりだが、そのところはこの場にいる誰よりも冷静だった。

「傷は残らないだろうし、これでよし。氷室君、二人を後送して。たしかすぐその公園を臨時拠点にしている筈だから」

「了解。…久しぶりっすね、ひかり先輩が指揮執るのって」

「本業は衛生兵だからね、わたし。歩兵役の梨紗ちゃんや輜重兵<sup>しちゆうへい</sup>役の氷室くん…前線組<sup>ライン</sup>と私たち<sup>スタッフ</sup>後方組とは本来は別系統なんだよ。」

輜重兵とはいわゆる輸送部隊に居る兵の事を言うので、ある意味正解、ある意味間違いではある。

啓作が応急処置の終わった誠　唯奈を抱え上げようとしたとき

「…ッ、痛った……………」

当然、貧血気味であることが判るくらい顔色は青かったが、唯奈が目を覚ました。

## # 6 4 (前書き)

第六話分はこれで終わり。

なんというか、よく人を庇って死にかけると主人公だなあ…とか書いてて思ってしまった。

本気で死ぬかと思ったけど、どうやら助かったらしい。

まあ、あの場だと防壁は間に合わないし、それ以外の攻撃も間に合わなかっただろうから、次善か次々善くらいの策だった筈だ。

「大丈夫か？」

「…なんとか、制服は血まみれですけどね」

少々ふらつくが立ち上がる。

「次の集団に行きましょう」

調子は悪いが、固定砲台役くらいなら出来ると思いそう言ったが

「氷室くん、楓ちゃん。強制連行」

「アイマム」

「はい」

氷室先輩と楓に拘束され遥と一緒にコンの背中に乗せられた。

「ついさっきまで死にかけてた重傷者が無理しない。本当だったら即病院送りの輸血が必要なレベルなんだよ？」

なんとか降りようとする俺に夏元先輩が迫って来た。

「でも…」

戦力が足りないんじゃない？…そう言おうと思ったが  
「いいから行く！というか連行。氷室くん、行っちゃって。遙ちゃんはこの子が動かないように見張ってて」  
遮られた。

「あつ…はい！」

突然振られたので慌てる遙。

「というか、見張りまで必要なの？」

「それじゃ、ちよつくら送って来ます」

「お願いね」

「了解。行くぞ、コン！」

それからあつという間に臨時に後方支援系の術師やら予備戦力やら指揮通信部門やらが展開する公園に運ばれた俺と遙は『動くな』と厳命されてしまった。

臨時本部付きの医術系術師に貧血以外の症状が無いことを確認されたあとは『安静に』と言われただけ。

結果、ここに居る以外のする事が無くなってしまった。

「ねえ。聞いていい？」

「何？」

不意に遙が話しかけてきた。

やることもないので、話す位しかやれることが無いからだろうか。

「あの骨と違って、なんなの…それにあの壁みたいなの…」

…正直、困った。

「…正直、困った。テンプレート解答だと『会長に聞いてくれ』な訳だが、それだと先ず納得しないだろう。」

「…壁に方に関しては、防御結界の魔術だよ。俺が作った符に遙が魔力を流し込んだから発動した。」

「…私の!？」

「まあ、会長にだって魔力があるんだから、妹である遙にない筈がないよな」

「……………じゃあ、あの骨は？」

「…<sup>デモン</sup>幻魔っていう、詳しくは判らないけど突然現れる『忌むべき来訪者』ってところか」

正直、全ての資料を目を通してモアレの存在は全く判らない。

「それじゃあさ　「うわあああ!!」「えっ!?!」

悲鳴のような声があがって、俺たちが目にしたのは公園のと真ん中の広場…救護所となった、俺たちのいる場所の至近に現れた濃紺のローブ姿の仮面付だった。

「くっ…！」

俺は体に鞭打って走り出し、何やら黒い球を周囲に浮かべ始めた。そして背後のケガ人との間に滑り込み、防御符を三枚かざす。

放たれた黒い球と防御符が展開した防壁が接触し双方がはじけ飛ぶ。

「なんつー、バカ威力」

そうこぼしながらも、俺は笑っていた。

「だが、これならッ！」

今度は自分自身の魔力を使って編んでおいた保護用の結界（半球状のヤツ）を展開して身動きの取れない負傷者や戦闘力のない医師の壁に廻る。

外側では急襲から立ち直った幾人かが防御や反撃の為の行動を取り始める…が、

「くっ…！」

微かだが目が霞む。

原因は判り切っている。

『貧血』。

血は『サーキット魔術回路』と呼ばれる体内の魔力を循環させる器官に流して

いない魔力の保管場所でもある。  
それを失うという事は回路に流せる魔力量が減るという事だ。

「確かに、これは即輸血レベルだったかもな……」

なんとなく回らなくなってきた頭を無理に回転させて打開案を探す。

その時だった。

突然、対峙していた仮面の術師が巨大な雷撃に撃たれて、消し飛んだ。

「助かったあ……」

正直、防壁展開しながらの攻撃系術式の並列発動するには頭の回転も魔力も足りなかったから、本気で助かった。

雷の放たれた方向に視線を向けて、驚いた。

「はあ……はあ……はあ……で、できた？」

遙が、なにやら呪符のようなモノを手にして呼吸を荒くしていた。

「は、遙あ！？」

びっくりした拍子に結界が解け、ついでに脱力する。

「だ、大丈夫!？」

駆け寄って来る遙。

「だ、大丈夫…それより遙、さっきのアレは…？」

「ええつと……………」

視線を外しながら遙が差し出してくるのは、先ほどの札。

「これって…」

それは俺が試作して、とりあえず持ってきていた攻撃用の符だった。

「ゴメン。さっき飛び出してた時に落してたから…」

「まあ、いいよ。助かったから」

それでも、確か俺が作ったのは、『魔力放出』  
ぶつちやけるとただ魔力を破壊力に変えて撃ちだすだけの簡単なも  
のだった筈だ。

だというのに、あれだけの雷が起こった…ということとは

「遙も魔術師ってこと、か」

先輩たちに報告しないと…そう思いつつ、無理させたせいで限界を  
超えたらしく意識が途切れそうになっていた。

「ちょ…ちょっと!？」

なんというか、今日や厄日なのかな？

そんな気がしつつも俺は本日二度目の気絶フラックアウトを迎える羽目になった。

\* \* \*

目が覚めてみれば、最早お馴染みとなった聖奏学園の保健室の一番右端のベッドだった。

「まったく、無茶するんだから」

そして、目が覚めると同時にひかり先輩のお説教が始まった。

「でも、あの場じゃそうするしかなかった訳だし、これからはもうちょっとと防御上手になってね」

それでも、『どれだけ周囲が心配したのか』とか『死にかけだった』とか言われただけだ。

「で、遥ちゃんの件なんだけど。この符、雷撃の術式が組まれた物なの？」

ひかり先輩が差し出してきたのは遥に渡った攻撃用の試作符。

「いえ、『ただの魔力弾を撃ちだす』だけの術式の筈で、せいぜい牽制程度の威力しかもってない筈なんですけど…」

それなのに、極太の雷撃を放った上に一撃で魔術師タイプ（むしろ

ネクロマンサー  
死体使いだつた気がする）の幻魔を消滅させた。

「…なんというか、今年の一年生は本当に豊作ね。まるでそれくらいの戦力がないと立ち向かえないような事が起こる前兆みたい」

「こ、怖い事言わないでくださいよ」

「でも、可能性としては否定しきれないでしょ。」

やれやれ、と言わんばかりのひかり先輩。

「ともかく、明日から遥ちゃんも生徒会の仲間入り確定だから、色々教えてあげてね」

「はあ…いろいろ？」

「魔術の教師役、奈緒ちゃんからご指名だよ」

「ええええええ！？」

本気で驚いた。

何故に俺が魔術を教える教師役をやることになったんだ！？

「だって、魔術をお札で発動させられるような術式を組みあげちゃつたんだから、ね」

結局押し切られ、翌日に正式に生徒会に籍を置くことになった遥（ついでに赤城と篠田）に魔術を教える事になったのだが…

「…なんというか、出鱈目だな」

遙は『放出』の札が無ければ攻撃術系を使えず、『防御』の札が無ければ防壁展開が出来ず、逆にそれらが有れば平均以上の術が使えらるという、とんでもない術師だった。

「むう、唯奈ちゃんに言われたくないよ」

「はいはい。とりあえず、札なしで放出できるようにするまでその反復練習ね」

「ううー」

遙は一週間かかってようやくと単純放出が使えるようになった事を追記しておく。

## # 6 4 (後書き)

これで、大体の主要キャラは登場が終わりました。

そろそろ、一度キャラ一覧でもつくりましかねえ。

あの、小説のカバーの所にある簡単なヤツを。

## #7 1 (前書き)

教習所通い始めたとか、大学の講習があったとかで大分遅くなってしまいました。

休みになって、更新速度が低下してしまった………

ついでにクオリティ絶賛低下中。

でもイベントフラグの為に避けては通れない………

六月も末、体育祭という精神崩壊の危機を乗り越えた俺は無事『御剣唯奈の交換留学期間』を終えて元の姿：すなわち『藤谷誠』として聖奏に戻る事が出来た。

戻ることはできたのだが：二週間の間『御剣唯奈』という少女を演じていたせいで歩き方とか立ち振る舞いがだいぶ女性的な物になってしまっていた。

それに気付いたのは一人称を『私』で言いそうになった時でその時は本気で屋上から身投げしたい心情に駆られた。  
楽に逝けるわけがなく、むしろ咄嗟に重力軽減と身体強化、あと受け身という防御手段をとって軽傷で済んでしまう可能性が高いのだが。

おかげで土日は思考やら仕草やらを元に戻す作業に費やされることになってしまった。

だが、月曜日。

完全に元通りに近い状態に戻った俺は内心、意気揚々と通学路を行き、教室に

『イギリスへ帰れ!』

「なにゆえ!?!」

入った途端、クラスの連中から怨嗟の声で迎えられた。

「よし、簡単に事情を説明してやる」

珍しく景山が暴走寸前の面々を押さえて前に出てきた。

なんとなく、久しぶりに教室で会う腐れ縁のこいつが無性に懐かしく思えてしまう。

「まず、この写真を見る」

つきだされたのはとある人物が写った写真だった。

「この子がお前と入れ替わりで留学してきた子だ。名前を御剣唯奈という。向こうで暮らす日本人だそうだ」

ついでに言うと、遥と楓の二人も一緒に写っている。

「…はあ」

「反応が鈍いな。これだけの美少女だぞ!? 『ぴん』とか『ピキーン』とか『キュピーン』とか、『ティーン』とか…向こう、スパークが走るような何か来ないのか!？」

「全く」

残念ながら、その人物が自分なのでそういう感情は一切湧かない。だが、それは秘匿しなければならぬ事なので絶対に言わないが。

「何故だツ！貴様それでも健康かつ健全な男子高校生か！」

「何だよ、その人を不健康で不健全みたいな言い方は」

その時だった。

「…そういえば藤谷ってかなりかわいい幼馴染みがいたよな。」

「ああ、四月に保健室で看病されてるの。俺、見たぞ。思わず鞆を叩きつけちまった」

わずか二人の声が教室に染みわたる。

ギリリ、と人を射殺せそうな視線が刺さり、嫌な汗が出てくる。

「ひっ捕える！この彼女持ち（彼女の）に血の制裁をおお！」

「「「おおおお！！」「」」

前にも言った気がするが、聖奏は男子部と女子部が別れている。

流石に小学校は一緒だが、中学と高校は男女別だ。

中等部からの繰り上げ組（もちろん、入学試験ならぬ進学試験を受けて合格しないとダメだ）も高校入試組も、基本的に異性との接点が無い。

それ故、知り合いに女子が居るだけで異端、付き合っていようものなら即処刑といった風潮が、少なくともこの一年三組には存在している。

それはともかく、クラス計三十人余り（九人ほどは遅刻か欠席の様だ）が襲撃をかけてくる。

「うおおお？」

いくら対幻魔で一对多数に慣れているとはいえ、得物無し、殺傷禁

止、相手は狂化中では勝ち目がない。

「…お前ら、何やってるんだ？」

担任の今松先生が現れた時、俺は教室最後列に設置された礫台の十字架に鎖で固定されていた。

「ほら、とつとと片づけてホームルーム始めるぞ」

「うーっす。おい、そっち持て」

「んあ？二人じゃ無理だ。あと二人！」

結局四人ほどが集まってきて、急に浮遊感に襲われた。

「って、撤去の前に外してくれよ」

「よし、『いち、にのさん』でいくぞ」

「了解」

「うーっし、やるか」

連中は聞く耳持たずでそのまま礫台を横にして

「いち、にの…さん！」

俺は礫台ごと窓の外に投げ捨てられた。

せめてもの幸いは礫台は足の側の方が重くなっているから足から落下する事になることと落下地点が花壇だという事だろうか。

ごん、という鈍い衝撃を感じて俺は予測通り花壇に到着。  
幸い、怪我は無いがかなり危なかった。

「とりあえず、救助待ちか…」

誰かが近くを通りかかってくれるのをただ待つ時間は割と早く終わったのだが…

「男子部って面白い人が多いみたいだねえ」

「そうだね」

現れた二人組は美術の授業で写生の題材を探している最中の楓と遥だったのが運のつきだった。

二人は礫にされた俺の居る花壇を写生対象にすることを決めたらしく、一限の授業が終わるまで解放してもらえなかった。

\* \* \*

花壇の一件は俺を襲う受難の序曲に過ぎなかった。

「だはああ…」

男子部に戻って二週間余。

七月に入り大分暑くなりつつあるこの時期、俺は机に力なく突っ伏していた。

「おうおう、お疲れみたいだな」

「そういうお前は随分と元気だな」  
俺は景山にげんなりとした表情のまま返す。

基本的に先の一週間の間におこったトラブルの八割五分はこいつが元凶だった。

「おう。ようやく完成したからテンションが天井破りだ」

確かに、疲労の色は見えるが妙にハイテンションという不思議な状態だった。

「何が完成したんだ？」

「うむ、聖奏学園写真部発行の『ミス聖奏 ver 上半期』だ。聖奏学園女子部の綺麗どころ、可愛いどころを集めた写真集だ。ちなみに一冊七五〇円。」

「…女子部の連中に知れたら危ないんじゃないか？」

「写真集の写真は女子写真部の提供で、掲載する写真の選定には女子も関わってる。それに同じ事を女子部むすぶもやってるからな。お互い様の必要悪だ」

「…盗撮写真じゃないだろうな」

「倫理的にヤバい写真はないから問題はない。まあ、生徒会には内緒でやってるけどな」

…こいつ、俺が生徒会の役員だつてこと忘れてるのか？

でも

「あの会長なら気付いてそうだけどな」  
後で聞いてみよう。そう思いながら言った

「ははは、共学化以来続いてきた伝統をここで途切れさせてたまるかよ」

したら、笑いながら返してくる

「それじゃ、特集本の選定作業があるからまたな」

そう言っつて景山は教室から出てゆく。

基本的に気さくでいい奴なんだけど、趣味やらやっつてる事が犯罪ギリギリもしくは犯罪というところかな。

「…そういや、明日から期末試験だけど大丈夫なのか？」

きつと忘れてるんだろうな、あのバカは。

そう思いながらも重い足取りで生徒会室に向かう。

明日から試験と言えど、術師連合の方には関係のない話なのだから。

ただ、ちょっとばかり調子がよろしくなく、軽い頭痛がしてるので  
『帰ったら早めに休んでおこう』とだけ決めておいた。

「うー」

そしてその三日後、期末試験最終日。

全ての試験を終えて生徒会室に来た俺は唸りながら机の上につき伏していた。

「あー」

頭痛は見事に悪化した。が他の症状がそれほどでないという不思議な状況に俺はやっぱり唸るだけだ。

「誠、大丈夫？テストで大失敗したとか？」

そんな俺に声をかけてくる楓

「…いや、そっちは問題ないけどさ、なんか調子が良くないんだよ」

「お大事に。もし悪化したら遠慮なく言ってね」

「もしもの時は頼らせてもらおうよ」

いつもなら『要らない』と言って機嫌を損ね、何かしらの罰則を負わされるところだが、今回ばかりは何かがおかしいという思いがあった。

「あれ？珍しいね」

「…なんか、変なんだよ」

「ふーん。今日は早めに帰ったら？」

『そうさせてもらっつ』そう言おうとした直前

「藤谷くん、防御符を六シート、攻撃符を十シートの依頼が来てるのだけど」

佐伯会長が俺にしかできない仕事を持ってきた。

印刷にしる、手書きにしる、紙に一回目の魔力を流し込む作業は俺にしかできないらしい。

符の魔力補充は他の魔術師でも可能だが新しく作るのは俺しかできないのだ。

そして、第三高校などの魔術師がいる学校は補充をして再利用してくれるが、そうでないところは湯水の如く使い捨てる。

使用済みを送り返してくれればいいのだが、彼らの場合は手加減なしで使うため、呪符その物まで魔力還元されてしまうのだ。

なので仕方なく、注文を受けたら生産して供給を繰り返している。

A3用紙一枚につき五十六枚。符の内容を印刷したコピー用紙に俺が魔力を流し込んで完成。

ただ、A3用紙一枚につき五分程度掛かる。

今回は合計十六シートだから、一時間二十分といったところか。

「了解。それじゃあ、印刷室使いますよ」

当てられている執務机からA3紙を二枚取り出す。

前に作って置いた攻撃符と防御符の元版だ。  
これをコピーして処理して作っている。

「それじゃあ、お願いね」

「はい」

資料室の隣の印刷室で元版をコピー、一度生徒会室に戻り元版を保管場所に戻した後に

「ちとど…」

回路を解放し魔術師に切り替える。

十センチ近い身長減少と急激な胸囲の拡大で夏服の半袖Yシャツがピン、と張る。

少々息苦しさがあがるが…

「あら？制服は切り替えないの？」

と、そこで会長から警告を貰った。

「あ、ちょっと調子悪いんで今日はこのままで済ませてください。」

事実、回路を解放したと同時に倦怠感と軽い頭痛腹痛に熱っぽさを

感じるようになった。

それまでも疼いているような感覚はあったが、なんで急に悪化したんだ？

「それじゃあ、始めますか。」

紙に触れ、魔力を通す道を作って流し込む。

五分かけて一枚を満タンにしたら次の紙へ。

満タンになった紙は楓にミシン目を入れてもらって完成だ。

十六枚、全てを作り終わるころには辺りは薄暗くなってきた。

「ラストー」

最後の一枚に最後の一本のミシン目を入れ終えた俺たちは

「あー、疲れた」

「んー！」

思い思いに伸びをしたりして体をほぐす。

俺の症状もやや悪化気味なので早めに帰りたい。

「さーてと、元に戻るとするかア」

と立ち上がるとっー、と腿を伝わる液体の感覚。

ついでに回路の閉鎖を試みたが何故か閉じようとするのに閉じる事が出来ずに押しあけられてしまう。

「ゆーな、血！」

楓に言われて足元を見ると靴下と上履きが紅く染まっていた。

「わわっ!？」

「怪我?とにかく患部を探さないと」

と、何故かズボンに手をかけてくる

「ちょ、楓!？」

「大人しくして」

抵抗むなしくぱさり、と軽い音とともに床に落ちるズボン。

ついでに上履きと靴下も剥ぎ取られ下半身は最後の砦を残してほぼ裸に近い状態にされ、楓の視線にさらされる。

「特に傷らしい傷はないみたいだし……」

血の伝う両足を見てそう呟く楓は

「他に何か症状とかある？」

と、聞いてきた

「強いて言えば微熱と頭痛腹痛、あとなんだか魔力が暴走しているような感覚が…」

そう言ったら楓は『なんだ』とホツとした表情を見せて、俺にとって致命傷になるような一言をぶつけてきた。

「それ、生理だよ。遙ちゃんも時期が来ると魔力が暴走気味って言うてたし」

「……………ハイ？」

俺は突然に意外すぎる宣告を受けて頭が処理落ちを起こしているようだ

「もしもし、奈緒先輩。高槻です。えつとですなゆるーについてなんですけど…はい」

そんな俺の目前で佐伯会長に電話をかける楓。

「できれば紗枝先輩にも連絡を…はい、お願いします」

要件を伝え終わったのか通話終了し

「これから紗枝先輩と奈緒会長が来るからちよつと待つ」「あれ、まだのこつてたん……………」

ガラっ、と勢いよく開けられたドアから半歩踏み出して硬直した遙。

「えっと、なんというか、障害は多いと思うけど…」

慌てて逃げようとする遙

「ちょっと待て。事情説明するから、お願いだから引かないで」

「ゴメン、流石にあたしは百合そらちの気、ないから。」

俺は遙にドン引きされ、説明と弁解に会長たちが来るまでかかってしまった。

\* \* \*

「まあ、あり得ない話じゃないわよ」

会長と紗枝先輩、先ほどの一悶着から参加が決定した遙への説明が終わったところで出たのが、会長のこの一言だった。

「一般に、精神は肉体に引き摺られるというしね。」

『病気や怪我の時に弱気になるのは体の不調が精神の不調を引き起こしているからだ』という例を挙げて会長は説明してくれたが…

「えっと…姉さん。それって今とどう関係があるの？」

遙は首をかしげる。

楓もやや理解しきれてない様子だ。

「つまり、体は女だから精神も女に近づいて言ってるってこと。」

「だから、なんで精神が女になるのとゆーなの生理が繋がるの？」

まあ、ある意味それは当人である俺も判らない事なのだが…

「おそらく、肉体と精神の祖語が機能を…この場合は女の子としての  
のだけど、止めてみたいね。『まだ不完全』って。」

紗枝先輩が補足説明をしてくれたら

「なるほど。つまり、『女の子としての完成』したから生理という  
この年代の女の子の機能が正常に動くようになったと」

「そういうこと。」

楓が正解に辿り着いた。

「女としての完成って…そんな事」  
否定しようと思って、否定材料ではなく肯定材料が見つかってしま  
った。

そういえば、二週間の『唯奈』としての生活を終えた直後は男に戻  
っても仕草に女らしさが出てしまった時期が(二)、三日だが(一)あっ  
た。

「その様子だと、思い当たる節があるみたいね」

会長の言葉が突き刺さる。

「…はい」

俺は否定できずに頂垂れる

「…夏休み明けから、正式に女子部の生徒にした方が楽かもしれないわね。」

その会長の呟きに俺は更に深く頂垂れる。

「とりあえず、元に戻るまでウチで面倒は見てあげるわ。困ってる後輩を助けるのは先輩の役割なもの」

「…お世話になります」

こうして、俺の佐伯家逗留が決まり収まるまでの一週間ほどを過ごす事になったのだった。

ちなみに、テスト返却日であり夏休み前最後の登校日である日、俺は公式記録上初めての欠席をした。

佐伯会長の家では何事も起こらずに時間は進んで行った。

会長と遥の母親、佐伯陽菜さんは聖奏学園のOGで、生徒会に所属していたとこのことで色々と見て見ぬふりとか便宜を図ってくれたりとかしてくれた。

ついでに俺の母さんと楓の母親の咲月さんの二人とは同級生だったとか。

制服でなければ俺 正しくは御剣唯奈が外を出歩いて問題はそのほど大きくなるらない。

『一時期留学していた縁で遊びに来ている』とでも言えば何ら問題は無いのだ。

ついでに、『佐伯会長の縁者で術師である』という肩書の元、生徒会連合の対魔組織としての側面にも『協力』という形で関われる。

『男に戻れない間の、七日ちよいの我慢だ』

そう思っていたらとある違和感というか、『奇妙な点』に気付いてしまった。

「誰かに見られてる?」

それは、逗留四日目。夏休みが始まって三日目のことだった。

「まあ、唯奈ちゃんみたいな美少女なら誰でも目で追うと思うけど？」

相談を持ちかけた俺に対して会長はそういう

「それに『元男』の部分で視線に含まれる欲望とか思考を理解しちやうから過剰反応してるってのも有るんじゃない？」

物凄く『元男』の部分に突っ込みを入れたのだが、今それをやると話がこじれるので後にする。

「そういう訳では無くて…何というか、気配はないのに見られているような…」

人気も気配もない、というのに誰かに監視されているような感じがする。

「ストーカー被害なら、警察に頼んだ方がいいわよ。一応、戸籍上『御剣唯奈』という人物は存在している訳だし。」

話はこれで終わりと言わんばかりに席を立とうとする佐伯会長だが  
「みゃう」

猫の姿で現れたマナがくわえていたモノを見て足を止める。

いや、くわえて引き摺って来たものを、と言うべきか

「カラス？」

それは体長四〇センチほどの真っ黒な鳥　カラスだった。

ただ、そのカラスには問題がある。

「やけに小さいわね。成鳥じゃないのかしら」

そう、普通に見かけるカラスとは様が違う。

「違うよ。コレ、使い魔みたい。一応止めは刺してあるから機能停止しているけど」

人の姿に変わるマナが言う。

「使い魔？」

「うん。ちょっと気になったから図書館で調べてみたんだけど、コイツは『ニシコクマルガラス』って言う種類らしいんだ」

最近は何方なくマナを放っておいてしまう事が増えた。

その結果、ヒマつぶしに時々図書館に行っただけ読んで借りずに帰るといふ事を繰り返しているらしい。

「それがどうしたの？」

「日本に居る筈のない種類のカラスなんだ。主にヨーロッパから中東くらいに住んでるヤツ。」

だから猫になって仕留めて調べてみたんだ、とはマナの談。

「…これは、ちょっとばかり用心が必要かもね」

「符は必ず携帯しておきます」

「出来れば、不用意な外出も控えた方が良さそうよ。マナちゃん、色々とお使い頼んでいい？」

「任せて」

また、かなり厄介な事になってそうだ。

そう思ったら本気で湿気た溜め息がでてきた。

\* \* \*

「わー、凄い人だね」

それから三日ほど経ち、どちらも動かないという状況の中で俺と楓と遙、あとマナで最寄りの神社の納涼祭に来ていた。

夏休みにはいつって一週間という早い時期に開かれるこの夏祭りはこの近辺の学生にとって、夏休みの開始を実感させるものであり、六週間ほどある夏休みの一週間目が終わったことを伝えるイベントであったりする。

一説によると、『この夏祭りまでに宿題を片付ける』と己に課す者もいるとか。

また逆に『この夏祭りから本気出す』という風な逃げを行う者もいる。

ちなみに、後者はそれをもう五週間ほど繰り返して九月に担任や担当教員に怒られるのが常。

「毎年、だいたいこんなものだよ。」

初体験のマンは興味津々、逆に慣れている楓はいつもの通りだ。

「…なんか落ち着かないな」

そして、俺は物凄く居心地の悪い思いをしていた。  
粘着質な視線がひっきりなしなこの場所に。

「もう、みられるのは美人さんと可愛い子の義務だって。浴衣、似合ってるよ〜」

そんな俺に軽く声をかけてくる遙。

「そうそう。」

(それに困とか関係なしに楽しまないと、ね)  
それに頷く楓がこっそりと耳打ちをしてくる。

「…それも、そうだね」

数日前からの監視の目の事を務めて頭の奥底に押し込める

「ん、元気出てきたみたいだね。それじゃあ行こー!」

俺は楓に手をひかれ夏祭りの雑踏に混ざり込んで行った。

\* \* \*

『男』は笑いが止まらなかった。

イギリスのロンドンに本拠を構える魔術協会の監視が行きとどいていない極東の地で『魔法』に至る道を見つけたのだ。

それも、極上の霊地である地だというのに管理している組織は無い。まるで『自分が魔法に至る為に用意された地』であるかのようだ。

孔を穿つ為に必要な量の魔力も確保できるめどが立っている。孔を穿つのが最も簡単である場所も目星がついている。

使い魔のカラスが何羽か猫に狩られてしまったがさして問題でもない。

『男』は自分が『魔法使い』へ至ることが出来ると確信しているのだから、その程度の損害など痛くもない。

『大丈夫？』

『ちょっと疲れただけだから…』

『もう、最近引きこもりっぱなしだからだよ』

『運動不足』

目的の少女は仲間と思しき少女たちと共にベンチに居た。

『ちょっと休んだら楓に連絡して合流するからさ。廻ってて』

更に好都合な事に『目当て』の少女がグループから離れる様子なのだ。

『それじゃあ、近場うるついでるから』  
『悪い虫には気を付けなよ』

この好機を逃がすほど、『男』は甘い人間ではない。

チャンスを生かすべく、行動に移す。

だが、『彼』は『己が魔法に到達する』事に意識が行き過ぎて見落としていた。

ここ、睦斗市が極上の霊地でありながら管理組織が見当たらない理由を。  
そして

「…こちら高槻、目標が行動を開始。監視に入ります」

『彼』はあえて泳がされていたという事を。

そつとは知らず、『男』は『魔力炉』となる存在を得て有頂天になり認識障害でコレと言って怪しまれることなく目的地へと辿り着

「Freeze!」  
（ひくくおな）

直前に無数の銃口を向けられた。

軍用となんら変わりがないアサルトライフルが向けられるというのは、並大抵の恐怖ではない。

だが、

「ふん  
」

『男』は腕が経つという自負のある魔術師だ。

軍用アサルトライフル程度ならば防げる防御障壁を作り上げる事も可能だし、銃を持った一般人程度なら無力化は容易だった。

だが、これから始める『儀式』の為にも無駄な浪費は避けねばならない。

その為、結界による防御のみにとどめたが銃を持った集団は無力化されたも同然だった。

だが、相手の方が数枚上手だ。

「藤澤会長！」

「任せろ。…ヒスイ！」

「はい。」

密閉されている筈の結界の中に、風が吹きこんできた。

パキン…と小気味のいい音がして、慌てた『男』が振り返ったら、片刃の剣 刀を握った惣一が結界を『切り裂いていた』。

啞然とする『男』

「そこまでよ。睦斗術師連合の名のもとに捕縛させてもらっわ」

さらに行く手を阻むように現れる奈緒率いる術師たち。

既に辺り一帯を覆う結界が張られ逃げる事も難しい。

前門の術師、後門の銃。

まさに絶体絶命を絵にしたような状況で追い詰められた『男』がとつた行動は、

「くっ…」

懐に隠していたナイフを取り出し、気絶させたまま運んでいた『魔力炉』の破壊を試みた。

蓄えられていた魔力を肉体の破壊で放出させるつもりだった。

だが、

「はい、そこまで」

気絶している筈の『少女』に指二本で白刃取りされた。

当然、男が掛けた術はレジストされ、掛かったふりをしていただけだからだ。

態々そんな事をしたのも、こうしておびき出す為。

身の危険があれば最悪手を下す事も考えられていたのだが、ある意味では奈緒たちのシナリオ通りに事は進んでいた。

進んでいたのだが…

「ッ ああ」

突然、男の胸から生えてくる鋭利な突端。

それはまるで鎌のような形をしていた。

その鎌によって男の体がひき千切られる。

血と臓腑をまきちらしながら、地面に落ちる。

「ッ」

唯奈はその光景を至近から目撃してしまった。

遠巻きに見ていた者ですら、顔をそむけたくなるような光景を極近くから、まじまじと見つめてしまったら、普通の人は気絶してもおかしくない。

事実、唯奈は呆然としている様子で固まっている。

「回収、急いで！」

「行くよ、遙、マナちゃん」

「わ、わかった」

「先に行くよ！」

一早く我に返った奈緒が指示を出し、その声で正気を取り戻した楓が遙とマナに呼びかけ、動きだす。

「総員、撃ち方用意！」

呪符と対魔用特殊弾の込められた銃が火を吹く瞬間を今か今かと待ち受ける。

三人が唯奈の元に辿り着き腕を掴んだ時

「遙っ！」

遙の背後に、なにやら波紋のようなものが現れそこから凶悪な刃が生えてきた。

「ッー！」

突き刺さる直前に防御符が反応し防壁を展開してはじいたが、危うく刺し殺されるところだった。

刺し損ねた鎌はそのまままた空間の波紋の中に消えてゆく。  
直後に楓の放った炎が何も無い空間を焼く。

「何、このもぐら叩き」

「しかも叩く側が隠れたり出てきたりするって、反則だよ」

なんとか唯奈を回収し、味方の所まで戻ろうとする三人。

だが、

「楓、危ない！」

「あっ！」

ちょうど真正面に現れた波紋。

そこにはすでに銀色に輝く切っ先があつて

「あ、だめだ」

よけきれない。

漠然ながら『終わり』を予感した楓だったが

ぶわっ、と風のような、衝撃波のようなものがすぐ近くから発生してその後の光景に楓は、いや、その場にいた全員が目を疑った。

それまで市街地に居た筈なのに、何故か荒野に居る。

そして、先ほどから襲いかかって来る鎌が、カマキリのような本体と共に、楓たちの前に居た。

「「きゃっ」

「わわっ」

突然、手を引っ張られて地面に伏せることになる楓と遥。マナはそんな二人に引っ張られて地面に伏せることになる。

強引に伏せられた直後、四人を銀色に輝く壁のような物が覆い、

「撃て！」

「攻撃開始！」

その場にいる他の全員が一斉に攻撃を始める。

それは今までにないオーバーキルだった。

そんな光景を余波をまったく感じさせない空間で見る事となった二人は

「すごい…」

そんな感想をこぼす遥、対して

「ゆーな、大丈夫？」

と楓は自分たちを強引に伏せさせた唯奈の方にかかる。

気絶しているかと思ったが…意識はあったのだろうか

そう思って目をみて、目に光が無い事に気付いた。

それはまるで『繭から出てきたとき』のような目だった。

「ゆーな？」

「ッ」

目に輝きが戻ると同時、異界とも思えるような空間が消え、彼女らを守っていた障壁も消える。

「あッ」

「ゆーなっ！」

そして操り糸が切れた人形のように、力尽きるかのように崩れる唯奈。

あわてて三人で支えるがその顔色は『死人の方が健康に見えるかもしれない』とその場の二人に想わせるほど青かった。

\* \* \*

気がついたら、佐伯先輩の家の部屋だった。

外の明るさからして、どうやら倒れたつきり一晩を明かしてしまったらしい。

「気がついた？」

「顔色は…死人よりはマシか」

そして、楓と遥は既に普段着になっていることから相当の寝坊をしたようだ。

「ようやくお目覚めみたいね。」

「あ、姉さん」

「会長、どうしたんですか？」

「…ちよつとばかり、厄介な事になったのよ」

顰めつらというか、苦虫を噛みつぶしたかのような渋い表情をする佐伯会長。

「厄介な事？」

「今日付けでこんな郵便が来たわ」

会長が差し出す封筒を受け取り、楓と遥が覗きこんでくる。

「…聖奏の生徒会宛ですか」

差出人は『関東学生交流支援機構』となっているが聞いた覚えが無い。

「それはカモフラージュ。私たち『術師連合』が学生で構成されている故の。とにかく中身を見て」

言われるがままに中に入っている物を出す。

それは一枚の書状だった。

「「「……………」」」

黙って目を通す。

内容はこうだ。

『以下の者の即時出頭を命ず

御剣唯奈

以上』

きつと、逮捕令状の方が温かみのある文章だろう。  
送り主である魔術協会日本支部の支部長は相当お偉い方のつもりらしい。

「居留守を極め込んでいいわよ。東京支部と真っ向からの喧嘩になつたら負けるのは向こうだし」

睦斗術師連合はそもそもで戦闘力が高いのに執行部との合併の結果、日本では最大規模に近い対魔組織になつた。  
当然、それは相手も理解している筈だ。

「でも、なんで俺なんだか…」

俺としては不思議でならない。

探査系としては格段の能力を持つ紗枝先輩、医術系としては最高峰のひかり先輩、暗示系では連合内で肩を並べる物が居ないほどの技量を誇る佐伯会長…

そんな人たちを差し置いて俺と言うところが判らない。

「何言ってるの。並の術師の数倍の魔力に『魔術符』の開発に半陰陽。おまけに昨日の夜は『世界の上書き』までやったのよ？連中が興味を持たないハズが無いわ。」

そう断言する佐伯先輩

どうやら、俺と言う存在は中々にすさまじい事になっているようだ。

「でも、それらの情報は『符』について以外は会長クラスにしか開示されていないし、世界の上書きは『位相変異の荒技』っていう説明で誤魔化したのに…」

『どこから漏れた？』と首をかしげる。

「要調査、ですかね」

「ええ」

そこに

「奈緒ちゃん、関東学生交流支援機構の田汲さんて人がいらっしや

ってるんだけど、追いつく？」

と、陽菜さんが現れた。

最初から『追いつく』という選択肢を提案してくるところがなんとも『大先輩』らしい。

「… 問答無用って訳か。とりあえず、私に対応するから」

「それじゃあ、お願いね。」

陽菜さんはそう言って部屋を出てゆく。

「さて、お役人と直接対決と行きますか」

「会長、俺も行きます」

「その場で強制連行もあり得るわよ？」

「その時は、相手もそれなりの覚悟をしてもらいますよ」

「判った。身だしなみを整えてから来なさい」

「了解」

結果として、俺の身柄拘束は回避できなかつた。

今日中の出発が決定され、今日の夕方には東京駅に到着しているという予定が立てられた。

せめてもの仕返しとして、交通費は向こう持ちにさせたが。

「それじゃ、ちょっと行ってくる」

見送ってくれる楓と遙…急遽集まってくれた聖奏生徒会の面々、そして同行が許されなかったマナに俺はそう言って睦斗市を離れる事になった。

## # 8 1 (前書き)

更新です。

今回はちょっとばかりグロエロ要素が含まれてるよつに取れる描写があるかも…

その日、聖奏学園生徒会一年生メンバー 楓、遙、晶、雅人の四人は生徒会室に集まっていた。

「遙、呪符は？」

「とりあえず、至急で必要みたいだから各一枚ずつ先に作った。今、攻撃符の二枚目。」

報告書を書く手を休めずに楓が遙に問う。

「おいおい、まだ三枚目なのかよ」

遙の答えに篠田が言うが

「出来ないアンタが言うな。」

「これ、かなりキツイんだよ、紙に回路を作るの。それに補充作業だってかなり消耗するから。」

突っ込む晶と『おかげで体重が三キロ減ったよ。』と苦笑する遙。

「ところで篠田くん、報告書の添削まだした覚えないんだけど」

「…ゼンシヨシマス」

彼女らは代替わりに備えて一年生だけで事務処理作業に当たっていた。

四月から居る楓がまとめ役になり、偶然から符の作成が可能だと判った遙が各校から寄せられる符の生産に当たる。篠田と晶の二人は楓の元で事務処理だ。

「…ホント、藤谷の凄さが実感できるな」

シャープペンシルを手にまだ六割方白紙の報告書に向かった篠田がぼつりとこぼす。

「まあ、符の大量生産が出来て、私らの分の書類も連名の署名だけで済むようにしてくれた訳だものね」

それに同意する晶は楓に添削してもらった報告書の修正箇所を直してボールペンでの清書作業だ。

冷房の効いた生徒会室だからこそ茹だるような暑さとは無縁でいられるが、そうでなければやってられないだろう。

「頑張ってるみたいね」

「一年生の諸君、差し入れだよ」

そこにやってきた奈緒とひかりの三年生コンビ。ついでにマナも居る。

その手には近場のスーパーの買い物袋が下げられていた。

「それじゃ、今やってるのが終わった人から休憩。遙は適当なところで休んで」

「あ、ハルカ。呪符の魔力補充はやるよ」  
マナが交代を申し出て遥が清書を済ませた晶と一緒に休憩。

楓も篠田が添削に出すまで待つ事になるので休憩。

ただ一人、篠田だけがせつせとペンを動かす。

「そういえば奈緒先輩。誠から連絡来ました？」

「いえ…協会からも音沙汰なしよ。こちらからコンタクトを試みるけど、梨のつぶて」

「そうですね」

楓は自分の席を立ちあがって会長用デスクの背後にある窓から空を見上げる。

「今頃、何してるのかな」

直後、『できた!』と声をあげた篠田の報告書の添削に入るのだが、赤ペンの入らなかつた行はなかつた。

その光景を見て篠田は『ひい』と悲鳴をあげ、晶と遥は苦笑い、奈緒とひかりの先輩コンビは『高槻先生』と冷やかしを入れる。

そんな、日常のようで何かが欠けた八月半ばの夏の日だった。

\* \* \*

あれから、一体どれくらいの時間が経つたのだろうか。

魔術協会日本支部東京本部に連行された俺は大分長い事、外界と隔絶された空間に入れられていた。

日の光が入ってこないのだから今が何時なのか判らない。

今が、何日なのか、判らない。

ただ一つ判っているのは、『俺』という存在はこの研究者にとって極上の研究材料であったという事だ。

ここに連れてこられた初日は技研部というところで魔術符についての技術開示を求められた。

それに関しては術師連合で普及させているのでどういふ事をやっているのかを簡単に説明したら向こうが勝手に色々弄り始めた。

それで用件が終わりかと思いきや、行き成り背後から襲われて意識を奪われ、気がつけば衣服を奪われ手術台のような場所に拘束されていた。

もともと、その手術台のような場所で何が為されているのか、俺に知るすべは無い。

大抵、意識を奪われ気付けばまた牢の中だ。

最初のその日以来、魔力封じの刻印を刻まれて拘留され続けていた。

魔力封じと言っても、魔術回路の魔力循環を遮るだけの物だが、循環が起これないと術式に乗せる事もままならない物なのだ。

「…つたく、我ながら情けない」

魔術が使えない上に回路の閉鎖が出来ない俺は単なる女子高生でしかない。

本来の状態　男のままならもう少し抵抗できたかもしれないが、腕力も年相応、動体視力がちょっといいくらいじゃそれほど役に立たない。

『研究用に』と持つてるだけの符をまきあげられた直後に背後から襲われてこのザマ。

本当に自分の間抜けさを呪いたい。

「…それにしても、一体何のためなのやら」

研究材料としてならここまで手加減されているのが不可解だ。

もっと早くに全身を切り刻まれホルマリン漬けにされていてもおかしくない。

そして、符についての研究としても不可解すぎる。

それならこんな監禁紛いの事をせずにごく全うに『協力』という対応をすればいい。

…一つだけ、思い当たる節があるがそれを認める事を俺の精神は全力で拒否している。

なぜならそれを認めるという事は『俺』の全否定に等しいから。

ただでさえ、時間感覚の狂う場所で大分長い事女の状態で拘束されているのだ。  
精神は大分女よりに引っ張られている。

…『俺』という存在を維持する為にも、『それ』ばかりは認める訳にはいかない。

「…悪いな、唯奈。お前に全部押しつけちゃって」

『誠』ではない『唯奈』という存在。

それは『男である藤谷誠としての精神』を護る為に生まれたもう一つの、『女の、御剣唯奈としての人格』。  
女であることを拒絶しながらも、女であるという事実を受け入れた事で生まれた 矛盾した存在。

『彼女』がいなければこんな長期間、自分が女の姿であるという事を認識させられ続けるような状況、何よりも孤独に耐えきれなかっただろう。

(その為に、私は形成されたんでしょ)

「まあ、そうなんだが…折角生まれたなら 　ん？」

牢のある区画に誰かが入って来た。

その為、もう一つの人格との対話を中断し現れる人物に警戒する。

現れたのは世話役にでもされたらしい、女性の魔術師だった。

その人は黙って牢の鍵を開けると拘束を解いてくれる。

「解放でもしてくれるんですか？」

「…支部長命令よ。黙ってついて来て」

冷やかしに対して帰って来たのは冷たい言葉だけだった。

「はいはい」

( 一体、今度は何をされるのやら )

連れて行かれた先は逗留者用宿泊施設の一室だった。

そこで手ぬぐいタオルを渡され

憐れみの視線と共に手ぬぐいタオルが渡され風呂場へと促された。

ドアが閉まるが向こう側から呟く声が聞こえる

『恆松です。はい、命令通り…後には…はい』

なにやら連絡を取っているようだ

『…可哀想に。まだ恋に恋してる年でしょうに』

その眩きを最後に、気配が遠のいてゆく。

(…どっいつ事?)

「知るかよ。」

だが、なんとなく予想は付いていた。

考え得る最悪のパターンだが……

「唯奈、換われ」

(え? ちよ )

『俺』は内側を意識するとすつと意識が遠のきまるで第三者視点に立ったかのような感覚に陥った。

「…まったく、妙に義理堅くて生真面目なんだから」

『私』は『男まこととしての自分』の頑なさに内心溜め息をしつつ、折角お風呂のタイミングを譲ってくれたのだから精々楽しむ事にした。

どうやら、実験やらの度に洗い流したりはしていたのか、思ったほど酷くは無い。

髪の毛は大分酷い事になっているけど…

湯船に浸かると溜まりに溜まった疲労やらがまるで溶けだしていったかのように気持ちが良いかった。

のぼせない程度に温まったところで上がろうとした時、

(唯奈、ちよつと体を貸してくれ。ついでに先に謝っておく。)

「へ?...まあ、この身体は本来あなたなのでしょう。返すわ」

イメージは内側へ、孔の中へ、という感じ。

すう、と意識が遠のいて俯瞰視点へと移れば体の受け渡しは完了する。

(で、何するつもり?)

『唯奈』の間に俺は答えず、黙って手ぬぐいで石鹸置きをくるむ

そしてタイル張りの床に叩きつけた。

ガシャン!

見張り役が遠ざかっているから出来た事だった。

陶器製の石鹸置きは鋭い破片へ姿を変える。

「確か、魔力封じは右手首だったよな」

その破片を一つ、鋭くナイフ状になった物を手に取る。

( ちょっと、何するつもり!?)

「決まってるだろ! つぐう」

激痛。

俺はナイフ状に鋭く割れた陶器の破片で自分の手首を深々と刺した。

( なッ )

「ッ  
」

それによって、魔力を停滞させていた『刻印』が破壊され魔力が再び流れ始める。

流れ始めた魔力を炎に変えて、手首の傷は焼いて塞ぐ。

荒っぽいが、止血が最優先だ

( )

「さて、と……………『アクセス接続開始』」

魔術師としての全力を取り戻した。

「唯奈、頼まれてくれるか？」

（何を？）

「後は、頼んだ。」

ふわり、と体から力が抜けてゆく。

（あっ……………）

遠のいてゆく『唯奈』の意識。

大量の 膨大な魔力が『唯奈』と共に抜けてゆく。

「…残念ながら、藤谷誠は『一般人だから』な

その少し後、乱入者が現れた。

『終わった』

そう連絡を受けた女性魔術師…恆松美咲は内心で溜め息をつきながら、先刻自分が牢から案内した少女が居る部屋へ向かっていた。

美咲は思う。

『何故に、自分がこんな侍従みたいな事をせねばならんのか』と。

彼女とて、身に宿す魔力量こそ並だがイギリスのロンドンにある魔術協会本部直属の研究機関『学院』を上位で出た秀才だ。

それ故に現支部長に目をかけられて居るといっても有るのだが…

まあ、愚痴を言っても仕方ない。

と割り切ったのは部屋の前に着いたためだった。

礼儀としてノックしてから扉を開けた。

「…あら？」

だが、部屋の中に件の少女の姿は無い。

「もしかして…」

そう思つて浴室へ向かつてみたら……居た。

ただし、それは見るも無残な姿だった。

同性である美咲からすれば戦慄を覚えるくらいの。

白と紅に彩られた、生気の無い少女。

いくらやっても反応を返さず、その瞳に光は無い。

「…壊れちゃってる、か。」

心の壊れた状態

精神崩壊とでも呼べる状態の時の特徴だ。

しかし、美咲は思う。

『壊れた方がこの少女にとって幸せなのかもしれない』

魔術師と言つ生き物は『研究対象』に対してはとことん非情で酷薄だ。

この少女が今まで生きてままバラバラにされて瓶詰にされなかったのも、早々に支部長とその一派が別の目的で隠匿したからに過ぎない。

「これ、この子の身内に知られたらあたしら皆殺しにされても文句言えないわ」

美咲は支部長から聞いていた。

この少女は『睦斗市』という霊地を管理する『術師連合』の所属だ

と。

…極めて高い戦闘力を持つ、『あの』術師連合だ。

一族郎党皆殺し…くらい簡単だろう。

前支部長も『睦斗の術師連合とは事を構えるな』と言ったほどだといふのだから。

まあ、そうなる前に逃げるけど。

『危ない橋に踏み入れる前にどうやって逃げ出すか』を汚された少女を流水で清めつつ考える。

「…やっぱり、一度師匠せんせいの所に顔を出しに行くかな」

そしてそのまま行方をくらましてしまおう。

部屋のベッドに少女を寝かせた時、それは起きた。

ガン…と音を立てて通気ダクトの金具が飛ぶ。

「な  
」

そこから飛び出してくる肌色が、その直後に意識を奪われた美咲の脳裏に強く焼き付いていた。

\* \* \*

「まじ  
ッ！」

排気ダクトから見張りらしき女性を蹴倒して降りてきた唯奈わたしはその光景に自分が間に合わなかった事を悟った。

「…間に合わなかった。」

生気のない瞳が虚空を見つめている。

それが何を意味するのか、理解できない訳が無い。

一緒に脱出する為に回収してきた服や所持品を入れた袋が、『どさり』と音を立てて落ちた。

じわり、と目頭が熱くなる。

「…ごめん。もっと早く…」

残念ながら、この身体は純粹な魔力の塊。  
通気ダクトの中から物理的な強襲をかけるため（あと、荷物を運ぶため）に作り上げた擬似的な肉体は細部までこって作り上げられている。

外見だけなら、小学生低学年の子供にしか見えないだろう。  
その反面、人間なら当然の如く起こる生理現象（呼吸や発汗など）は一切起こらない。

だから、涙など流れる筈が無い。  
けれども、私は涙を　　誠から分けてもらった心で流す。

そつと、開きっぱなしになっている目を閉じさせる。  
その様子はまるで生きることを放棄した、温かい死体だった。

『恆松は一体何をしている。』

部屋の外から、そんな声が聞こえてきた。

どうやら、時間をかけすぎたらしい。

精霊とは違うので、一度安定させたこの身体を再び希薄化させることはできない。

だから、『わたし』は最初に蹴倒した女性からローブを剥いで袖を通す。

ついでに回収してきた荷物を入れた袋を体に括りつけ、身構える。

一撃を加えてから、通気ダクトを通って外へ逃げ出す。

そう決めて、手に魔力の塊を展開する。

今の私にとって魔力は文字通り体の一部だから、呼吸をするよりも簡単な事だ。

バン！

勢いよく空いたドア。

「恆m      ふじっ!？」

ドアを開けた中年の顔面に勢いよく銀色の塊を叩きつけたわたしはまるで重力を無視したかのようにダクトへと潜り込む。

「侵入者だっ！」

その中年の付き人らしき青年が叫ぶ声を背に私は『誠に頼まれた事を遂行すべく全速で逃げ出すことにした。』

そして、協会の追手との戦闘を影で繰り広げながらの逃走劇が始まった。

\* \* \*

それは八月も半分が終わったある日のことだった。

「…あらま」

行方知れずになっている息子の住処の、定期的な掃除と様子見に来た和葉はその家の玄関先で思いもよらないモノを見つけてしまった。

一見すればただのボロ布だ。

だが、その中から白い何かが見え隠れしていると話と話は違う。

めくってみたら中身は小学生くらいの女の子だった。

気絶しているようだが、目立った外傷はない。

そう、ローブが引き裂かれたりしているのに体の方は無傷なのだ。

「マナちゃん、鍵開けて」

今、家を管理している息子の使い魔に呼び鈴で声をかけつつ、濃紺のボロ布と化したローブをまとった少女を抱き上げる。

「さーて電話、電話。」

和葉は厄介事が起こるだろうな、と思いつつ、親友の娘であり後輩である少女たちに話を投げることにした。

\* \* \*

「協会の日本支部：東京本部が襲われた？」

「ええ。それで各地の対魔組織に伝達が有ったわ。賊は睦斗市方面に逃走中。協会が放った追手も大分返り討ちにしてるみたい。」

聖奏学園の生徒会室では、急遽集められた聖奏の役員と各校の生徒会長が一枚の書面を前に頭を悩ませていた。

その書面というのが、魔術協会の東京支部が襲われたという話で、その賊の拘束もしくは殺害が各地の協会が配下に置いていると思っ  
ている組織に伝えられていた。

「姿恰好は身長一一五センチほど。協会の職員から奪った濃紺の口  
ーブと袋を一つ持つてる女の子ってのがまた不思議なのよね。」

協会が作っていた人工生命体が脱走したと言われた方がまだ現実味がある。ホームクルス

「それに、術師連合は従ってやる義理も無いしな」

「だからと言って無視と言う訳にもいかんだろう。睦斗市を目指す理由次第では捕縛殺傷を躊躇う訳にはいかないだろう」

男子陣 藤堂会長と藤澤会長 が挙げるそれはどちらも正論だった。

「それに、ウチの生徒を一人向こうに連れ去られてるからね。返すまで動かないってのも手ね」

「それで相手を頑なにしたら元も子も無い訳だけど」

会長たちの雑談に等しい会話。

「…とりあえずは見回り強化と会敵時は即全体へ連絡。目的次第では我々で保護」

「そのあたりが妥当か…?」

奈緒の出した結論にまとめかけた時…

ルルルルルル…

電話が鳴った。

「ちょっと失礼するわ」

モニターの向こう側に断りを入れてから奈緒は受話器を取る。

「はい、聖　　ああ、和葉さん。どうしたんですか？」

電話の相手は和葉だった。

それにしても珍しい…と思っていたら

「　　不思議な子を拾ったから見て欲しい？どんな子なんですか？」

今から二十年ほど前の生徒会連合を切り盛りした会長から電話に奈緒は首をかしげる。

「　　濃紺のローブを着た小学生低学年くらいの女の子？」

その特徴は、協会から寄せられた『人相書き』に酷似して…

「　　…今からそちらに行きます。　　みんな、悪いけど即時出勤用意をお願い。準備が終わったら私に連絡して。追って指示出すわ。」

奈緒はモニターの向こう側に宣言し、

「　　みんな、藤谷くんの家に行くわよ。一応戦闘準備を忘れずにね」

生徒会室に集められていた役員たちに声をかける。

終始無言を護っていた遙と楓は居ても立っても居られず、到着まで終始そわそわしたままだった。

『本当に貧乏くじを引いたな』

そう、美咲は己の不運を嘆いた。

支部長が連れ込んできた少女の付き人にされたかと思っただら誰かに蹴倒され、今は追撃隊の一員に加えられている。

「…こんなことで故郷くにに戻って来る事になるなんてなあ…」

おそらく、それも追撃隊に加えられた理由の一つだろうと美咲は思う。

追撃隊の構成員は美咲を除けば全員が支部長の子飼いだ。

腕は確かだが人格面では難ありと、元々人格に問題アリな人間が多い魔術師業界でも言われるほどの連中。

全員が支部長の家の家紋を元にした紋章をあしらったローブを着ていて『魔術師です』と言わんばかりの奴ら。

「恆松、お前はこのあたりの出身だったな。この地を管理する組織の所在地は何処だ」

「え、何故ですか？」

美咲は思わず、隊長格の男に聞き返していた。

協会を襲撃した（と言う事になっている）少女を追撃していたのではないのだろうか。

「この管理組織は目標を匿った。重大な反逆行為を行った以上、管理地は没収。我々が管理する。」

それで美咲は大体納得した。

あの支部長は訳有りだが極上の霊地であるこの睦斗市を自分の手元に置いておきたいらしい。

「了解。ただ、一つ提案があります。」

「なんだ？」

「先に逃亡先…いえ、逃げ込んだ先を把握しておくべきです。もしこの地の管理組織が匿ったのではないとしたら、我々の方が危ない」

美咲は知っている。

その恐ろしさと戦闘力を。

そして、魔術協会如きに恭順するような組織では無いという事も。

「我々は『匿っているという事実』に基づいて行動をしている。判るな？」

そして、その子飼いの男は知らない。

故に、牙を剥く事を躊躇わない。

「…はい。管理組織の場所ですが…」

美咲は嘘を交えて『管理組織』の所在地を教える。

そして

「私は皆さんほど戦闘力はありません。ですから、情報収集と逃亡先の捜索に当たります。…制圧後楽に事が済むように」

そついい訳をして独自行動許可の言質を取る。

死亡フラグを乱立させたような連中と一緒に行動するなんて、真つ平御免だ。

「連絡は敵に。それでは行くとしよう。」

敵かに動きだす一団から美咲は離れてゆく。

「…あの連中、確実に全滅だろうなあ」

十分に離れた辺りでポツリとつぶやく。

それから、顔面にケリをくれた少女を追う事にした。

おそらく保護されているであろうから、その保護者と接触する為に。

\* \* \*

「こつちよ」

藤谷家に呼び集められた聖奏生徒会の面々は和葉によってその『件の少女』の元に案内されていた。

客間の真ん中の布団に寝かされた少女は、なにやらうつなされていた。

「この子が着ていたのが、このロープ。見てみて」

和葉が少女の傍らに畳んで置いておいたロープを奈緒に渡す。

奈緒はそれを広げてみる。

「うわ、随分とボロボロ」

「それにだいぶ汚れてるね。」

凜と梨紗が驚きの声を挙げる。

「うーん、でもなんかおかしくねえか？」

そこに啓作が言う。

「何がおかしいって？」

「これだけロープがボロボロになるほどの状況なら血痕の一つや二つがあってもおかしくない筈だ。」

「…あ、」

切り裂かれたような跡すらあるロープに血の一滴もない。

それは確かに異常だった。

「おまけに、靴も無しで足は無傷だったわ」

そこに和葉の捕捉が入って一同は唸る。

「少なくとも、マトモな人間ではなさそうね」

話の方向性が『ローブ』から『正体は何か』にシフトしつつある中、一年生陣は少女の方に興味を寄せていた。

「小さいね」

「小学生の低学年…八歳くらいか？」

「あんなにうなされて…」

昴、雅人、遙はそれぞれ、思う事を口にした。

「…なんだか、どこかで…」

一方、楓は『何か』が引っかかっていた。

それはなんとなく見覚えがあるような……

「あの、おばさま。あの袋は？」

喉に小骨が刺さっているような、そんな不快感を覚えながらも楓は別の点に視点を移す。

「ああ、すっかり忘れてたわ。それはその子が持っていた物なの。気絶してもしっかり抱えて…よっぽど大事だったんでしょうね。袋は無傷だったから…」

和葉がそう言うのを聞きつつ、楓はその袋を開封した。

そして袋をひっくり返す。

ばさっ

ひっくり返された袋から出てきた物を見て、目撃した一年生陣全員が目を疑った。

「…!？」

中に入っていたのは女性用の洋服と携帯電話、そして革製のカバーが付けられた小さな手帳。

その手帳カバーは奇しくも聖奏学園が生徒手帳カバーとして使用している物と酷似していて…

楓は恐る恐る、手に取って裏返して見る。

表紙に当たる部分には聖奏学園高等部の校章。

開いてページ目の、学生証を入れる為のスペースに収められている学生証は

「おいおい…どういう事だよ!」

凍りついた三人の心を雅人が代弁した。

その語調の強さにローブと正体について議論を交わしていた和葉や奈緒たちが議論を中断した。

「どうしたの？」

「これ、見てください」

雅人が凍りついた楓から手帳を奪って奈緒に見せる。

「ッ！」

そして、奈緒や渡された物を覗き込んだ梨紗や凜も驚愕で凍りついた。

その生徒手帳は、生徒手帳に収められた学生証は行方知れずになっている『御剣唯奈』の物だった。

何故、交換留学生だった彼女が学生証を持っているかと言うと、聖奏の特殊性故である。

男子部と女子部が隔絶されている高等部と中等部は学生証に内蔵されたICチップのデータによって生徒を判別する。

一見すれば何も無い廊下だがICリーダーが壁に内蔵されて出欠確認と男子の女子部侵入、女子の男子部侵入の阻止が行われている。

だからなのだが、問題はそこでは無い。

何故、それをこの少女が持っているのか、である。

ただ、謎の鍵はこの少女にある。

その事は確かだった。

どうすべきか、議論が始まるうとした時

「ゴメン、マコト」

少女の呟きに再びその場に居る全員が硬直した。

何故、この少女から『誠』の名前が出てくるのだろうか。

手帳は唯奈の物で、『彼』はその事を秘匿している筈なのに。

「少なくとも、これで協会に引き渡す事は出来なくなりましたね。どうします？『匿った』って叩かれますよ？」

復活した啓作が言う。

「おそらく、この件で動いているのは協会直属の連中だけよ。なら、袋叩きにして追い返せばいいだけ」

奈緒は携帯電話を取りだして、連合所属校の生徒会長全員に一括して転送する設定になっている番号をかけて宣言した。

「協会襲撃犯と思しき少女を保護するわ。協会の連中を叩きだすわよ。」

返事は『待ってました』と言わんばかりだった。

\* \* \*

美咲を除く追撃隊の面々が身を置く状況を簡単に言い表せば『絶体絶命』だった。

別行動する、戦闘力の低い美咲を除けば彼ら十人はそれぞれ荒事を『それなり』に経験している協会内では猛者に分類される。

東京の日本支部では最強から数えた方が早いのが彼らだ。

だが、相手が悪い。

今、彼らを襲う『敵』は平均して月に三回ほど、人外の化け物である『幻魔<sup>デモン</sup>』と戦い、討滅してきた学生術師連合。オマケに『睦斗術師協会』も動いている。

この術師協会というのは術師連合に所属していた魔術師、精霊使い、異能者がそのまま籍を置く、術師連合の後援組織だ。

戦闘関連は術師連合に任せて監視に廻っているが基本的に術師連合の卒業生だ。その戦闘力は並では無く高い。

数も少ない、質も同等未満の相手に苦戦しろと言う方が無理な話だ。

「くつ、貴様ら魔術協会を敵に回す気か!？」

隊長格の男がそう叫んだ。

今までならそれで相手がおびえ竦んで優位に立てた。

だが、

「魔術協会なんかに従うほど、落ちぶれちゃいないよ」

そう、第六高校生徒会長 吉川信乃は言い返す。  
聖奏の某生徒が開発した呪符の雷撃を添えて。

「ぐあつ」

その様相は戦闘などではなく、完全な殲滅戦だった。

その様子を見て美咲は焦った。

早く自分と面識のある人を探さないと、自分も殲滅されてしまう。

慌てて住宅街の方へ逃げ込もうとして、沢山の足音に出くわした。

突然の遭遇ながらもすぐさま攻撃の態勢に入る聖奏せいそうの生徒たち。

その中で唯一、ちよつと驚いたような顔をする人物を見つけて美咲は内心で諸手を挙げて喜んだ。

同時に、驚いてもいた。

「結城会長！」

「え、…美咲ちゃん！？」

まさか、この人に会えるなんて。

己の幸運に感謝しつつ、警戒を止めない少女たちに

『自分は協会側の人間だが抵抗する意思も敵対するつもりもない。投降する』という事を伝える。

今年の子たちは質が高いな

そう思っていると、高校生組のリーダー格らしき少女 奈緒だが携帯電話を取りだす。

報告を受けているようだ。

「思ったより、手ごたえが無かったみたいね。それじゃあ、拘束しておいて。回収に行くわ」

どうやら、追撃組の他の面々は見事に袋叩きに遭ったらしい。

「…いろいろと聞きたいことがあります。喋ってもらえますね」

その少女 奈緒が声をかける。

美咲は『もちろん』と応えた。

# 8 4 (前書き)

2011.3.15 ルビミスを修正

恆松美咲という情報源を得た奈緒たちだったが、結局のところ『唯奈がどんな事をされていたか』と『保護した少女が鍵』という二つしか判らなかつた。

美咲も『支部長直属』という立場を持っていたが新入りの下っ端には中間管理職の職員程度にしか情報は流れてこないのだ。

「…これが、私が知り得ている範囲での全てよ」

美咲はそう言い終えた途端、強烈な殺気をぶつけられて喉を詰まらせたような感覚に陥つた。

その『されていたこと』は彼女たちにとって到底許せるものではなかつた故に。

それは当然かもしれない。

『大切な人』を凌辱した相手を、誰が赦せようか。

「抑えて、楓ちゃん、マナちゃん。」

怒り心頭な面々の中で、殺気まで放っていた二人を和葉が抑える。

「それをぶつけるべきは彼女じゃないでしょ」

そう諭されて二人は漸く落ち付き、美咲は一息つく事が出来、冷や汗を拭う。

「…全ての鍵はあの子、か」

和葉は居間から客間に寝かされた少女の様子をうかがう。  
少女は今もうなされ続けている様子。

「美咲の身柄は術師協会の方に預けるわ。あの子は…私に任せてもらえるかしら」

和葉の申し出に一同の視線はマナと楓に集まる。

『関係者だった』と言うだけで殺気を叩きつけた二人の意見が一番の強硬派になるのは目に見えていた故に。

『あなたの意見を取り入れる』と奈緒が視線で送る。

どんな答えが出るのか、戦々恐々としながら。

だが、

「お願いします。マナちゃんはウチに来る？」

「…お願い」

その周囲の予想に反して二人は申し出に乗った。

おまけに同じく強硬派になり得たマナを自分の家に、というのだ。

「ええ、任されたわ。　　奈緒ちゃん、ひっ捕えた協会の魔術師は？」

「ええ。OBの方たちと一緒に『お話し』を聞くつもりです」

「あら怖い」

それから、引き上げてゆく聖奏の生徒会の面々を見送った和葉は受話器を取った。

「さてと。純一くんに連絡、連絡。」

\* \* \*

『目、覚まさないね。どうしたの?』

『うーん、疲れてるのかな?』

覚醒しかけの意識に、感覚器官から情報が届けられる。

この声は、           さんと           ちゃんの声だ「error」

『そろそろ夕飯にしましょ。』

そんな、聞きなれた           の声「error」

どうもおかしい。

何故、ノイズが入る?

『データ』はちゃんと存在しているのに、何故?

何故、『自分の記憶』である筈なのに自信が持てない?

「ッあ  
」

喉から漏れ出る苦悶の息。

自分の記憶か、他人の記憶か、判断できない。

『データとして閲覧』することはできるのに『思い出』せない。

そしてそれは、究極的な問いを自分に突き付ける事になる。

「『私』は誰？」

記録にある『自分の名前』は『藤谷誠』と『御剣唯奈』  
偽名とはつきりしてるのは『橘高統夜』と『宮野真心』。

判らない。  
誠と唯奈、どちらが本当の自分なのか。

判らない、判らない、判らない、わからない、わからない、わから  
ない、ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、

まるで、他人の記憶を見ているよう。

それ故に…

「目が覚めたのね」

視界に現れたその女性を 『藤谷誠』の記憶によれば母親である

筈のその人物を…

「えっと　　和葉、さん？」

『母さん』と呼べなかった。

当然、相手は疑問を抱くだろう。

『何故、名前を知っているのか』と。

「ええ。　　あなたは？」

やんわりと尋ねてきているが実際は黙秘を許さない命令でしかない。

「私は　　」

\* \* \*

「記憶が混同している？」

生徒会室にふらりと現れた和葉によって告げられた『少女から得られた情報』を聞き終えた楓たちは口をそろえてそう言った。

「『混同』と言うよりは『自分の記憶として認識できていない』と言うべきかしらね。　　記憶の内容からすればほぼ確定で誠か、そのコピーであるって断言できるんだけど」

「…でも、誠じゃないんですよね？」

和葉の『ほぼ誠で確定』という知らせは確かに明るい物ではあるが、同時に悲痛なものでもあった。

「ええ。あの子の人格は『誠』をベースに作られた『唯奈』、そう考える方が自然かもしれないわね」

皆が手を顎に寄せて考え込む。

「そつえば、今はどうしてるんですか？」

遙が思い出したように言った。

その答えは

「いま、裕未　うちの娘の面倒を見てくれてるわ。」

小学五年生のね、と付け足す和葉だが、周囲は見事に凍りついていった。

「…素性も判らない相手に子供を預けても平気なんですか？」

思わず尋ねてしまった雅人。

「人格がどうであれ、あの子はウチの子だもの。信用できない訳ないでしょ」

それに対して帰って来た答えは子供を信頼する親の物だった。

「結論として、あの子は問題なしよ。むしろあなた達と一緒に居た方が記憶の整理も付きやすいかもしれないわね。」

「それじゃあ、手続きしておきますね。」

「お願い」

何の手続きなのか和葉は問わなかった。

そんな事、聞くまでもないのだから。

その数日後、夏休みも終了へのカウントダウンを始めた頃。  
イギリスから転校生が来る事が決まったのだった。

## # 8 4 (後書き)

あるえ？

おつかしいなあ…元々のだと感動の再会のシーンを書いた筈なのに  
こんなダークになっちゃったよ？

…まあ、最後がハッピーエンドでなくグッドエンドだったのは変わ  
らないと思いますが…

# 9 1 (前書き)

ちょっと遅れました。

今回も繋ぎとつかフラグの為なのでちょっと短めです。

九月。

夏休みという一ヶ月半に渡る長い休みを終えて英気を十分に養った学生たちが学校に戻って来る日。

その日、聖奏学園女子部一年三組に『転入生』がやってきた。

その知らせを担当の有坂先生が持ってきた時、クラス中がごく少数の例外を除いて沸き立った。

そんな生徒たちを一喝して黙らせた有坂先生は言う。

今日からこのクラスに加わる少女は先の交換留学生の妹である。

本当は妹の方が来る予定だったのだが姉が妹の名前を騙って代わりに来たらしい。

年齢は当然ながら同じ十六歳………高校一年相当だ。

そして、

「ちょっと事故で記憶に曖昧なところがあるらしいから、あんまり話を聞きたがらないように。」

余りのショックに、既に詳細を知っている関係者二人を除いた全員が黙り込んだ。

「それでも、日常生活にはなんの問題もないから普通に接してあげ

てね。 それじゃあ、呼んでくるから静かにしてるように」

釘を刺してから一度退出する有坂先生。

だが、そんな釘なぞ何処吹く風。

足音が聞こえなくなったところでゴシップに飢えている少女たちは雑談を開始する。

ほどなくして戻って来た有坂先生の一喝で再び静かになった教室に、『問題の少女』が現れる。

教室二列目以降は、首をかしげた。

『居ないじゃないか』と。

二列目以前は驚いた。

『まるで小学生だ』と。

幼い容貌は中性的な整い方をしていて、身長も一五六だと公言する有坂先生より頭二つ分くらい小さい。

歩みを進めるたびに後頭部で結われた背中の中半ばまである髪 所謂ポニーテールだ がゆらゆらと揺れる。

用意された踏み台に立って、教卓から上半身を出したその少女は見た目相応の声で言う。

「御剣……唯奈、です……」

葛藤と困惑が込められた自己紹介に、含まれる感情を読み取れた二人は苦々しい顔になり、他の面々は「初心だ」「恥ずかしがり屋だ」と盛り上がる。

「はいはい！みんな静かに！それじゃ、御剣さんの席は」

あらかじめ用意されていた楓と遥の間の席が宛がわれ、小声の憶測が飛び交う授業が始まった。

\* \* \*

「あなたは藤谷誠わたしのむすこじゃない」

そう、『和葉さん』に言ってもらえたから私は『御剣唯奈』を名乗る決心が出来た。

実際、こっちの名前の方がしっくりくる。

『とりあえず、はっきり判るまでは借りておく』

別に同姓同名がない訳じゃない。だから、一時的に借りる。

とはいえ、そうすぐに割り切れるものでもなく、転入生の通過儀礼である自己紹介は相当躊躇った。

それが原因なのか…休み時間ごとにクラスメイトや噂を聞きつけた先輩後輩にもみくちやにされた。

先輩方からは『ちっちゃい可愛い子』として、後輩たちからは『ちっちゃくて可愛い先輩』として。

まあ、身長一二四の体重二一キロって『何処の小学校低学年生？』  
って思うだろうけど。

本来、私の身体は魔力の塊であり、精霊と大差なく物質化させるこ  
とが出来なければ見えても触れない幽霊みたいな存在である。

それだと『怪我をする』とか『汗をかく』とかの『人間として当然  
の事』が起こらない。

それだと色々問題が出てくるので『人間そのものな入れ物』に入っ  
ている。

『魂の入っていない人間』と言うべき禁術の産物。からだ

魔力の塊である私を『魂』に見立てて肉体を作り上げた、と言う訳。

まあ、高校生相当の器を作っても良かったんだけど とうか、作  
ったんだけど誤差が酷くて慣らし期間リハビリが足りない事もあり、本体と  
サイズが似た今の身体に落ち着いた。(ちなみに本来は一一五セン  
チくらいしかない)

当然、魔術協会にバレたら即拘束、実験材料確定なのだけど使える  
のは私一人なのでばれる可能性は低い。

なんせ、『そんな事出来る筈が無い』という事なのだから。

とりあえず、クラスに迎え入れられて無事放課後を迎えた私だけど

.....

「萎びてるな」

「溶けてるんですよ」

生徒会室のデスクに顎を乗せてぐてーっとしていた。

生徒会室に来たのは たぶん条件反射みたいなもの。

『放課後だ』>生徒会室いかなきゃ』みたいな

それは『誠』にも『唯奈』にも言えた事だったから『私の中の唯奈』をなぞるべく動いてる。

まあ、転入初日はみんなに構われ過ぎて心身ともに大分お疲れだけど。

「大変だったねー。三年生や中等部の子たちまで来たんだから」

と、遥（基本的に同学年は親しければ名前、そこそなら苗字を呼び捨てにしてたと言われたからそうしてる）に言われた。

うん。本当に大変だった。

途中で『過去の話』を聞いたがる人がいて危うく意識がシャットダウンされかかったりなんていうトラブルもあった。

∴個人的にはあの時に触れた『ブラックボックス』的な何かが重要なんだと思う。

まあ、ブラックボックスを開封しようとしたら強制シャットダウンだと思っけど。

「なんとなくか、女子高の気風を侮ってた∴処で遥は何してるの？」

紙の上に両手をついてそのまま魔力を流し込んでいる？

「ああ、これ。これは呪符を作ってるの。攻撃用だったり防御用だ  
ったりのお札」

…ああ、確かに『記憶』にはある。

「一枚貸して」

「いいけど…」

遙から楓経由で渡されたA3のコピー紙を手に

「『アクセス同調開始』」

込められたモノを、紙の中身を『視』る。

見て、理解した。

「これだったらこっちの方がいいかも」

紙を身体の一部と認識して、魔力を流す。末端まで丁寧に。

「え？」

周囲から驚く声上がる。

出来上がった紙を遙に返す

返したA3紙の裏側にはかなり精密な縄文式土器みたいな紋様がびつちりと張り巡らされていた。

それは『紙に作られた回路』の姿。

それを見た遥の反応は判り易かった。

「無理！絶対に無理！ここまで細かくだなんて無理だよー」

半分泣きの入った声で『無理』を連呼。

「そうかな…それほど難しいことしてないつもりなんだけど自然と、首をかしげていた。

「いや、無理だから」

「ふつーの人間に、紙を身体の一部として扱うのは難しいよ」したら総突っ込みをもらった。

奥の方で矢吹先輩が鼻を押さえてるように見えるのは気のせいと言っ事にしておこう。うん。

「でも、これを作った人って頭良かったんだね。回路の精度はイマイチだけど」

これさえあれば一般人でも魔術が使えるのだから。

「何言ってるんだよ。お前が作ったんだぞ？ついでに佐伯妹がやる

よづなになってから劣化してるし」

「えっ？」

思わず記録を振り返る。

振り返ろうとして

「何？出来る人の自慢？ねえ、それ自慢？」

「ひはいひはいひはいひはい（痛い痛い痛い痛い）」

遙に頬を思いつきり左右に引っ張られた。

親指が口の中に入って来て、其のまま左右にむよーんと。

我ながら、よく伸びるなあ…

ついでに、遙の背後では篠田くんが晶ちゃんにボコボコにされていた。

「はへ、はいほうふはほ（アレ大丈夫なの？）」

「はー、やーらかーい…」

…ダメだ。放してくれそうに無い。

「アレはいつもの事だから。ほつといても平気だよ」と楓。

いや、どう見てもオーバーキルな気が…音も『ぐガッ』とか言ってるし

と、心配そうな顔をしたら

「大丈夫。一〇分もほっとけば復活してくるから」

とか、言ってくる。

何か間違ってる気がした。

「ほうはほははあ（そうなのかなあ）？」

「そういうもののなの」

とりあえず、なんか悦に浸ってる遙は指を

「あぐ」

と、軽く噛んで手を引っ込めさせることにした。

「痛いっ!？」

おお、いい反応。

「なにするだー」

噛まれた手を庇いつつこっちにむかってやや棒読みに言う遙

「いや、何時までも人の口の中に指突っ込んでるからでしょうが」

そこに楓の事務処理用ファイルが振り下ろされる

すぱーん

「痛いっ! 楓、それは凶器! 凶器だから!」

今度は頭を押さえながら楓から距離を取る遙。

「あはは」

遙がボケて楓がツッコミ、という漫才じみた状況を『珍しいな』な

んて思った。

二学期開始から五日目の晩、緊急招集がかかった。

聖奏と第六高の縄張りに『敵』が出てくる気配があったのだ。

その為、私たちも『出撃』となる。

…戦闘の知識が無い訳じゃないけど、主観的には『初陣』はじめてなのだから多少は緊張する。

「大丈夫。あたしと楓がついてるから。ね？」

遙に声を掛けられて少し緊張がほぐれた。

楓も自信満々だから、大丈夫。

「無理しないで、慣れてけばいいから」

そして、矢吹先輩の張った結界内で『幻魔』掃除が始まった。

その光景は楓の火力に物を言わせた単騎突入広域殲滅戦とでも言え  
ばよかったのだろうか。

「破あッ！」

とにかく大火力・広範囲の両柱を抑えた楓によって焼き払われてゆ  
く雑魚。ヨリン

「逃がさないわよ！」

そして、狩り残しは遥の狙い澄ました単発の魔力弾によって一匹残らず狩られてゆく。

『あれ？二人つてこんなに強かったっけ？』と思わず思うほど二人は強かった。

事実、私は何もしていない。

「でもま、何もしいってのも、守られっぱなしってのも性に合わないんだよね」

だから、戦闘開始からずっと準備してきた『ソレ』に仕上げの魔力を流し込んで可視化させる。

「二人とも、援護するよ！」

私の頭上にあるのは総数二〇ほどの魔力球。

一発一発の破壊力は単発に劣るが数の多さや発展性の高さが利点のモノ。

今回は威力より手数と誘導性能を重視して発生させた。

「行けっ！」

雨あられとはいかないまでも、数の暴力に対抗する事が出来る程度の質と量はある。

「やるね！」

そんな賞賛の声も届くが『大したこと』と思うほどの事じゃない。

残敵掃討の段階に入るのも目前：と言うところで不穏な気配を感じた私はつい、叫んでいた

「何か来るよ！」

「えっ？」

「遙、離脱！」

二人が飛び退くと、地面にできた穴のような影から何者かが出てこようとしていた。

「離脱援護、弾幕張るよ！」

先ほどの誘導弾から誘導性能を外して手数を増やしたモノを大量に用意する。

瞬間的に展開される四〇の魔力弾。

次々と生成され、七〇集まるのにそう時間は要らない。

そして、撃つたら補充で魔力弾を雨霰と連射する。

その隙に、接近し過ぎな二人に後退してもらうつもりだ。

「な……」

「なんて攻撃……」

遙と楓は離脱コースに入りつつも感嘆というか、驚嘆の声をあげる。その声に含まれるのは純粹な驚愕。

まあ、それも当然か。

こんな『人間バケモノじみた離れした真似』は『普通の人間』には不可能なのだから。

確信を持って言える　　私はある種の化け物だ、と。

二人が十分な距離を取れた事を確認したところで攻撃方法を切り替える。

中距離からの飽和攻撃の必要はもうない。  
近接戦にシフト。選ぶ武器は刀。

イメージの仕方は『今まで通り』。

魔力を設計図に流し込むと『すう』と、手に握られるように現れる日本刀。

小さい私が振るうには少々大きいのが問題は無い。

足止め用の連打の最後の一波に混ざって、一気に斬りかかる。

「ゆーな！」

「遙、援護」

「わ、わかってる！」

退避していた二人はそのまま逃げに入ると思っていたのか接近に驚き、慌てて攻撃術式の構築に入る。

今回の敵は正に『悪魔』っぽい外見をしていた。  
なんというかレッサーデーモンとかグレイターデーモンとか呼ばれてそんなヤツ。

刀を振るう、が硬質な表皮に阻まれ弾かれる。

「堅い」

これじゃあ、それほどダメージは期待できない。  
けど、手は見えた。

斬れないなら、叩きつぶせばいい。

弾かれ、刃こぼれを起こした刀を魔力に戻し別の形に再構築。

作りたいのは…斬馬刀。

それもどちらかと言えばフィクション向けな、『馬諸共叩つ斬る！』  
と言わんばかりなヤツ。

当然、重量もそれなりにある…というか、私の数倍重いそれを振り

回すのは割と大変。  
ま、出来ない事じゃないけど。

「おうりゃあっ！」

力を込めて横薙ぎに振るう。

見た目相応に作られ、魔力で強化されているだけの身体が悲鳴を上げる。

斬馬刀は一つ目悪魔に抑えられた。

「遙、大きいのは？」

「ちよつと位置が悪い……」

背後からは手を出しかねる二人の声。

援護できない状況みたいだ。

でも、もう不要だ

「動きがとまれば、もう十分」

「あ」

背後から間の抜けた声が出た直後、ズドン、という音を立てて馬どころか船…むしろ艦を斬れそうなくらいの大きさの太刀が降って来て、その重量を貫通力に変え、悪魔の脳天に直撃。

「秘技、斬艦刀流星落し　　なんてね」

実際はただいつもは手元に構築している刀の創造位置を結界の限界高度ギリギリにしてそのまま自由落下させただけなんだけど。まあ、大質量の金属に頭上から襲われればひとたまりもないだろうっていう安直な考えでも上手くいくもんだね。

「ゆるな、まだ動くよ!」

その声が無ければ、左腕を完全に吹っ飛ばされた。

ギリギリで展開した障壁で若干浅くなった爪の斬撃は肩をえぐるだけに終わる。

「痛っ…」

邪魔でしかない斬馬刀は消し、肩に食らった一撃の勢いを利用して転がるようにして下がる。

失血死しようが、首を飛ばされようが『本体が魔力で出来た霊体みたいなもの』である私は死なない。

が、痛い物は痛いし、自分の姿をした死体を眺めるというのも中々に嫌な光景だと思うので『今の体』を殺さない努力はする。

傷に魔力を回して止血、細かい治療は後回し。

「流石は悪魔ってところ?」

脳天から大きな剣に貫かれているというのにまだ動き一矢報いてきた敵を睨む。

自分の慢心と油断の授業料が左肩の怪我が…

「ゆるな、下がって。」

「出来れば増援、呼んできてほしいな」

「でも…」

その時だった。

串刺しにされている悪魔の背後に膨大な魔力が膨れ上がったので三人そろって防御態勢を取る。

楓は持つてる防御符で、遥と私は自前の魔力で防御障壁を張る。

ドン！

数瞬、目の前が真っ白になった。

爆音の直後に微かな異臭　　これは…オゾンの匂い？

と言う事は、さっきの閃光は、落雷？

悪魔　　正しくは悪魔っぽい幻魔は串刺しにしていた斬馬刀の一部と共に消し飛んでいた。

そして、それを撃つたと思われる人物は…

「あの、大丈夫でしたか？」

現れたのは精霊を連れた少女。

「白澄さん？」

白澄 里桜。

第六高校の生徒会役員で精霊契約者。

『誠』だっ……たところは中々に縁があつた人物。

「あ、高槻さん。そつちの子は すぐに救護を

私を見て慌てる白澄さんに

「あ、大丈夫です。傷はもう塞いでありますから」

よくよく考えれば、制服のセーラーは肩が引き裂かれ紅く染まっている。

大怪我と見間違える要素たっぷりだ。

「そうですね。」

「さっきの雷撃は……白澄さんが？」

「うん。凄い威力だね、聖奏学園特製の攻撃呪符。」

そんな白澄さんに遥がツツコミに行った

「いや、それ確実に違うから」

『遙の時』と同じだろう。

呪符に書かれた術式を利用しての、砲撃とも言えるモノ。

単純魔力弾の筈が、何故雷撃になるのかは調べてみないと判らないけれど。

「おつとつと、ちよいと失礼　はい、白澄です。…幻魔出現地点に居ます。　はい。処理班に引き継ぎですね?」

最後に『了解です』とめて電話は終了。

おそらく、第六高生徒会の吉川会長が相手なんだろう。

「それじゃ、ウチの処理班が到着したら引き上げね。他の聖奏所属の人たちはもう集まってるって」

其の処理班が到着するまでに時間はさほど要さず、私たちは合流となった訳だけど…

「うわっ！唯奈ちゃん大怪我!?!」

「痛くない　って確実に痛いよね!?!」

「き、救急車!?!」

「それより先に止血!止血!」

「待ってる、今すぐひかり先輩を呼ぶからな」

到着した私たちを見て一気に錯乱状態に等しい具合の混乱に陥る先輩たち+2。

ちなみに上から順番に昴、矢吹先輩、篠田、梨紗先輩、氷室先輩。

「えーと、一応傷は塞いだから大丈夫なんですけど…」

そんな私の声も当然届いておらず急遽呼ばれたひかり先輩の前に差

し出され…

「傷、塞がってるけど？」

そのにこやかながらどこか刺々しい一言で皆が凍りついた。

「だから『傷は塞いだ』って言ったのに…」

「あはは…みんな慌ててたもんね」

「いや、あれは錯乱って言った方がいいでしょ」

そんな私たちの溜め息も凍りついた皆の解凍には何の貢献もせず

「まあ、折角だから傷痕は消しとくね」

やれやれ、と言わんばかりのひかり先輩。

「ちょっとくすぐったいかもしれないけど、我慢してねー」

傷のあった辺りにひかり先輩の手が添えられ、ほんわかと温かい感覚に包まれる。

「それにしても、まったく。自分の事を顧みないのは相変わらずね」

『相変わらず』

その一言をひかり先輩が言ったと同時に、凍りついていた皆が急速解凍され

「夏元先輩！その話はご法度って話じゃ」

梨紗先輩が抗議して、ひかり先輩に睨まれて黙る。

そういえば、いつもニコニコしてるイメージしかないひかり先輩のこんな顔は初めて見る。

「みんな過保護過ぎ。少しは信用してあげないと。私は言っても問題ないと思うけどな」

…『誠』や『留学生の唯奈』の話を皆がしないようにしてたんだ。道理で話題に上がらないし、不用意に言ったから篠田がボコされたのか。

「…先輩がそう言うなら……………」

そして

「さーで、みんなで治療中の雑談でもしようか。話題は今年入ったからの出来事！」

ひかり先輩主導の元、他校の人も数人巻き込んだの思い出話が始まった。

# 9 3 (前書き)

2011.3.15 ルビミスを修正。

思い出話で判ったことはそれと言ってある訳じゃない。

ただ、『記録』としてしか残っていない脳の中の『出来事』が『記憶』となる 実感が持てる部分が少し出てきたのは収穫だった。

「そういえば、男子部の一年三組：誠のクラスの景山くんだった？ 中学校時代、誠と仲良かった：本人は腐れ縁って言ってたけど。その彼が私んところに来て『藤谷について何か聞いてないか？』って尋ねられた事あったよ。迷惑だから代表で来たって言ってた。

もちろん、特に知らされてないって答えただけ。」

予想外だった。

驚いた以上に嬉しかった。

あいつら『俺』の事を散々裏切り者だの奇人変人だの言ってたけど、  
結局 不器用なじゃれ合いだったんじゃないか。  
ちよっとやり過ぎな部分もあったけど…

不意に、目じりが熱くなった。

「ど、どうしたの!？」

「傷が痛むのか？」

再び慌て始める皆。

「うっん」

手でこすって拭う

「ちょっと嬉しかった…のかな？」

なんとか、笑う。

でもそれは、きっと泣き笑い。

「嬉しかった？」

聞き返してくる遙。

きっと、この感覚は上手く言い表す事は出来ないと思う。

けど、強いて言うなら…

「唯奈は、誠から分かれた存在だから」

自分の半身まごが想われている事は、嬉しい事以外の何物に当てはまる  
うか

「うん。はつきりと判った。私は、誠の半身。魔術師であり、女で  
ある、『唯奈』の部分。」

まあ、その『唯奈の部分』も元は誠から派生したから『誠の要素』  
も持っている訳だけ。

「遙、会長に連絡取れる？」

「姉さんに？」

突然話を振られて困った顔になる遙。

「うん。ちよつと悪だくみの相談」

今はまだ、皆にも内緒の企み事。  
自分一人でもいいけど、折角だから皆で。

「ちよつと一暴れ、したくない？  
誠に酷いことした連中相手に。」

きつと私は今、物凄く黒い笑い方してる。

「その話、一枚噛ませてもらえる？」  
その声は、予想外の所から聞こえてきた。

\* \* \*

『悪だくみ』を聖奏の生徒会室に戻ってからした。  
其の時の反応は二通り。

「魔術協会の支部を襲撃するう！？」

「ははは、中々に大事件の予感ね」

素っ頓狂な声をあげな佐伯会長、面白いと言わんばかりの第六の吉川会長。

「だって、誠が拘束されて、返してもらえない以上奪い返しに行

くしかないじゃないですか」

だから『襲撃』です。

そう言ったら『むう…』と考え込み始める佐伯会長。

「これは、佐織と藤堂くんも巻き込んであげるべきかね」

「とりあえず、話だけは耳に入れておいていいと思います。仮に、誰かから協会に漏れても詳細が判らなければ無駄に気を張るだけですから」

「そっか。よし判った。えっと、まずは佐織から…あ行の二文字目ら行だから…あつたあつた。『p.i』…もしもし、佐織？ちよつとばかり悪だくみの相談なんだけど、乗る気ある？ うん、それじゃ聖奏の生徒会室ね。藤堂くんにも連絡しないと。 ああ、執行部の藤澤会長？一応、耳に入れておいた方がいいと思うけど、とりあえず術師組で意思統一が先なつて。うん。それじゃあね。『p.i』はい、おひとり様ご案内。」

あつという間に第四の有沢会長の参加が決定。

同様に第三の藤堂会長も乗ってくれて、佐伯会長が気付いた時には

「ふむ。確かにこの間の一件は完全に舐めた真似してくれたからな。」

「それに、二十年くらい前に聖奏の結城会長指揮で協会を半身不随に追い込んだって有名な話もあるし」

「その時は確か、執行部の藤谷会長が市内警護を協力してくれたん

だっけ？」

「そうそう。会長以下三役の二年生が主体になった聖奏指導部は今でも伝説の代よね」

術師連合の所属校生徒会長大集合、となっていた。

私は出てきた名前に頭が痛い思いだった。

ついでに遥と楓も。

家に古い詰襟があつて、『これはお父さんが高校生の時に着てた制服。このバッジは生徒会長さんのしるし』なんて説明してもらった覚えがある。

その制服、確か睦斗学院の物だった。

つまり、誠は聖奏学園と睦斗学院の生徒会長　学生対魔組織のトップ同士の息子ってこと。

そりゃ、潜在的な魔力とかも凄いことになるわけだ。  
と一人納得。

それはともかく。

「と、まあ。下はやる気満々なんだけど、どうする？佐伯総長」

いつもは名前呼びなのを態々役職で呼ぶ吉川会長。

「ここまで周到に用意されたら、却下出来る訳ないでしょ。それに、いい機会か」

少々あきれた様子の佐伯会長。

「いい機会？」

幾人も首をかしげる。

「次期術師連合総長に、御剣唯奈を推薦するわ。異論のある人は？」

何故にそこで私の名前が？

「しつかりと、仕込んでくれるんでしょ？」

「それに、発起人が最高責任者というもの、中々にすさまじいわね」「不足は俺たちで支えればいい訳でしょう？」

異論のある会長は一人も居ない様子。

「で、総長就任はイコールで生徒会長な訳だけど……」

佐伯会長の視線が聖奏生徒会の皆の方に行くけど

「むしろ歓迎です」

「うん。いいんじゃないのかな」

「副会長と会計も後任選びしとかないとな」

同じく拒否が出ない。

「それじゃあ、決定。OB会……睦斗術師協会と学長他の報告や手続きが終わるまで一週間弱かかるけど」

ぼん、と佐伯会長の手が私の肩に。

「それまでに生徒会長と術師連合の総長に必要な技能、全部叩きこんであげるからね」

「お、お手柔らかにお願いします」

ちよつと、顔が得物を狙うネコ科の動物っぽい怖さがあつたのは黙っておく。

「とりあえず、今日のこれからはどうするの？」

くすり、と笑って佐伯会長が手を離す。

「えつと、今日の所は参加表明していただいたので解散です。詳細は後日連絡するのでその際に決めましょう。できれば窓口役の生徒を一人決めておいてください。できれば身動きのとり易い一年生で」

最後のこの『一年生で』というのは私が二年生を『使う』事に抵抗があるかなんだけど。

「最後に、手を貸してくれてありがとうございます。 私たちに喧嘩売った事を後悔させてやりましょう！」

『それでは、解散です』としめたら会長たちはポンポン、と頭を撫でながら『頑張れ』とか『期待してる』とか声をかけてくれた。

「あと巻き込むとしたら、藤澤会長の所ですね。ヒスイ経由でお願いしておきます」

ヒスイは最近藤澤会長の所（おそらく睦斗学院）にいたことが多  
いみたいだけど、魔力供給は私からしているので呼び出すのは割と  
簡単。

「男子高の連中は、割と『こう言う賄賂』でオチると思うがな」

と、氷室先輩は雑誌らしきモノを何処からか取りだす。

「何、それ」

「写真部が出してる写真誌だよ。毎年、どっという訳かサンプルが各  
二部届いて一部は生徒会に届けられるんだよ」

氷室先輩曰く、製本代などの大きな出費を部費でやる時は生徒会経  
由でないといけないという決まりがあるからだという。

これらの製本の費用も生徒会が部費を代理執行して払った訳。

バレないようにやってるつもりが、完全に把握されてますよ。

「まあ、コレを売ってるのは知ってるからその分写真部の部費は製  
本でギリギリになるように設定されてる訳だが。」

ま、必要悪ってところか。

と笑う氷室先輩。

「あ、おつきいゆーな」

と、楓が言って視線が集まる。

楓が持っているのは写真部が出した特集本？

ふと、『特集本の選定作業がある』と某写真部員が言ってたような

……

「追加発注、しておくか？」

「…なんか釈然としないけどお願いします」

効果は抜群で、執行部は二の句を継げずに参加を表明してくれた事を追記しておく。

\* \* \*

「ただいまー」

家に帰って来た私は色々やらなきゃならないことが合ったけど、一つ確実にやっておかなきゃならないことを優先して行動していた。

今日は金曜日。

週末は遠野家の面々がこの家に来る日なので、おそらく。

「お帰り、唯奈ちゃん。お疲れ様」

案の定、リビングに居た。

「ただいま、お母さん」

それまで、どう呼んでいいのか判らなくて『身元引受人』<sup>おやぢ</sup>となってくれたのに『和葉さん』という他人行儀な呼び方をしてたけど、呼

ぶ決心がついた。

私は『誠』でもあるのだから。

それに、書類上では遠野和葉は御剣唯奈の身元引受人。つまり、母親も同然。

だったら、そう呼ばない義理はないでしょ。

ただ、向こうはそう呼ばれるとおもってもみなかったのかぽかーんと呆けていた。

「それじゃ、夕飯の支度しちゃうね」

パタパタ、軽い足音を立てながら部屋へ引っ込んで荷物を置きに行き、台所に立つ準備をして降りたら台所には母さんが居た。

「いつも娘に任せっぱなしじゃあね。少しは手伝うわよ」

夕飯の支度と言う意味では殆ど役に立たなかったけど、母さんが手伝ってくれて、娘と呼んでくれるのは凄くうれしかった。

「…ところで、何時から私の事やら裏の事知ってたの？」

「学生時代からのコネがあるのよ」

『夜寝る時に話してあげようか？』

なんて言われたら、つい好奇心が勝ってしまい徐々に、甘えてしまった。

母さんも、環境に自立を強制された誠に甘えさせられなかった分と言わんばかりだったから……

不思議な事に、朝起きた時にお母さんと私の方に義理の妹になる裕未ちゃんが潜り込んできていた。

\* \* \*

それから数日後……

その日は学校中がとある発表についての話題で盛り上がっていた。

それは噂話というレベルではなく、学校中各階の掲示板に堂々と貼られていた一枚のプリントが原因である。

『下記の者を次期生徒会長に任命す。』

女子部 一年三組 御剣唯奈

』

生徒会長の決定である。

その人選には生徒会が内部推薦で役員を決定すると知っていても知らなくても驚きが付きまわっていた。

名前と姿かたちが一致する女子部の生徒は驚く。

『あのちつちやい子が！？』と。

名前は聞いたことがあった男子部の生徒も写真部がもたらした写真で知り、半数は驚き、半数はお祭り騒ぎを始めた。

お祭り騒ぎを始めた連中は一般に『小さい女の子が好き（ロリコン）』と呼ばれる人種であることを追記する。  
あと、女子部にもそういうのが居た事も。

一部では『転入して一ヶ月も経っていない生徒に任せられるのか！？』という意見があったが、本人に『佐伯会長に鍛えられましたから…』と虚ろな目で語られた為にそれ以上の追及を放棄した。

朝礼の場での就任演説では、演台に隠れてしまつて踏み台が必要になるという判り切つたハプニングがあつたが、概ね問題なく行われた。

「生徒会長に就任することになりました、高等女子部一年三組の御剣唯奈です。転入して間もない私ですが、この学校を想う気持ちは皆さんと変わらないつもりです。精一杯、任を全うしていきたいと思つので、皆さんご協力お願いします。」

就任挨拶が終わり、マイクの余韻が切れたところで拍手とざわめきが溢れかえる。

聞いていた方は知らない事だが、演説の台本にはこんな事が書かれていた。

『この中に魔術師、異能者、精霊使いが居たら生徒会室まで来なさい。以上』

その一文は当然の如く無視され、唯奈が自身で考えた文章を言ったのだが、一つだけ。

書いたのは佐伯遥嬢である。

### # 9 3 (後書き)

今回は誠から分かれて出来た人格である『唯奈』が『自分の確立』  
をする回でした。

記憶は二人分、人格は一人分ならこういう混乱が起こるんじゃない  
のかなあ？  
なんて思っで。

ただ、この回の本題は

『唯奈、生徒会長になる』

『魔術協会日本支部壊滅フラグ成立』

なんですよ。

ついでに、時系列確認の為に作った設定資料からちよこちよこ、と  
ネタを持って来てみたり、出オチにする予定だったネタをちよこつ  
と持ってきたり。

現在教習所通い中なので執筆速度大幅低下中ですが、気長にお待ち  
ください。

# 1 0 1 (前書き)

お待たせしました。  
1 0 話更新です。

あと一ヶ月もすれば文化祭という時期を迎えた私たちは表の仕事で多忙を極めていた。

早い段階から始めなければならぬ打診や注文は佐伯先輩（会長と呼ぶと『今の会長はあなた』と怒る）がやってくれていたのだけれども、直前にやらなきゃならないこともやっぱり多い。

たとえば、各団体（用は部活動や各クラス）のやる内容の承認とか、配当教室以外の部屋（つまり自分たちの教室以外の部屋）の使用申請の処理とか。

生徒会が呼ぶことになっている特別ゲストとの折衝だったりとか。

勝手知ったる二年生は最大限利用させてもらってるけど。

会計担当の氷室先輩には遥をつけて一任。

対外折衝には梨紗先輩に楓をつけて同じく。

まあ、必要なら私も同席してるけど、大体は二人の采配任せ。

庶務、総務系は矢吹先輩に晶と篠田の二人つけてほぼ丸投げ。

『いざ裏の仕事』となると生徒会外の協力者だったり、他校だったり居るから戦力十分に見えるけど単体となると割と人手不足だ。

そして、そんな時に限って…

『生徒の呼び出しです。生徒会長、御剣唯奈さん。至急職員室まで来てください。繰り返します……………』

何故か、呼び出しがかかる。

一斉に集まる三人分の視線。

言わずもがな、私じゃなくても処理できる作業を丸々投げられて困ってる矢吹先輩以下の三人の。

其の視線が語る。

『何仕出かした』と。

「…何も。行ってくるから追加分は私の机をお願いします」

「いってらっしゃーい」

何とも嫌な予感というか、面倒事の予感がしてならなくて職員室に向かう足取りも重い。

「どこの誰よ。面倒事を持ちこんでくるのは」

愚痴らずには居られなかった。

職員室前に来ると担任の有坂先生が困惑顔で迎えてくれた。

「えっと、警察の方が生徒会長に用があるって言ってるんだけど…  
思い当たる節はない？」

『さつき電話があつたの』と有坂先生。

「まあ、皆無という訳じゃないですけど…聖奏の会長は生徒会連合  
の総長も兼ねますから何かあればウチに関係なくても連絡は来ます  
よ？」

「それが、出来れば早急に来て欲しいって…。」

何かあつたんだろうか。

「判りました。準備してすぐ行きます」

報告は追つて…と話を折つて私は一度生徒会室に戻り外回りの用意。  
生徒会室で書類処理に追われる三人には『適当なところで休憩しな  
がら』と追加指示を出してから私は急ぎで睦斗警察に急いだ。

\* \* \*

「突然呼び出したりしてごめんなさいね」

私を警察署に呼びだした張本人 所轄部の赤城警部は私を執務室  
へと招き入れてそう切り出した。

誠だった頃から含めれば半年ちよいの付き合いのある、警察と生徒  
会連合との接点となっている女性警察官。

蛇足だけど赤城晶の母。

「いえ、それだけ急用ということですよね」

「ええ。この件はなるべく早めに伝えておいた方がいいと思ってね」

赤城警部が一枚の書類を差し出してくる。

当然『部外秘』の文字。

「昨日、公安から廻って来たの。睦斗市に自衛隊が新しく部隊を置くそうよ」

紙面に書かれている内容によると『自衛隊特殊災害対応隊睦斗支隊』なるモノが睦斗市に置かれることになるらしい。

「なんとなくか、胡散臭い名前ですね」

この、『特殊』の所が。

「ええ。設立の際に特別顧問として上がってる名前もあまり聞かない名前よ」

指さされた場所に書かれた名前は……

「…これ、裏の人間ですよ」

私は覚えがあった。

「裏つてことは…そっち側？」

「はい。それもちょっと因縁がある相手ですね」

『私』が生み出される元凶の手先の名前を忘れる筈が無い。復讐リストを作ったら上から数番目には必ず上がるであろう。

「警察にも協力要請が来てるけど、『態々自衛隊を用意するほどの大事には私たちでは対処不可能です』ってハネてもらったわ」

「それでいいと思います。裏は裏でないと処理は難しいですから。」

最近、ようやく裏に関わる表に近い人間の武装強化が出来たばかりだから警察まで手を回す余力はちょっとない。

だから、関わらないでいてもらえるのが一番有り難い。

「この件は各校にも伝達しておきます。まあ、結界げんばの中にまで侵入するのは難しいと思いますけど……」

「お願いね」

話は終わりなのか私が持ち帰る分の資料以外を仕舞い始める赤城警部。

「えっと、来月末…十月の最終土曜と日曜は聖奏学園の文化祭なんです、よかったら来てください。晶ちゃんも、主催者側せいとかいで頑張ってますから」

一応、そう伝えてから私は一路学校に戻る。

『表の先生にはどう説明するかな?』と考えながら。

\* \* \*

事の顛末を訊いてきた有坂先生には『喧嘩騒ぎがあったらしいんですけど誤報でした』と濁して誤魔化し納得してもらい、急いで生徒会室に戻った私は山と積まれた書類に出迎えられた。

どう考えても、留守にしている間に来た量じゃないのが明白なほどの山に。

そしてこれらの書類処理を割り振って置いた三人の姿が見えない事を鑑みると…

「逃げられたのかあ」

とりあえず、書類の束をちよつとどかして各校の会長に警察から来た『火遊び』の話をまとめた報告書を送る為の作業を始めた。

で、ほぼ完成した頃…

「今日はお疲れ様」

「はい！残りは明後日ですね。お疲れ様でした」

「正しい数字の書類が来るまではコレを部屋で整理だな」

「はい……………」

それぞれ学校中を駆け回っていた二組が戻って来た。折衝組の梨紗先輩と楓は順調みたい。

会計組の氷室先輩と遙はちよつと問題アリっぽい。

「ああ、報告する事があるからちよつと…」

「ん？」

集まつて来る。

「なんか自衛隊が睦斗市に拠点を置くみたい。詳しくは今報告書つくってるんでそれを。あ、氷室先輩。コレ完成したらデータ渡すんで各校の会長に送信お願いします」

報告書を書く手を休めずに言う。

これが割と大変で手と口を別々に動かす必要がある。

まあ、並列思考はマルチタスク魔術師の必須技能といえは必須だけど…

「一つ質問いいか？」

「どうぞ」

氷室先輩は本気で困惑している様子。

なんとなく、質問内容は予測できるけど…

「何故に自衛隊なんだ？それに俺たちにどんな関わりがある」

想つた通り。

「詳しくは報告書読んで欲しいんですけど、設立されるのがどうやら裏絡みのようなんです。特別顧問として名簿に魔術協会日本支部の支部長の名前乗ってました。どうやら、本格的に私たちと対立する気みたいなんですよ」

「…成る程」

頷く皆。

「まあ、隔離の為の結界の中に入れないから事後処理の終わった現場に辿り着くのがやっとだと思っんで基本無視で大丈夫かと」

幻魔出現の時は最初に空間がちょっと歪む。

それは私たちが使う位相変位結界と似たようなものだから一般人は侵入どころか気付く事も出来ない。

それを私たちが人為的に継続させて処理を終えれば本来の位相にはなんの痕跡もなく終了となる。

つまり、私たちに手出しは出来ない。

たとえ現場付近を閉鎖されても結界で覆ってしまえばなんの抵抗もなく突破できるという意味でもある。

「ただ、執行部の装備は盗まれないように気をつけてもらわないと」

あの中には位相変位結界や出現時の歪みに入り込むための刻印がされた物があるから、奪われると大分厄介な事になる。

少なくとも、現場で出くわす事になる。

「はい出来たつと。氷室先輩、各校にこのデータの送信お願いします。」

「りょーかい」

会長デスク備え付けのUSBメモリに完成した報告書のデータをコピーして氷室先輩に渡す。

「楓と遥でコレを印刷してもらえる？ウチの人数分」

もう一個の備え付けUSBメモリにもコピーして今度は楓にパス。

「それが終わったら今日はお終いです。お疲れ様でした」

時間も大分『イイ時間』となりつつあるから、今日はもう終わりにした方がよさそうだ。

私以外は。

皆が仕事を終えた生徒会室で一人呟く。

「…この山、どうやって切り崩そうかなあ」

監視体制も作り上げなきゃいけないし………休日出勤確定かあ。

ああもう！人手がもつとあれば………

「あ」

其の時ある事に気付いた私は大急ぎで『ある事』の準備を始めた。

翌日、土曜日。

本来は休みなこの日もきつと唯奈は学校にいるだろうと楓も遥と待ち合わせて学校に来ていた。

時間としてはもう昼近いけれどもまあ、休みの日にまで学校にきて事務仕事をするのだからこれくらい赦されて当然だろう。

簡単なお昼になりそうなモノも用意して来た二人だったが、生徒会室に一歩足を踏み入れて

「あれ、居ない？」

おそらく、居るであろうと思った生徒会長執務机が無人な事に拍子抜けした。

「遥、鞆はあるよ」

楓が持ち上げたソレは確かに唯奈がいつも使っている通学カバンだった。

「…あれ？」

鞆を開けてみれば昨日の授業で使った教科書が入りっぱなしになっていた。

「どうしたの？」

「もしかして…」

楓は遙を放置で生徒会室からとなりの応接室に移動。  
無視された形になった遙はちよつと慥然としながらも付いてゆく。

「…あ」

「あえ？」

二人は一瞬見惚れ、次の一瞬で疑問を抱いた。

そこにはソファと机の間で毛布にくるまって寝ている唯奈が居た。  
何故にソファの上ではなく床で寝てるのかは知らないが、とにかくそこで寝ていた。

どうやら昨日は泊まり込みだったようだ。

それはそれで問題だけど置いておく。

今、問題にすべきは…

「あの犬、何？」

唯奈がぎゅっと抱きしめるようにしている、一匹のゴールデンレトリバー。

その傍らにいる黒ネコはまあ、マナだからいいとする。

だが、犬の方は全く持って正体不明。

事情を知ってそんな唯奈も今は夢の中だ。

起こせばいいのだが、幸せそんな寝顔を眺めていたら『起こす』という行為になんとも罪悪感を感じてしまう。

「どうする？」

「どうしようか」

とりあえず、どうするべきかを悩みながら寝顔を眺めること五分。

「んん……………」

もぞり、と大きく動いたと思ったら唯奈がうつすらと目を開けかけていた。

「あれえ？かえでえ、はるかあ？」

まだ寝ぼけているのか間延びした感じのする口調だ。

そんなところは見た目の年齢相応に見えてしまうので二人は頬が緩むのを自覚する。

「あ、れえ？もうじゅういちじい！？」

がばっ、と起き上がってごじごじ、と目をこする。

「あのさ、寝起きの所悪いんだけど……」

「何、遙」

すっかり目が覚めた様子にちょっと落胆しつつも遙は問う。

「其の犬、何？」

その答えは二人からすれば予想の斜め上だった。

「新しい使い魔だよ。      ツバキ、起きて。 マナも。 もう昼だよ」

抱き枕にしていた大型犬をゆすって起こそうとする唯奈。

その一連のやり取りでその問題の犬が『ツバキ』と言う名前の新しい使い魔だと二人は理解できた。

\* \* \*

「      つまり、文化祭の準備と昨日のあの火遊び対策を並行してやるための人手」

『私の使い魔だから、私の使える魔術の幾割かは使えるんだよ』と付け足して締めたら二人はうんうん唸りながらも頷いてくれた。

「で、泊まり込んだと…」

なんだろう、二人がちょっと怖い。

「そ、そうだけど……………」

一応、宿直の先生にお願いしてシャワールームは使わせてもらったけど…

「まったくもう。どうして私生活よりも仕事を大事にするかなあ！」

「その辺の対策はOB会にも連絡してお願いする予定なんでしょ」

何故か仕事熱心を責められた。

「で、でも、こっちからお願いする以上は出来る限りの準備した方が…」

「高校生にそこまで求めないって普通。」

「でも…」

言い返そうとしたら、何故か三人に肩を掴まれた。

どの三人かというと、楓、遙、ツバキの三人。

ツバキもマナと同様にカモフラージュ用の動物の姿と人間の姿の両方が使える。

動物の時はゴールデンレトリバー、人の時は結構長身な女の人（お姉ちゃん系）。

「……自分をもっと大事にしないで」「」

使い魔にまで叱られた。

「…はい」

完全な包囲網から脱出も難しく私は大人しく返事をするしかなかった。

ツバキには私の無意識とか自意識とかの一部がコピーされて人格が作られてるけど…あんな強引な部分あったのかなあ…

（注：誠の頃から思いつきり有りました。年上体質的なモノとして。）

「ちょっと早いけどお昼ご飯食べましょ。　どうせ昨日の夕飯も抜いてるんだろっから」

「う」

見透かされた！？

「まったく…」

呆れた風の三人。

ともかくその後、二人が持ってきてくれたお昼を食べた後、ツバキはマナを連れて探知網の構築に。私たちは生徒会室で山積みの書類処理にかかった。

終わったのが夜だったのは言うまでもない。

\* \* \*

『　　以上、市庁舎前からお伝えしました』

私はそれを聞き終えたところでテレビを切る。

「…と、まあ大掛かりな火遊びが始まった訳ですが…」  
と、感想を求めたところ

「酷いわね」

「酷いな」

「税金の無駄遣いだ」

「我々の猿真似 いや、それ以下だな。」

以上の悪辣というか辛辣な酷評が帰って来た。

設立決定の報道に合わせた会長会議という場での新設部隊の評価はそんなものだった。

「そもそも何これ。『特殊災害対応隊』って。胡散臭いにも程があるでしょう」

みんな同じような感想を抱いているらしく、うんうん、と頷く。

「この件に関して執行部は装備の強奪、接収に気をつけてください。戦闘は必ず位相変位結界を張ってからでお願いします。」

お願いしますよ、と念を押してこの件は終了。

次は…

「あとは、協会の移転先ですけど、どうやら地下施設が大半みたいです。…協会に不満も持っている各地の対魔組織は四割が協力、三割が静観を申し出てくれています。」

外堀埋めは七割半完了し

たと言えますね」

協会への、仕返しの件。

「外堀埋めは順調だとして…侵入手段と脱出路はどうするつもり？」

『まさか、行きっぱなしで占拠するつもり』と言外に尋ねてくる吉川会長。

「それに関しては…」

そう言つて、私は指で軽く『空間を引つ掻いた』

その様子を不審げに見つめる会長たち。

その視線を浴びつつ私は引つ掻いた場所に手を『突っ込んだ』

そして、その手は十センチほど先の空間から生えてきている。

「  
空間<sup>こゝれ</sup>接続で解決です」

その光景に会長たちは皆して啞然としてくれた。

一番最初に我に返つたのは有沢会長だった。

その有沢会長のコメントは

「人間、辞めたの？」

私がさつき実演して見せた空間接続は、一種の『再現不可能な神秘』

つまり、魔法　人外の技。

「説明しませんでしたっけ？私は、『元から人間じゃない』って」  
生みの親とも言える誠はまだ人間だったけど、私はその魔力から形作られた存在。  
故に、人間に無茶な事も出来てしまう。

『世界の記憶』アカシックレコードというトンでもないモノの閲覧が一部なりと出来てしまった誠の純粋な力から出来た私なら。

「突入と脱出の手段は確保済み。場所も構造も把握した。あ  
とは、外堀埋めとこちらの準備が終わり次第…」

「殴り込み、か」

私の言葉尻は藤堂会長に引き取られた。

「はい。予定している戦力としては私と聖奏から二人、あとは各校一人の六人くらいのつもりです。できればその倍用意したかったんですけども火遊び対策もあるので。」

「そんな少数でいいの？」

有沢会長が思わずと言った風で聞いてきた。

答えは

「少数でいいように仕込むんです。襲撃の時期としては向こうの警戒が緩み始めた頃を狙います。それまで、土日は私の家に拘束になるかもしれませんが」

「なら、有望株を差し出しとくのが上策かね。第六高<sup>ロウ</sup>は一年の白澄が立候補してるから決まりだけど」

「…そうですね、次の週末に一度招集をかけたのでそれまでに決めてください。土曜日の十二時にここ聖奏学園で一回目の顔合わせをしたいと思います」

「了解」

「それでは今日の所は解散です。また、対自衛隊の監視網が完成したらそれ関係の連絡をします」

『お疲れ様でした』と会議を締め轉移の実体験をしてもらうために各校の生徒会室に空間を繋ぐ。

実際に学校まで戻る距離が零というのを体験してもらえば不安は無い筈。

効果のほどは十分だったらしく空間の接続を切る時に向こう側から『殴り込みに行く役を決めるぞ』という旨の聲がしていた。

「う、うー」

「あー」

「ふしゅー」

「ち、知恵熱が…」

「うわあ…死屍累々」

それが翌週の土曜日の我が家の光景だった。

一番面倒な許可許諾の類を一通り終えてしまえばあとは生徒会は途中途中で出てきた追加の許可を出すだけになるので大分楽になる。

それ故に、突入部隊となる一年生を藤谷<sup>わがや</sup>家で魔術師としての勉強会を顔合わせがてらに開いた。

参加者は遥<sup>いけにえ</sup>と第六高校の白澄さん、第四高校の結城愛衣さん、第三高校の七瀬純くん。

それぞれの学校の会長が選んだ面々なんだけど…見事に全員が頭から煙を吹いてそうなくらいな状態になっていた。

魔術師じゃないから参加者ではなくお手伝いをお願いしてある楓の感想はそんな光景故である。

「…と、まあ術式を全部覚えようとするところなるから」

私がそれぞれの前に何処にでも売ってる豆ノートを置いてゆく。

「…ナニコレ」

「ん？カンニング用。覚えるの大変でしょ？」

それはもう、午前中をかけて結界と攻撃　あの符で発動させられる術を暗記させようとした時に判り切ってるので誰もがうんうんと頷いた。

「だから、これでゆっくり時間をかけて　使って覚えてね」

最後の『使って覚えて』の部分で一斉に死んだ魚みたいな目になる皆。

「あのねえ…せめて防御くらいはカンペなしでやれないとキツイよ？攻撃と防御を同時にやる必要がある場合もあるんだから。こんな感じに」

咄嗟に右側に防壁を展開。

すると丁度そこに楓の焰弾が命中。同時に反撃用の魔力弾をいくつか生成、炎が消えると同時に打ち出して当たる直前に魔力に戻す。

「おおー」

上がる歓声

「まあ、身体で覚えた方が早いかな。昼休みを挟んだら聖奏の屋上で実戦訓練と行きましようか」

丁度その時だった。

「空間湾曲を確認。位相変位結界で包囲　できました！」  
ツバキが突然何かに反応をした。

「……どうやら、幻魔がツバキの構成した監視網に引っ掛かったらしい。結界まで張れているのは『ツバキの手下』となるスズメやらカラスやらの姿をした使い魔が現場に急行しているから。結界は張れるけど、それ以外は監視くらいしかできないし人の姿も取らない、監視と隔離が仕事。」

「場所は？」

「聖奏学園から南に一キロほど」

「わかった。ツバキはここで待機。みんな、いい練習台が湧いて来たよ。」

『手加減無用ね』

にっこりと笑いながら言っつて、ツバキの僕が作り出した結界へと直通路を開いた。

そして、その直通路は（相手にとっての）地獄への直通路でもあったみたいで……

遙の豪雨のような魔力弾が降り注ぎ白澄さんの極大の雷撃が飛び、  
…逃げようとする敵は七瀬くんの拘束で身動きが取れず…オマケに  
結城さんの局所結界によって囲まれてるから逃げ場のない雷撃や魔  
力弾が敵を繰り返し蹂躪する。

そんな状況がモノの五分で出来上がっていた。

「あるえ？」

午前中のダメさ具合がすっかりと影を潜めている。

「何？この凶悪なコンボは」

具体的に言えば

- 1．遙の豪雨魔力弾で足止め
- 2．七瀬くんのバインドで固定
- 3．結城さんの結界で正面と上以外を壁にする
- 4．白澄さんの雷撃が直撃

見た目が某RPGのラスボスチックな魔王っぽい感じなのにカンペ  
片手の四人組に凶悪なコンボ決められてほぼ一撃というのがなんと  
も哀愁を誘う。

「うーん、何というか…書き方間違えたかなあ…」

国語方式、つまり右側を綴じてある状態を表紙にするノートの作り方したから、数学とかの左綴じ方式でめくると『一番後ろ』からみることになるんだよね。

「まあ、いい実戦訓練か」

それに、ある意味では最終目的の第一段階終了って事になるし。

見ている先では倒せたと喜ぶ四人。

「まあ、ツメは甘いかな」

喜んでる四人の先でぐったりと地に伏せていた魔王つぼいのがなにやら一矢報いようとしている。

どうやら、止めには足りなかった様子。

「ま、それは今後の課題かな」

そう楓と頷きあいながら止めを刺す。

音もなく魔力弾の連打を食らった魔王モドキはそのまま塵となって消え…

「マスター、結界が外側から…」

「結界破り？」

ツバキが少々慌てながら言ってきた。

数ある結界系でも単純な認識障害や人払いに比べて位相変位は難易度が高い分効果も破るのに必要な労力も大きい。

まあ、ある程度の魔力があれば力技で結界破りは出来るんだけど…

「なら、もう一枚壁を張つといて、破られるまでの間に遁走と行き  
ますか。おーい、みんな逃げるよー」

一個、監視用のサーチャーを置いて空間接続で逃げる。

破壊された結界に飛び込んできたのは迷彩服姿の市街地としては一番不自然かつ不審な集団だった。

先頭の一人の手には

\* \* \*

「杭打ち機？」  
バイルパンカー

「どつやらコレが結界破りの為の道具みたいだね」

「それにしてもなんて趣味な…」

「浪漫装備だな」

自衛隊部隊の結界破りから撤収までの一部始終を記録した探査機サーチャーの映像を緊急招集した会長たちに見せたところの感想はそんな感じだった。

藤堂会長と藤澤会長はやや肯定的な目をしてるけど、吉川会長と有沢会長は『訳分からん』と言いたげ。

「とにかく、要注意ということで幻魔との戦闘の際は数枚の障壁を張っておくようにしてください。執行部の場合は複数枚の結界符を消費の増加分は増産して追加供給します。結界破りの性能は化学部に再現を依頼してあるのでそれが完成し次第データを取って結果を知らせます。」

「…ところで、預けた白澄がなんか魔改造されてるんだけど…何やったの?」

「そつちも?ウチの結城もよ」

「ウチの七瀬もだ。」

「えっと…暗記必須の術式をいくつか叩きこんであとはカンペ見ながら行けるようにしたただけなんですけど…」

魔改造というより本人の才能が開花したと言っべきなのでは?

「暗記必須って…どんな術式?」

モノは試しと言わんばかりに有沢会長が聞いてきた

「えっと、瞬間的な防壁の展開とあとは単発の魔力弾ですかね。不意打ち用と不意打ち対策用の」

当然、それだけじゃ勝てないのでそれぞれの得意分野で色々仕込む予定だけだ。

「……………今度からあなたのことバグキャラメイカーって呼ばせてもらおうわ」

「？」

それから何故か『新米の育成法』に話題がシフトしたのだけど、

「…白澄……………普段は優しくしてあげないと」ホロリ

「だから、『先輩ですごく優しいです』なんて言い出したのか」ホロリ

「…悪いことをしてしまったなあ…」ホロリ

私がした指導法に対して出たのが受講者に対する同情って…

そんなに厳しいことしたかなあ…

(注：できないと直撃をもらおうという状況で練習させるのはかなり厳しい実戦型指導です)

「まあ、一人一人が一人軍団ワンマンアーミーなら行動の幅も広がるからいいのでは？」

ただ一人、藤澤会長だけはやや肯定的な事を言うけれども一斉に吉川会長、有沢会長、藤堂会長の攻撃にさらされ沈黙を余儀なくされた。

「ともかく！計画は順調に進行中です。実施直前にまた声をかけますからそれまでは各校で現状通りの対応をお願いします」

報告事項も終わったのでこの場では一度解散にする。

「ところで、なんで態々集合をかけるんだ？今まで通りオンラインでもいいんじゃないか？」

「相手は自衛隊ですから、そこらへんは慎重に。この中の誰かが漏らさない限り秘密が守れる手段の方がいいんです。」

「なるほど」

文化祭と、作戦決行を控えたある夕方の事だった。

\* \* \*

「陸上自衛隊 特殊災害対応隊陸斗支隊駐屯地 支隊長執務室」

「くそっ！」

「そっいきり立つな、柿沼二尉」

「しかし村井支隊長…！」

そこでは二人の男が半ば睨みあうような状態でいた。

片や憤怒の表情を、片や呆れているような表情を浮かべている。

それもそのはずだろう。

柿沼と呼ばれた男は先日、『顧問からの提言』により出撃した部隊

を率いて『結界』と呼ばれていた空間閉鎖を用意された対結界兵装で破壊して侵入する、という初出勤を指揮していた。

だが、その結果は無駄に結界だけ破壊したにとどまり戦果は全く出なかった。

その後もその繰り返しであり、その結界が何故発生しているのかすら不明な状態なのだ。

「これは異常事態です！すぐに増員の要請を！」

「…我々は設立されて間もないんだ。部隊の練度も低い。今のうちに…『設立したばかりだから』という免罪符が使えるうちに失敗をして経験を積んだ方がいい」

柿沼の怒声に村井は溜め息混じりに諭すように言う。

「何を悠長な！」

だが、それは柿沼の憤怒に燃料を注ぐだけに終わる。

「やはり、何者かが妨害を…」

「柿沼二尉」

おそらく、成果が出ていないことを焦っているのであろうと思う村井は柿沼に言う

『憶測で物事を決めつけるな』と。

「そつだ！『協会』から提供された資料に『連合』なる組織がこの

あたりを根拠地としているという情報がありました。おそらくその連中が……」

妨害しているのは、一体どちらなのかねえ

そんな感想を抱きながらも柿沼の演説を聞き流す村井。

「早急に『連合』の制圧を！でないと我々は本来の任務を果たせません！」

「……仮に、妨害されているとしてだ。我々に一度も尻尾を掴ませない相手にどうするつもりだ？」

村井は『i f』の話を持ちだす。

もしそうだとしても相手の方が数枚以上上手なのだから。

だが、村井は知らない。

「策はあります。確実に失敗の無い策です」

柿沼には、『協会』から村井に知らされていない情報が与えられている事を。

「えくちっ」

行きなり鼻がムズムズしてきて私はくしゃみをひとつ。

「えくちっ」

も一つ。

「あれ？ ゆーな、風邪？」

「というより、二回だから誰かに噂されてるのかもね」

そんな何気ない会話をしている私たちだけど、実際はかなりの緊張感の中だった。

まあ、主に緊張しているのはこの『悪だくみ』に巻き込まれる形になった白澄さんと結城さんと七瀬くんだけど。

そういう意味では、ちょうどほぐす原因になったくしゃみは少々恥ずかしいけどいいタイミングだった。

「とりあえずは大丈夫。…それじゃあ、確認するよ。」

私は生徒会室に供えられているホワイトボードに簡単な作戦手順を書いている。

「第一段階として、まず支部長室…この最深部の部屋を占拠。」

簡単に書いた図の一番底に『占拠』の文字を書き入れる。

「次に、この部屋を結界で隔離しておそらくここにいる支部長を捕縛。何をしてでも『隠し場所』を吐かせたら」

「その場所に突入して奪還後即脱出…でしょ」

私の説明に楓が乗って来る。

「まあ、その前に一暴れしてもいいけどね」

白澄さんにリミッター無しで雷撃を一発撃ってもらえばそれで十分なもするけど。

「…それじゃあ、点呼。」

私は気分を出す為だけにクリップボードを片手に持ち…

「楓」「準備いいわよ」

「遙」「ええ」

「白澄さん」「はい」

「結城さん」「が、頑張るよ」

「七瀬くん」「…あの地獄を超えたんだから大丈夫だ」

よし全員揃って

「吉川信乃」「ま、ひと肌脱ぎますか」

「有沢佐織」「後輩の手前、無様なかつこは見せられないね」

「藤堂誠一」「みんな、手伝ってくれてありがとうな」「いえい

え」

「藤澤惣一」「頼むぞ、ヒスイ」「ええ」

え？

「ななな、なんているんですか！佐伯会長！」

思わず、叫んでしまった

佐伯先輩に、吉川会長、有沢会長。藤堂会長はどういう訳が数柱の精霊と一緒にいる。

そして藤澤会長は対魔術防護服に愛用の銃と日本刀、そして傍らにはヒスイの姿。

「今の会長はあなたでしょう。御剣会長。 私たちもちよっと手を貸してあげようと思ってね。」

「元々、生徒会長を戦力には数えないからね」

「指揮系統はちゃんと確保してある。安心しろ」

「まあ、後輩へのいい訓練だな」

と、やる気満々らしい。

「それに、飛び入り参加は私たちだけじゃないわよ」

「え？」

佐伯先輩が指さす方向を見て、顎が外れそうになった。

「お、お母さん!？」

「はあい」

現れたのは母さん。

マナとツバキを引き連れ、姿は堂々たるもので二十年ほど前の生徒会を仕切っていた生徒会長というのも頷ける。

「『魔法使い』である現会長が直々に育てた直属に会長が六人、十分な戦力なんじゃない？」

「むしろ、戦争起こせるレベルなんじゃない？ ゆーな一人でも」  
「ですね」

『そこまで人間止めてないもん』とは流石に言いきれなかった。

「さて、ゆーなちゃん。総司令官の合図が無いと締まらないわよ」

「…はい。 それではみなさん、喧嘩を売って来た連中に、どれだけバカな真似をしたのか教えてあげましょう。」

あの憎たらしい支部長の顔を嫌々ながらも思い浮かべながらすつ…と指で宙を切る。

「 突入！」

まず最初に飛び込み、それに続いてくる皆。

着地点は思い浮かべていた支部長の顔面と決めていた。

…待っててよ、』  
』

そして、多少距離がある為に完全につなげ切れなかった為に発生した『亜空間』を抜けた先には…

思い描いた通り支部長の顔面があったので思いっきり足蹴にしてやった。

ちよつとすつきりした。

「さて、拷問おはなタイムと行きましようか」

体重の軽さと手加減の恩恵で鼻血だけで済んでいる支部長に「っ」と笑いかける。

その手には愛用の刀。  
幾多の幻魔を斬殺してきた刀だ。切れ味に不足は無い。

そんな私の背後で部屋を隔離すべく結界の多重展開をするツバキの姿が目にとまったのか、支部長の顔色が一気に悪くなった。

支部長が私たちに必要な情報を吐くまで、五分と掛からなかった。

\* \* \*

支部長室の執務機の背後の壁にあった隠し階段から進む事数十分。

随分と長い螺旋階段を下りていくがまだ下が見える様子が無い。

ちなみに、支部長室に各種結界を張った上で扉を無くしておいたので追撃は今しばらく無理だろう。

支部長は密閉された支部長室で放置だ。

まあ放心してるから助けを求めることすら難しいだろうけど。

それに、仮に呼びかけることが出来てもすぐに救援を送れる辺りにある戦力保有組織は私たちの側だから応じないだろう。  
根回しに抜かりはない。

「随分と長いわね」

「ええ」

「それにしても、あの地獄の意味って…」

「ああ、アレは正面突破の時の為の保険」

雑談を交わしつつ、階段をただ降りる。

最下部に着いたのはその十分ほど後のことだった。

一番下は扉が一つあるだけの空間だった。

「扉の向こうには？」

「探査してみる　あんまり大きくない魔力が一つ。あと、ごく

小さいのが一つ」

支援・補助型として二週間で育て上げた結城さんの腕は十分信用に足る。

「白澄さん、七瀬くん。何かあったら即援護を。楓、遙、行くよ」

めいめいの了承を確認して…私はドアを蹴り破った。

「なッ！？きs　ふべっ」

その部屋にいた男を問答無用で殴り飛ばす。

そのまま壁の側まで飛ばされた男はぐったりとしている。だが…

「藤堂会長、藤澤会長、拘束お願いします。出来れば、間接も外せるだけ外してください。無理なら両腕と両足の骨を折ってもらえると助かります」

その男は、私にとって『誠』を壊した仇敵なのだ。命を取らないだけ、マシと思っただけ。

「佐伯先輩、ここの指揮をお願いします。追撃があったらここで食い止めておいてください」

「了解よ。会長」

それから、楓と遙、それに母さんの三人を連れてさらに奥へ。

予想が正しければ……そこは……

開けた扉の先は、清潔な白い監獄と、それを見張る研究室だった。

「酷い……」

「こんなのって……」

「悪魔の所業ね……」

口ぐちにそんな事を言うのも、無理は無い。

その無菌室であろう白い部屋への扉の横にある棚には幾つもの密閉

瓶が置かれていた。

その中には小さな何かが漂っている。

その瓶詰にされている標本は一般に胎児と呼ばれる

新たな命

となるべき存在。

本来、神聖なモノである筈のソレは今やただの研究資料でしか標本ではない。

それが、誰のものなのかもその場にいる全員がなんとなくではあるが理解していた。

「…どうやら受精卵を胎盤ごと引き剥がして人工子宮で育てようとしては失敗したみたい」

磨き上げられた硝子に写った私の顔は 表情が全く無かった。

「なに ぐあっ!?!」

無菌室らしき部屋のとなりから出てきた男がいたが速攻で魔力弾を撃ち込んで失神させる。

魔力を全て衝撃波に変換すれば殺さずに気絶で済ませることもできるが一步間違えば死に兼ねない事には変わりはない。

私は男が出てきた部屋を覗く。

そこは、部屋の中央になにやらカプセルらしきものがある部屋だった。

「 楓、遙。二人でこっちの部屋の調査をお願いできる? 」

「……………わかった。行くよ、遥。」  
「うん…」

二人がそっちの部屋に入って行くのを見届けたところで

「唯奈ちゃん」

「はい。行きます」

私と母さんは、その純白の監禁部屋へと足を踏み入れた。

そこには、生命維持装置に繋がれたベッドが一つあるだけだった。

ぴっ…ぴっ…ぴっ…ぴっ…

心電図が定期的な拍動を電子音で追う。

その拍子は生命体としての生存の証拠。

私はようやく表情を思い出せた気がした。

「遅くなって、ゴメン…迎えに、来たよ」

虚ろな瞳は虚空を見つめ、その焦点は全く合っていない。

完全に、心が死んでしまっている。

そう、私には見えた。

「さ、一緒に帰ろう……みんなで、迎えに来たんだよ。だから……、だから……」

感情の暴走を止められなくて、ボロボロと涙がこぼれてくる。

『もう、大丈夫だよ』

その言葉は、どうしても口に出せなかった。

「お母さん、このベッドごと『家』に送るから電源のつなぎ直し、お願い」

幸い、ベッドに全ての機能を集約させバッテリー式にもなっているらしいので送る間は大丈夫なはず。

「…ええ。唯奈は？」

「みんなと合流して、学校に送り届けてから帰るから」

「…それじゃあ、待ってるわね。一緒に」

「…うん」

母さんがベッドに寄り添ったのを確認したところで、我が家を想い浮かべて接続。ベッドごと母さんを送り返す。

「ゆーな、隣の部屋…人工子宮の設置場所みたいだったんだけど…」  
続きは判る。

『全部だめだった。』

「判った。出入口の皆の所に合流するよ」

ぐいつ、と袖で涙を拭う。

これから、治療がまってるんだから、こんなところで時間を食ってられない。

「いくよ、楓。遙。」

二人はついて来てくれる。

そう確信して私は歩みを進める。

協力してくれる、皆の待つところへ。

階段を下った扉の前は死屍累々の惨状になっていた。

「へへ、ちよろいちよろい」

「まあ、御剣会長の特訓に比べればねえ」

「それでも今だに一勝できないんだから、規格外の極みよね」

私が鍛えた三人がほぼ主体で追撃隊が壊滅状態に追い込まれていた。

「いやー、ホントにすさまじい成長だなあ」

「なんか、指導者としては自信無くすわね」

「まあ、嬉しい事じゃないか。後輩が立派に成長してくれるのは  
会長たちも苦笑を浮かべている。

「みなさん、作戦は終了。目標も無事奪還しました。これから脱出  
します」

来た時と同じように、いつもの屋上をイメージして空間を切る。

「マナ、ツバキは私と周辺警戒。」

こくり、と頷いた二人と一緒に壁際の空間の裂け目を背中にする。

「先戻るけど…絶対に戻って来なさいよ」

遙と楓も、会長たちが続いて学校へと帰還してゆく。

自分が最後に、と渋るマナとツバキを強引に空間の裂け目に押し込んだ私は、最後の仕上げをする。

「全て…灰燼に帰せ」

研究室になっていた部屋を、完全に吹き飛ばす。

その爆発は威力を逃がしきることが出来ずに地下室を揺らす。

その揺れは地下空洞であるその空間に多量の土砂を流し込み、土砂によって出来たスペースによって生まれた不安定さに地下施設群は晒される。

「今回は、この程度で勘弁してあげる。」

最下部が土砂で埋まる直前、私も裂け目に飛び込んで入り口を閉じる。

『ようやく、取り戻せた』

その思いで、胸がいつぱいだった。

#104 (後書き)

はい、『唯奈、逆襲しかえしするの巻』でした。

そして次話からは『あの人』も帰って来る!?

そして柿沼の持つ『秘策』とは？

……なんとなく、フラグで展開読めるかもしれませんがと言わな  
いが華ですからね？

# 1 1 1 (前書き)

更新です。

それにしても、地震凄かったですね。

ウチはこれと言った被害も無くガラスのグラスが一つと紙粘土製の人形の裾が割れただけで済みましたが…

被災した方にはこの場を借りてお見舞い申し上げます。

『もう、二度と目覚めることなんてある訳ない』

そう思っていた『私』は『意識が覚醒へと向かう』という当たり前のモノながら懐かしさを覚える感覚に驚いた。

『私』の 藤谷誠という人格（ほんざい）はあの時、確かに消えた（しんだ）筈なのに。

ふと、手をぎゅっと握られている『感覚』に気付く。

『私』の手を握るその手はとても小さく、絶対に離すまいと言わんばかり。

『身体を動かす』という、誰しも当たり前に出る…けれども久しくやっていなかった事に四苦八苦しつても意識が覚醒に向かってゆく。

最初に視界に写る天井は、見慣れた、懐かしい我が家の天井だった。

\* \* \*

「本当ですか!？」

楓は『その知らせ』に思わず携帯電話を取り落としそうになった。

『ええ。本当よ。』

「よかつたあ…」

『救出した彼女が目を覚ました』という知らせに楓は心から喜んで  
いた。

『まだ本調子じゃないから身動きは取れないみたいだけど、話す分  
には問題ないみたいよ』

「はい！これから行きます！ 遥！」

「ん 今、こつちケリつけるから」

昨日の夜に襲撃をしたとはいえ、昼間は文化祭の準備に追われる身  
だが二人は準備を放り出す支度を整える。

『それじゃあ、待ってるわね』

「はいっ！」

それを合図に和葉からの電話は切れ、『つーっー』という通話終了  
を知らせる音だけが響く。

「終わったよ」

「それじゃ、急ぎましょ」

楓と遥は共に仕事をしていた啓作たちに一声かけて許可を貰ってか  
ら、長らく待ち望んでいた瞬間を迎えるべく走り出した。

\* \* \*

「大分、疲れてたみたいね。」

「そう、みたいですわね」

和葉は、目を覚ましたばかりの『彼女』に気さくに話しかけていた。それに対する反応は、『彼女』の腿を枕に眠る唯奈の頭を撫でる手と同じくどこかぎこちない。

「唯奈<sup>1561</sup>から話は聞いてるわ。『私たちの知ってる誠はもういない』。同一人物だけど別人だったって」

ハッ、とした様子で俯き気味だった顔をあげる『彼女』

「そこでなんだけど、この子の『お姉ちゃん』になる気はある？」

「え？」

その間にぼかん、と呆けたような顔をした。

「存外甘えん坊だね。それに奈緒ちゃんが作った設定のせいで『御剣唯奈の姉』って人物が必要なのよ」

『どう？』と問う和葉だが、『彼女』からすれば一大決心の時だった。

『彼女』には『自分は藤谷誠であった存在で、既に死んだ存在であ

る』という自覚がある。

精神が、人格が死んでも身体が生きている限り『人格が死んだ』という事実は記憶されている故に。

『それを捨てる気はあるか?』と問われているのだから。

自問自答する。

『私』は

『彼女』は視線を眠る唯奈へと向ける。

自分を助け出す為にひと騒ぎを起こした元凶は今をあどけない寝顔を晒し、『彼女』にかけられた布団をぎゅっと握りしめている。

『私は、この子の姉になっていいのだろうか』

この、御剣唯奈という少女がどんな存在なのか『彼女』は誰よりも理解している。

『唯奈』が『誠から切り離された異能者であり女である部分』なら『彼女』は『精神崩壊を起こした誠という人格の後に主人格となった存在』なのだから。

「…私なんかで、いいんでしょうか」

「アナタだから、よ」

そう言われて『彼女』はズルイと思った。

そんな言われ方したら、拒絶なんてできないじゃないか。

今の私は『どこかの誰か』でしかないのだから…

「その顔を見れば、答えは聞くまでもなさそうね。」

声に反応して顔をあげたら満足そうな顔の和葉と『彼女』の目が合った。

「アナタと唯奈ちゃんの保護者は私だから、遠慮なく『お母さん』って呼んでね、琴音ちゃん」

実際のところは書類上『御剣唯奈』の保護責任者でしかないが和葉が奈緒に頼めばあつという間だろう。

「ことね？」

聞き覚えのない名詞に、思わず聞き返す。

「御剣唯奈の姉の、アナタの名前よ。」

それは、唯奈に頼まれて和葉が考えた『娘の名前』だった。

「気に入らなければ、自分でつけ直してもいいわ。これから奈緒ち

やんをお願いする訳だから

「そんなわけじゃ……」

慌てて琴音は手を振る。

「それじゃあ、奈緒ちゃんをお願いしてくるわ。唯奈ちゃんのこと  
しっかりね、琴音ちゃん」

「はい、お母さん」

和葉は連絡すべく琴音の寝かされている部屋を後にすると、入れ替わりで一匹の黒ネコが入って来た。

その黒ネコ（マナ）は部屋の中に着地するや否や少女の姿に変わる。  
じっと、見つめるマナ。

対して琴音は

「えっと………はじめまして？」

その瞬間マナの表情は落胆に彩られ

「それとも……ただいま？」

次の一言で歓喜に彩られた。

涙を流しながら抱きついてきたマナをあやしつつ琴音は言う。

「私はもう『誠』じゃない。

けど、ちゃんと連れて帰って来

たよ」

その返事は、一層大きくなった泣き声で帰って来た。

それは別れを嘆く涙なのか、帰還を喜ぶ涙なのか……  
琴音には判らなかった。

ただ、優しく抱いてあげるだけ。

それが、今の彼女に出来る精一杯だった。

\* \* \*

「興奮してるかもしれないけど、ちょっと静かにお願いね」

大急ぎでやってきた楓と遥を迎えた和葉が開口一番に行ったのはそんな注意だった。

訳も判らず二人はとりあえず頷いて、和葉に案内された。

何を言おうか、何から言おうか。

そう思っていた二人だけでも、襖を開けて目に飛び込んできた光景に全てが押し流されてしまった。

優しい表情であどけない寝顔の少女の頭を撫でる『彼女』は正に母親の様であった。

ふと、撫でる手が止まり顔をあげた『彼女』と楓たちの視線が交差する。

「あ」

「楓、それに遙」

名前を呼ばれた二人はびくっ、と過剰に反応を返す。

彼女 琴音は続ける。

「ただいま。私はもう『誠』じゃないけど…ちゃんと連れて帰って来たよ」

その言葉を聞いて、二人は色々と言おうとしていたことがあったけど、どどつでもよくなってしまった。

二人の想い人は『彼女』となってしまうけど、ちゃんと帰って来たのだから。

だから、こつ言つことにした。

「お帰り」

楓が浮かべた笑顔は涙でちょっと歪んでしまっていた。

「「琴音？」」

数分後、すっかり落ち着いた二人は色々話をしていた。

そして上がった『新しい名前』が現在の話題になっている。

「ええ、御剣琴音。それが、新しい私の名前」

『琴音』という名前は『誠』から『こと』という音を貰って作られているのだが、それはつけた張本人である和葉と相談に乗った唯奈のみの知ることである。

「付け足すと、楓ちゃんたちの一つ上の学年になる予定よ」

「あ、和葉さん」

用が済んだ和葉が加わり一同、ぐっすりと眠る唯奈に視線を向ける。

「ホント、よく寝てますね」

遙が面白がって頬をつつくが全くと言っていいほど反応を返さない。

時折、むにゃむにゃと言う程度だ。

「学年が一つ上ってことは学校に？」

一方で楓は先ほど言っていた事についての質問を出す

「文化祭が終わった頃に、聖奏学園の二年生として、ね。」

『さつき、設定作りをお願いしてきたわ』とは和葉の談。

「ところで、みんなは文化祭で何をするのかな？」

「えっと、クラスの方ですよ？喫茶店の予定です。」

「割と本格的にやる予定なんですよ。」

「へえ…楽しみね」

楓と遥の答えに和葉は関心した風な声をあげる。

「是非一緒に、来てくださいよ」

「それじゃあ、あの一週間ちょっとで動けるようにならなくちゃね」

「ふふ、そうですね。これは頑張らないと」

『長いこと身動きがとれなかった』

『琴音として身体を動かしたことがない』

『身体が違う』

これらの要因が琴音の自由を奪っていたがリハビリに精を出す理由が出来たのだ。

動き回れるように、人並みになるまでそうは時間は掛からないだろ

う。

和んでいたら『準備手伝え』というまったくもってありがたくないクラスメイトから送られてきたメールが二人に届き楓と遙は慌てる。最近、生徒会の方が忙しいからとクラスの方を大分放置してしまっていることに気付いた故に。

おまけに主戦力となる生徒会長殿は御休み中となれば…

「大変ね」

「月並みだけど、頑張ってね」

二人に『楽しみにしてる』と激励なのかハードルをあげているだけなのか判らない声援を背に二人は一路学校に急いだ。

ただ、その速度は行きの半分程度だったけれども。

当然のことながら二人を迎えた第一声は『遅い！』だった。

# 1 1 1 (後書き)

明日行く予定だったe b！フェスも当然中止になりました。

なので執筆&教習所（但し外出禁止が出なければ）に回す予定です。

バカテスイベント初参加だったんで残念だったんですが、あれだけの天災の後じゃ仕方ないですよ。

「へー。そっか」

「はい。それなんで、文化祭が終わったら先輩たちの学年に合流するそうです」

週明けの文化祭まで残り一週間と僅かとなったその日、楓は生徒会室でのんびりと梨紗と話していた。

「あれ、クラスの準備の方はいいの？確か遙ちゃんと唯奈ちゃんは準備で今日は遅くなるって…」

「あ、私の担当部署はもう終わったんです。」

と、いうのも最初は生徒会で多忙を極めていて後半戦序盤は『色々あつて疲れていたりしたのでお休み中。』

そんなふうにくラスの準備の方に不参加が続いていた唯奈がただいま教室で絶賛拘束中なのだ。

そして、寝ていたりするとただのちびっ娘でしかない唯奈でも真面目に働けば超絶高スペックなリーダー気質。

あつという間にクラスを主導し、ただでさえ『本格的』と銘打つほどの力の入れようだったのを『的』の一字を抜かせるレベルにまで押し上げた。

その結果、自分の部署が終わってしまえば楓の様に余暇が与えられる。

ちなみに蛇足だが遙は自分の所属する担当部署が現在進行中で扱使

われているところ。

唯奈自身も抜けることができない状態だ。

「へえ……」

「それで、和葉おばさまと一緒に連れてくるって」

「それは楽しみね。何組になるのやら」

本気で『楽しみ』にしている梨紗だが、楓にはなんとなくで何処のクラスに入るのか予想はついていた。

選択肢は凜の居る二年一組か、梨紗の居る二年三組か、紗枝の居る二年四組。

そのうちでおそらく、二年三組だろう。と

理由は 縦割りチーム分け行事を行った時、唯奈の居る一年三組と同じグループを組むことになるから。

そんな我儘は普通通らないが、行っているのが生徒会長で、対象の生徒は（記録上）今まで静養していたのだから。きつと、通ってしまっだろう。

「もし、同じクラスになったらしっかり守ってあげてくださいよ。ゴシツプに飢えた女子エサからけだもの」

「一緒になったらね」

あはは、と笑ってからふと気付く。

「そういえば、ツバキは？」

最近はおペレーター役として認識されつつあるツバキの姿が無い。ついでに言うと、マナも居ないのだがそれはいつもの事なので誰も気にしない。

「ツバキはリハビリのお手伝い中だそうです。代わりに、この子が居ますから」

そう言つて楓は一般役員だった頃の唯奈の席（今は空席）に置いてあつた毛玉を手取る。

点目に太いまゆ毛というなんともコミカルな見た目なソレだが

「何それ」

「ツバキが作った使い魔の一体だそうです。他の使い魔からもらった情報を表示する役目の」

『へえ』と言いながら楓から毛玉を受け取る。  
観たまんまの柔らかい手触りに少し感動。

「この子のおかげでツバキもずっとここにいらなくても済むようになつたんですよ」

「うーん…ツバキのお茶、美味しいから素直に喜べない…」

世話焼きな性分のツバキは生徒会室に居る時は大抵茶汲み坊主だった。

「誠譲りなんですよ。きつと」

そういえば、世話焼きだったなあ…と懐かしく想う楓は会長デスクの背後にある窓から空を見上げた。

青い空に、数えられる程度の白い雲。

そこに一筋の飛行機雲が線を描いている。

晴れ渡る空。

だが、楓はその静けさが嵐の前のそれにしか思えなかった。

\* \* \*

「狙撃班が柿沼の指示で動いている、だと！」

駐屯地の執務室で村井一尉は部下である相模一曹からの報告を受けて声を荒たげた。

「はい。なんでも特別顧問の助言を受けての特命だそうです…」

村井は顔をしかめた。

また、『特別顧問』か。

以前にも柿沼三尉は妨害を受けているからその原因である組織を叩きつぶすべきと論じてきた。

その際の根拠も『特別顧問』だった。

「…これは、ひと騒ぎ起こるかもしれないな。  
の行方を…」

相模、柿沼隊

丁度その時、支隊長室のドアがノックされて出そうとした指示が途切れる。

ガチャリ。

返答も待たずに開けられたドア。

入って来た男は一枚の書類を村井に突き付けた。

「ッ

」

それは、村井一尉の更迭と柿沼三尉の三佐昇進と部隊長就任の辞令だった。

「成る程。そういうことか」

それで、村井と相模は悟った。

この部隊は『特別顧問』とやらが公権力というオモチャを振り回したいが為に作られたのだと…

そして、その為には村井が部隊長では都合が悪いらしい。

「相模、後は頼む」

引き継ぎの資料をまとめに執務室から一度出る時、村井は相模に耳打ちしていった。

幸い、人事部の男には聞こえていない様子だった。

\* \* \*

柿沼は興奮で我を忘れそうだった。

自分の手で『特別顧問』からの特命を果たす事ができるのだ。

興奮しない方がおかしいだろう と柿沼本人は想っている。

『結界』と呼ばれる謎の技術だがそれを突破する手段も『特別顧問』から与えられている。

柿沼本人としてはそんな訳の分からないモノを認める気は無いがそれが自分の出世に使えるのなら使ってやるつという心意気だ。

「隊長、『空間湾曲』を確認しました」

「よし、その中に全ての元凶がいる。各員、我々の責務を果たすぞ。結界破碎杭、用意！」

「結界破碎杭、用才意」

「放て！」

ずがん！

轟音を立てて何も無い筈の場所を杭が打つ。

「第二射、放て！」

ずがん！

傍から見れば奇妙な集団だろう。

だが、彼らは至って真面目にパイルバンカーを連射し続ける。

六機の結界破砕杭発射装置が装填されている六発分の炸薬を使いきった時、展開されていた『不可視の壁』が破碎された。

その中に居たのはいずれも非武装な数人の少年少女。

「全員、動くな！」

逃走を試みようとしている様子だったが柿沼の一喝（というよりは全員に向けさせた銃）にその場で立ち止まる。

その中でもひとときわ小柄な少女が『特別顧問』の言っていた『標的』だ。

「狙撃班、用意」

インカムで命令を伝えるとすぐに射撃準備完了の報告が帰って来る。

「貴様を公務執行妨害並びに国家反逆罪で連行する。」

柿沼は勝利を確信してにやりと笑いを浮かべた。

「ちょっと、どついつ事！」

と傍らの少女が文句を言ってくるが部下に銃を向けさせ強引に黙らせた。

「来い」

『標的』の腕を掴んで引つ張ろうとした瞬間、少女が柿沼の腕を振り解く。

抵抗した。なら、次の手を使うまでだ。

「狙撃班、撃て」

柿沼の手を逃れた少女が、急に何かに殴られたかのように吹き飛ばす。「ッ!？」

少年少女たちの表情が一気に強張った。

それも当然だろう。

吹き飛んだ少女の制服の袖は穿たれた孔からこぼれ出す液体で紅く染まりつつあるのだから。

孔は左二の腕に空いていた

「抵抗するからこうなるのだ。

連れて行け」

部下に命令を下す。

が、部下が誰も動かない。

「どうした！命令を」

何をしているんだと部下の方を振り返つたら、S & amp ; WM 3  
7 : 警察用の拳銃の銃口と目が合った。

その背後には抵抗どころか警察官と一緒に成つて柿沼に小銃を向けている者までいる。

「銃刀法違反、並びに殺人未遂の現行犯で逮捕します。」

先頭に立つて柿沼に銃を突き付ける女性警官が宣告する。

「く…狙撃班、撃てるか？」

インカムで問うが返答は無い。

「狙撃兵はこれで全部か」

「ああ。そうみたいだな。しかし…ここまで接近戦に弱いとはな」  
それどころか制圧された様子が聞こえてくる。

いくら全能感に浸っていても狙撃班は既に制圧され三十以上の銃口  
を前にまだ浸っていられるほど柿沼の神経は太くは無かった。

「唯奈が撃たれた!？」

その知らせを貰った時、琴音は思わず駆け出そうとしてバランスを崩して倒れそうになった。

「ああっ！琴音さん、無理しちゃダメです。まだ歩くのがやっとなの…」

ツバキが支えに入って倒れるのは間違え、手を借りて直立状態に戻る。

「一体何処の誰に、何が起こって!？」

興奮状態の琴音。

「左腕で命に別状はないみたい。詳しいことは聞いてないけど相手は自衛隊だったみたい。ほら、この間来た」

知らせに来たマナが説明するが琴音にいったいどれだけが理解できているのだろうか不安が残る。

「とにかく、落ち着いてください」

「冷静よ!」

それでツバキは理解した。

確かに冷静なんだろう。きつと『冷静に怒り狂っている』のだと。

「今、和葉さんがお見舞いに行く準備をしてますから。琴音さんもね」

そう言われて怒りの炎はようやく鎮火間際にまで弱まった。

ただ、ここで重要なのは『弱まった』だけで何かきっかけがあれば再燃する事があり得るという点だ。

「ほら、着替えましょう。どんな服がいいですかね」

なんとか話を逸らして『お見舞いに行く』方向へと向かわせてなんとか怒りを鎮静化させようとするツバキだが内心『この特上シスコン』と毒づく。

「何か言った？」

「いえ、なにも」

シラを切ったけど、内心冷や汗ダラダラだった。

「琴音ちゃん、お見舞い行くけど来る？」

そう和葉が言いに来た時には琴音だけでなくツバキとマナも出かける用意が終わっていた。

\* \* \*

「…結局、上に握りつぶされたって事ですか」

私は病室のベッドの上で吉川会長をはじめとする連合首脳陣と一緒に

に赤城警部からの連絡を聞いていた。

「残念ながら、ね。今回の件は『実弾訓練中に誤って入りこんだ子供を誤射した』という風に処理されるそうよ」

赤城警部の顔は苦虫をかみつぶしたかのような渋面だった。

立件しようとして取り調べを始めようとした矢先の『捜査中止、即時釈放』命令だった。

「おまけに、この件で処罰されたのは無関係なのが判っている部長一人。実行犯はそのまま繰り上げで部隊長就任」

うわぁ…と声上がる。

「表沙汰にしちゃったから怪我を魔術で治す訳行かないし…」

「何というか、撃たれ損？」

はぁ…と誰からともなく溜め息が漏れる。

「とりあえず、これからも対自衛隊の備えは十分に」

その時、『バン』と盛大な音を立てて病室のドアが開けられた。

その音にびっくりして皆してその方向に視線を向ける。

現れたのは

「誰？」

「お姉ちゃん？」

「琴音さん」

現在絶賛リハビリ中でやっと歩けるようになってきた琴音お姉ちゃんでした。

「ああもう！無理に走ろうとしないでくださいよ！」

その後にリハビリに付き添っていたツバキも慌ててやって来る。

誰だか知っている私と楓と遙以外の面々はみんなして「ぼかーん」。

そんな中でお姉ちゃんは私のベッドの所までツバキに支えられながらやって来て…

ぎゅっ

「あ」

私を抱く手が震えていた。

「あらあら、みなさんお揃いで」

更にお母さんとマナ。

「ええと、こちらの方は？」

「ええと…」

有沢会長に尋ねられてどう説明するべきか…と戸惑う楓。

「私は御剣唯奈の保護者の遠野和葉です。向こうは唯奈の姉の御剣琴音」

「ついでに言うと和葉さんは藤谷くんの実の母で学生時代は聖奏学園で生徒会長を」

自己紹介を始めたお母さん。

楓の捕捉も加わって『ああ、なるほど』と納得の声上がる。

「心配したんだから…」

耳元で震えるような声。

しっかりと抱かれてるから顔は見えないけどきつと泣いてると思う。

「琴音さん、歩くのがやっとなのに走ろうとしたんですよ」

うらみがましく言うツバキだけど、それほどまで心配して駆け付けてくれた事が私にとっては嬉しい。

「心配してくれたのは嬉しいけど、無理しちゃだめだよ」

ツバキの『言ってやってくれ』と言わんばかりの視線に負けて私は言う。

『無理するな』と。

「無理して走ろうとして、転んで怪我でもされちゃったら…」

「唯奈の性格なら間違いなく自分を責めるんじゃないの？」

マナの合いの手も入り包囲網が完成。

「…そうだね」  
ツバキの顔がお姉ちゃんのその一言を聞いてやれやれ、と言わんばかりの顔になる。

「えーと、三人とも説明聞くからちよつと中断してもらえる？」

「あ、はい」

「あ、皆さんは解散で構わないです。報復は絶対にさせないでくださいね」

会長たちには用件は大体伝え終わったので（私が動けるようになるまでは第六の吉川会長に総指揮はお願いしたし）一度解散にしてもらい、お母さん達が赤城警部から事の顛末の説明を聞き始める。

525

その結論が…

「よし、滅ぼそう」

B Y 琴音お姉ちゃん

「だからそれはダメだつてば」

「補助なしじゃまともに歩けない人が無理言わないでくださいよ」

「シスコンもここまですれば逆に凄いね」

私とツバキとマナは即座にツッコミを入れる。

そんな中で一人黙っていたお母さんだけど…

「ダメよ、琴音ちゃん。」

やっぱり止めに……………

「その連中は私たちがPTAで騒ぎにして袋叩きにするんだから」

PTA、Parent-Teacher Association、

各学校における保護者と教師から成る会合。

実質的には親が学校に文句を言うための組織。

「協力、してもらえますよね。赤城さん」

「ええ。」

どうやら赤城警部（＝赤城晶の母）とウチのお母さんはどこかで接点があった様子。

「あとはOB会の方にも話を持っていかないと。さてさて、何処の阿呆か知らないけど、喧嘩売った相手がちよつと悪すぎたわねえ」

うふふふふ、ははははは、と笑うお母さんに私たちは

「相手、詰んだね」

「うん。コレは詰みだよ」

「逃げ場、残って無いだろうね」

「」愁傷様」

『ああ、怖い怖い』と棒読みで言わんばかりに黒い笑いをこぼす親たちを眺める。

「そういえば、退院はいつになりそう」

「もうすぐ。二、三日で退院できるって。」

「文化祭、近いですよね」

「うん。でも左腕にヒビ入ってるからギプス付きで退院になりそうなんだ」

「大変だね」

そんな会話をするのも、どこの悪の組織の幹部だよと言いたくなるくらいの親たちから目をそむけたいから。

みんなから、なんて言われるかなあ…

\* \* \*

文化祭前日のホームルームが終われば授業は無く全部会場準備に当てられている。

そんな日のホームルームで担任が突然

「えつと、ここ二、三日欠席してる御剣さんですが…入院していたそうです」

とんでもない事を言いだした。

楓と遙はその事情を知っているのであまり騒がないが周囲のクラスメイト達はざわめき始める。

『ええっ!?!』という驚愕の声はもちろん、『お見舞い行かないとね』とか『なんで今ごろ!』という声も混じっている。

「先日の自衛隊の誤射事件、あれで撃たれたのが御剣さんだそうです。」

その瞬間、クラスが凍りついたように楓は思えた。

「さ、幸いながら命に別条はなくて」

その雰囲気を押されてちょっと噛んだ先生の続きの言葉に皆の表情が和らぎ…

「今日も学校に来てますけど、絶対！絶対に無理させないでくださいよ」

「え！？」

丁度そのタイミングで教室のドアがノックされ入って来たのが…

「保健室に書類出してたので遅れました」

左腕をギプスで固められたままの唯奈だった。

クラスメイト達は、楓と遙も含めて思わず

「無理せず休め！」

声を合わせて、言っていた。

見事な団結力である。

「と、とにかく、明日から文化祭が始まるので準備をしっかりとや  
りましょう。」

「はい」

「御剣さんは絶対に何もさせないように！何かあったらすぐに取り  
押さえて保健室に連行してください。いいですね！」  
ちなみに、『保健室送り』というのは『早退させる』と同意義であ  
る。

「はいっ！」

まるで『ここは軍隊か』と思うほどの返事に唯奈はバツの悪そうな  
顔になったがその後

『何かやることない？』

『保健室』

『!?!? (びくっ)』

というループを何度も繰り返して、今までとは違う一面を見せてク  
ラスの皆を愉しませてくれた。

ちなみに唯奈は生徒会室への逃亡も試みたが生徒会室その他の施設  
は施錠されており侵入出来ずに楓と遥によって教室へ『そんなに保  
健室に行きたいの?』という問いかけをされながら連れ戻された。

なお、そのビクビクしている姿を見て多くの生徒が『なにこのかわ  
い生き物』と呟き、写真部が撮影した『怯えるちびっ娘会長』の  
写真はかなりの速度かつ高額で流通した。

「シフト表、出来た？」

「うん。OK」

だが、誰も唯奈にその『シフト表完成版』を見せることはなかった。

どうしてこうなった？

「はい、あーん」

状況を整理してみようと思う。

今日は文化祭初日。

朝、開会式で生徒会長挨拶を終わらせて（皆の目が微笑ましい物を見る目だったのはなんでだろう）『さて始動だ』と教室に戻って『着物＋割烹着（「一の三」という刺繍入り）』という一年三組の文化祭中のユニフォーム（料理上手が多かったから和食処を模擬店としてやる）に着替えた（当然、手伝ってもらった）。

そしたら『シフトにコマも入っていない』と言われ確認したら本当に入っていないで、入れてもらおうと思ったたら丁度そこにお姉ちゃん参上（当然、介助員同然のツバキも一緒）。

一般入場は始まっているからおかしくないけど、まだ準備中な一年三組に入り込んだお姉ちゃんは軽く自己紹介した後、『確認お願い』と出された煮物は何故か私が受け取るうとしたらお姉ちゃんが受け取り、冒頭の『はい、あーん』に繋がった。

「ほら、口開けて」

「あ、あー…む」

お姉ちゃんが差し出すかぼちゃの煮付けが口に運ばれて散々練習させて会得させた（何度泣かせたことか）程よい甘みと塩みが口の中

に広がる。

一方で周囲は『おお！』と歓声をあげていて、本気で恥ずかしい。ツバキはニコニコして見守ってるだけ。後で覚えてる。

「ん、これなら大丈夫じゃないのかな。」

評価はちゃんと言っけれど恥ずかしさに負けてちょっと俯き加減になっちゃった。

………実を言えばお姉ちゃんは退院したその日からこの調子なのだ。右手でも箸は使えるから自分で出来るのにその箸を取り上げられ「はい、あーん」と食べさせようとしてくる。

だから『強制帰宅』になる保健室送りはなんとしても避けたかった。

「よかった。お墨付きが出たぞー！」

「者共、開店準備急げー」

「今年の出し物コンテスト模擬店部門のトップをいただくぞオ！」

威勢よく『おー！』と返された後に皆が動き出した。

「…で、私はどうすればいいの？」

シフトに入っていないければ準備にも参加させてもらえていない私以外は。

「あ、ゆーなはその格好で校内をうるついで。エプロン部分に『一の三』って入ってるから宣伝にもなるだろうし」

ついでと言わんばかりに『せいとかいちよう』の腕章と『利き腕負傷中』のステッカーが左腕のギプスに貼られる。腕章があえての平仮名にちょっとイラッと来たけど暴れることが出来ないのでぐっと我慢。

「だったら、色々と案内してもらおうかしら。今度から通う学校だし、色々と見ておきたいし。」

「え？聖奏に転入してくるんですか？」

クラスの一人（確か新聞部の後藤さん）がお姉ちゃんの発言に食いついた。

「ええ。リハビリが終わったら、二年生に入る予定よ」

「リハビリ…怪我でもしてたんですか？」

また別のクラスメイト（今度は確か空手部の中島さん）が尋ねる。

「まあ、そんなところ。」

「琴音さん、そろそろ動きまわったらどうですか？こっちもそろそろ開店ですし」

このままだと質疑応答が終わらないと思った楓がそう呼びかけた。

「そうねえ。それじゃあ、お昼くらいにまた来る事にするわね」

「お待ちしてまーす」

「それじゃあ、案内よろしくね。唯奈。ツバキ、行きましょう」  
「はい」

二人に促されて教室を出る。

まだ早い時間だからそれほど人はいないけど…

「ねえねえねえ！聞いた！？」ツバキ、行きましょう」「って」

「なんか、本物のお嬢様って感じだよな」

「あのツバキって人は付き人さんなのかな」

「転入してきたら取材して特集を一本組まない」と

だからって、教室の中でそんなに騒ぐのはどうかと思う。

534

「ふふ、元気がいいわね。それじゃあ、二年生のフロアからお願い」  
「わかった」

先導しようとする私だったけど、「唯奈はちっちゃいから人ごみだと見えなくなっちゃう」となんとも腹立たしくも真実を突き付けられ手をつなく羽目になった。当然、右手。

「ねえ、会長と手を繋いでるの誰？」

「夏休み前に居た御剣さん　お姉さんの方に似てるよね？」

「もしかして、本人？」

早速、噂話が広がり始める様子を見せていた。

\* \* \*

最初に行った二年生フロアでツバキと梨紗先輩がお茶のみ友達という新事実が発覚したり、編入予定と聞いて二年生が集まって来るなどのハプニングもあつたりしたけど概ね問題なく進む。

続いて三年フロアや特別教室とかをざっと見て回って…

「そろそろお昼時よね」

「一年三組のお店に戻りましょうか」

「楽しみよね。唯奈ちゃんが指揮執つて作り上げたんでしょ？」

「ゆーなの料理じゃないのがちょっと残念だけど」

PTAの特別企画（先日の『誤射事件』を問題視する親の集まり）の所で合流したお母さん&マナと一緒に出発点だった一年三組に戻つて来てみたら…

「最後尾はこちらです」

「列は他クラスの邪魔になっちゃうんで窓側をお願いします。」

入場整理に要員を割く必要がある状態になっていた。

周囲の噂話を拾ってみると『本物顔負け』とか『ハイレベル』とか『死者多数』とか聞こえてくる。

どうやら『仕込み』の成果が出ている様子。 最後の一つがちょっと不穏だけど。

「あ、ゆーな。」

「一回り終わったから来たけど…今じゃマズイかな」

入場整理に当たっていた遥が声をかけてきたので尋ねたところ

「あ、ちよつとまつてて。」

ぱたぱた、と教室に一度戻ってゆく遥。

何故か教室から出てくる人の視線がこっちに集まってるような…

「おまたせー。こっちからどーぞ」

と、本来出口になってる側から教室に入場。

見たら、席が準備の時より一つ増設されていた。

しかも、予定にはない五人掛けの席が。

その席に案内される私たち。

「ご注文は何にしますか？」

注文と言ってもA定食とB定食の二つしかないけど。

「それじゃあ、Aを二つとBを三つ」

「かしこまりました」

にこやかに接客するクラスメイト。

「アレは？」

お母さんが教室に設置されてるモニターに映されてる映像を指さす。

あれは…

「文化祭の準備期間中の様子ですよ。」

特訓の様子、会場設営の様子、特訓で泣かされた子、上手くいつて笑ってる子、おびえる私、

！

「ッー！」

怯える私の次に表示されたのが、『はい、あーん』をされてる私（今朝）。

「それでは、ごゆっくりー」

さっそうと立去り調理場部分へ消えてゆく。

私は恥ずかしさに顔を真っ赤にして俯くくらいしか自衛手段が無かった。

「成る程ね。これが『死者多数』の理由なのね」

「納得です」

「ふふふ」

「……………」

ただ、憐れみの視線を送ってくれるマナだけが唯一の救いだった

ほどなくして届いたセットメニューだけど、私の所に箸は無く、お姉ちゃんの所に箸二膳と匙（木製）が置いてある

「はい、あーん」

利き腕絶賛負傷中の私に食べさせようとするお姉ちゃん。  
右手でも何とかなるのに箸が取り上げられてるからそれすらさせてもらえない

気がつけば視線が集まっている。

私に、逃げ場などある訳なく…

「あー…」

大人しく、食べさせられるしか無かった。  
お母さんもツバキも食べさせようとしてくるので本気で逃げ場が無い。

恥ずかしさで、味なんてまったく判らなかつた。

『ダメな大人』を冷やかな目で眺めるマナだけが本当に心の救いだよ……………

（…言えない。実はやりたいなんて絶対言えない）

…救い、だよな？

ぶすつとした顔のマナに若干の不安を覚えつつも食べ終わり、一年三組を出る

その時、今さっきの映像がモニターに表示されてホントに妙なところでのスペックの高さに溜め息をつきたかった。

\* \* \*

お母さんと別れてから私は屋上に向かう。

施錠こそされていないけどその一つ下のフロアが関係者以外原則立ち入り禁止な生徒会フロアなので一般生徒の立ち入りが事実上の禁止になっている場所。

そこには…

「これって…魔方陣？」

「そうだよ。」

私が、文化祭を邪魔されないための用意として張った『魔除け』の陣がある。

若干のほころびがあるせいで魔術師には見えてしまっけど一般人には見えないようにちゃんと隠蔽してある。

「折角の文化祭を無粋な来客で邪魔されたくないからね」

その魔方陣に私は手を触れ…

「どっにするの？」

「後夜祭で花火打ち上げる予定だから魔方陣を隠蔽し直しとこうと

思つて。」

お姉ちゃんに尋ねられてちよつと中断。

片手間にできるほど簡単な術式じゃないのでもう一回集中、集中…

「ふうん……………」

判つてるんだか判つて無いんだか判らないお姉ちゃんは

「えい」

行き成り魔方陣に手を触れて、魔方陣を消してしまった。

「ちよつ!?!」

「慌てない、慌てない」

そう言われて落ち付いてみると確かに反応はある。

ただ、認知が出来ない…『完璧な隠蔽が為された』だけ。

「私だつて、これ位はね。」

そう言いながら陰りのある笑顔を向けてくるお姉ちゃん。

「さーて、文化祭を楽しみましょう」

お姉ちゃんが私の手をひいて屋上の出入り口へと向かう。  
その顔にさっきの陰りはもう欠片も見えない。

「…うん。そうだね」

今度は、私が手を引く。

行き成り引つ張られてちょっと驚いた風のお姉ちゃんはこいつめ、と笑う。

「はあ…まったくこの重度のシスコン姉妹は…」

「いいじゃん。微笑ましくて」

「ほら、ツバキ！マナ！行くよ」

なにやらぶつくさ言ってる二人を呼び私たちは再び文化祭の喧騒の中へと潜り込んでゆく。

今日くらい精一杯楽しんだっていいだろう。

なんせ、今日は祭りなのだから。

…私が噂の事をすっぱーんと忘れているんな場所を歩きまわった結果、クラスの皆が集客し過ぎでダウンしかけるといふ事故があったけど…私は悪くないよね？

\* \* \*

「おまけ」

\* \* \*

花火が、上がる。

夜空に咲き誇る火の花を見上げて、誰ともなく歓声が上がります。

一日目の夕方に搬入・設置された花火が二日目の夜：文化祭の終了を祝って打ち上げられていた。

「綺麗だねえ」

「そうだね」

私は生徒会室せいはいしむから、楓と一緒に夜空を見上げる。

「……………」

「……………」

ただ、『ひゅるるる』という打ち上げられる音と『ばーん』と火薬が破裂する音が電気をつけていない、薄暗い部屋に響く。

「ゆーな、さ」

「何？」

「楽しかった？」

「…それなりには。楓は、忙しかったんじゃないの？」

楽しむ暇もないくらいに…

暗にそう言ったのに気付いたのか楓は苦笑いを浮かべ

「楽しかったよ。準備とか、そういう忙しさを皆で楽しむのも中々にいいもんじゃない？」

そう、楓は笑う。

「そんなものかな」

「そんなもんだよ」

ああ、たのしかっ疲れた。

そう言いながら楓は私に寄りかかって来る。

「……………楓」

「なーに？」

「本当は私じゃなくてまk「ストップ」」

『誠と見たかったんじゃないの？』

そう聞こうとしたら、遮られた。

「それは無しだよ。」

「でも」

言葉を継「こうとした私の口に指を当てて『しー』と止める楓。

「いいかな、唯奈くん」

妙にもったいぶって楓が言い始める。

「こうやって、女友達と見上げる花火つてもの中々に乙なものなのだよ」

「ぶっ…」

全くにあって無くて思わず吹いてしまった

「酷いなあ」

「だって、まったく似合っていないんだもん」

くすくす、とこみあげてくる笑いを消費する事にする

恥ずかしいのか、楓は視線を窓の外の花火に移す。

「でもまあ、確かにいいものかもね」

私は、元は誠の一部だったから判る。

楓が、誠に好意を抱いていて、誠もまた楓に好意を抱いていた事を。

だから毎度毎度、楓との『必ず戻って来る』って約束を律義に守り

続けてきた。

「まったく、はやく帰ってくればいいのに」

あり得ないと思う事でも、言いたくなる。

『藤谷誠が帰って来る』なんてあり得ない。

なぜなら『御剣琴音』が『藤谷誠のなれの果て』なのだから。

それでも言いたくなってしまうのは幼馴染の恋路を応援したいと思う心が有るからか。

それから、また二人で黙ってひと時の宴を見上げる。

これが終わったら生徒会は平常運転。

後片付けと対魔組織としての活動が待っているのだから。

だから、今は

# 1 1 4 (後書き)

おっかしいなあ…

凛々しい見た目少女の生徒会長の筈が中身まで幼女化しつつある。

ついでに、# 1 1 - 3で撃たれたのに腕のヒビだけで済んでるのは『唯奈だから』の仕様です。

あと、花火の部分で楓と唯奈だけなのは二人が抜けだしてきたから。琴音はまだ一般入場者なので閉会后に帰宅させられました。

そもそもで、花火は二日目の夜。本文中で書かれた次の日なんですけどね

#12 1 (前書き)

更新です。

地震から一週間、被災された方も被災されなくても影響を受けている方も、そのどちらでも無い方も、少しでも楽しんで、心の余裕の材料にしていたただければ幸いです。

…ただ、ちょっと内容はダークだったりするかも

文化祭から一週間後

『御剣琴音です。一年の御剣唯奈の姉で夏休み前には唯奈の名前を騙って二週間ほどお世話になってました。てへ。あ、ちなみに妹を行かせて大丈夫なのか見極めるためだったんでそのところ間違えないように』

ちなみに『てへ』は本当に言った事だったりする。

そんな『迷演説』<sup>たわごと</sup>を全校生徒の前でぶちかました姉さんが学校生活には順調に馴染んで行った。

……中等部も含む後輩たちに慕われる『お姉さま』として、また同じく三年生や同級生である二年生とは『妹（分）を溺愛する同士』として。

そして魔術師としての適性もかなりの物（まあ、元が私と同じく『世界の理』に触れた誠だから当然と言えば当然）なのであっさりと生徒会の役員に加入。

と、いか会長の私が反対票を投じても副会長以下誰も反対しないから通さざるを得ない。

これは民主主義的決定法かぎのけつごうに負けたのであって『毎日の三の教室に遊びに来る』という強迫文句に負けたわけではない。

無いつたらない。

呼び方を『お姉ちゃん』から『姉さん』に、『お母さん』から『母さん』に変えたのも甘やかそうとする家族対策ではなくてちよつと

した心変わりだから邪推しないように。

「ただ、そんな身内の悩み事はどっかに放り投げておいて私は今、もっと重要な案件で悩んでいた。」

「さて、この件はどうしたものか」

「そう、遂にやられてしまったのだ。」

「執行部の部隊が例の特務隊によって『追いはぎ』に遭ってしまったのだ。」

「奪われたのは対魔術加工のされたコートが八着、防御呪符三枚、対魔刻印を付加した弾丸を撃つために改造したモデルガン八丁と弾。攻撃符はその直前に出現していた幻魔討滅の際に使いきっていたから向こうの手には渡っていない。」

「以前の執行部が使っていた実銃（市は黙認）だといざという時に危ないから銃刀法に引掛からないようにして必ず鞆に入れて持ち歩くように通達したから」

「たとえ引掛張られても『サバイバルゲーム部の部員です』で通る（実際、警察はそれで通してくれる）ようにしたんだけどな…」

「遂に、って感じがするけど対策がなあ…」

「別に、呪符は奪われた処で一回しか使えないだろうし既に協会もそう言うのが有るといっているのは知っている。」

「対魔刻印弾や改造モデルガンもそれなりの知識が有れば作れてしまうので問題ではない。」

問題なのは対魔加工され結界への侵入が可能になるコートだ。

今までは結界破壊用のパイルバンカーで結界を殴ってる間に結界を張り足して破られる前に撤収という方法が使えたけどこれからは結界の中にそのまま入ってこられてしまう。

まあ、幻魔相手にあの連中が勝てるとは思えないけど副業（本業が別）な私たちと本業がアレな連中だとしても初動が向こうの方が早くなってしまう場合がある。

その場合は連中を助けなきゃならないので余計な手間。オマケに記憶操作もしておかないとならないし…

今のところはツバキとその手下の毛玉のおかげでごく少数ケースではあるけど。

「とりあえずは警察に盗難の届け出かなあ…」

『自衛隊員らしき集団に脅されてモデルガンと弾、あと着てたコート奪われました』

うん、なんというか酷い。自衛隊が単なる窃盗集団と化してる。

それに、学校に戻る途中でやられたというのだから…

「あと、執行部は出勤停止にしないと、学校の前で張られて辛づるでやられちゃうだろうし…」

執行部が単独で作り上げたとはいえ魔術的要素が含まれた対魔加工に自衛隊の連中が気付かない限り向こうは執行部の装備を狙い続けるだろうし…

「ああもう、文化祭終わってようやく通常営業になったって言うの

に…」

ホント、叩きつぶしてやりたい。

撃たれた怨みも、ついでに晴らしたいし

いつそ呪殺でもしてやるうか…と黒い考えが頭に浮かんできた。でも、そこまでのキツイ呪いをかけるにはそれなりな触媒が無いと出来ないんだよなあ…

「あ、なんかゆるーなが黒い事考えてる」

「あの子、すぐ顔にでるわよね」

「素直でいいじゃないですか」

「そこ、うるさい」

考えが完全に読まれている（そんなに顔に出てるのかな）事に恥ずかしさと驚きを感じつつそれを隠して注意する。いくら相手が姉さんと楓と遥であっても、生徒会を統括する会長として。決して照れ隠しなんかでは無い。

「…絶対に照れ隠しですよね」

「それ以外の取り方出来る？」

「はつきり言っただけ無理です」

「ああ、もう！」

考え込んでいた書類を机の上に置き、ちよっときつめに怒ろうかと

したその時…

「睦斗市役所付近に空間の歪みが発生。結界展開の準備…」

姉さんの机（かつては誠の席だった場所）の毛玉が声をあげた。

それと同時に姉さんも楓も遙も目つきが変わる。

「市役所付近っていうと…」

「第三高校と第一高校の管轄テリトリーです」

姉さんが楓に尋ね、答えを聞いてちょっとホッとした様子になる。

「西睦斗駅付近に空間の歪みが発生。規模は通常の三分の一以下。」

「えっ!?!」

突然の事で訳が判らないような声が上がった。

「結界は!?!」

そんな中、私は別の事に意識が廻る

「現場到着まで三分必要」

「判った。私が行くわ。情報の整理と各校への警戒の呼び掛け、よろしく」

複数体が出てくる事が今までに無かったかと言えば無かった訳じゃない。

ただ、複数個所に出てきたことが無かっただけ。

「ちょ、ちよつと!」

遙が生徒会室から飛び出そうとする私を呼びとめてきた

「西睦斗駆つていうと連中の目と鼻の先…一刻を争うし執行部が出るとまた追いはぎに遭いかねないでしょ」

「それはそうだけど…」

「それに、このあたりで出現された時の事も考えて。ここを空き家にする訳にはいかないでしょ」

「…わかった。」

「姉さん、いざとなったら指揮をお願い。」

「ええ」

それから私は支部襲撃の時と同じように空間を切って繋いで、現場へと跳んだ。

左腕のヒビを完治させて初の出勤だから多少慣らしも必要だろうし、ちよつとばかり慎重に行かないとね……………

\* \* \*

結果として、第三高校と第一高校の連合部隊は出現した幻魔を掃討した。

一方で私は

「何も無かった？」

ツバキの使い魔からのオペレートで現場に到着した時には、既に歪みは消えていた。

「ええ。幻魔が出現した形跡もないし…こっち側に出てこようとして諦めたのか、出来なかったのか…」

そのどちらにしろ、『何も起こっていなかった』というのが正解なのだ。

「ただ…」

「ただ？」

姉さんが繰り返してくる。

私が疑問というか、不思議に思う事…それは

「転移して通常の空間に戻る時に人影とすれ違った気がするんだよね」

「すれ違った？そんな事、あり得るの？」

遥が首をかしげる。

「ごく近い位相を通れば見えるかもしれないけど…詳しいところはさっぱり。私も『魔法が使える』と言っても完全に理解してる訳じ

やないからね」

感覚的に『身体が覚えている』とでも言えばいいのだろうか。

「とにかく、この件は要調査。歪みが発生したらなるべく現場に行ってみるわ。…流石に、この作業は私しかできないからね。」

「その分、通常業務は私や楓や琴音さんで代行ってこと？」

「そういう事。まあ、私じゃないとダメな部分はちゃんとやるけどね」

そう言いつつも頭の中のコルクボードには新たな問題点のメモが追加される。

今、現実問題として切迫するのは『自衛隊対策』と『すれ違った影』。

自衛隊の方、殲滅で終わらせられれば楽なんだけどもなあ…

とはいえ、出来ないことをいつまでもぐだぐだ言い続けるのも私らしくないのでさっさと思考を切り替える努力をしよう。

何かいい方法……………

何かいい方法……………

何かいい方法……………

「やっぱり殲滅が一番…でもなあ…」

切り替えると言いつつ、結局同じループに戻って来た私だった。

「これまた酷いことになってますね」

「散々注意を呼び掛けられていたから警戒をしていたのだが…」

その日、私は執行部の藤澤会長から心労が増える土産話を貰っていた。

「…それでもって追いはぎばかりを警戒し過ぎて、備蓄倉庫の予備を根こそぎ持ってかれた、と」

「……………すまん。」

申し訳なさそうにする藤澤会長を前に相手が年上だとか関係なしに溜め息が出る。

「具体的な窃盗被害はどれくらいなんですか？」

「ああ、コートが一箱に十着入ってるんだがそれが八つ。うちひと箱だけが加工済みだったモノだ。他には」

被害の総計はコート八十着（うち十着が対魔加工された防護コート）、特殊弾五千発、改造したモデルガンが十丁。

護符や未改造のモデルガンは興味が無かったようですべて無事だったという。

「…とりあえず、コートは生徒会イベント時防寒用のモノ、モデル

ガンと弾はサバイバルゲーム部の備品として警察に盗難届を出しておきましょうか」

特殊弾と言ってもパツと見は普通のプラスチック弾だし、殺傷能力は殆どないに等しいから大丈夫だろう。そもそもで睦斗警察がこつち側の組織だし。

「で、今回の一件で執行部の活動にどれくらいの影響が出ました？」

「ああ、幸いにして殆どない。追いはぎにやられた連中への装備の支給は済んでいるし弾薬も予備の備蓄分がやられただけ、コートは来年の新入生用の前準備の為のものだ。」

成る程。

「では、しばらくは自衛に専念をお願いします。警察が何処まで動けるかは判りませんが多少慌てさせて相手が手を出してくればこちらが『正当防衛』の行使で殲滅戦に持ち込めますから」

藤澤会長の口元が一瞬ばかり引き攣った気がするが気にしない。

「ああ、所属各校にもそう伝えておく。」

「被害届はこちらで出しておきますから。続報があったらお互い…」

「ああ、また連絡する。」

「お願いします」

ぷつり、とモニターが消え私はそれなりに長い時間同じ姿勢でいた

為軽く伸びをして身体をほぐす。

「あー、さらに厄介な事になった」

これで相手の手が増えてこっちの手が減った。

魔術と科学の混合によって作り出された通信機（防諜性抜群）の初使用がこんな報告だなんて…

「……………とりあえず、少し表の仕事でもして気分を変えますかね」

通学カバンとは別の仕事鞆に数枚のプリントと封筒を枚数を確認して入れる。

表の仕事として中等部の生徒が二月後に行う職業体験のあいさつ回りがある。

中等部にも生徒会長は居るが表周り系は高等部の会長がやるのが伝統らしい。

端的に言えば『後輩がご迷惑をおかけします』とあいさつして回るわけ。

あとは…

「職業体験の挨拶周りしてきます。定時になったら各自解散してください…っつと」

ホワイトボードに行動予定を書き込んでおく。

こうすれば問題は無い筈だ。

ついでに睦斗警察に寄った時に被害届も出しておかないと

「あと、警察署に寄ります」

その文を書き足してペンを置き生徒会室を出、挨拶に行く相手先と最短ルートを考えながら下校する生徒に交じって門を出る。

…今日の所はとりあえず睦斗警察方面かな。

何時までに帰れるかな…そんな事を考えながら私は警察署前のバス停を通る路線バスの最寄りバス停を目指して歩き始めた。

\* \* \*

「…それにしても遅いわね」

琴音は時計を見上げながら呟く。

唯奈は職業体験のあいさつ回りをしてくると書き置いて外出したみたいだけどいくらなんでも遅すぎる。

帰宅した時家で留守番していたマナとツバキによればまだ帰ってきていないとの事。

なのでもう一度学校に来てみたが姿が見当たらない。

なら、何処で？

「確か、行き先のリストが合った筈よね」

琴音は妹の性格ならコピーの一枚でも残している筈だと会長机の上を漁るとすぐさま薄く『原本』の書き込みがある行き先リストがあった。

ごく丁寧に電話番号や営業時間もついている。

「えっと…先ずは…」

『警察署による』と言っていた以上警察署には行ってる筈だ。

「もしもし、睦斗警察所でしょうか。私は聖奏学園生徒会の御剣と申します。ウチの会長がそちらにお邪魔していませんでしょうか…」

なので琴音は警察署を一番にかけることにした。

だが…

「え　来てない？」

思わず、受話器を取り落としそうになった。

「は、はい。お手数をおかけしました。はい、何かありましたらまたご連絡致しますので…はい。失礼します」

なんとか落ち付いた応対をして電話を切り…

「これは、緊急事態よね」

すぐさま別の番号をダイヤルする。

宛先は唯奈の持つ携帯電話。

だが、いくらコールしても出る様子は無い。

呼び出しまでは行くから電波は届いているようだが…

一度受話器を置き、もう一度取る。

次の連絡先は…

「もしもし、梨紗？緊急事態が発生したわ。副会長権限で集められるだけ人を集めてもらえる？」

書類上、唯奈に次いで権力者である副会長の梨紗の所。

最近是一年に仕事を任せて隠棲状態になりつつあるがこう言う時、肩書は割と重要だ。

電話の先の梨紗に簡単な事情説明をしたら二つ返事で了承が帰ってくる。

そしてその電話の僅か三十分後には聖奏生徒会のほぼフルメンバーが生徒会室に集合していた。

「どうしたんだ？緊急事態って」

啓作が状況が読めない故に問う。

それに対し、琴音はこう答えた。

「唯奈が、行方不明になったわ」

その言葉に、集められた全員が凍りついた。

\* \* \*

パン

「っぐ！」

乾いた破裂音が、陸自特殊災害対応隊駐屯地の一室に響いた。

続いて壁や床に紅い飛沫が散る。

「柿沼二佐！」

相模は、上司の凶行に唾然とする同僚たちの中で唯一声をあげるこ  
とが出来た。

だが、その非難する声を気にする事無く、柿沼は引き金を引き続け  
る。

パン「あぐう」、パン「っがあ」、パン…

その破裂音が一回響くと部屋に散る紅い飛沫は数を増やし、そのた  
びに呻くような声もあがる。

柿沼の引き金を引く指は将官用護身用拳銃の装弾数を全て使い切り  
から撃ちするまで止まらない。

「ふん……連中にこの映像を送りつけておけ。どうなるかの見本だ。」

「はっ」

そう冷たく言い放つて柿沼はその部屋：尋問用の部屋を後にする。撮影をしていた副官も付き従い、残るは相模の部隊の者だけとなる。

「…くそっ！」

相模は思わず悪態をつく。

村井一尉が更迭された後に昇進して支隊長となった柿沼の命令で『連合』なる組織の長であるという少女の拉致をさせられ、尋問をさせられ…

そのオチが時間がかかっていることに憤った支隊長自らが射殺である。

悪態の一つでも付きたくなる。

そもそも相模らには『連合』がどんな組織なのか教えられていない。

故に何も判断が出来ないのだ。

「隊長、どうしますか？」

小隊の兵に言われて相模は撃ち殺された少女に目をやる。

態々苦しむように、腕から順番に四肢を潰した後に腹部、右胸部、左胸部：最後に額という撃たれ方をした、白い制服を血で赤く染める少女。

その顔は予想とは裏腹に苦悶の表情と言つよりは驚愕の表情を浮かべている。

「遺体袋を。このままじゃ、可哀想だろ」

「はっ」

二人ほど用具庫へと向かわせる。

「…これは、相手を激怒させるだけなんだろうな」

『あの支隊長、詰んだな』と相模は思いつつ遺体袋の到着を待つ間『有事』の際の自分の部隊の行動を予測しておくことにした。

\* \* \*

これが『死ぬほど痛い』って状態か。

ああもつ、あの部隊長一辺三途の川をわたらせてあげようかしら

そう『撃たれた傷のあった場所』をさすりつつ、私は『御剣唯奈<sup>わたし</sup>』が遺体袋に詰められて運び出されていく様子を眺めていた。

普通なら頭を撃たれた時点で即死なのだけれども本体が『魔力の塊』であり『魂』である私は肉体が無くとも『精霊みたいな存在』として生きていられる。

ただ、一般人から目視が不可能なだけだ。

ったくもう、また人外レベルがあがっちゃったじゃないのさ

だからと言って今すぐ報復行為を始める必要もない。

どうせウチの姉あたりが周囲を扇動して特務隊の殲滅…むしろ駐屯地の更地化をしてくれるだろう。

どちらにしる必要になる結界類やらを起動寸前の魔方陣という形で隠蔽展開しておきながら、私は『<sup>ぬけがら</sup>肉体』の詰められた遺体袋を追う事にした。

本部らしき建物を出ると隣にあるのは寮らしき建物。

その横にあるのは…装備庫か何かっぽいけどこう嚴重な警戒がされてる倉庫。

『へー』とか『ほー』とか言ってるうちに肉体は寮の方に運び込まれてゆく。

生まれて初めての『壁抜け』は何の事は無く『自分は違う次元の生き物なんだ』という中々に凹みなくなる事実だけが心に押し掛かった。

ともあれ、そんなこんなで入りこんだ寮の一階はラウンジになっていた。

「結局、村井一尉の危惧していた通りになってしまいましたね、相模隊長」

「ああ、そうだな…」

その一団は適当な席に集まると頭を抱え込まんばかりに悩み始めていた。

「おそらく、相手方からすればこの上ない挑発…いや、報復理由だ。ここが更地にされても文句は言えん」

中々にいい予想をしてる、尋問役のリーダーは相模と言っらしい。

「あの、相手は学生なんですよね。そこまでの戦力というか…自衛隊を相手にそんな事は流石に…」

取り巻きの一人が手をあげて疑問というか思ったことを口にする…が

「いや、これは村井隊長から聞いた話なんですが、このあたりには古くから『化け物と戦つたための組織』があるそうだ。」

「はあ…そんな、眉唾物じゃないですか」

「それがな、村井隊長が学生時代に所属していたそうだ。その化け物を叩く為の組織にな。」

「はあ!？」

周囲の隊員たちが驚愕と困惑の声をあげる。

けど、私的には少し納得した。

執行部出身者が居るなら、外の魔術師が『ロクに管理もされていない』と誤認するほどのレベルで隠蔽をしてきた私たちを補足してきたのも判る。

「その化け物つてのが小隊規模の銃撃で足止めがやっとだったそう  
だ。後々に多少の傷は負わせられるようになったらしいが…」

その言葉に周囲が啞然としていた。

「なら、どうやってその化け物を？」

「倒せるんだよ。…オカルトの世界の連中がな」

そう言いながら、ちらりと遺体袋が運ばれていった方へ視線を送る。

「まさか…」

それで大体の予想は着いた様子だった。

「まったく、貧乏くじを引いたもんだ」

…この人たちは放置で平気っぽいな。

そう判断した私は他の場所を回ることにした。

「こんな時間に集合をかけてごめんなさい。ただ、それだけの大事だという事は理解してもらえぬ助かります」

琴音は集まってくれた全八校プラスOB会の戦力を前に最終的な『演説』をしていた。

「事前に事情は伝えましたが連中は完全に私たちと対立の姿勢を取っています。それどころか、トップを拉致するという強硬手段に出ています」

その知らせを聞いて、一体何人が夢であるかと疑ったものだろうか。

「なら、徹底的に叩きつぶして…返してもらいましょう」

集まった一団から歓声上がる。

その時だった。

「こ、琴音さん！」

ツバキがかなり焦った様子で駆け込んできた。

「どっしたの？」

「自衛隊の駐屯地が：巨大な歪みに包まれました！」

「ッ！？」

驚愕。

ただそれだけがその場を支配する。

「目標変更ね。連中を助けるつもりは無いけど、野放しにはできない。抵抗されたら容赦なく気絶させて排除するわよ。ここからは各校の会長にお任せします」

たが

「折角だから、突入の命令位は出してよ。御剣琴音生徒会長代理。」

会長不在故の代理設置。

その結果で出来た指揮権を振るえと信乃は言う。

「判りました。……………状況、開始！」

隠蔽して集結していた総勢千に近い数人が人払いなどで漏洩を防ぎフエンスをブチ破って突入していく。

（待っててよ、唯奈）

琴音はそれだけを頭に、先行する一団を追った。

\* \* \*

「敵襲！敵襲ーッ！」

「くそっ…こんな時にッ！」

相模達は歪みの中で実際に現れる幻魔達に遭遇していた。

この『歪みの中に一般人が入れる』というのも唯奈が展開しておいた結界陣などが誤作動して起きている状態だが、そんな事は彼らはずゆ知らず。

「全員、一体に射撃を集中させる。人間と違って連中は頑強だぞ！」

相模は村井から教えられた『通常兵器での対抗方法』を使い一体、また一体と一つ目の小鬼を倒してゆく。

ただ、二体倒すのに半個小隊分の小銃が弾切れになるほどの高燃費な戦闘はそう長く続けられる訳ではない。

事実、六体ほどの一つ目ゴブリンを倒した段階で相模の小隊は手持ちの弾薬をほぼ全て使い切ってしまった。

それから始まるのは…異形の化け物との白兵戦である。

『こんなことなら白兵戦用の装備の用意も具申しておくだった』

そう、今更な後悔をしながら飛びかかって来るゴブリンから目が離せなくなった相模は、その後の出来事が少しばかり信じられなかった。

「居たぞ！ゴブリン八匹に襲われてる！工藤！」

「了解ッ！」

目の前を閃光が走る。

信じがたい事にその閃光に吞まれたゴブリンはあっけなく、消滅して影も残さない。

一個小隊が苦戦してなんとか六体倒したというのに、現れた一団はたったの一撃で消し飛ばしてしまった。

「あー、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

先ほどの閃光の発生源の少年　工藤に声を掛けられてなんとか現実に戻って来た相模。

「そりゃ何より。避難誘導するんでついて来てください。先導はアイツが。今旗、任せるぞ」

「了解」

示す方向にはサブマシンガンを手に警戒に当たる少年が一人。

あんな軽火器で大丈夫なのか？

そもそもで、何故学生らしい彼らがあのような銃を？

相模の脳裏に幾つもの疑問が浮かんでくる。

「工藤、八時からゴブリンがまた十。モテモテだな」

「バカ、冗談言ってる場合じゃないだろ。ゴブリンで済んでる間に逃げるんだよ」

相模たち自衛隊員と幻魔の間に素早く展開した数人の学生が銃を構える。

それらは相模達が持つ小銃と同等かそれ以下の火力しか持たないモノにしか見えず…

「そんな軽火器では連中にダメージは…」

タタタ、とまるで電動エアガンのような軽い発射音。  
だが、撃ちだされた弾丸はゴブリンに孔を穿っていた。

その様子に目を丸くする自衛隊員たち。

そんな彼らの緊張をほぐそうと工藤はおどけて言ってみせる。

「ああ、コレの弾は八ミリのプラスチック弾なんで当たっても痛い  
で済みますから」

ついでに、市販の電動エアガンの改造品ですよ、と。

だが、隊員たちには自分たちの対人殺傷力の確かな小銃で苦戦する相手にそんなものが通じるとは思えなかった。

現実には通じてしまっているのだから始末に負えず何人もが思考停止<sup>ス</sup>してる訳だが…

「とにかく、今は移動を。俺たちが邪魔で火力が振るえない連中がいるんですよ。」

工藤ら学生たちに急かされて相模は隊の面々に彼らに従うようにと指示を出した。

「追撃、ゴブリンが二十と中型<sup>デーモン</sup>が八」

「あっちゃー、もうデーモンが出てきたのか。」

牽制射撃を加えつつ大所帯を誘導する彼らだが、相模の目からすれば無謀の極みでしかない。

先ほどまでの小型の一つ目を数倍にしたかのような容貌の中型には目立ったダメージがいつているようには見えない

「七篠、呪符で吹っ飛ばしちまえ」

「あいよ。」

再び取りだされた紙片を手に相手に向け…

「吹っ飛ベツ！」

再び、閃光が追手に襲いかかる。

ゴブリンなぞ眼中に無く、事実射線上に居たから消滅させられただけで端からデーモンだけを狙った閃光は直撃したデーモンは消滅させ、かすっただけのモノにはそれなりの傷を負わせる。

更に銃撃が加えられて追手の集団はいとも簡単に壊滅する。

「これで呪符はお終いか。」

「急いで退避だな」

それから急かされて相模達の小隊は指令部となっている建物のすぐ傍らの、何十という工藤達と同じ格好の学生たちが守る建物へと押し込められるように避難することになった。

\* \* \*

「どうなっている！第一小隊は何処へ行った！第二と第三の被害は！」

柿沼は折角のチャンスが無駄にしつつある部下に業を煮やしていた。

前任者の村井の隊で副官をしていた相模の指揮する第一小隊は思考こそ柿沼と相反する者たちだったが技量は部隊随一だった。

事実、他の隊とも連絡が取れなくなる前に『撃破』報告をあげてきたのは第一小隊だけなのだ。

「ま、まだ状況が…それに通信も不通で…」

「まったく！我々が探す手間が省けているというのに、なんともぶがない！」

柿沼は部隊の配置換えや人材の交換の具申をする事を考えながら、どうやって指揮系統を取り戻すかを考える。少なくとも第一小隊は全員を予備に回す事は決定だ。

「連絡のつく兵と警備部隊は俺について来い！出るぞ！」

その結論が、指揮官の前線出撃であった。

指令部護衛と連絡のつく…指令部の至近に居る兵を呼び集めて出来上がったのは寄せ集めの一個小隊とオマケ程度の戦力だった。

「まず、備蓄庫の重機関銃などの装備を回収する。その後生残兵を吸収しつつ掃討に当たる」

部下に確認を取り、指令部である建物を出た直後、翼を持った異形ガーゴイルの群れに出くわして柿沼はみっともない悲鳴をあげた。

魔力を持たない一般人にはそれほど興味を持たないガーゴイルだが、耳障りだったのか柿沼たちに鋭い眼光が向けられる。

生物の本能が身体を縛り付け直衛隊は見事に全滅の危機を迎え…

「楓ちゃん、遥ちゃん！」

幾百の光弾と火球がその危機を撃ち払った。

たった一度の攻撃でガーゴイルは有る者は焼き払われ、ある者は光弾にその体躯を貫かれて墜落し消えてゆく。

続いて現れた大きな一つ目 デーモンは何処からかの狙撃によって崩れおち、狙撃を逃れたものも容赦のない閃光に吞まれてゆく。

『助かった』と思った柿沼が次に思ったのは『化け物を倒せる戦力の吸収』だった。

「そのの  
」

だが、その言葉は発しきる事が出来なかった。

柿沼は予想外というかある意味予想出来る事だがしなかった現実を見て硬直。

部下たちも同様の状態に陥っていた。

信じたくないのだろう。

セーラー服を着た女子高生の一団によってあの化け物が一掃されたなど。

そして、まるで魔法のような、光弾や炎を手から発する少女たちを。

「菊池君、あの連中を退避場所へ。」

「了解」

呆然としたままの柿沼達は何がなんだか分からないまま白いコートを着た一団に誘導されてほぼ無傷の、連絡が取れなくなっていた隊の面々が居る場所へと連れられた。

私が姉さんを見つけた時、姉さんは何やら大事の準備をしていた。

その証拠に並の術式なら一息で、なんのためらいも無く成功させて見せる姉さんが深呼吸をして精神の集中を図っている。

「さて、やるわよ…」

『何を？』

決意のこもった呟きをこぼすものだから、つい尋ね返してしまった。

残念ながら今の私は霊体みたいなものなので『物理現象としての声』では無く『思念通話』という形でだけ。

579

盛大にズッコケかけて、収束しつつあった魔力も拡散してゆく。

ぱッ、と振り返って来た姉さんと目が合った。

『やっほー』

「唯奈！？」

手を振る私の姿は姉さんにしっかり見えているようで、というか見

えるようにしてるので私の所に駆け寄って来る。

で、抱きしめようとして手はすり抜けた。

『あ、今は幽霊みたいな状態だからちょっとお触りは無しだからね』

「幽霊って…どうしてそんな事に…」

『まあ、ちょっとばかり（話したらここが更地になるような）理由があるんだけどね。今は幻魔退治』

「…はあ。それもそうね」

やれやれと言わんばかりの姉さんは再び集中を始めようとする。

『あ、広域殲滅系の術式をひとつ展開してあるから、制御渡すよ』

と、私は前もって展開しておいた術式の一つの制御を姉さんにパスする。

膨大な魔力が必要なのでそれなりの量は蓄えてある。

あとは『起爆』に必要な量を流し込めば術式は起動する。

「まったく…準備がいいんだから」

そんな事を知ってか知らずか…にやり、と笑みを浮かべる姉さんから魔力が流れ込む。

その瞬間に姉さんの足元に六芒星が現れる。

術式の制御部がそこに現れたのだ。

ついでに言えば空から見下ろせば今頃、巨大な六芒星がこの駐屯地のフェンスギリギリまで広がって見える筈。

『ツバキ、この駐屯地を見張ってる使い魔からの位置情報全部回して』

『ゆ、唯奈さん！？無事だったんですか！？』

『ほら、やることやる！』

『はい！幻魔の位置情報、全部送ります！』

念話による連絡でこれで『手札』は全部揃えた。

ひとつ、ふたつ、みつつ…と光が生まれ始める。

渦を描くように動いていたいくつかの光が巨大な光の塊に姿を変えてゆく。

『照準よーし』

私の声が届いて、姉さんは手を上に上げ

「行けっ」

手を振り下ろすと同時、巨大な光の塊は幾つもの光芒を魔方阵の各所にへと降り注がせた。

ツバキの使い魔が捉えた幻魔を一体ずつ消し飛ばしてゆく、究極の誘導射撃とでも言えはいいんだろうか。

まあ、欠点は必要な魔力と誘導に必要な思考力が普通の人間じゃ不可能なレベルだってこと位か。

ツバキの使い魔を通して次々と幻魔が斃されていく様子を私はリアルタイムで見届ける。

最後の一匹を打ち抜くと同時に避難場所の近くで『本命』が出てきたのだけど、執行部数百と魔術師十数の前にノコノコ出てきてしまった哀れな異形は一斉射を一身に浴びて何のために出現したのかも判らないまま消し飛んだのだった。

うーん、哀れ。

\* \* \*

「負傷者なし。自衛隊の方も、何人が軽傷だけどもまあ、無事みたい。今、執行部が武装解除をしてるみたい」

「そっか。それじゃあ、私たちがちょっと離れても問題ないかな？」

遙と楓は指令部らしき建物から出てきた一団を『避難場所』まで護送した後周辺警戒に当たっていた。

今回は『本命』たる幻魔も討滅済み、修復も完了しているが最近は極小の歪みが発生する事が多々あった故の『念の為』。

「ゆるな、探しに行かないとね」

近場に居る執行部の一団に一声かけてから、自衛隊の誰かから聞きだそうかと動こうとした時…

「動くなッ！」

そんな怒声と銃声が鳴り響いた。

「何事？」

「なんとというか、癩癩？」

一時期は実銃を使用していた執行部はもちろん、至近でその音を聞いていた魔術師組も平然としていた。

ごく一部、つい最近加入したメンバーがびくつとして一瞬動きを止めた位だ

「貴様ら全員を公務執行妨害と銃刀法違反で拘束する！」

そんな声に失笑がこぼれる。

「エアガンで銃刀法違反だつてよ」

「笑っちゃうな」

「公務執行妨害？」

「どちらかって言うと、ウチら民間人が協力してるって光景じゃな

いの？」

「完全に足引つ張られたけどね」

あはは、ふふふ、わはは、ははは…

そんな笑いすら混じる状況に怒声をあげた張本人 柿沼は怒りの熱をさらにあげてゆく。

パン！

と再び鳴らされる銃声。

なんだなんだ？

注目の合図か？

そんな感じに一度雑談を中断させるが、一部（主に女子）は喋るのを止めようとしない。

「貴様らも昼間の小娘のようになりたいのか！？」

その瞬間、ぴたりと雑談が止んだ。

「質問！具体的にはどんなふうになるんですかー？」

小馬鹿にしたような声を、工藤は精一杯相手をバカにして出した。

「それに、昼間の小娘って誰ですか？」

それに次ぐ誰かの声も、笑い声も柿沼の自尊心をガリガリと削り取るようにする。

元来、我慢強い性格では無い柿沼にとってそれは耐えがたい屈辱として怒りに変換される。

そして、度の過ぎた怒りは正常な判断力と我を忘れさせる。

「き、貴様ら…全員」

『ブチ殺すぞ』

そう柿沼は続けたかったが一瞬で変わった雰囲気と言う事は出来なかった。

幻魔という化け物を相手にする魔術師でも一瞬ばかり怯えるほどの殺気に近い雰囲気にもなく道を譲る。

現れたのは銀色のパツク 自衛隊の遺体袋を大事そうに抱えた琴音だった。

沈黙が支配する空間に、琴音の、皮靴特有の足音だけが響く。

こつーん

琴音は楓の前に立ち止まってその袋を渡してくる。

楓が受け取った袋は、予想していたよりも軽かった。そしてその中身の形は、まるで

「と、止まれ！」

柿沼の制止を琴音は当然のように無視する。

銃を向けられようが、全く構う事は無い。

むしろ、逆に日本刀を魔力から作り出し、無造作に構える。

「こ、琴音さ」

遙が前に出て止めようとする

が、

「ダメだよ。」

「ダメです」

マナとツバキに止められる

「ちょ…2人とも？」

「その中身、判らない？」

楓が仲裁に入るがマナに言われて『あえて想わないでおいた事』を  
思う事にする。

この袋は見た目ほど重くない。

また、持った感じは力の抜け切った人間に近い。

大きさはやや小さく子供くらいだろうか。

そして、先ほどの柿沼の『昼間の小娘のようになりたいのか』というセリフ。

行方知れずの唯奈

中が見えない、子供くらいの大きさと重さの中身の入った袋。

琴音の、我を忘れるどころか冷静になるくらいの怒り様。

それらから導き出された答えは

「よくも、妹を……」

この件で唯一の死者が、唯奈である。

「ひっ！　わ、我々に手を出したらしく、国が黙っては居ないぞ！」

往生際が悪くそんな事を言うが、怯えて尻もちをつき、銃を取り落とす柿沼。

その周囲からは部下たちが逃げるように遠ざかってゆく。

「ご愁傷様。あんたらの頼みの綱の『特別顧問』とやらも、しかるべき組織に告発済みよ」

刀が、ギラリときらめいた。

「あとは、落とし前をつけさせるだけ」

「琴音さん」

柿沼の前に立つた琴音に、楓が話しかけた。

「何？」

邪魔するなら容赦はしない。

そう目が物語る。

「私にも、やらせてください」

「ダメ。これは姉の私がやるべきことなの…黙って見ていて」

楓を下がらせて琴音は構えた刀を振り被り…

「ひいひいひい！！」

ぱりん

悲鳴をあげる柿沼の頭に刀の刃が触れたと当時、刀の方が碎け散った。

「え？」

当然、斬殺されたと思っている柿沼は放心状態。

一方で、確実に斬り殺したかと思ったら刀が割れて無傷という状況に困惑の声をあげる周囲。

「ま、こんなもんで勘弁してあげるとしましょうか。唯奈、お願い」  
「はいはい。村井さん、どうぞ」

「はあ!？」

何故か、唯奈が二人の自衛隊員を連れて現れた。

「『特別顧問』と共謀し隊を私物化し、現地組織の妨害行為を行った柿沼二佐は降格の上更迭されることが決まった。」

村井の傍らに立つ男がよく通る声で宣言する。

「今後は復帰した村井一佐が指揮を取られる事になった。」

「最初の命令だ。柿沼を拘束せよ。また、その後は武装解除し待機とする」

「了解!」

村井の命令に、相模が一番最初に大声で返礼をし、放心したままの柿沼の腕を掴む。

腕を掴まれた事で我を取り戻した柿沼は  
「上官に対して…無礼だぞ!」

「村井一佐の命令です。」

それだけ答えると続いて動き出した相模の部下と共に柿沼は拘束され独房へと案内されることになる。

「さて、あとはウチとの折衝ですけど」

琴音が村井にそう呼びかける

「はい。上層部にもこのことは説明済みです」

「死者一。これはどうする気？」

「それに関しては…どんな事をしてでも償いきれないでしょうね」

その琴音の言葉に、皆してキョトンとした。

「あれ？琴音さん。唯奈、そこに居るんですけど」

遙が思わず尋ねた。

「遺体袋、開けてみて」

言われるがままに楓がマナに預けた袋を開けると

「キヤッ!？」

中の惨状に遙は思わず飛び退いた。

中身が知人の銃殺死体なら、誰でも驚く。

「ま、殺された本人が無介入を決め込むならそれでいいって言うてるからここで手打ちとしましょうか」

「…感謝します」

「ただ、あの大馬鹿者の処分は」

「かなり厳しいものになるでしょうね。」

では、と敬礼をしてからその場を去る村井。

「あの、話の流れがまったく判らないんですけど」

今まで黙っていたが誰かが聞かないと話が進まなそうだったため白澄が恐る恐る声をかけた。

「あはは、私はちょっと特殊でねえ。『うつつわ肉体』が無くて、『エネルギ魂』だけで存在出来ちゃうんだよね」

そういう唯奈を良く見ると普段よりなんか小さい。

「まあ、精霊みたいな感じの存在ってことかな」

そう、朗らかに笑いながら説明する唯奈だが、一体何割が理解できたのだろうか…

「とりあえず、これで一件落着いて事？」

楓は首をかしげながら、おそろくそれが一番近いであろう答えを呟いた。

魔術協会日本支部の仮支部長室では二人の男が乾杯をしていた。

『先ほど、睦斗の管理組織の長を始末出来た』

という知らせを手ごままである柿沼から受けた為の乾杯である。

一人は特殊災害対応隊 唯奈たちは『特務隊』と呼ぶあの一団の『特別顧問』でもある支部長、もう一人は支部長の腹心の長である支部長の息子。

「これでようやっとあの目障りな連中が消え、あの特別な霊地を抑えることが出来るな」

「それに、連中に奪われた『鍵』もようやく奪還できる」

二人はコレから広がるバラ色を超えた輝かしい未来を夢想し、それを肴に酒を飲んでいた。

だが、それもつかの間。

「ん、なんだ？」

「無粋なヤツだな……」

一人の男が部屋へ無断で立ち入り、二人を見て顔をしかめた。

「昼間から酒とは、良い身分だな」

「なにい？」

その男の言い様が気に食わなくて支部長は喰ってかかる。

「まあ、最後の酒だ。十分に楽しんでおけ　　魔術協会は貴様らの処断を決定したのだからな。」

「なッ!？」

「佐伯の霊地に手を出したのが、間違いだったな」

それだけ告げた男はそのまま退出してゆく。

その数分後、仮設支部長室には物言わぬ人形ひとがたが二つ置かれるだけの空間に変わっていた。

\* \* \*

「つまり、これって予定されていた作戦だった訳……」

あの襲撃から三日後、週明けのその日に希望者には聖奏の生徒会室に集まってもらってネタばらしをしたら落胆の声が帰って来た。

「まあ、唯奈が殺されるのは予定外だったけど」

姉さんが言う通り、元々は何らかのもめごとが起こったところで魔術協会本部からの『支部長及びその周辺の処断』と村井一佐による『特務隊上層部の入れ替え』を起こす予定だった。

その『もめごと』が組織トップの射殺という極上のモノになった訳だけだ。

「で、ゆうなはなんで楓の膝の上に座ってんの？」

そう、遥が言ってきた。

……実は、そうなのである。

「だって」

何故、私は楓の膝に座っているのか

それは…

「準精霊状態って『なんにも肌で感じられない』から、かな」

撃たれて機能停止した肉体を修復して違和感がなくなるまでの間は感覚が希薄で視覚と聴覚くらいしか正常に働かない。

まあ、ぶっちゃけると

「要は人肌が恋しいだけ、でしょ」

やれやれ、と言わんばかりの姉さんにそう言われた通りなのである。

「甘えんぼだなあ〜」

「えへへえ」

楓の手が私の頭をわしゃわしゃとかき混ぜ、私はその感触が嬉しくて笑う。

>きーんこーんかーんこーん<

「おっと予鈴だ。それじゃあ今はここで解散。各校の生徒会室にゲート開くよ」

私がパチン、と指を鳴らすと七つのゲートがそれぞれの学校へとつながる道を開く。

楓の膝から降りない理由は…まあ、察して欲しい。

説明会参加者が全員それぞれの学校に行った事を確認してゲートを閉じ、私たちも教室に向かうべく移動を始める。

流石にその時は膝から降りた。

「さて、今日も一日頑張るぞー」

その日、私の機嫌は中々に良かった。

その日の晩までは。

夜、聖奏の校庭　それも帰宅間際で昇降口にいた私たちの目前に『  
極小の歪み』は現れた。

慌てて鞆を手放し、戦闘態勢を取る私たち。

当然のように結界を張って対峙しようと思ったが、現れたのは予想  
外の存在だった。

「え？」

皆があげたその声こそが、全てを代弁してくれていた。

## # 1 2 5 (後書き)

今回は戦闘無しの回になるかもしれません。

大学が地震で今月一杯は立ち入り禁止（許可を取り教職員付き添いなら可）になったのでヒマが出来てしまいました。

故に明日からの三連休中に（まあ春休み中なんで連休も何も無いけど）、筆が進めばもう一話行けてしまつかも…

ちなみに、作中では# 1 2 - 5 終了時点で11月の四週に入ったところ位です。

次はクリスマス（終了式）あたりかな？

#13 1 (前書き)

更新です。

また一週間内に出来なかった……

ただ、戦闘のネタが尽きつつあるんですよね。

『幻魔アイディア』の募集でもしてみようかな

楓は、気が気でなかった。

「楓ちゃん、もう少し落ち付いたら？」

「これでも落ち付…こうしてます」

楓は自分が『落ち付いている』と言える状態ではないと自覚しているので『落ち着こうとしている』と言い換えた。

それにそう尋ねてきている琴音も、落ち付いているようには見えずそわそわとしているからおあいこだ。

帰宅から数刻。

夜が深まる中二人はただ部屋の前で落ち着きなく時間が過ぎるのを時たま、意味のない会話を繰り返しながら待っていた。

\* \* \*

「楓、物凄く眠そうだけど大丈夫？」

大あくびをする楓を気遣い半分、訝しみ半分で遙は眺めていた。授業中も居眠りとはいかないまでも半覚半眠、休み時間は全部爆睡という状態だったのだからそれもある程度は致し方ない。

「琴音さんも眠そうだけど…二人で何かしてたの？」

そこには『何故誘わなかった』という憤りも含まれている。

「んー、ゆーなの寝顔観賞会」

「うわ、ズルイ。私も」

「を兼ねたホラー映画リレー」

「パス」

楓は遙がホラー系が大の苦手と知って敢えてそう言った。

以前、ちよつとした手違いでホラー系映画の一番怖いシーンを目撃してしまった遙が、唯奈に抱きついて翌朝まで涙目&べったりだった様子は楓の脳裏にしっかりと保存されている。

ちなみに、楓はそのことをこの友人が結婚式を迎えた時に大々的に暴露する予定だ。

当然、『本当のこと』は黙っているように念を押されているから言うつもりは全くない。

「……ってか、よくもまあそんな事を平日にやろうと思うね」  
翌日のこと考えなよと言外に行ってくる遙

「まあ、和葉さんの思い付きだし」

「あ、なんか納得」

「それで納得するんだ」

楓にも『なんだかなあ』と思いつつも『あの人ならやりかねん』と

思う部分がある。  
確かに、理屈じゃなく勢いとかそういうので納得させられてしまうのだ。

「さてと、企画書読みはこの辺にしようとして、アイディア練りに移行しようか」

「そだね」

楓が言うと、遙もそれならいそれまで読んでいた事務ファイルを置いて机に向かいメモになんだかんだと書きこみ始める。

もうすぐ十二月。

基督教系学校ではないが、日本人のお祭り好きな気風をしつかりと継いでいる聖奏のクリスマスパーティー（生徒会主催）の企画立案が今の二人に課せられた仕事だった。

\* \* \*

「遅いわよ、楓ちゃん」

「すみません」

「まあまあ、まだ予定の集合時間の五分前よ？」

琴音と楓、そして和葉の三人が藤谷家に集合したのはその日の夜だった。

集合した、というか唯奈によって呼び集められたのだが、その理由はまだ伝えられていない。

『居合わせた』琴音と楓は、若干予想は出来るが相手はあの唯奈だ。きつと斜め上に行ってくれるだろう。

「あ、みんな揃った？」

そこに、唯奈が現れた。

明らかに疲労の色が見て取れる唯奈を、『珍しい』と眺める三人。

「ええ。でも、何のために私たちを？」

代表して最年長者 - というか親の和葉が尋ねる

「ついて来て」

そう言っつて案内された先は夏休み以降『開かずの間』として扱われてきた場所 『誠の部屋』だった。

部屋の前に立ち、琴音と楓は大体の事は予想がついた。

「ここ、誠の部屋よね」

「私になってからは『開かずの間』扱いにしてあったけど…」

その封を昨夜、破った。

「この中に、何が有るの？」

唯一、全く知らないで呼ばれた和葉は問う。

「……………この中でなにかあっても、落ち付いていてね」

そう念をおしてから唯奈がドアを開く。

そこには、——がいた。

「あ……………」

和葉から声にならない声が漏れ、琴音と楓は予想が八割方有っていた事を確信した。

「『彼』が現れたのは昨日の夜。私たちの前に突然、『幻魔と同じ方法』で現れたの。刀傷らしき致命傷一歩手前の傷を負った状態で。」

そんな唯奈の説明だが、今の和葉にはまったく届いていない。

和葉にとっては、そんな些末な事よりもベッドに寝かされている少年の事の方が大事だ。

「それで、私が治療を兼ねて調べてみたんだけど…彼は」

「まじと…」

「そう。二ことは違う世界の、藤谷誠。正しくは、その抜け殻だけだ」

「抜け殻？」

「それって、どういう事？」

ベッドのそばで物言わぬ息子を前に立ちつくす和葉をひとまず置いておいて、琴音と楓はそれぞれ疑問を口にした。

「魂が、破損しちゃってるんだ」

唯奈の説明はこうだ。

人間を含む『生き物』は三つの要素で出来ている。

一つ目が存在その物である『魂』。

二つ目がこの現世においては不安定な魂の入れ物である『肉体』。そして三つ目が魂と肉体を繋ぐ『精神』。

今目前にいる誠は『魂』が一部欠けてしまっている為に『人間』として存在していられないのだという事。

例外としては『魂と精神だけ』で存在する『精神エネルギー生命体』である精霊と『魂だけ』で存在出来てしまう唯奈が挙げられる。

が、精霊は『物理干渉』をするために『擬似的な肉体』を構築する必要があるので三つの要素全てを備えていると言える。

唯奈は 問答無用な例外中の例外、チートでもバグでも好きに呼べ状態なので考慮外。

そもそもで『最低限魂がないと存在しえない』という点は変わらない。

それでも理解の範疇外にある二人は知恵熱がだんだんと危険域へと向かっていく。

「パソコンに例えるなら魂がOS、肉体がハード、精神がドライバってところかな」

そう言われても使えるけど詳しくない二人にとっては全く理解できる内容では無かった。

「…で、結局のところ何のために楓ちゃんと母さんと呼んだの？」

知恵熱で痛む頭を抱えながら琴音が問う。

「…この『誠』をこの世界の誠として修復しようと思うんだ」

「出来るの!?!?」

それまで無反応だった和葉が飛びついてきた。

「えっと、『元々は誠だった魂』を持つてる人間がここに二人いるでしょ。」

当然ながら、それは『元は誠の持つ女性的人格』であった唯奈と『元は誠だった身体に宿った新たな人格』である琴音の事である。

「それだったら私と和葉さんはなんで？」

楓の疑問は『魂同士で何とかなるなら自分たちは不要なのでは？』  
と言う物だ。

それに対しての答えは、至極単純だった。

「だって、人間て一人じゃダメでしょ。魂に記録されている『誠』、  
別人格からみた『誠』、他人からみた『誠』：みんな『藤谷誠』の  
要素だよ」

「だったら、遥でもいいんじゃないの？」

そこで、楓はあえて親友であり恋敵である少女の名を出す。

だが、

「誠との付き合いが一番長い他人が母さんで、その次が楓だからね。  
それに、遥の中の誠は大部分が女装中だし」  
つまるところ、『少年 藤谷誠』として修復するには無駄というか  
邪魔になるだけ。

唯奈の『楓の恋は成就して欲しい』という個人的感情もある程度含  
まれているがそこまで手を出すつもりは無い。  
あくまで、本人に任せるつもりである。

それはともかく。

こほん、と似合わない咳払いをして唯奈が三人と誠の間に立つ。

「まったく同じとは言えない、『限りなく近い存在』でしかないとしても やる?」

その問はその場にいる全員に向けられたものではあるが、実質的には楓と和葉に向けられたものだった。

そして、その答えは

翌日 -

聖奏学園男子部の高等部一年三組ではいつも通りのHRが進められていた。

点呼による出席確認。

担任の今松教諭はクラスの中一点だけ空いている席を内心痛ましげに眺めつつ出席を取ってゆく。

「手塚」「はい」

その次は…

「藤…」 「今松先生」

『藤谷は休学中』そう、眩きながら出席簿に書きいれようとした直前に教室の前扉がノックされ、出席確認は一時中断となった。

現れたのは男子部教員の中では数少ない女性である養護教諭だった。

「なんででしょうか      ！」

呼ばれるがままに廊下をうかがい、言葉を失った。

そんな様子を怪訝そうに教室の中から眺める一団の前に戻って来た今松先生は

「あー、嬉しい知らせだ。」

そう、切り出した。

『何が嬉しんだ？』『転入生か？』『男の娘希望！』

そんな声がちらほらと出る中…

「よし、入れ」

今松先生の声に合わせて、前扉が開かれて現れたのは

「今日付けで、藤谷が復学する事になった。」

夏休み以来姿を見せず、いつの間にか休学になっていたクラスメイトの一人。

「色々と聞き出したいこともあるだろうがそれが原因でまた休学でもされたらたまらんからな。ほどほどにしておけよ。」

そう言って誠に自分の席に着くように促す今松先生。

「それでは、出席確認を続けるぞ。藤谷」

「はい」

夏休み前の交換留学から合わせれば五カ月ぶりのクラス全員出席に  
今松先生は感動と歓喜で胸が一杯だった

そして『いつも通り』に出欠確認が終われば連絡事項の申しつけが  
有りその後は…

「今日も一日勉強に励むように」

いつも通りの定型文が終われば授業開始までのわずかながらの雑談  
の時間がやって来る。

普段ならば気の合う仲間同士で軽く行われるソレだが、今回は事情  
が違う。

「藤谷、テメなりに五カ月も学校休んでんだよ」

「少しは連絡くらいしろつての！」

「突然休学って驚いたんだぞ」

当然の如く、ここ最近の日常にとっては異物であり、本来の日常に  
としては有るべき存在であった藤谷誠その人に集中した。

「悪い悪い。突然の事でこっちも手が回らなかったんだよ。せめて  
で出来たのが休学届だ」

突然の集結に驚きつつ、軽くどつかれながらも答える誠が浮かべる  
のは苦笑。

「で、休学中何やってたんだ？事と次第によってはこの場がそのまま処刑場だ。」

全員が聞きたい一番の内容を、景山が尋ねた。

「OK、とりあえずみんな殺気をまきちらすのは勘弁してくれ。運悪くイギリス（むこう）の研究者に目をつけられて実験台になってただけだ。あのマッドは、人を掴まえて実験台にしてそのまま何ヶ月も拘束してくれやがった」  
そういう誠にクラスメイト達は問う。

「その研究者<sup>マド</sup>つての、どんな人だ？」

もし、その答えが女性（特に美女）だったらこの場は流血沙汰の殺人事件現場と化していた。  
だが、

「愛想の悪い五十くらいのおっさんとその助手の二十そこそこの野郎<sup>ワ</sup>だよ」

うらやむどころか逆に同情すらしたくなるメンツだった為、事なきを得た。

「で、どんな実験の実験台だったんだ？」

理系の誰かが興味本位で言った、そんな問い

だが、その問をぶつけられた直後に数瞬ながらも硬直した誠はどこか明後日を見るような達観した顔で言う。

「留学前の自分がどんだけ人生を楽しまなっていたかが判ったよ。  
…走馬灯があんなに単調だったとは」

少なくとも、それでクラスのほぼ全員は理解をした。

『あの真人間にして真面目の権化とも言つべき藤谷誠を俗世に戻らせるほど、苛烈だった。ついでに走馬灯を見るほどにも』

「…今度、遊びに出る時には誘つよ」

同情ムードが一気に広がり、そうこうしているうちに一限の担当教員がやってきた。

復学の知らせをまだ受けていなかったらしくひとしきり驚いた後、チャイムが鳴り学生の日常である授業が始まった。

\* \* \*

「えっと、今日付けで藤谷くんが復学、生徒会にも復帰しました。ちよっとばかり休学中のトラウマのせいで人格変調が起こってるかもしれないけどまあ、生温かく見守ってあげてください」

呆然とする生徒会の皆（姉さんと楓以外）の前で私は誠を立たせてそう宣言した。

「おいおい、人格変調ってなんだよ。あと、『生』は余分だろ」

そう律義にツツコミを入れてくる誠はガン無視。

ついでに遮音の結界の中に閉じ込めて本人には全く聞こえない状態にしてから私は言葉をつなぐ。

「前に、支部を襲撃して回収した『本来の体』が宿した人格なの。だから、正真正銘の藤谷誠だけど、以前の誠とはちよつと違う。

要素である私と姉さんが抜けてるからでもあるんだけど」

そう言ったら氷室先輩が困惑気味に聞いてきた。

「つまるところ、ちよつと人が変わったが藤谷だって訳か？」

「そうですね。」

「なら、俺は何も言わんよ。梨紗は？」

「私も同じかな。凜は？」

「問題なし」

先輩方の中では『問題なし』の判断が下されてゆくなか、複雑そうな表情をしているのは楓と遙だ。

「それでは、顔合わせは後に回して…クリスマスイベントの関連は…氷室先輩」

私が振ると

「ああつと、会計関係については今、佐伯を仕込んで。中々に使えるが経験不足は俺が補う予定だ。」

つまり、会計は今のところ問題なしと。

「次に梨紗先輩」

「こつちも楓ちゃんを指導中。ま、文化祭からやってるから大分飲み込めてると思うから相談役程度で済んでるわ」

二人とも、中々に頑張ってるみたいだなあ

「それじゃあ、楓、遙。企画の方は？」

そう、二人を呼んでみる。

敢えて両方を指名したのは、どちらがこの件についての主導権を握っているのか、それとも同格でやっているのかを見るためというの  
も少しある。

案の定、二人は数瞬の目配せの後楓が立ち上がった。

つまり、限りなく同格で表向き楓がリーダーと言う訳ね。

「企画に関しては過去資料から大体の方向性は決定済み。現在は『可能な範囲内で出来る限り』を模索中」

「判りました。施設利用に関しては十二月二十四日、丸々一日学校全体を使えるように申請してあるからいくらでも都合出来るので必要なら私に連絡してください。今のところ仕事が無くても後で出来

た時は問答無用で呼びだすからそのつもりで。」

そう言ったら必要な三役：会長、副会長、会計以外の役職を振られている面々が不満げな顔になる。

そっかー。そんなに嫌なのかー。じゃあ

「それじゃあ、今から割り振「勘弁してください」それじゃあ解散です。」

用のない面々（晶とか篠田とか）はさっさと帰宅準備を始め、先輩たちものんびりと。

仕事があるのは企画発案を一任された楓と遥、色々な決済がある私のみ。

まあ、誠と姉さんは生徒会室内の席の配置があると言えはあるわけだけどツバキが勝手に使っていた席を開けるだけだからすぐに終わる。

結果として、夕日の差し込む生徒会室に残るのは私と楓と遥の三人のみ。

「……」

無言が支配する生徒会室に、筆記音だけがやけに大きく聞こえた。

「あのさ…」

「何？」

唯奈が『ちよつと息抜きに散歩してくる』と生徒会室を出て行って少しした時、遙がようやつと声を出した。

「誠の事、知ってたの？」

遙が問うのは『誠が復活したことを知っていたのか』と言う事。

それに気付けたのは生徒会室に誠が現れた時に楓が驚かなかったからだった。

「…まあね」

それに対し、楓は嘘は言わなかった。

「丁度、琴音さんと三人で居た時の事だったからね。あのホラー映画のリレーの時」

方便とはいえ、表向きはそういう事になっているのだから、嘘をつく必要がない。

そう言われて、遙はごくりと息を飲んだ。

楓が遙も誠に好意を抱いている事を知っているのと同様に遙も楓の意中の相手を知っている。

互いに、ライバルとして認めあつた上で争い、親友をやっている。

故に、遥には『先を越された』という焦りがあつた。

「…負けないから」

最悪、友人関係すら壊れてしまふかもしれない。

だが、相手として対等に見るからこそ遥はそう言つた。

だが、

「…欲しかったらあげるよ」

楓が言つたのは事実上の敗北宣言だつた。

「え？」

遥は耳を疑つた。

あれだけ幼馴染に熱をあげていた楓がこつもあつさりど？

あれだけ、周到に外堀埋めをしていたというのに？

疑問は山ほど浮かんでくる。

「どつして？」

「んー、なんか違つんだよねえ」

楓は言いながら、窓の外の夕焼けから夜空へと変わりつつある空を

見上げた。

「違う？何が」

「んー、なんとなく」

楓の答えは漠然とし過ぎていて遥にはよく分からない。

だが、楓にとってその『なんとなく感じる違い』は大きい。

『初恋が何故甘酸っぱいと表されるのか』を知ってしまった身としては、いくら想い人に似ていても別人としか扱えない位に。

もちろん、『高槻楓は藤谷誠の幼馴染である』という点は変えようがないから今まで通りに接する。

だが、あくまで幼馴染であって恋心を寄せる相手では、最早ない。

楓にとって、『藤谷誠』という少年は既に手の届かない場所へ逝ってしまった『過去の人間』なのだから。

「だから、私はもういいかな」

楓の顔は、どこか懐かしむような

ちょうど、その時だった。

「何が『もういい』のかな？」

「ひゃあッ!？」

楓は背後から近付いてきた誰かに冷たい物を頬に押しつけられて悲鳴をあげた。

「あ、おかえり」

遙は予想外の悪戯に目を丸くしながらも戻って来た唯奈に声をかけた。

「ただいま。ふっふっふー、はい」

楓と遙のデスクに一本ずつペットボトルのミルクティーが置かれた。先ほど、楓を強襲した『冷たい物』の正体がコレだ。

「頑張る次期副会長と次期会計に会長からの御褒美だよ」

そう言うってから唯奈は会長デスクに戻って残っていた書類の処理を再開する。

唯奈の乱入で会話も仕事も中断となった二人は互いに見合わせてから苦笑いを浮かべ

「それじゃ、ちょっと一休みといこうか」

「そうだね」

唯奈が買ってきてくれたボトルのお茶でしばしの休憩

「そつえばさ、」

「ん？」

「誠の何処に惚れたの？」

「ぶっ!？」

楓に振られた話に、危うく吹きそうになった遙は思いっきりむせた。

「けほっ、けほっ………このタイミングでその話題振る？」

「まあ、思い付きだし」

しらっ、と言われると納得以外の何もできない遙は口をつむぐ。黙る口実に紅茶をゆっくりと飲み続ける。

そんな様子に楓は溜め息をひとつ。

「その様子じゃ、気付いたら惚れてたってところかしらね。」

まあ、大体正解である。

「そっという楓はどうなんよ」

紆余曲折、かくかくしかじかがあるのだがほぼ凶星を突かれた遙は反撃と言わんばかりに質問を返す

「私？私は…幼馴染だったからね。ずっと一緒、それが当然って感じだったかな」

が、楓はほぼ即答。

「ふ、ふーん」

そのあっさり具合に答えに窮した遙はなんとか流す事しかできなかった。

「……………」  
「……………」  
「……………」

再び、部屋を捺印と紙の上をペンが走る音だけが支配する。

「まるで、暴露大会」

唯奈がぼそり、と言ったとき、楓と遙は椅子をけたげて立ち上がり

「それだっ！」

同時に叫ぶ。

それには眩いた張本人が驚いた。

「クリスマスなんだから、ちょっとくらいぶっちゃけても大丈夫でしよ。」

「先に叫びたい人を募集して…」

二人が何やらメモを一気に書き上げて唯奈の前へ

「企画書提出します！」

二人で唯奈に差し出すと、唯奈は残り数ミリまで薄くなった未処理

書類の決裁を中断して、企画書に目を通す。

「まあ、手間がかからないと言えはかからないけど…手抜きと思われない程度に詰めないとダメだよ」

唯奈はそう言いながら白紙の企画書を数枚、会長デスクから出して二人に渡す。

それは事実上の『Goサイン』であった。

「よっし、それじゃあ盛り上げる方法考えよ！」

「そうね…ぶつちゃけ告白の一つでもあればお祭り騒ぎな訳だけど…」

盛り上がる二人を前に書類決裁に戻った唯奈はふと思う。

『聖奏所属の男子相手に告白した場合、その男子が袋叩きに遭うんじゃないのかな』

それは、唯奈の中に残る『誠』の記憶で経験した事だった。

ま、何とかするだろうと放置を決め最後の一枚に印鑑を押し終わったところで

「はい、今日はここまで」

手をパンパンと叩いて盛り上がる二人を冷却する。

「もう大分暗くなってるし、帰る」

ほらほら、と唯奈に言われて二人は議論を中断、帰宅準備を始める。おそらく、放っておけばいつまでも議論を続けてくれるだろうから、丁度誰かが終えたところで中断させるしかないのだ。

「あ、そうだ。近いうちに誠と姉さんの戦力測定するから、心の準備だけしといてね」

「了解、ゆーな」

その返事は二人分びつたりと合っていた。

\* \* \*

「んー、これって何というか…」

「ある意味じゃ相性抜群って言えるけど…」

「まあ、見事なまでの天敵な訳か」

私たちは目の前で繰り広げられる一方的な戦闘にそんな感想をこぼした。  
ワンサイドゲーム

無論、そんな余裕が実戦であるわけが無くこれは姉さんと誠がどんなタイプなのかを見極めるための模擬戦だったりする。

とりあえず、二人ともやや戦闘向けっぽかったから手っ取り早く二人で手合わせしてもらったんだけど…

姉さん：中長距離殲滅型・指揮官適性有

誠：近距離格闘型

見事なまでの相性で誠が一方的にやられまくってる。

「どわぁっ!?!」

「ちよこまかと…次っ!」

姉さんの一方的な弾幕が接近しないと攻撃手段の無い誠をかすめ続ける。

それでも誠は意地か弾幕を避け続ける。

避け続けて、避け続けて、避け続けて…

「あ」

スタミナ切れか、息をついたかしたところで一瞬だが足が止まった。

そんな好機を逃すはずもなく全弾斉射を叩きこむ姉さん。

「うわ…誠大丈夫かな」

遥と楓はやや心配そうに。

けど、それは無用だと私は判っていた。

「まったく、とんでもない切り札カードを持つてるなら最初から出せば楽に終わってるのに」

今の誠は『私たちの持つ誠の要素』で補修した魂を持っているとはいえ、元は別の世界で成長し魔術師となった藤谷誠の物。当然、魔術の適性なんかは向こうの方に準拠する。

それは、私や姉さんが知らない『手』を持っている可能性を意味していて…

びたり

姉さんの首筋に冷たい鋼が触れる。

それは訓練用に刃を潰してある、誠の獲物の先端から三十センチのところだった。

「これは、勝負ありってところかな」

砂埃が落ち着くと、誠の持っている刀の半分ほどから先が何かに隠されたかのように見えなくなっていた。

「そこまで。二人ともお疲れ様」

私はスポーツドリンクを二人に渡しに行った。

「空間接続？」

楓と遥と姉さん、三人の声が重なった。

「そう。二点間の距離をゼロにするほぼ魔法に入る魔術だよ」

「それって、ゆうなが使ってるのと同じヤツだよな？」

楓がそう聞いてきた。

「まあ、大体はな。俺にこいつほどの事は出来ないが」

と誠が親指で指さしてきた。

誠の限界は直径三十センチほどの穴で十メートル先に一分間継続だ  
そつだ。

ちなみに私は直径二メートルほどの穴を距離の制限ほぼ無し、かつ  
並列起動可。

出口はイメージできれば問題なし。失敗したら『かべのなかにいる』  
とまではいかないまでもうまく空間が繋がらない。

「人間辞めてる私相手じゃ、前提条件から違うでしょ」

『魔法使い（じんがい）とレベルこそ違えども同じことが出来る』  
と言う意味では『魔術師（ひじうし）としては最高クラス』の証明ともいえる。

「そりゃそつだ」

とはいえ、真っ向からの人外認定は割と凹む。

ペし

「くら」

「あだっ」

そしたら楓のわりと鋭いツッコミが誠の後頭部を一撃

「何すんだよ！楓」

「まったく、肯定されても嬉しくない部分があるって察しなさいよ」

べしっ

「痛てえ！」

「人の気持ちを察せない人って…」

「ひどいよね」

楓の直接殴打、姉さんと遥の非難を一身に浴びることになった誠はその数分後、部屋の片隅で正座させられていた。

「と、誠の弾効はそれくらいにしておいて…楓、企画の方は？」

「粗方完了。今は叫びたい人の募集期限待ち」

「それじゃ、段取りとかの相談」

『空間の歪みを感知。隔離班出動』

はあ、と息をいれてからその後の文章を切りかえる。

「の前に幻魔退治だね。姉さんと誠は初陣だけど、見学だけにしとく？」

当然、私も本気で言ってる訳じゃなく八割半が冗談。

残りの一割半はさっきの模擬戦で魔力切れギリギリになってる可能性もちょっと考えて。

「冗談」

「実力を見せつけてあげるとしましょうかね」

当然のように帰って来た二人の参戦表明に私は自然と笑みを浮かべる。

このメンバーでなら、きっと無敵だ。

そう、確信できるから。

「それじゃ、出動！」

私たち五人だけでも幻魔相手に十分オーバーキルなのに第六高との共同作戦になった物だから…

「なんというか、完全に殲滅戦だねえ」

私はのんきにそんな事を言ってもらえる位、戦況は優勢だった。

ゴブリンみたいな数の多いのは遙や姉さんのガトリングガンのような魔力弾の豪雨が片っ端から吹き飛ばしてゆく。

逆に一発で倒せない中型以上は誠の斬撃が一体ずつ始末してゆく。

それなりに手強いのが数集まっている時は楓の豪炎と白澄さんの雷撃で一掃。

時々、私の所までやって来ることがあるけどもうボロボロの死に体なので軽くど突いてあげれば簡単に消えてゆく。

結果として、以前なら出現に間に合わず幻魔（本体）の出現を許してしまっていたところを今回は余裕を持って中心部へ到達。

相手が出てくる前に歪みを解消させて出現を封じることが出来ていた。

…今回に限って言えば、封印が間に合わなかったら『楽に逝く』じゃ済まない威力の集中砲火を浴びてた訳だから幻魔にとってラッキ―だったんじゃないのかなと、つい思ってしまった。

「まあ、こんな調子でクリスマスまでに始末がつけばいいけど…」

十二月二十四日は、もう目前まで迫っていた。

\* \* \*

「それではみなさん、羽目を外しすぎない程度に楽しんでください」

あつという間にやってきたクリスマス・イブ十二月二十四日。

『野暮だから』と言う理由で学園長挨拶が省かれ、私が生徒会長挨拶を終えると煌々と照らされた校庭で吹奏楽部有志の演奏をBGMにパーティーが始まる。

クッキング部やPTA、教職員が用意した飲み物や軽食が振舞われ、生徒会で用意したツリーの電飾に光がともる。

『走れそりよ 風のように 雪の中を 軽く早く 』

誰かが吹奏楽の演奏に合わせて歌いだす。

『笑い声を 雪にまけば 明るい光の 花になるよ』

思えば、クリスマスなんて今まで祝った覚えが無かった。

ただ、世の中がそう騒いでるなあ、程度。

あとはその後でケーキが安売りしている事が多くなる、位の認識。

だけど…折角だから

「ジングルベル、ジングルベル、鈴が鳴る」

街を歩けば必ず耳にする歌詞を、私も口ずさむ。

「鈴の、リズムに 光の輪が舞う」

ふと、背後から声がして振り返ったら楓と一緒に歌いながら、両手に持った紙コップの片方を差し出してくる。

『ジングルベル ジングルベル 鈴が鳴る』

私はそれを受け取り

『森に 林に 響きながら』

「メリークリスマス」

乾杯をしてから、二人で空を見上げる。

空には、丸い月が輝いていた。

\* \* \*

しばらく楓と色々食べ歩いた後、私は一人裏庭に来ていた。

裏庭といっても校庭の外れにある用具庫とかの影にあるちよつとした林でしかないその場所に私は念の為の結界陣を張っておいた。

その確認の為に来た訳。

「うん、術式も正常稼働中だし隠蔽もばっちり」

念には念を、ただそれだけの為。

『それではこれより、生徒会企画『大暴露大会』を始めたいを思います。みんなあ！準備はいいかあ！』

『おー!』

『なお、発言の危険度によっては問答無用で舞台上から消すんでそこんところよろしくお願ひします』

『うおおー!』

どうやら、遙たちが始めたみたい。

安直なネーミングは言いかえれば内容が判り易いと言える。

だからこその参加人数だったみたいだけど…

『それでは、エントリーナンバー一番はこの人だー!』

楽しそうで何より。

「さてと。そろそろ戻ると　ッ!」

よりによって、こんな時に…ッ!

私は自分の見通しの甘さを怨んだ。

敵は何も幻魔だけじゃない。

魔術師だっている。

いくら敵対組織である魔術協会の支部を叩いたとはいえ、活動できる魔術師がいる限りは警戒をしておかなきゃならなかったのに…

用意した備えは敵意を持つ人間に対する認識阻害の他は全て対幻魔用の空間の歪みを封じ込めるためのモノでしかない。

私は臨戦態勢を取りつつ人払いと認識阻害の結界を張る準備をする本来ならそれじゃ不十分だけど今すぐできるのはこの程度でしかない。

「ったく、折角のクリスマスだっていうのに！」

悪態をつきながら、私は侵入者の元へと急ぐことにした。

向かった先は、正門。

そこで結界に引っ掛かった存在が二つ。

そこに居たのは…

「君たちは………？」

中等部の生徒らしき二人組

いや、どう見ても聖奏の中等部の男子生徒。

どうしたものやら…

不審さ満々な状況に警戒しつつ私はその二人に近づく事にした。

「ッ  
！」

# 1 3 4 (後書き)

唯奈の身に何が!?

正解は次の話で

「あれ、ゆーなは？」

「十分前くらいに『ちょっと見回り行ってくる』って、  
遙かに尋ねられて楓は少し前の事を思い出す。

「どうかしたの？」

「いや、ちょっと姿が見えないから…それに、そろそろ『あれ』の  
用意もしてもらいたいし…」  
そう言われれば時間的に『そろそろ』だ

「わかった。それじゃあ私が探してくる」  
遙は司会進行の仕事があるから動けない。  
故に唯奈と同様に『着替え』なくてはならない為にシフトから外さ  
れている楓が動くことになる。

「お願い」

「任された」

楓は『唯奈ならどんなふうに見回りをするか』を考えながら駆け出  
した。

背後で『放せー』とか『勘弁してくれ』とかの悲鳴っぽい声が聞こ  
えたが重要度の差から放置した。

\* \* \*

「く あ ー」

なすすべなく抑え込まれ首を締めあげられていた。

相手が単なる『協会の支部長派の残党』なら問答無用で消し飛ばしていたかもしれない。

だが、今回の相手は後輩、一般人だ。

だから直接的に応戦できないで、おそらくこの二人を操っているの  
であろう術者を探す事しかできないでいた。

振り解くことはできる。

出来るけど、その後で何が起こるか最悪の場合を予想出来てしまう  
故に、出来ない。

また、身体を置いてここを離れることもできるが、やはり出来ない。

いくら肉体が存在しなくても存在出来ると言えども、そう自由自在  
に肉体を捨てられる訳ではない。

『器』との接合を解くというのは想像を超えるほど精密な術式の元  
で行う必要がある。

その『精密な術式』は首を絞められるという脳が警告信号を出して  
いるような状況で扱えるようなシロモノではない。

術式に頼らない唯一の例外が『肉体が死亡し（こわれ）た時』なの  
だが、相手方はそれを警戒しているのか、それとも長々と苦しめよ  
うという魂胆なのか、致命的な状態に至るまでやってこない。

それにそういう魂の離脱は死ぬほど痛いし、死ぬほど苦しい思いをしなきゃならないのでご免被りたい。

故に、やられるがままになっていた。

何か、きっかけさえあれば…

「ほげうつ!?!」

男の悲鳴。

同時に押さえつける手と、首を絞める手から力が抜ける

「いまだあつ!」

強引に二人を跳ねのけ悲鳴をあげた男の方へと跳ぶ。

跳んで、何故か楓の胸に飛び込んでいた

「ちよ!?!」

「えっ!?!」

私は楓が飛び出してくるとは思ってもみなかった。

きつと楓は、さっきまで首を絞められてた私が跳んでくるなんて思いもしなかったんだろう。

私の方がやや勢いがあつたせいか、受け止めることになつた楓はそのまま後ろへと尻もちを突くことになる。

「なにやってんの」

マナの冷やかな声に気付けば私は転んで尻もちをついている楓の胸に顔を埋めていた。

あ、やわらかくてなんか落ち着く。

…同い年なのに一枚板と連山というこの差がなんとも恨めしい。  
こんな体で生みだしてくれた生みの親を恨　　じゃなくて

「わわわ…ごごご、ごめん！」

私は慌てて飛び起きる

跳び起きたら、顔が紅い楓とさっきの男を踏みつけて時々躡っているマナと操られていた二人を介抱するツバキが居た。

「あ、え、えつと、大丈夫なの？」

そう言いながら立ち上がる楓。

ちよつと罪悪感。

「う、うん！相手も致命的なところまでやってこなかったから、それにこれ位なら慣れてるし」

「首、痣になつてる」

楓の手が首筋に触れて…あ、冷たくて気持ちいい

「楓さん、この子たちの処置とその後始末は私たちでやっておき

ますから」

「ハルカが待つてるんじゃないの？」

「あ、そうだった。首の痣とか、消せる？」

「まあ、それくらいなら」

流石に、規模が大きくなれば大きくなるほど治癒にかかる時間は延びる。

けど、痣くらいなら数秒もあれば…

「じゃ、すぐにやって。着替えないと時間おしちやってるし」

「え？え？え？」

言われるがままに全身に魔力を流してやり痣を消したらすぐさま楓に手をひかれ、訳の分からないまま走り始めることになった。

\* \* \*

私と楓がサンタクロースの衣装を着て舞台袖に入ったら

「遅かったじゃないの」

「……………」

遥と、何故かミニスカサンタが居た。

長身で美人なその人物。今は無表情だが笑ったりでもすれば道行く人のかかなりの割合が振り向きそうだ。

言うまでも無く、例によって例の如くな感じもするが誠である。

その顔は羞恥と寒さが限界突破して表情すら消えているけど

ちなみに、最近は母さんの写真のモデルは姉さんが『二代目』としてやってたりする。

それはともかくとして

「何というか、惨い」

血の気が引いて青白くなった誠は、確かに常人離れた白さを見せつけている。

「さて、それじゃあ始めるから合図を出したらこれをバラまいて」

私たち三人に渡される袋。

典型的なサンタクロースの格好になった私たちが配る、プレゼント。

「それじゃあ…準備して」

カウントダウンが始まり、ゼロカウントと同時に照明の殆どが一斉に落された。

『何!?!』

『停電!?!』

あわただしい、悲鳴混じりの声。

「ゴォー」

遙のゴーサインと同時に私たちは舞台上へと飛び出した。

\* \* \*

まったくの蛇足かもしれないがこの聖奏のクリスマスイベントは誰でも参加する事が出来る

故に、第六高校に籍を置く白澄里桜がここにいることも何ら不思議では無かった。

里桜は会場で出会った聖奏の晶や雅人（二人は会場警備を兼ねてここにいる）や襲撃の際に一緒に突入した第四の結城愛衣や第三の七瀬純と一緒にになってなにやらあわただしく動く舞台の方を眺めていた。

ばちん

『何！？』

『停電！？』

突然の消灯にあわただしくなる周囲。

晶や雅人は全く聞いていないのか一緒になって慌てている。

周囲が慌てると逆に冷静になるという状況を実感しながら里桜は舞台の方へ眼を向ける。

トラブルじゃなければこれは何かの演出の為のもの。  
ならば…？

そういう里桜の読みは見事的中し、スポットライトに照らされたのは

「わあー」

男子を中心とした歓声。

舞台上に現れたのは三人のサンタ娘だった。

ちっちゃいサンタは会長である唯奈、中くらいのサンタは楓。

大きいサンタは誠なのだがそのことに気付いている者は殆どいない様子だ。

周囲からは『かいちよー』という歓声や『おい、あの美人だれだ？』という男子のリサーチの声が溢れかえる

「みんなー、メリークリスマス！」

唯奈が袋から何かを取りだして投げると、ちょうどそのタイミングで『ひゅるるる…』という特徴的な音がして皆して空を見上げる。

ばーん

破裂音と共に広がる花火の光。

花火の光に見惚れていると、ふと手に何かが触れる。

「いつの間にか…」

里桜は自分の手を見て苦笑する。

いつの間にか、小さい箱が手に握らされていたのだから。

きつと、気付かれないように花火を打ち上げておいて、魔術を使っただろうと里桜は予想する。

基本的に里桜たちが使う魔術は『守るための攻撃』が殆どだ。こんな風に、夢のある使い方は初めての事。

最後の、三人が同時に投げ上げて連射が終わると照明が復活して花火の終わりを告げる。

そして、一足先に気付いた里桜と同じように、その手に渡されたプレゼントに気付く。

「すごい、なんだか魔法みたい」

そんな声。

それをやっていたのが『正真正銘の魔法使い』だと知る一部は笑い

を堪え切れずに笑いだした。

それがいつの間にか伝染して笑い声が広がってゆく。

クリスマス・イヴの夜はこうして更けてゆく。

学校のイベントだから終了は九時前と定められているが、それが終わるまでの間…

僅かな間とはいえ、『笑い声』と『笑顔』という『誰もが使える幸せの魔法』が会場を包み込んでいた。

\* \* \*

「楽しそうだね」

「そうねえ。」

マナとツバキは侵入者をOB会に引き渡し、操られていた二人に対する処置（主に記憶の改竄）を終えて一息ついたところだった。

校舎を挟んで反対側では笑い声が溢れかえっている。

「……………」

「マナちゃん是不機嫌そうだけど、もしかして参加できないから拗ねてるのかな？」

「拗ねてない」

そのやり取りでツバキはマナが拗ねているのを確信した。

「だったらその不機嫌と悲しみを足したような表情は？」

「……………」

黙ってしまったマナ。

「まったく、正直じゃないんだから」

くしゃ、とマナの頭をなでるツバキ。

マナも自分が拗ねていると自覚しているからやらせるがままにしている。

「おい、マナー、ツバキー」

「にやつー!？」

「あら」

声がして、二人がその方向に視線を向けるとサンタクロースの格好の唯奈が何やら包みを持って二人の元に向かって来ている。

その背後には楓の姿も見て取れた。

「どづしたの、ゆうな」

「二人にクリスマスプレゼント渡しとこうと思って」

『メリークリスマス』と言いながら二人に包みが渡される。

好奇心と嬉しさから受け取ってすぐに封を切る

「…まふらー？」

中身はマフラーだった。

それもマナの分は白地に黒で『Mana』、ツバキの分は若草色に赤で『Tsubaki』と片端に名前も編まれている

「わあ！ありがとうございます」

礼を言うツバキと目を丸くしてマフラーを見つめるマナ。

目の細かさや正確さは既製品に近いレベルだが二人の名前が入っている時点で手作りなのだろう。

じっと見つめていたら二、三ヶ所ほど目が跳んでいるところを見つけてしまった。

「巻いてあげようか？」

「じ、自分でやるから！」

不意に声をかけられてマナは慌ててマフラーを首にまく。

ただそれは本当に『首に巻いただけ』であって、まるで包帯のように巻かれたマフラーはマナの首の動きを完全に阻害していた。

「違つよ、マフラーの巻き方はこつ」

唯奈が一度解いて巻き直し。

「あ、ありがとう…」

「さて、ゆーな。そろそろ」

楓に呼ばれ唯奈はマナの手を取ったまま移動しようとする。

「え？」

「もうすぐ終わりだけど、参加自由だからね。ツバキも来て」

「はい」

二人を加えた一行は表に戻り残り僅かになったパーティーを楽しむことにする。

後日、三人のサンタ姿を見たいと和葉がゴネてもう一度女装する羽目になったりもしたのだがそれは本当に余談である。

# 13 5 (後書き)

袋から取り出して投げているのは唯奈がこっそりと転送していたりします

それにしても花火好きだね、聖奏学園は。

全く話が変わりますが…

復活した誠を楓が『誠じゃない』と思う部分は『再現できて本物には成りえない』という筆者の考えが反映されています。

まあ、再現にも『本物に無い味』が有ることは否定しませんけど…

# 1 3 . 5 (前書き)

完全に番外編的な代物です。

「どうして、こんな事に……………」

楓は、本気で困っていた。

まだ、火照りが抜けないがそれを何とか振り払って現状把握に努めようとする。

談笑していた母親たちが酔いつぶれている。

それはまあいい。久々で限度を忘れていたんだろうから自業自得だ。

その横ではそれぞれの父親たちが楽しそうに語り合っている。

陽気そうな様子から確実に酔っている。

幼馴染の誠が、苦笑いしていた。

先ほどまでは見事な着物（女物）を着こなし艶姿を見せていたがどうやら解放されたらしい。

親友の遙が顔が赤くして寝転がっていて、そのそばで明らかに二十歳未満お断りな透明な液体をちびちびと楽しむ先輩の奈緒がいる。  
… おそらく、奈緒に酔いつぶされたんだろう。それもまだマシだ。

明日は二日酔いで大変だろうけど。

琴音とツバキが楽しげに、マナが物欲しげにこっちを眺めている。

お願いだから、笑ってないで助けて欲しい。

琴音の膝（というか腿）を枕に誠の義妹の裕未が寝息を立てている。小学五年生の彼女に午前二時という時間はかなり遅い。眠くなっても当然だろう。

目の前の炬燵の天板の上には『元凶』が独特の香りが混ざった湯気をあげている。

だが、それは楓の記憶が正しければアルコールなど殆ど含まれていない甘酒だった筈だ。

確かに、僅かながらにアルコールを含む酒粕から作られている。けれども、加熱されているから殆ど残っていない筈だ。

ならば、何故？

「うにゆう」

何故、唯奈がまるで酔ったみたいに顔を紅らめているんだろうか。そして、楓に縋りつくようにして抱きつき、寝息を立てているんだろうか。

「本当に、どうして……………」

楓は時々もぞもぞと動く時のくすぐったさと戦いながら『原因』を振り返って探してみることにした。

\* \* \*

年内最後の日。

十二月三十一日、通称『大晦日』。

この日、楓は唯奈と琴音と遙を誘って初詣を行う神社でカウントダウンをしよう、との約束を取り付けていた。

だが、それを聞きつけた親たちが『ならば家族総出でそれをやろうじゃないか』と乗り気になり三家族合同の初参りが行われることになった。

楓の時計（デジタルだ）が『23:59』を差した時、持ってきていたラジオからカウントダウンの準備の様子が流され

『三、二、一、』  
カウントダウン。そして

『ポーン』

「あけまして、おめでとございます」

時報が午前零時を伝え、新年のあいさつを交わす。

高校生ともなれば、この程度の夜更かしは割と平気なのが、琴音に手をひかれる裕未だけは少し眠そうにしている。

それでもしつかりと新年のあいさつして、お参りは済ませる。

「唯奈ちゃんは眠くならないの？」

と、見た目年下に見える唯奈に対してお姉さんぶる位の事は造作もない程度には。

「…私、年上なんだけど」

そう言っても説得力皆無な唯奈（外見年齢六歳前後）は少し拗ねている様子。

それでも滞りなく初詣を終えた一行は地元の自治会が振舞う甘酒で温まりつつ帰路に就く。

帰路に就いたのはいいのだが、元は生徒会で役員をしていた親友三人組である母親陣は元より、同じ年頃の娘（息子）を持つ親として語り合いたいことが山ほどある父親陣が意気投合。

そのまま最寄であった藤谷家（誠現住地）でささやか（？）な新年会モドキが始められたのだった。

誠と唯奈を中心に夜食が作られ、それを肴に帰路の途中で仕入れた酒を楽しみ始める父親陣。

母親陣もめいめいに楽しむ中、子供組（高校生以下）は琴音が用意した甘酒で冷えた身体を温めていた。

「あれ？姉さん。なんで透明…まさかお酒飲んでるの!？」

そんな中で遥が奈緒が飲んでいるのが透明…すなわち父親陣の処からこっそり持ち出してきたのであろう日本酒だと気付く。

だが、

「ただの水よ」

「嘘だ。顔、赤くなってるし」

「なら、飲んでみなさい」

そう言われて遥は奈緒の持っていたコップを受け取り、少しためらった後、僅かに残っていたそれを飲み…

「これ、やっぱりお酒…」

ただの水ではないことを確認したのだが、

「飲んだんなら同罪よ」

同時に、奈緒の術中に嵌っていた。

「うぐう…」

「ほら」

気がつけば遥の手中的のコップは再び透明な液体で満たされ、同じ物を奈緒は傾けている。

しばらくコップを見つめた後、遥も舐めるように少しずつ飲み始めてしまった。

（注：お酒は二十歳を超えてから）

しばらくすれば酔った遥のしどけない様子が見れるだろうが、後が大変だろうから適当なところで止めを刺してあげようと決める楓。

「まあ、お正月だから、ね」

親同伴だし、と唯奈も誠から渡された甘酒をちびちびと飲みながら笑う。

「…ゆーな、酔ってないよね？」

ふと、こころなしか顔が赤い唯奈の変調に気付いた楓は恐る恐る、尋ねてみた。

「んー？よってにゃいよ〜」

楓は軽い絶望感と共に確信した。

完全に、酔っているぞ。

「にゅふふー」

まるで猫のように両手をついて楓にやや熱のこもった視線を向ける唯奈。

なんとなく、甘えようとする子猫を連想してしまった楓だが

「にゃー、ふかふかー」

「ちよ！?」

甘えられる親猫役が自分となると、話は違う。

胸元に顔を埋められ、楓は本気で慌てる。

相手が酔っ払いとはいえ、そんな事をされるのは始めてだ。

異性なら突き飛ばすなりひっぱたくなりしたかもしれないが、同性相手。振り払うべきか、引き剥がすべきか、少し迷う。

少し迷ってるうちに、人肌に安心したのか元よりややうるんでいた唯奈の瞳がトロン、と重くなってくる。

そして……

「んー」

襟もとを軽く引っ張られて下を向いた時

「んちゅ」

楓は、唯奈の顔のどアップに気を取られて一瞬何が起こったのか判らなかった。

判らなかったが気付きはしていたらしく顔に血が上って来てかぁーっと熱くなってくる。

(きききききき…キスされた!?)

不意打ちでというのは二度目な楓だが流石に『慣れる』事は出来ないので相当に慌てる。

楓が我を取り戻した時、唯奈は楓の胸ですやすやと寝息を立てていた。

そして、現在に至る

\* \* \*

一番怪しいのはあの甘酒なのだが、そんなに弱かっただろうか。

楓の疑問の答えはその後の一言で判明した。

「なるほどな。酔うと絡むというか…幼児化するのか」

そんな事を言ってきたのは先ほど唯奈におかわりの甘酒を持ってきた誠だった。

「とーや、まさか…」

「甘酒と日本酒、比率は1:1」

してやったり、と言わんばかりの誠への怒りがふつつつと沸騰を始める。

「おっと、それくらいにしとかないと起こしちまっぞ」

誠に言われるまでも無く、縋るようにして寝ている唯奈を起こしてしまつのは避けたい楓。

だから、こう言つ事にした。

「後で覚えてなさいよ」

にっこりと、会心の笑顔と共に言い渡されたその言葉に誠は顔を引きつらせ、『つまみの追加作って来る』と台所へと逃げ出した。

そこまでしてから、ようやく落ち着いてきた楓は改めて唯奈へと視線を向ける。

普通のしつかりした様子からは想像できない、幼さというか甘えっぷりを見せている唯奈の表情もまるで小さな子供の様。

それも、ある意味では当然なのかもしれない。

『御剣唯奈』という、今ここにいる少女が存在するようになってから、まだ半年と経っていないのだから。

…それならば、ちょっと予行演習だと思っておこう。

そう自分に言い聞かせてから楓は完全に寝ている唯奈の髪をほどいてから優しく撫でてみた。

最初は恐る恐るだが目を覚まさないことに安心して恐る恐るやってきた故のぎこちなさが少しづつだが消えてゆく。

そうこうしているうちに楓自身もだんだんと眠くなって来る。

時間も大分遅いし、唯奈という人間湯たんぽを抱いている状態なのだから当然だろう。

「おやすみ」

大分うとうとしてきていた楓も、誰かが毛布をかけてくれた事に安心してすんなりと意識を手放して眠る事にする。

なんとなく、いい夢が見れそうな気がした。

\* \* \*

「寝たみたいね」

「寝たわね」

「あれは確実に寝てるわね」

楓が寝ついたので見計らって母親ズが動き出す。

「楓ちゃんの顔つき、まるで母親よね。」

あそこまで甘えてくれない、というのは誠の母 和葉。

「ちょっとばかり大人びてきたと思ったら、少し納得ね」

そういうのは楓の母の咲月。

「うちの二人も楓ちゃんか琴音ちゃんみたいになってくれればね」  
そう愚痴を言うのは佐伯姉妹の母 陽菜。

三人は当初は酔い潰れていたが唯奈が酔って甘え出した辺りから復活していた。

が、酔い潰れたフリをし続けていた。

その結果として一部始終を楽しむことが出来たのだが、色々喋るとバレるので我慢する必要があった。

三人でざっと部屋を見渡すと琴音と裕未、楓と唯奈が寄り添うよう

にして眠っていた。

遙と奈緒は毛布をかけに来たツバキとマナをそれぞれ捕まえていた。ただ一人、誠だけはここに居ないが恐らく自分の部屋に戻って寝ているのだろう。

同世代では男女比1：4、ツバキとマナを合わせれば1：6の空間には居辛い物がある。

それ以上に、報復実行を宣言した楓から逃げたかつたんだろうけれど。

「それにしても、今年のメンツは粒ぞろいよね」

和葉がコップを傾けながら呟いた。

「そうよね。私たちの頃に比べたら、量はともかくとして質は上がってるわね」

彼女らが言う『質』というのは、生徒会役員としての質ではなく、対魔組織の構成員としての質である。

「何か、悪いことの予兆じゃなきゃいいんだけどね」

それから、三人で僅かに残った分で幸多き事を祈りながらの乾杯を交わしてから眠る事にした。

真つ暗闇になった部屋に陽光が飛び込み明るくなるまで、まだもう少し時間があった。

# 1 3 ・ 5 (後書き)

勢いと脳内にはびこる妄想から構成されてしまった代物です。

これを# 1 4の冒頭にしてもいいかなと思ったんですけど繋ぐのが難しいので番外編扱いにして入れました。

もうひとつ予定されてる番外編『# 6 ・ 5』は冒頭部分がちよろつと出来てるだけですが、完結までには完成させて入れたいなあ…

書いてて、『可愛い生き物』と化してしまった唯奈は……………

当初の予定だと、しっかり者の『見た目は子供、中身は大人』な筈なんだけどなあ

やはり肉体に魂が引っ張られてしまっているのか…

# 13・75 (前書き)

なんとか間に合わせましたけど、やっつけ感がぬぐいきれない…

突然だが二月十四日は日本の某所にある某私立高校は戦場であった。

…………… 比喩でなく、本当に。

「捕まえる！」

「殺せエエ！！」

「畜生めっ！」

「爆発しやがれ！」

「だああああ！しつこいぞ、お前ら！」

階下のグラウンドで繰り広げられる命がけの鬼ごっこを、唯奈は溜め息半分に眺めていた。

\* \* \*

時は少し戻り二月初頭。

学年末試験を月末に控えたこの時期だが、幻魔の出現件数は減少、睦斗市内の戦力は向上という好条件が重なったためかなり平穏な学生生活を生徒会連合の面々も送っていた。

「で、バレンタインな訳なんですよ」

「…で、そのヴァン・アレン帯がどうしたの？」

ヴァン・アレン帯とは地球の磁場に捕らえられた陽子と電子から成る放射線帯なのだがそれは今は置いておく。

「だから、来る二月十四日。バレンタインデイに生徒会でイベントを…」

遙がごり押しに近い形で提案してくるので唯奈は溜め息をつきたくなっていた。

「……………今、卒業式関連の準備で忙しいって判って言ってる？」

そうなのだ。

唯奈を初めとする生徒会の面々の大半は三月半ばに予定されている卒業式の準備で割と忙しかったのだ。

ただ、遙と啓作の会計だけはPTAや教師陣との兼ね合いで割とヒマ。

故にそんな事を言っているのだが…

「そうなの？」

「言わせてもらえば、現在進行形でお仕事なんだけど」

「いっそのこと全校朝礼で『今年のバレンタインは中止です』とでも言ってやるうかと思っただけだが、そんなくだらないことに時間を取らせるのも悪いので考えるだけにしておく。」

第一、唯奈自身にそれほど時間がある訳ではない。

「あ、そうなの？」

「卒業式まであと一ヶ月ちょっとしかないんだから。それくらい察して」

お願いだから、と唯奈はそのまま書類作業を進めていくが…

「それでもさ、土日の一日くらい空いてない？」

「…一応、週末くらいは開けてあるけど」

「じゃあさ、一つお願いがあるんだけど…」

それまでかなりの勢いで押してきた遙が行き成りしおらしくな  
って『お願い』などしてきたのだから

唯奈は少し拍子抜けした。

なんせ、あの『相手が一步引いたら二歩でもう二歩引かせる』よ  
うな勢いから一転したのだから。

「…事と次第によるよ」

暗に『言ってみろ』と言う唯奈に遙は恥ずかしそうに言った。

「  
」

\*  
\*  
\*

で、決戦前日。

機密保持の為に佐伯家に招かれた唯奈は目の前に広がる惨状にかなりのローテンションになっていた。

数日前の遙の『お願い』とはバレンタインの時に渡す『チョコレート菓子』の作り方を教えて欲しい、というものだった。

唯奈としては市販品だったり、市販の板チョコを湯煎で溶かして整形して固め直せばいいんじゃないのかといたい所だが、遙としてはそれでは『不十分』らしい。

それ故に唯奈は『とりあえず勝手にやってみたら？』と手綱を完全に放した状態でやらせてみた。

その結果

焦げ付く鍋。

焦げたチョコレートが何とも苦い匂いをまき散らし、後片付けも一苦労な状態になっている。

ひっくり返ったボウル。

中には苦労して泡立てた生クリームがなみなみとが入っていた筈だ。

床に刺さる包丁。

鍋に慌ててボウルをひっくり返し、それをなんとかしようとした時にチョコを刻むための包丁を床に落とした。

それが床に付き立っている。

つまるところの大失敗であり、『慣れないことすんじゃねえ』と言わんばかりの惨状であった。

一応弁護しておくて遙は料理が出来ないわけでは無い。チヨコレートを使った菓子作りが初めてなだけである。

「さて、それじゃあ片づけてから第二ラウンドといきますかね」

床に刺さった包丁を抜き、ぶちまけたボウルの中身をなんとか片づけ、がちがちにこびりついた『チヨコレートだったもの』をなんとか剥がす。

それだけでも唯奈は大分げんなりとした表情を浮かべていたが、遥の落ち込みようはかなりの物であった為放置はできなかった。

「とりあえず、チヨコレートを使ったお菓子作り初心者な遥ならブラウニー辺りが無難かな」

本当は色々手順があるが、ぶつちやけると『基本的には薄力粉と砂糖を混ぜて卵とバターとこかしたチヨコレートを加えて焼く』というモノだ。

幸い、佐伯家にはオーブンもあるし、失敗と大量生産を前提に唯奈

が用意してきたから材料も十分ある。

「はい、それじゃ始めるよ」

落ち込んだまま、言う事通りに作業を進める遥とそんな様子を眺めつつ自身も作業を始める唯奈。

焼き始めた途端、家じゅうに甘い匂いが広がって行き無事完成したブラウニーを見たとき、落ち込んでいた遥は一気にテンション天井破り状態になっていた。

完成して粗熱がとれたブラウニーに湯煎でとかしたチョコレートをかけて完成にしておくのは、先ほどの大失態の恐怖があるからである。

ちなみに、さつきは安易に「熱を加えれば溶ける」と直火でとかそうとしたから焦げた。初心者にありがちな間違い故の失敗である。

「で、できた…」

最初の失敗で『自信？ナニそれおいしいの？』状態になっていた遥は戦々恐々としつつも完成した代物を見つめる。

「とりあえず、味見してみたら？材料的にはまだまだあるし」

「う、うん…」

唯奈に促されて遥は完成品の一つを手取る。

思い人へのプレゼントなのだから、失敗は許されないのだ。

恐る恐る口元へと運び…

「んー、素朴でいい味だしてるんじゃないの？」

いざ、というところで突如として現れた姉　奈緒にかっ攫われた。

「姉さん！」

「唯奈ちゃん、ウチの妹が迷惑かけたわね」

「もう慣れっこです」

遥の抗議を受け流す奈緒と唯奈。

「それじゃあ、これからも面倒みてあげて」

それだけ言ってからもう一切れつまんで持ちさる奈緒。

…実は甘い匂いに空腹感を煽られてつまみ食いをしに来ただけと二人が知ったらどんな顔をするのだろうか。

「…それじゃあ、他の人にも試食してもらったら？」

「…自分で食べてみてからそうする」

『しっかり者』というイメージが根強かった二人は少し唾然としながらもつまみ食いするだけして去って行った奈緒の事を忘れることにした。

\* \* \*

で、当日。十四日。

遙は手造りブラウニーを片手に登校したは良いが女子部生徒では男子部の下駄箱に進入できない事に気付いた。

おまけに生徒会室に行けば行ったで仕事中の誰かが居る。

唯奈と琴音はおそらく何も言わずに前者ガン無視、後者ニコニコ。凜あたりなら冷やかしてくるだろうし、遙としては楓の前というのは中々にやり辛い。

故に男子部から生徒会室へと至る途中に居て、待ち伏せることにした。

オマケに四階の渡り廊下はこの間、『急造のツケ』が見つかって通行禁止中。

なので待ってる場所は中央ホールである。

遙のお目当ての人物、藤谷誠その人が出てきたのはそれからほどなくしてなのだが…

「裏切り者には血の制裁を！」

「それをこつちに寄越して処刑されると殺されて奪われるのを選ばせてやる！」

「ふふふふ…ハアっはっはっは！  
打つ叩ぶったぎるKiiler！」

男子高等部一年三組の集団により襲撃を受け逃げ回る事になった。

『リア充死ね      リア充死ね      爆発しろ！』

オマケに周囲に居る男子のほぼ全てに近い割合そんなアブナイ歌を  
斉唱しながら襲撃側を応援する。

「だあああツツ！！」

結果として、女子は『男子は何やってるんだか』で不介入、男子は  
『死んでしまえ、むしろ殺してでも奪い取る』で一致団結した為  
命がけの鬼ごっこが始まってしまったのだ。

それは教員にも言える事で女性教員は『高校生にもなって…』と不  
満顔だが騒いだけなのでそれより先に行ったら注意しようとい  
う程度、男性教員は『昔やったなあ』と言わんばかりに苦笑い。

それ故に、誠はデス・レースから解放されるためには相手を全滅さ  
せるか、奪われるか、投降するか、誰かに止められるかのどれかを  
選ぶしかなくなってしまったのだ。

選択肢として、選ぶべきは

\* \* \*

冒頭部に戻る。

「…なんか、凄い騒ぎになってるけど、大丈夫なのかな」

生徒会室からそんな様子を眺めていた楓は思わず呟くが

「あんなもん、じゃれ合いだ。じゃれ合い」

と、梨紗お手製のチョコケーキを堪能している啓作が言った。

実際、以前に衆目の前で受け取った時は危うく殺されかけた啓作である。

それ故に生徒会室という場所を受け渡しに使うようになっていたのだ。

『どちらも生徒会役員』という組み合わせ限定の裏技である。

「はあ……でも、とーやは前に四階から磔にされたまま落されてましたよ」

「今年の一年は随分とアグレッシブだな」

楓はバレンタインで頭の中身が花畑になりつつある先輩二人を思考の範疇から切り離れた。

おそらく、何言っても望む答えは帰ってこないだろうから。

「ゆーな、どう　　あれ？」

ふと気付けば、楓の隣で呆れ顔でグラウンドを眺めていた筈の唯奈の姿が消えていた。

「何処行っただら……」

その答えはその直後に入った放送で判明した。

\* \* \*

ぴんぱんぱんぱーん

突然の校内放送に野次馬がビクリ、と反応した。

『えー、生徒会より連絡します。』

唯奈の声の放送に野次馬からは『あ、生徒会長だ』とか『何の連絡？』と声上がる。

遥の近場に居た友人は『呼び出されてるんじゃないの？』と声をかけてくる。

だが、

『ただいまより、中央棟三階、大講堂にて、バレンタインイベントとしてチョコレート菓子の配布を行います。数に限りがありますので、ご了承ください。繰り返します、』

一斉に走り出す男子生徒。

エレベーターなどというまどろっこしい物には目もくれずに階段を駆け上がっていく一団はまるでバッファローの群れだった。

『なお、男子生徒に限りませんので』

今度は女子生徒の大半も走りだした。

女子にとって、『甘い物』はかなりの重要度を持つアイテムなのだ。

たとえば、体重計が恐怖の象徴となろうとも。

結果として、唾然とした遙、ほか数組の渡すタイミング待ちだった者だけがエントランス部分に取り残されていた。誠は校庭のど真ん中で放置である。

「……………なんだったの？」

結果的に助かった事だけははっきりと理解できた、だがそれは逆に言えばそれ以外は訳が判らなかった、という意味でもあった。

ともあれ、我を取り戻したカップルたちは受け渡しを始め、遙は校庭のど真ん中でバテる誠の元へ駆け寄った。

「だ、大丈夫!？」

「ぜえ…ぜえ…な、なんとか」

普段の、命がけという点はあまり変わらない幻魔との戦闘でもバテる事が殆どない誠がバテているという現状に驚きつつ、遙はほっと溜め息をついた。

ほっと溜め息をついて、自分が渡した『それ』に命がけの追いかけてこをするほどの価値があるのか、不安になった。

『それ』を手放してしまえば少なくともあの追いかけてこはすぐに終了した筈だ。

身を危険に晒す事無く切り抜けるには最上。だが、誠が何故そうしなかったのかが判らなかつた。

そんな思いが顔に出ていたのか

「どうした？」

と誠の方から尋ねてきた。

何か聞きたいことでもあるのか、と言わんばかりに。

だから、聞いてみた。

「あのさ、私が言うのも何だけど、それを手放してればこんな事にならなかつたんじゃないの？」

それ、といって指すのは遥自身が先ほど渡したブラウニーの包みである。

丁寧に包装されたそれは今もちゃんとその姿を無事に残している。

「折角、作ってくれたんだろ。」

肯首

唯奈に指導してもらい、手伝ってもらったとはいえ遥の手造りであることに間違いは無い。

「なら、それを誰かに渡すのは遥に対して失礼になるだろ……………」

その後、誠がなにやら呟いた。

本人は遙に聞こえないように呟いたつもりなのだろうがその呟きはばっちり聞こえていた。

その内容が嬉しくて仕方ない遙は座り込む誠の手を取って無理矢理立たせ、そのまま校舎へと引つ張ってゆく。

「ちよ、遙!？」

「ほら、早く生徒会室に行かないと。仕事溜まってるんですよ」  
遙は振り返らずに答える。

振り返らないのは顔の赤さを悟らせないためなのだが、それは徒労に終わる。

なんせ、耳まで赤いのがから後ろからでも一目瞭然だ。

講堂を迂回して生徒会室まで戻った二人だったが一部始終をしつかりと見られていた事を知らされ真っ赤になって俯くしかなかった。

\* \* \*

「へえ、そんな事があつたんだ」

「結構な騒ぎになってましたよ」

夜、高槻家にお呼ばれした和葉は楓から昼間あった騒ぎの一部始終を聞いていた。

「でも、よかったの？楓ちゃんも誠の事、好きだったんじゃないの？」

そう、心配げに尋ねてくる和葉に楓は苦笑を返す。

「ちよつと、違うんですよね。今の誠は…」

以前にも語ったが楓にとって今の誠は『自分が好きだった誠に似せられた者』ではない。

熱をあげられるような存在ではないのだ。

「そつか。それじゃあ、楓ちゃんのお眼鏡にかなう男をまた探さなきゃね」

「スペック高かった誠が基準になると中々いなさそつですけどね」

今度は楓が苦笑

「ところで、それだけの為に呼んだの？」

「えっと、実はですね」

楓がそつとふすまを開けると隣の部屋では座布団を枕に唯奈が撃沈していた。

「今日、騒ぎを収めるためにブラウニーの配布会なんて開いちゃっ

だから疲れ果てて寝ちゃってるんですよ」  
その疲労の原因は九割八分弱が精神的疲労である。

「だから迎えに来るのも兼ねてってところ？」

「あとは家で作ったバレンタインのを持ってってもらうためですね」  
そう言ったら和葉は少々考えてから

「じゃ、泊めてもらえる？後で必要になりそうなものは持ってくるから」

翌日は平日だがあと一週間もすれば期末試験が始まるこの時期は大半の授業がテスト対策の為の自習か模試になる。  
鞆の中身の交換は殆ど必要ない。

と、なれば楓としては拒否する理由も無く、親側も『たまにはゆっくり話してみたい』なんていうから問題は無いだろう。

「それじゃあ、お母さんの事説得しときます。ま、二つ返事でOK出すとは思いますが」

「それじゃあ、お願いね」

一度、帰ってゆく和葉を見送った楓は家族に唯奈が今夜は泊る事を伝える。

大喜びで準備を始めた母親を見て、楓は苦笑いをこぼす。

翌朝唯奈が起きた時、楓の抱き枕にされていて、なおかつ格好が三毛猫のきぐるみみたいなネコ耳フード、ネコ手手袋ネコしっぽのついたものだった事、見覚えのない場所であることの数点セットで驚くことになった。

# 13・75 (後書き)

ちなみに、自分は2 / 14に貰う事は先ず無い部類です。

むしろ、妹と母が作るのを手伝って、その報酬として貰った分  
前を配る側…

ただし、高校時代の部活仲間とかのみ。

## #14 1 (前書き)

お待たせしました。

大学が始まって、ガイダンスだの書類処理だのと慌ただしくなってしまうのですが、なんとか出来上がりました。

それでは、どうぞ。

「さて、そろそろ時間ね」

私はそう、生徒会室の時計を見上げて呟く。

机の上には封筒が一つ。

その中には一枚の便箋程度の大きさの紙が畳んでおさめられており…

今から、その内容を壇上で話す予定なのだ。

入学式のお約束。

生徒会長挨拶。

去年の自分たちが見つめる中でやることになるなんて思ってもみなかった。

「さーて、精々『見た目不相応に頼りになる先輩』でも演じてくるかな」

時計は入学式開始時刻の十分前。

会場入りするように指示が出たのはつい先ほど。

机の上の封筒を制服のポケットに差し込み、軽く身だしなみチェックをしてから私は生徒会室を後にした。

\* \* \*

「あゝ、うゝ」

入学式が終われば新入生オリエンテーション（生徒会主催）が有り、在校生との交流会（生徒会主催）が有り、委員会の委員長会議が有り、少し間が空いて生徒総会（生徒会主導、四月末）がある。

更には五月末に予定されている『生徒会連合の首長会議』と『学校間交流会』も早めに企画を出しておかないとならない。

まあ、ぶっちゃけると企画運営しなきゃいけないイベントが盛りだくさんな訳なんですよ。

しかもその仕事のうちの半数は『会長でなければ決済できないもの』だから始末に悪い。

更に楓から直々に『お願い』された事もある。しかも一筋縄ではないかないもので三月からずっとやってるけど漸く先が見え始めてきたくらい。

てな訳で、一種のデスマーチ状態な私はようやくひと段落ついたので気の抜けた声悲鳴モドキをあげていたのである。

ああ、机が冷たくて気持ちいい

春の温かい気候についてウトウトとしてしまい、瞼が完全に落ちそうになった瞬間

『ずどオおおおおお　ん』

腹の底から響くような爆発音で否応なく眠気は吹っ飛ばされた。

生徒会室の窓（注：ここ六階）にもくもくと上がってくる土煙に私は溜め息をつきながら窓を開け、大きく息を吸い

「その集団！なにやらかしてるの！！」

大声で叱咤。

逃げ出す一団。

こんな事が出来るのは化学部の連中だけだから限定は出来るけど個人の特定まではできない。

けれど所属団体に嚴重注意をしに行かなきゃならない。

部室へ乗り込んだ所、紗枝先輩から代替わりして部長になったばかりの同級生がジャンピング土下座という高等技術を以って迎えてくれた。

…とりあえず、化学部も苦勞しているらしかった。

\* \* \*

それから数日後、

「失礼します」

生徒会室に見慣れぬ人物が現れた。

見慣れてはいないが、面識がないわけでもない。

「あなたたち、何の用？」

人数は三人。男子二人と女子一人。

いずれも高等部所属で、今年度に高校一年生に上がった子たち。

そして、六階に上がるには人払いを突破してくる必要がある。

突破できる条件は、魔術が使えるか、異能の血が流れているか、精霊か、前述した人物に手引きされている事。

つまり、この三人は…裏にかかわる要素を持っている。

「えっと、生徒会に入れてもらいに来ました」

そう、少女 富坂紫音は言い、残りの二人も肯首した。

三人が言うのはこうである。

自分たちは不可思議な体験をしたがそのことは妙に伏せられている。

それを知るには生徒会が一番近いと感じた。

生徒会は役員を募集していないので会長に直談判しに来た。

「…なるほど。話はわかったわ」

とはいえ、唯奈には『ハイそうですか』と役員に加える気はさらさら無い。

「だけどね」

ずどおおおおおおおおおおおお……ん

爆音、再び。

目の前の三人が何か怯え始めた。

けど、そんな些末な事はどうでもいい。

私は窓を開けて、吼えた。

「化学部ッ！」

古人曰く『仏の顔も三度まで』。

三度以上の嚴重注意でまだ辞めないその犯人に私は自制を忘れて行動していた。

すなわち、

「あ、ここ六階」

窓からの飛び降り

全身をばねのようにして着地、逃がしきれない衝撃はそのまま前転し地面を転がって対処。

前転の勢いで起き上がって、啞然としている下手人に襲いかかる。

「きゃー」

飛びかかられた相手諸共地面を転がり、なんとか確保。

そのまま化学部部室へと連行し化学部顧問、部長、私の三人で一人当たり三十分、合計一時間半にも及ぶ説教タイムが始まる事になる。

\* \* \*

「一年三組の富坂紫音です」

「えっと、秋山進です」

「藤村浩平です」

「以上の三人が仮だけど加入しました。はい拍手」

姉さんの声に一齐に拍手する皆。

どいう訳か、私が生徒会室に戻ってきたらさっきの三人が全員仮加入になっていた。

ただ、それはあくまでも『表向き』でしか無い。

私以外の全員が加入を認めている以上、私一人がゴネても無意味。

決して拒否した時の姉さんの行動が恐ろしい訳ではない。

「判った。今から届け作ってあげるから、ちょっと待ってて」

そう言いながら、私はパソコン前に付き、

「ようこそ、非日常へ」

それだけ言ってから説明関係は姉さんに丸投げして入部届けモドキの作成を始めたのであった。

誠と楓もそうだったけど、随分と早い事で…

そう思いながら。

\* \* \*

四月半ば、入学式から二週間ほどが経過し、イベントの半分が終わった頃…

「はい、それじゃあここの所を反復練習ね」

姉さんが主体となって新米役員の戦力化作業　つまり教導が行われていた。

私がやってもいいけど、それは主に遙と晶と篠田の三人に禁止された。

折角、スリーマン・アーミー三人軍隊化させようかと思ったのに…

まあ、そのおかげで私は会長と総長の仕事に専念できるから有り難いと言えば有り難いんだけど。

「さてと…それじゃあ見極めの日程もそろそろ決めないとね」

そんな話題が出始めた時、

「西睦斗七丁目に空間の歪み発生。結界展開まで三十秒」

今まで減少傾向にあった幻魔の久々の出現。

「西睦斗なら、ウチらじゃ無くて第二高校の方ね」

以前なら大急ぎで出撃していたけど、今は執行部担当区域でも心配無く任せていられる。

…けれど

「西睦斗六丁目に空間の歪み発生。結界展開まで一分」

「西睦斗二丁目に空間の歪み発生。結界展開まで二分」

前の教訓から増やした警戒毛玉ズが次々と歪みの発生を伝えてくる。

「姉さん！」

私は椅子をけたげて飛び出し、

「判ってるわ。三人とも、見学会よ」

姉さんも指導中の三人を連れて私の後を追ってくる。

「楓と遥は生徒会室で続報に警戒して、必要なら出て。先輩たちにも連絡をお願い」

「了解」

「任せて」

背中に声を受けそれなりにスペースがとれる場所に移動した私は『ゲート』を開く。

「飛ぶよ！」

出た先は幻魔の海でもいいように術式は構成させておく。

真っ先に私が飛び込み、その後ろから三人を突き飛ばして押し込んだ姉さんがついてくる。

出口の先にはゴブリンが数体。

とりあえず、先に貯めておいた数十発の魔力弾の一部をぶちかます。

あっけなく貫通されて消えるゴブリン。

「次は」

次の獲物を探して見まわした時、異変が起こった。

「え？」

歪みが、消えていた。

「…異常に小さい規模の幻魔しか出現しない歪みの多発、ねえ」

「質より量ってところなのか…」

「発生場所が散らばるとキツイな」

生徒会長と顔合わせを兼ねた会合の場は早速裏の側面に突入していた。

会長陣の顔ぶれは第三の藤堂会長はそのまま、第四と第六、それに執行部は世代交代が起こった。

…とはいえ、第六高の新会長は白澄さんだし、執行部の新総長は前から何かと表舞台に出てきていた飯島という名前の二年生<sup>ふくせうせい</sup>。唯一第四高だけは管轄の関係であんまり面識のない元副会長（三年）だけ。

「現段階で二週間間に発生した歪みが二十七件。数日に一度、まとめて数か所で発生。ただし」

「出てくるのはゴブリン程度の小物が少数、でしょ」

「やれやれ、と言わんばかりの白澄さん。」

彼女も大量発生したゴブリンの相手をした事が有る方だから件数の増加はやや楽観視している様子。

「問題は、何が原因で『質より量』、『数より回数』に変わったのか。」

一度に一か所で大量発生させずに、分散させて少数を何か所にも出す。

それが意味するのは一体何なのか。

「何らかの原因で歪みが小さくなってる可能性は？」

白澄さんの指摘。

「確かに、歪みその物はそれなりに大きくても発生源は小さいってケースはあったわね。けど…問題はその『原因』の方でしょ。」

地震とかの地殻変動が起こって地脈の変化が起こった訳でもないし、そもそもで断層によって寸断された結果が今の睦斗の霊地化である。

「うーむ、幻魔の出現する時の歪みのメカニズムが判れば少しは考えようもあるのだが…」

藤堂会長がポツリ、と呟いて私たちは目を丸くした。

「そんな判り切った事」

第四高の会長（まだ名前覚えてない）が言おうとして、私はすっかり失念していた事に気がついた。

「そうか。そっちの切り口があった！」

「何か気付いたの？」

突然声をあげた私に、第四の会長は目を丸くして、白澄さんは興味津々に尋ねてきた。

「幻魔って今までは大物が出てくる前に前座としてゴブリンとかが出てきて、先に歪みを潰せない限りザコの後には必ずそれなりに力を持つ個体が現れてきたでしょ」

「そうね。最近歪みの解消の方が早い事が有るけど」

「それって、それなりに力がある個体のみができる、『こつちへの干渉』をしようとするから歪みが出来るって仮説の根拠にならない？」

それに、過去にこちら側から干渉しようとして幻魔の大量発生を誘発した一件もある。

それは、十分に理由になり得ると私は思う。

「…だとすれば、だ。仮に今の仮説が正しいとしたら考えられる事は二つ。」

藤堂会長が説明を始める。

「一つ目はこちら側とあちら側の境界があいまいになって力の弱い個体でも突破できるようになっている。」

確かに、その可能性は否定できない。

否定できないけれど…

「その場合、今までみたいにザコばかり湧く事と歪みの発生源が小さい事に説明がつかないんじゃないですか？」

私が思った通りの事を白澄さんが尋ねてくれた。

「だから、二つ目だ。」

まあ、待て。と言わんばかりに一本だけ伸ばしていた指に、もう一本を加え

「何者かが、こちら側からあちら側に干渉しようとしている。今の所その干渉の規模が小さいから俺たちの監視をくぐり抜けられているし幻魔もごく力の弱い個体しか出てこない」

部屋がしん、と沈黙と息を飲む音に支配された。

カチカチと時計の音だけが妙に大きく響く。

「……………」

「一度、大掃除しないと拙いかもしれないわね」

「そうね」

その数日後、警察や自衛隊をも巻き込んだ監視網が構築される事になったが、手掛かりは全くと言っていいほど見つからなかった。

\* \* \*

気がつけば月末を迎えていた。

新入生三人も数度のごく小規模な幻魔討滅戦に参加し少しずつ戦闘経験を積み、それぞれにあった装備や戦法を編み出しつつあったりしたが、依然として『孔の空く原因』は発見できずにいた。

四月一杯で起こった歪みの件数は約二十余。

異常な数ながら、出現する幻魔の大半がゴブリンでしかないという、量と質がまったく伴わない物ばかり。

お陰で『幻魔狩りは楽』という認識を持ちつつある新入りの伸びてきた鼻をへし折らなきゃならなくなったりもした。

それはともかく、幻魔の襲来は最早毎週のお約束と化してきた感があり、

「東睦斗三丁目に歪み発生」

今日もまた、お約束通りの襲撃が…

「東睦斗三丁目に歪み発生」

「東睦斗三丁目に歪み発生」

「東睦斗三丁目に歪み発生」

「東睦斗三丁目に歪み発生」

「東睦斗三丁目に歪み発生」

お約束通りと思いきや、同じエリアに複数発生という前に例のない事態が起こっていた。

しかも一件一件の規模こそ小さい物の密集しているせいで歪みと歪みが接触して繋がっている。

「どういう事？」

「判らないってば」

「楓、遙。押し問答してる暇あったら出勤準備！」

私は深呼吸をしてから集まった役員全員が跳ぶ為のゲートを開く。

「一年坊主共も慌てず急げ！」

誠の発破も有り、一年生はドタバタと出勤準備を始める。

「行くよ！」

ゲートの先は久々に見るゴブリンの海だった。

それに今回は範囲が広いからここにいるのが全てではないはず。

「な、なんなの！？この数」

「勝てるのか!？」

「むしろ、逃げ切れるか？」

その状況に早くも弱腰な悲鳴をあげる三人。

けど、私たちからすればこの程度は『慣れっこ』だ。

「姉さんは三人をお願い。」

「ええ、任されたわ」

「楓、遥、やるよ」

「りょーかい」

「それじゃ、『先輩の本気』を見せてやりましょか」

私は五、六十ほどの魔力弾を精製する。

楓は巨大な焰球を発生させる。

遥も多量の魔力を手元に集める。

私たちが攻撃態勢に入った事で隠蔽が解除されゴブリンの群れがこ  
つちに群がり始めるけど

「もう遅い」

楓の焰弾と遥の雷撃に群れが半壊、まばらに残った残存も私の魔力弾によって一匹ずつ確実に打ち抜かれて消滅してゆく。

「こいつも持ってけっ」

誠が改造した呪符から極大の砲撃を放って残りを掃討。

それで知覚できる範囲にいるゴブリンは壊滅。

一年生たちはそんな私たちに啞然としていた。

「次、行くよ」

複数の歪みが合体して出来上がったこの巨大な歪みの何処が中心点なのか判らないが、とにかく今はそれを探すしかない。

三人もそれぞれ落ち付いたらしく、富坂さんと秋山くんの二人は魔術行使を補助する、術式の織り込まれた手袋を、藤村くんは触媒となる素材が使われたリボルバー式の拳銃を手に握りこむ。

そんな三人に刀を抜刀した誠と私同様にいくつかの魔力球を待機状態で用意する姉さんが付き、私と楓と遥で強行偵察と殲滅戦を繰り返す。

ま、繰り返すと言っても見敵必滅を繰り返すだけの単純作業なんだけど。

ゴブリンの群れを解体し続けること三十分。

いつもならとつくに殲滅が終わってもおかしくない時間が経っているけど、今回は範囲が広いせいで時間がかかる。

故に、

「二手に別れましょ。誠と遙、あと一年生三人はここから北側を、私と姉さんと楓で南側を。いい？」

戦力を分散させて効率の向上を図る。

とはいえ、私、楓、遙の三人で数百単位のコブリンを狩れるので分けても問題はそれほどない。

たとえ本命の幻魔が出てきたとしても、勝てないまでも負けない戦いならいくらでもできる。

「何かあったらすぐに連絡してよ」

「行くぞ、一年坊主共」

互いにそう信じているから、二人は文句も反論もせず一年三人を引き連れて北側へと進む。

私たちは南側へ。

それから数百単位のコブリンが集まった群れを壊滅させること数度、位相変位結界で覆われた歪みの中で一段と歪み具合が大きい場所が発生した。

……本当に久々な、大物の出現の前兆だった。

しかも、複数。

「正直、勘弁して欲しいなあ……………」

おまけにアクリル板やガラス板に痺が入った時のような『ピシッ』という何とも破滅的な響きの音が結界の中に時折響くのがかなり怖い。

「なんて、言ってる場合じゃないか」

けれども、私たちはやるしかない。

たとえどんな状況であっても、幻魔は討滅しなくてはならない。

でないと、数刻先に『大惨事』が待っている。

私も、久しぶりに魔力を物質化して刀を一振り作り出す。

姉さんも同様に武器を作りだし、楓も炎を剣状に形成する。

「さて、大物狩りを始めますか。」

それから二十分かけて大物 本命の幻魔を追討し、強敵だった最後の一匹は遙と合流後、全員の斉射を浴びせかけて倒し、その日の

歪みは解消されていった。

おそらく、私たちの誰か一人でもかけていたら、倒せなかったかもしれない。

そう思うと、妙な戦力の充実具合が不気味に思えて仕方なかった。

そこは、とても不思議な場所だった。

場所と言っていていいのかも判らない。

上と下、右と左、前と後ろ。

そういつた概念が存在するのも判らない、空間

何も無いようで、何かに満たされているその場所を、私は何故か漂っていた。

まるで、海の底にでもいるのかのような静寂なる世界。

見上げた先には、青い惑星<sup>ほし</sup>の姿。

どんな宝石よりも貴重であろう、それをしばし眺めている。

ふと、人影が現れた。

その影は光源で逆光になり影しか見えない。

けれど、不思議と背中側を見てみると言わんばかりに下を指さしているのが判って、私は下…背中側を見てみた。

え？

そこには、もう一個、地球の姿があつた。

慌てて振り返れば地球、もう一度見返しても地球。

二つの、青い惑星<sup>ほし</sup>。

『これだけヒントが有れば十分かな？』

そんな声が聞こえた気がした。

けれども、その声は

\* \* \*

気がついてみれば、私は自宅の自分の部屋だった。

どうやら、机に突っ伏して寝てしまっていたらしい。

時計は午後十時を指している。

「…なんだったんだろ」

鮮明に覚えている夢の内容。

二つの地球を、外側の空間から眺める夢。

私は無性にその夢の話をしたくてメールで確認してから楓に電話をかけることにした。

707

『ゆーな、こんな時間にどうしたの?』

「うん、ちょっと居眠りしちゃったら不思議な夢を見たんだ」

『不思議な夢?』

楓の言葉には嫌そうな様子は無い

「そう。」

『どんななの?』

「二つの地球の間から両方を眺める夢」

『ふーん』

「あの空間、なんとなくだけど知ってるような気がするんだよね」

どこかで感じた事のある感触に包まれていた。

そんな気分がするが夢の中の話なのだから説得力など皆無。

『それって、生まれる前とかの事とか？』

確かに、その可能性はある。

けれど、

「それは私には無いと思うな。」

私に『生まれた時の記憶』というものは無い。

『なら世界の狭間みたいな場所は？』

「……………それなら、判るかもしれない。」

『とりあえず、頭の片隅に置いておく事にするから、早めに寝たら？ここ最近、忙しいんだからしっかり休まない』

「…そうだね。ゴメン、変な時間に電話しちゃって」

『いーよいーよ。それじゃあお休み』

「おやすみ。」

ぷつ、つー、つー、つー…

電話が切れる。

不思議と、さつきまで残っていた不快感というか倦怠感のような物はきれいさっぱりと無くなっていた。

「さて、お風呂入って寝ちやお」

それから一時間ほど後、私は布団にもぐり込むとすぐに寝つくことが出来た。

声の事は、何故か言えなかったのに。

\* \* \*

それから数日、ゴールデンウィーク目前の日曜日

「つたく、少しくらい休みをくれたっていいじゃないかよ」

「はいはい、文句言う暇あったら手を動かす！」

「この区画はまだこれだけ戦力が有るだけマシよ。」

誠の悪態に遥と琴音の中々に逃げ場のないツッコミが突き刺さった。

そうやり取りしながらも、誠が斬撃を飛ばし、遙と琴音の魔力弾が雨霰と降り注ぎ、軽く三ヶタ近い数のゴブリンの群れを吹き飛ばす。

「うひゃー、先輩たちすげー」

「所詮、俺たちは単発どまりからな」

「秋山、藤村。ごちゃごちゃ言っていないで手を動かす！ 収束、固定、そして 打ちだす！」

「いや、お前らも十分凄いと思うぞ」

そんな様子を見ながらも新入生三人組こと秋山 進と藤村 浩平と冨坂 紫音もそれぞれの手段で攻撃を続ける。

進は魔術特性『風』の初歩であるカマイタチで、浩平は魔術こそ使えないが魔力の放出は出来た為、魔力をかき集めて『撃ちだす』という性質を持った素材を使って作られた銃で。

紫音は『魔力の結晶化』という特性を生かし、結晶化させた魔力の欠片を撃ちだしては炸裂させるといふ、いわば榴弾砲のような方法で。

倒す数こそ三人の一斉射で数体では有るが傍から見ていた第六高校の面々からすれば十分規格外に近い戦力である。

第六の面々は長期戦に備えて休憩中なのだが、予定より聖奏組が戦闘を続けている為手持無沙汰になっていた。

彼ら聖奏生徒会と第六高校生徒会の面々は両校の管轄域をまたいで発生した巨大な『歪み』の対処に当たっていた。

最初はバラバラに活動していたのだが中心から有る一定距離に来たところで出現する小物の数が激増した。その為、それぞれ戦力がある程度まとめて配置し数方向から同時に削る方法を取る事にした結果がコレである。

別の場所では第六の生徒会長である里桜が率い、聖奏の非戦闘組とその護衛　つまり啓作と凜、そして梨紗が属する本隊が里桜の砲撃で空いた穴を広げつつあり、また別の場所ではマナとツバキを護衛につけた唯奈と楓が御得意の広域殲滅を繰り広げていた。そこに今ここで戦闘をしている琴音に率いられる、新入りが一番多く配置されたこの一隊を合わせた三部隊編成だ。

この集団からも火柱と紫電、またたく銀光ははっきりと見て取れる。規格外たちの戦闘の様子は直線距離で一キロ離れていても見えるようだった。

とてもではないが結界なしでは繰り広げることのできない戦闘である。

一応、断っておくが広域殲滅組は基本的に広い幹線道路や公園などを戦場を選んでおり極力被害は出さないように加減はしている。ただ、『街に被害を出さないための加減』が『威力の収束』になっているだけで。

街を更地にしても事後処理班が地獄を見るだけで実際の所の影響はあんまり無いのだが。

それはともかく、大量のゴブリンを前に実質的に足止めをされている状態が続く。

先日以上に強大な本命との戦闘を、二年以上は半ば確信的に予想していた。

\* \* \*

「何だよあれ！？でかいぞ！」

「ボスキャラか!？」

「…中ボス止まりじゃないのかな」

琴音たちの一団が中心部に近づいた時、地面から巨人の胴体から上が生えていた。

それを見て男子はざわめき始める。

まあ、見た目が割と凶悪そうで強そう、かつ今までザコが大量発生していた後のソレなのだからシチュエーション的に期待するのは判る話である。

だが、先輩方からの話やデータからそういう『浪漫』とかを追い求めない女子からは至極冷静な呟きがこぼれる。

どちらかと言えばまだ半分しか出現していない大物よりもその周囲に群れなす小物の方が厄介だ。

とはいえ、

「おー、久しぶりの本命は随分とおつきーわね」

「まあ、大きければいいってもんじゃないがな」

「二人とも、先にあの廻りの小物退治が先よ」

余裕綽々な琴音たち。

彼らが規格外な戦闘集団とはいえその様子に安心感を覚えた一年集団も驚いたり感心する事はあっても怯えることは無かった。

「浩平、まだいけるよな」

「当然。冨坂は休んでいいぞ」

「冗談言わないですよ。私の魔術って威力の割に燃費いいからね。これからが本番。」

むしろヤル気満々でそれぞれの得物の準備をする位だ。

「燃えてるねえ、聖奏組は」

「第六は会長の火力頼りだからな。連中ほど燃えないんだよな」

「なら、ウチ来る？」

そんな第六組に遥が声をかけた

「「遠慮させて頂きます」」

だが、九十度の最敬礼で辞退された。

その間も紫音の榴弾砲撃やら、浩平の単発魔力弾やらがゴブリンを

着実に減らしてゆく。

だが、命中弾は出ているが大物には目立ったダメージが無い。  
ピリリリリリ、

「はい、あ、ゆうな。どしたの？」

攻めあぐねていると遥の元に電話がかかってきた。  
相手は別動隊の唯奈だ。

「…わかった。至急退避ね。相手から二百メートルほど距離を」

『二百メートル圏からの至急退避』  
なんとも物騒な響きだ。

「みんな、聞いた？ウチの会長から」とつとと逃げる『だってさ』

「それじゃ、退避いー」

さっさと距離を取り始める琴音たちを一年集団が追う形になり、十分な距離をとって振り返った時…

ずだだだだだだだだだだ

「」「」「」「」「」

無数の銀光が降り注いでゴブリンを次々と葬ってゆく。  
が、巨大な幻魔にはまったくダメージが与えられている様子が無い。

落胆と僅かな絶望感が一年生たちの中に生まれ始めた時、宙に現れた銀の輝きに変化が現れた。

それまでは拡散して降り注いでいたものが一か所に集まり始めたのだ。

そして、それは剣の形を取り、鋭い切っ先を形成し

すじゃっ

「ギヤアアアアアア………」

身動きの取れない巨大な幻魔を脳天から貫いた。

続いて巨大な焰と紫電が無数の閃光と共に襲いかかる。

「うわぁ……」

「なにこれこわい」

「見事なまでのオーバーキルだな」

「オーバーキルは魔王の嗜みですよ、判ります」

「幻魔終了のお知らせ」

その光景を目の当たりにした一年生たちは口ぐちに訳の判らない事を呟いていた。

おそらく、怪電波でも受信してしまったのだろう。

ともかく、巨大で強そうな見た目の幻魔は見事にオーバーキルされて少しづつながらも光に還元されていた。

「ふう。」

殲滅を確認した私は緊張の糸をほどくと同時に息をゆっくりと吐く。それが合図になって合流していた聖奏・第六高の主力部隊全体の緊張を解きほぐす。

「お疲れ、ゆーな。白澄会長もお疲れ様」

「楓さんもお疲れ様。それじゃあ処理お願いしますね、御剣会長」  
ちよっとばかり形式ばってはいるがそこはソレ。『時と（Ｔ）場合と（Ｐ）相手次第（Ｏ）』である。

「了解よ、白澄会長」

それに今回は出現しようとした幻魔が大物だった故に歪みの中心部も大きい。

私が出張るのもそれが理由にある。

もうひとつは、なんとなく夢の事が気になったから。

今回の歪みは、はっきりと『孔』がわかるほどの大きさがあった。

………思い切って、孔を覗き込んで見た。

「…………ッ！」

そこには夢に見たままの『何かに満たされた空間』が有り、碧く輝く宝玉の如き惑星<sup>ほし</sup>の姿が

『  
』

「え？」

誰かに、自分の知ってる声の誰かに呟かれて『はっ』と我を取り戻した時、知らず知らずのうちに発動させていた空間の歪みを修復する術式によって孔は完全に塞がれた。

術式が終了したのを見て、楓たちがこっちにやってくる。

みんなのねぎらいの言葉も、後輩たちの様々な思いのつまった言葉も、さっきの声が気になって仕方ない私の耳には届いていたが聞き流されていた。

…あの声は、一体

\* \* \*

その晩、私はまた最近の恒例となった『狭間』の夢を見ていた。

違うのは、二つの地球の距離が少しばかり近づいている事。  
そして、

「……………説明してもらえない？あなたは何者で、ここは何処で、何が  
目的なのか」

私のすぐ後ろに、例の声の主が居ること。

『いいわよ。時間もなし、決断してもらわなきゃならないしね』

少しタメたあと、声の主は私と同じ声でそう言ってきた。

『ここは次界の狭間。螺旋せかいと螺旋せかいの隙間とも言える場所。』

声の主は今私の前にいる。

ただ、光の加減のせいで顔はまだ見えない。

『私はその次界を統べる者、世界を内包する世界の管理者、そして

』

中々大層な肩書らしい。

だんだんと、その全貌が光にさらされてゆく。

そこにいたのは、ある意味では予想通りの人物だった。

『別の可能性せかいで生まれ育った、御剣唯奈あなた』

驚くほどの事じゃない。

今、私たちの世界にいる誠は別世界から流れ着いた誠を『この世界の誠』で上書きした存在なのだから、居て当然ともいえる。

「なるほど。で、何のために私に接触してきたの？」

『気付いてるくせに』

流石、別世界とはいえ私だ。

隠し事はお互いにできそうにない。

「そっちも、黙ってようとしてる事、あるんでしょ」

「『ふっ…』」

それから、お互いに笑い合ってから本格的に話し始めた。

「大方、あのすぐ近くにあるもう“一つの地球”に関わる事なんですよ」

『「明察。むこうの地球のさらに向こう側でちよつとした大魔術の失敗のせいで二つの世界が重力均衡点リケランジュポイントから外れて引き合ってるのよ」』

「廻りくどいことしないでいいわよ。引き合ってるのが私の今いる世界と“それ”なんでしょ」

『そ。引き合う二つの地球が互いに影響を与えあうから次元の壁もところどころゆるくなってるし小さい穴も空きやすい訳』

なるほど。道理でいくら街を『掃除』しても出ない訳だ。

「で、次界の管理者サマとやらは私に何をさせたい訳なの？」

『直接手出しのできない私の代わりに事態を解消してもらえない？』

…？

直接手出しができない？

「それってどういう事？管理者なんでしょ？」

『社長とか専務が部長とか係長の仕事をする訳にはいかないのと同じよ』

つまり、『この私』はほぼトップで実務をやってる連中の仕事を取るわけにはいかない、と。

「なるほどね。大体の事情は理解したわ」

世界の衝突は、破滅なのか融合なのか判らないが『私』にとってはそれは見逃すことのできない事態らしい。

だが、直接的な介入が出来ない為に『管理者では無い私』に変わりに介入をさせようとしている。

「そろそろ、こないだの『決断の時は近い』って言葉の真意を話してもらえない？」

それは、この間の特大幻魔を倒した後の孔を覗き込んだ時の事だ。

あの時、確かにそう言われた。

『……………仮にも世界に影響を出すような大技よ。そんな事をしたらず、世界の管理者が黙っちゃいない。』

その理屈は判る。

私たちだって、霊地管理をやっているのだから。

『だから、私は介入が完了した時点で“あなた”も“私”の一人にする。そうすれば世界の管理者程度がどうこう出来る存在じゃない。その代わりに』

「元の世界には帰ることはできない、かしら？」

『その通り。そのうち世界への介入をできるようになるだろうけど、それでもしばらくはかかるでしょうね』

「私が知り合いと永遠に別れるか、世界と一緒に消えてなくなるか。確かに決断しないとね」

『別に、今すぐとは言わないわ。……………あなたの世界で五月五日の

日に、コレを持って孔の場所まで来て。来なければそれでいいわ。世界と運命を共にするって決断したって事だから。』

私の手の中に、栞のような短冊状の物が現れた。

『それじゃ、ね』

急に明るくなって目の前がホワイトアウトし、目を閉じる。

次に目をあけたらそこは見知った天井で、雀のさえずりと朝日が演  
出するゴールドデンウィーク直前の月曜の朝だった。

\* \* \*

その日、唯奈はなにやら手に持った何かを眺めながら呆けていた。

ただ、多忙な役職故にひと段落後のちよつとした燃え尽き症候群的な物ではないかと思われ、かつ学年順位が一位であることから『まあ大丈夫だろう』と教師陣も放置していた。

「ゆーな、おーい」

見かねた楓が目の前で声をかけても反応が中々帰ってこない。

というか、目の焦点がなんかズレてるような気もしないでもない。

目の前で手を振ってみてもイマイチだ。

目の前で手を叩いて、所謂『猫だまし』をしてみても反応がないのは流石に驚いた。

『心ここに在らず』

正にその極致だ。

突いたり、軽く叩いたりしても反応が無い。

目を開けたまま寝てるんだろうか、とも思ったがそれなら流石に突かれた段で気付く筈だ。

「…うーん、最期的手段（その1）を使わないとダメかな」

そう呟いて楓は唯奈の耳に息を吹きかけた

「ふっ」

「ふにゃあッ!?!」

したら、ようやく反応が帰って来た。

あまりのびっくりし具合に様子を見ていた方がびっくりするくらいに。

「よーやっと帰って来たみたいね。」

「あ…！もう授業が」

「全部終わって放課後だよ。」

「え！？」

もう放課後だという事に驚く唯奈。

本当に気付いていなかったらしい。

「ずっと上の空で、先生も諦めたみたいだったよ。」

「あっちゃー…やってしまった…」

頭を抱える唯奈。

そこで遥は本題を切りだす事にした

「何か思いつめた様子だったけど、どうかしたの？」

『相談に乗るよ、と言っても多分言わないだろうな』と二人は思っていた。

「ん、ちょっと考え事してた。」

それで、少し俯いてしまった唯奈に不思議そうな顔をする楓と遥。

「ねえ、この世界ってどう思う？」

あまり大きくない声での問。

何故そんな問が出てくるのか不思議で仕方ないが楓は答える

「色々あるけど、楽しいよ」

「うんうん」

それに遙も同意の肯首。

「そっか……………」

唯奈の顔が、何かを決断したような、迷いを振り切るような目つきに変わったのを楓は感じた。

楓の胸中に、なんだか不穏な予感が募る。

「ねえ、明日皆で遊びに出ない？」

明日はゴールデンウィーク初日。

一年前は一連の大事件『魔の五連休』があつたが、今年は確執のあつた組織は殆どなく、技術面でもかなりの進歩を遂げている為あんな事件は起こる事は先ず無いだろう。

「せっかくの連休なんだしさ。ねー！」

「うん、うん」

有無を言わずに押し切り約束を取り付ける楓。

押せば押すだけ引いていきそうな唯奈を、強引に下がらせないようにした。

「ついでにウチに泊ってく?」

「え?」

「お母さんも会いたがってたし、そうと決まれば和葉さんと琴音さんに連絡、連絡」

「え、ちょ」

勢いに乗った楓を止めることは今の唯奈には至難の大事であり、多少の抵抗こそできたが大勢には何の影響も無かった。

唯奈の『高槻家へお泊まり』が確定したのはその三十分も経たないうちであった

「ねえ、楓」

「なに？」

翌日、集合場所で唯奈は思わず楓に尋ねてしまっていた。

「…人数多くない？」

今ここに居るのは唯奈と楓、遙に誠と琴音、マナとツバキに晶と雅人、啓作に梨紗に紗枝に凜。

他校生である里桜や愛衣、純も居る。

オマケに遙から聞きだして参加の奈緒、奈緒から伝えられて集まったひかり、信乃、佐織。

紫音に進に浩平の一年生トリオも居るし、何故か和葉に咲月に陽菜母親トリオも居る。

この時点で26人居るが全部ではないのだから恐ろしい。

集まったメンツ的には生徒会連合（＝術師連合）の現役&OGという、これだけで戦争を起こせそうな戦力集中っぷりだ。

「だいじょーぶ。五組に分けてボーリングの予定だし」

他に考えが無かった訳ではないが、集まった人数的にそれが一番無難という判断だった。

ちなみに、籤は用意済みで楓の鞆の中にある。

「それに、このままこーやってのんびりしてるんでもイイんじゃない？」

広々とレジャーシートが敷き詰められた上で楓は足を投げ出して寝転がる。

集合場所として楓が指定したのは睦斗市中央公園（広大な広場のある市営公園だ）だった。

そこでシートをしいて皆でお昼（唯奈と楓と咲月と琴音、誠らによる持ち寄りの弁当）を食べてからの遊びに行く。

弁当箱とレジャーシートはデットウェイトになるがそこはそれ、男性陣もっちもちに丸投げの予定。

「…それもそだね」

計画性があるようで無い、そんなめちゃくちゃな企画ではあったがそれもそれでいいと思った。

だから唯奈も楓の横に寝転がって一緒になって空を見上げる。

幸運にも晴れた空はどこまでも高く

「……、主催者！サボってないで音頭取ってよ！」

そこに遙の悲鳴が飛び込んできて、楓と唯奈は互いに苦笑。

それからやれやれと言わんばかりに起き上って弁当を囲む環の中に飛び込んでいった。

『続きはまた後で』。

そう、決めてから。

\* \* \*

結局、食後はそのまま公園でのんびりすることになった。

弁当箱だけは唯奈がこっそりとゲートを開いてそれぞれの家に持ち帰らせたため荷物は最小限。

思い思いの人と、思い思いに過ごす昼下がりがり。

唯奈は、約束通り楓と一緒に寝転がって空を眺めていた。

「……………」

ただぼーっと空を見上げる。

単調で、単純で、つまらなそうに聞こえるが『誰かと一緒に』となると意外と面白い物である。

沈黙。

微妙な緊張感と『言葉なしでの意思疎通が出来ている』ような気分になれる、不思議な時間。

そんな時間を終わらせたのは『ピシリ』という、どこか破滅を感じさせるような音だった。

唯奈のポケットからこぼれた朶が、銀色の輝きを放つ。

その瞬間に『世界』が変わる。

その変化に反射的に思考を戦闘向けに切り替えて即戦闘可能な面々は敵襲に備え、武器が必要ながら持ってきていない面々は邪魔にならないような位置取りに移行。

接近戦を主とする面々に至っては靴も装備し駆け回る準備も万端にしている。

全ては、和やかな日常の時間に戻る為に。

だが、今回ばかりは勝手が違った。

身構える唯奈たちの目前に魔方陣らしき紋様が浮かび上がってくる  
と、その中心から刃が生えてきた。

その刀身から銀色の輝きが方陣へ広がり重々しい音と共に紋様の上  
に人影が投影される。

「えっ!?!」

「ッ!」

視線が唯奈に集まる。

身構えている方ではなく、方陣から現れた方に。

『団らん中悪いけど、時間切れが予想より早まったわ。今すぐ、  
けど決断できる?』

そんな事をお構いなしに唯奈に話しかける投射体<sup>ゆいな</sup>。

「そんなの、とっくに出来てる。」

『上出来。』

にやり、と笑う

「ただ、みんなに事情説明くらいはしてよ?」

『…きつと、ね』

方陣へと足を進めようとした唯奈を阻んだのは楓の腕だった。

後ろから抱き抱えるようにして、楓の腕が唯奈を掴まえる。

他の面々は思考停止に陥っているのか身動きが取れないでいる。

「楓、放  
」

「行っちゃ嫌だ、とでもいうべきなんだろうけど…」

振りほどこうとする唯奈が、動きを止める。

楓が少し腕を緩め、唯奈は楓と向き合う。

「それは野暮ってもんでしょ。」

楓は、薄々ながら気付いていた。

唯奈が、何か『覚悟を決めた』事、そしてその結果どこか遠くへ行ってしまう事に。

そしてそれは、唯奈自身の為ではなく、『わたしたち他の人の為』である事に。

「だから、私はこう言っただ。」

それは、今まで通りの言葉。

「行ってらっしゃい。帰ってくるのを待ってるからね」

思考停止から抜けだした面々も、黙ってその光景を見守る。

「            どれだけかかるか判らないよ？」

心なしか、声が揺れていた。

「それでも、私は待つよ。」

「            ツー！」

今度は、唯奈の側から楓にしがみつく。

まるで、泣き顔を隠すかのように楓のおなかに顔を押し付ける。

「待つのは、楓ちゃんだけじゃないわよ」

琴音に続いて、『私も』『俺も』と声上がる。

「お姉ちゃん、みんな            」

楓から顔を離れた唯奈の目は僅かながらだが赤い

「マナ、皆のことお願いね。」

「うん」

「ツバキ、私の机の引き出しに入ってるのの続き、お願いしちゃっていい？」

「任せました」

「お姉ちゃん、お母さん達をよろしくね。お母さんは全く家事出来ないから」

「こら、そんな心配しなくていいの！」

「ふふふ、判ってるわ」

「佐伯先輩、事後処理はお願いします」

「…今回ばかりは、骨が折れそうね」

そして、しがみついていた手を放し

「そしてみんなに 行ってきます！」

背中を向け、魔方陣へと駆け込む唯奈。

精一杯の強がりに見えるその姿を楓たちはただ見つめる。

魔方陣の中心に辿り着いた唯奈は投射体と共に溶けるように消えてゆく。

散ってゆく銀色の光。

非日常の終わりを告げたその残滓を見送ってから楓は咳く。

「行ってらっしゃい」

なんだか、むしように泣きたくなった。

けれども、楓は泣かない。

『帰ってくる』と約束したから。

『行ってきます』と言って旅立ったから。

『行ってらっしゃい』と見送ったから。

少し長い間、会えないだけなのだから。

そして、心に決めた。

帰ってきたら、会心の笑みと共に言ってあげよう。

『お帰り』と。

だから、待つ。

『ただいま』と言って、戻ってくる日を。

ぐいつ、と袖で目許を拭ってから楓は務めていつも通りの笑顔を浮かべる。

唯奈は日常を守るためにあの決断をした。だから、その日常を大切にしよう、と。

「さーて、頑張るよ！」

唐突な楓の言葉だが、帰って来たのは一様にして『応える』声だった。

シートの上にこぼれた栞は、もう輝かない。

\* \* \*

『随分と、可愛がられてたのね』

「まあ、ね。そういうそっちはどうだったの？」

『もう、覚えてないわよ』

二人の唯奈はそんな事を言い合いながら銀色の方陣を組み上げる手を止めることは無かった。

近づきつつある二つの世界。

管理者たる唯奈が直接手を出せない代わりに、人間で、魔法使いでしかない唯奈が行う『次界』への干渉。

「嘘つけ」

構築が終わった方陣に、次は魔力が集まり始める。

一度身体を通って方陣へと注がれてゆく魔力。

それが、臨界に達した時、管理者の方の唯奈がぼそりと言った。

『 大泣きしたわ。引きとめられて、夜にこっそり飛び出して

…』

方陣が臨海を突破し術式が稼働を始めようとする。

『 …でも楓にはバレてて、そこでも大泣きして タイムアップ  
に急かされて以下略。』

「なるほどねえ」

暴走と安定の狭間を暴れる魔力を抑えつつ、唯奈は言う。

「そっちも、こっちでも楓には頭が上がらないわ。これ、アカシック・レコード世界の記憶にでも記述されてるんじゃないの？」御剣唯奈は高槻楓に頭が上がらない』って

『 そんな、まさか』

「あり得ないなんて、あり得ないんだよ」

そついう唯奈の手に、巨大な魔力球が形成される。

それを弾けさせることで微細ながらも波を起こして接近しつつある世界を押しとどめ、押し流す。

強すぎてダメ、弱すぎてダメ。

繊細な調整が加えられた最適な魔力球。

「さて、行きますか！」

『……………それを撃つたら、すぐに「引き込む」からね』

「そんじゃ、これからよろしく、私」

『ええ、歓迎するわ。甘えん坊で、同じくらい人たらしの私』

ぱーん、

その瞬間、銀色の閃光が次界の海を満たして舞った。

# 1 4 5 (後書き)

これで終了・・・。

けれども、彼女たちの物語はもう少しだけ続きます。

# After -そして時は流れ……………-

あれから、十数年の時間が流れた。

高校という短い時間を駆け抜けた私たちはそれぞれの路へと別れ、歩んで行った。

進学、就職、人によっては結婚し、更にその中には子供が居る人もいる。

十数年という時間は、短いようで長くて、過ぎてみればあっという間の事だった。

それでも、過ぎた時間は確実に私たちを変えていた。少なくとも、当時小学生だった誠の妹を社会人にしてしまう程度には。

遥も姓を藤谷に変えて旦那まんなとよろしくやっている。

確か、一番上の子が来年の春に小学校に上がるのだとか。

そのほかにも、苗字が変わった友人は少ない。

同窓会が『母親の集い』に半ば化しているのも致し方ない程度には。

かく言う私、高槻楓も…

「おかーさん！ツバキさんが待ってるよー！」

現在幼稚園の年長、来年の春には小学生になる娘が居る。

まあ、娘と言っても少々訳有りな生まれ方をしており、父親も居ないのだけど…

強いて言えば、十数年前に『彼女』が残したモノの成果だろうか。

とはいえ、予想外に早かった初孫に母さんたちはもうメロメロ。  
それに、母さんたちも『裏』の人間だったから判ってくれるのも早かった。

「はーやーくー!」

「今行くわ」

急かす娘 唯香ゆいかの声に応えて、私は身支度を確認する。

それから、ちらりと机の上に飾られた写真立てに視線を向ける。

そこに写っているのは聖奏学園の制服に身を包んだ一団。

そこには、唯香に似た面影を持つ少女も居る。

「…十八年、か」

それは、『もう』という意味でもあり、『まだ』という意味でもある。

ただ、あれから十八回目の五月三日がやってきた。

それだけの事。

けれども、その日は私たちにとって『特別な日』。

「それじゃ、行ってきます」

外に出たら、待ちくたびれた様子の娘と、微笑ましげに頬を緩める乳母同然のツバキが待っていた。

「遅いよー」

「お待たせ。さ、行きましようか」

「うん！」

唯香の右手は私の左手と、唯香の左手はツバキの右手と、しっかりと繋ぐ。

行く先は、十八年前の約束をした場所。

再開発で少しばかり様相の変わった街の中で、唯一姿を変えなかつ

た場所。

「楓、遅いわよ」

十八年前と全く同じ場所に広げられた巨大なレジャーシート。

そこに集まっているのは、十八年前にここに集まった仲間たち。

「ごめん、ごめん。」

「まあ、十分許容範囲だし、集合時間よりは早いから問題ないんだけどね。それじゃ、始めましょうか」

十八年前から毎年繰り返された『集まり』が始まる。

\* \* \*

「唯香ちゃん、随分とおっきくなったわね。」

「晶菜ちゃんだって、十分大きいでしょ」

団欒する私たちの視線の先には、子供たちが集まっていた。

が、まだ幼稚園児か小学校低学年生が大半なので引率役にマナが黒猫の姿で混ざって面倒を見ていた。とはいえ、大半が昼寝中で一部のやんちゃ坊主が駆け回っている程度。

「なんだか、マナと一緒にいる唯香ちゃんを見てると思いだすね」

「……………そうだね」

『誰』を思い出すかは言わずとも判る。

その時だった。

ピロロロロ…

「ちよつと失礼」

私の携帯電話に着信があった。

送信元は、私の職場。

睦斗市が十八年前の『大発光事件』後に設置した裏に対応する為の部署。

『特殊災害対策課』

…この課に入って一番最初に思った事は『役所って特殊とか特別って単語が好きなんだなあ』だったのは今だに覚えている。

それはともかく、

「はい、高槻です。」

『ああ、休暇中悪いが今何処に?』

今日が当番になっている室長からだった

「中央公園の広場に居ますが…」

『丁度よかった。そのあたりで微弱ながらも空間が歪み始めているんだ。早急に対処を』

ノイズが激しくなり、遂には切れてしまう。

「どうしたの?」

「職場から電話が有ったんだけど切れちゃって　っ!」

ぞくり、と背中に悪寒のような物が走った。

それはまるで、空間が歪む前兆でも有るかのようにな………

ぐにゃり　と、空間が曲がるような錯覚

かつては日常的に起こり、十八年前の『あの日』以来は年数回程度となった『それ』

私は『市職員の仕事』として対応に当たって来たから良い物の、ここにいる面々の半数以上は戦列を離れて久しい。

だから、この時は生徒会連合のOGとしてではなく、睦斗市役所の特殊災害対策課の職員として動く。

「ツバキ、避難誘導！マナちゃん、子供たちをよろしく」

それから、いつも通り符を取りだそうとして、持ってきていない事を後悔する。

私には魔力はそれなりに有ったようだが使う方の才能は皆無と言って良い。

だから『発動体』となる符を使っていたのだけど…

万全の態勢とは言えない状態のまま、特徴的な『パキン』という音が歪みの中に響く。

歪みの中心部　公園の広場の中心から、何かがはい出てこようとする

出きった瞬間が勝負………

そう、身構えていたら

「ぐぐぎやあつ」

はい出てこようとした幻魔が、下から生えてきた銀に輝く刀身にあっさりと思モノにされていた。

「え？」

光となって溶けるように消えてゆく幻魔は誰もが意識の外側に追いやり、その串モノにした刀に視線が集まる。

それは、『十八年前』と同じような……

幻魔がすっかりと光に還元された後に、残り続ける刀。

それは、存在を誇示するかのように立ち続ける。

きゅっ…

左手の指を握られてはっと我に帰る。

唯香が私の指を握って、不安そうにこちらを見上げている。

「おかーさん…」

見てみれば、それぞれ子供たちは親元に寄っている。

それはうちも例外ではない。

「大丈夫。」

そう言って、自由な右手で優しく頭を撫でる。

刀から円が現れた。

それが地上から二メートルほどまで浮かびあがって、円の中に複雑な文様が書かれてゆき、方陣が出来上がる。

そして、その方陣の中に銀色の光が満ちてきて…

『だあー、やっと来れたー！』

その光が抜けた後、どこか透けて見えるが懐かしい、待ちわびていたあの姿が現れた。

その姿に私たちはただ、啞然としてしまう。

『……………ん？』

そして、私と目が合う。

『えっと……………楓？』

不意に、目頭が熱くなった。

「まったく、何年待たせたと思ってるの？」

声が、少しだけ上ずってしまってる。

『「う、五年くらい？」』

「十八年よ」

たったの、十八年。

長くも、短い時間。

『なるほどねー。道理でみんな老け』 「老けた言うな」

でこぴんの一つでもしてやりたいけど、触れるかどうかも判らないのでツッコミだけに留めておく。

『道理で、みんな大人びた訳だ』

言い直させて、その頃によく状況を飲みこめたみんなが駆け寄ってくる。

「で、いつまで幽霊状態で居るつもりなの？」

『あ、これ以上出来ないんだ』

抱きしめたい。

そう思った私の言葉はほかならぬ『彼女』に否定された。

『管理者権限でこうやって中までは入ってこれるけど、直接影響は与えられないんだ』

つまり、この幽霊みたいな姿が限界。

「そんな……………」

眩きが、背後からこぼれてきた。

『これでも頑張った方なんだよ？この世界を総ての中心に据えて、総管理者の居場所に一番近い直轄世界にしたんだから。』

それでもしなかったらこんな事できないし。

なんて続けた『彼女』は笑う。

戻ろうと、約束を守ろうと全力を尽くしてくれたんだろう。

『まあその代わりに、なんとというか、ヤバげな神さま系の上役になつちやったりもしたんだけどね』

「なんか怖いから具体的には聞かない事しておくわ」

『まあ、色々あったけど、これからは多少近くに居れると思つから

………』

“ たいま ”

そして、薄ら透けた姿が虚空に消えてゆく。

同じくして、魔方陣もその姿を虚空に沈みこませてゆく

ほんの短い時間だったけれど、戻って来た事が実感できた、約束が果たされた瞬間。

だから、私たちはこう言うんだ。

「おかえり、唯奈<sup>ゆいな</sup>」

歪みが消滅した後、刀身のあった場所にはちいさな、木の芽が芽吹いていた。

\* \* \*

ねえ、知ってる？

そう、話しかけてきた友達と言う

市役所の近くに、遊具も何も無い、広場だけの公園がある。  
その公園、昔は今の数倍の規模があったけれど、街の再開発で今の規模まで縮小されたらしい。

「で、その公園が何故広場だけ残されたのか、だけど…」

ごくり、と一緒に聞いていた友人たちが息を飲む。

「あそこの広場の真ん中にさ、やけに大きい樹が生えてるでしょ？  
そこに『護り神的な何か居るから』らしいのよ」

真顔でそう言った友達に、友人たちは言う

『何をバカな事を』

「唯香、あんただけは信じてくれるよね!？」

話を始めた友達が、唯一否定的な事を言わなかった私に寄って来た。

私は……………

「信じるも信じないも…私、会った事あるよ。」

保存樹になっているあの木が、まだ小さい芽だった時に。

「また始まった、唯香の不思議ちゃん」

「まあ、そういう感じる系が強いのかもね」

私の発言に興ざめたのか会話の流れはこの後に控える連休にシフトしてゆく。

高校に入って一度目の、まとまった連休。

「じゃあ五月三日でいいんじゃないのかな」

今年出会ったばかりの友達がそう切り出したけれど

「あ、ゴメン。その日はちょっと用事があるんだ」

小学校に上がった頃から毎年参加している、幼馴染たちとその親との集まり

「他の日に回せないの？」

「唯香は小学校からずっとこうだよ。」

「五月三日だけは必ず用事が入ってるの。」

「ごめんね」

「ま、いいけどわ」

それじゃあ、いつにしようか。

そんな話もいつしか雑談に変わり、教室に夕日が差し込む時間になり、

「それじゃあ、またね。」

『計画』なんて代物が出来上がる前に帰らざるを得なくなる。

ちよっと、ふとした出来心で私は『例の公園』に立ち寄る事にした。

ただの広場でしかないその公園の真ん中には保存樹に指定され、一部では御神木とまで呼ばれている樹がある。

「こんにちは、唯奈さん」

その、枝の一本に腰かけた私よりも小さな少女、母さんの大事な人に挨拶だけはする。

本当は入学した日にも報告に来ただけど、その時は居なかったからお披露目は初めてだ。

「私も、聖奏学園に入ったんですよ」

母さん曰く、昔から変わっていない制服をくるり、と回って見せる風が吹いて、樹が立てる音が『頑張ったね』と語りかけてくるような気になる。

「明日は、ちゃんとここに居てくださいよ。『最近姿が見えない』って、母さんたち残念がってたんですから」

ざわ…

その風の音を聞いていると、まるで苦笑いしながら『努力はする』と言ってる様。

「それじゃ、ちゃんと居てくださいよ！約束ですからね！」

それから、私は公園を出る。

六つ年下の妹と母さんが待つ、我が家へ。

\* \* \*

『まったく、親子揃って強引なんだから』

そう言いながらも、唯奈の顔は笑っていた。

『約束もさせられちゃったし、これは頑張るしかないかな』

そう言って、枝から飛び降りると地面に吸い込まれるようにその姿は消える。

世界は、今日も平常運転を続けている。

# After -そして時は流れ…… - (後書き)

これにて、Magius!の物語は一度幕を閉じます。  
ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

## あとがき

どうもこんにちは、高郷です。

2011年1月1日に投稿を開始して、丸四ヶ月かけて完結まで辿り着く事ができました。

この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

…完結と言っても本編だけの話でアクセス記念系でやるうかと思っていた番外編的な物は一切完成しませんでした。

その所は『やるやる詐欺』になってしまっただけで申し訳ありません。どうしても『唯奈』を描こうとするとあの『ちびっ娘』の方になってしまっただけです！

まともに大きい、『誠である唯奈』を書こうとしているのに……ッ

話がそれました。

あの終わり方ですが、今の自分にできる最良の終わらせ方にしたりもります。

ハッピーエンドとは言えない、『めでたしめでたし』で終わらない。

むしろ、『エンド』ですらない。

まるで打ち切りになったマンガの終わり方みたいですが、『喜怒哀楽、様々な感情を抱えたまま、地球は廻り、時間は進む』

世界ってそういうものじゃないですか

……………風呂敷を広げ過ぎて、畳むのに苦労したというのも多分に有りますが。

あと、Gジェネワールドと地球防衛軍2Pと第二次SRWZとR-Typeとかのプレイによる執筆放棄とか、ISとかバカテスに浮気してたりとか、他の人の二次創作とかを読みふけったりして時間を使いつぶしていたりも…

ついでに四月に入ってからには大学も忙しかったし…

げふんげふん  
言訳無用

書いていて一番大変だった事。

それは……………

何故にヒロインだった筈の楓が主人公と化して、セカンド主人公だった筈の唯奈がヒロイン化した！？

という一点にあります。

『んー、ここの立ち位置的には楓が適役かな』とかやってたら

遥と誠 カップルになったけどモブ化

琴音とマナとツバキ いつもニコニコな傍観者

先輩たち 最早モブ

後輩ズ オマケ

…アルエ

これは『誠 唯奈』ではなく楓を主人公でやるべきだったんじゃないか、と思えてきたりもしたんですよね。

まあ、それやったらこんな物語には成らなかったと思いますけど。

きつと、遥と誠がくつついた辺りから全てが狂い始めたんだな、そうに違いない

よし、元凶をとに拷だ って、元凶自分だ。

(とに拷!!)とにかく拷問だ 拷問にかけろ!』という某企業が出すゲームに出てくるぶっ飛んだ選択肢 捕虜の処理についての場面で実際に使われてた アレ さんパネエ)

設定資料的な物を最後に乗せておくので、クロスネタとして使いたい、又はこれの二次をやりたいと思ったださった方がもしいらしたら参考程度ですがお使いください。

できたら、その時は一声かけてもらえるとうれしいです。

さて、次は何をやるうか。

『ネギま』にしようか、『なのは』にしようか『IS』にしようか、『マクロス』にしようか…

折角なんで、ややテンプレ的なものもやってみようかなと、思っています。

それでは、またどこかで。

**設定資料（ネタばれ注意）（前書き）**

はっきり言って、作っただけの代物です。死に設定も多い上に書いてるうちに変わって行った部分も有ります。

ちなみに、自分のこれの使い方は『名前と肩書確認』だけでした。

## 設定資料（ネタバレ注意）

### 世界設定

型月魔術に近い系統の魔法・魔術が化学の裏で発展。

化学でも代用可 魔術

再現不能な神秘 魔法

一般には浸透していないが、裏の魔術関係組織はネットワークを持つており『協会』が情報集約点としての働きをするような構造。

睦斗市：物語の舞台。戦後に地脈の変動が起こったことにより一等品の霊地と化した為幻魔が現れるようになり生徒会連合の祖となる組織が出来ていった。

と、されているが実際は並行世界との接点であり、接触した為に霊地化した場所。古くから魔術師が多く住み（現在では廃業しているものも多いが）ある意味では日本における魔術の中心地。

睦斗生徒会連合：睦斗市に存在する戦闘特化魔術師集団の隠れ蓑。表向きは睦斗市内に存在する私立二校・公立六校の生徒会の互助組織。

実情としては聖奏学園、および市立第三、第四、第六の三校の互助会。睦斗学院及び市立第一、第二、第五高は名前のみである。

連合総長は代々私立聖奏学園の生徒会長が務める。  
裏の正式名称は『睦斗学生術師連合』

魔術師、および異能者、精霊との契約者を戦力と

する。非魔術師系生徒も研究開発などに当たっては居るが：

一応『協会』の出先機関の一つとなっているが、総本山である『協会本部』や『皇室』『王室』などの直轄組織でもある。

聖奏学園：睦斗市内に存在する私立学校。中学校から大学院まで持つ。物語開始の数年前から共学化した為男子部の施設がかなりお粗末。

聖奏学園高等部生徒会は魔術師である学生が所属し魔術師集団としての活動も行う。そのために現職役員が希望者から選出という方法をとって代替わりを行う。

制服は男子は黒の詰襟（中等部：金ボタン 高等部：銀ボタン）、女子は白地に蒼のラインが入ったセーラー（中等部：臙脂のタイ 高等部：紺のタイ）。

執行部：正式名称 睦斗学生連合実動処理執行部 非魔術師系の学生を中心にした対魔組織。生徒会連合とは敵対こそしていないが犬猿の仲。

当初は改造モデルガンに少々魔術師系の学校から入手した対魔の刻印を刻んだBB弾を使用していたが、現在は通常の火器を保有する（警察、市共に認めている）。

下手な自衛隊部隊よりも練度は高いが対魔刻印が不完全な為、数で押す方法しか取れない。中心となっているのは睦斗学院高等学校。睦斗学院の生徒会長が部隊長を代々引き継いでいる。

なお、基本装備として結界内部への侵入・活動が可能になる刻印と魔術防御の刻印が刻まれた防護服（白コート）がある。

魔力：人間が持つ不可思議な力の総称。体力だったり気力だったり、精神力だったり生命力だったりするが、基本的に魔法や魔術などを使うためのエネルギー源。

一般に女性の方が保有上限量が大きいが瞬間放出量の上限は男性の方が高い。物に込める事も可能で一種の葉茨みたいな物も存在する。ちなみに女性の髪の毛は魔力の貯蓄場所である。

魔道回路：マジックサーキット。魔力が流れる道。通常は血管や神経と一体化している。回路数が多いほど瞬間的に放出できる魔力量が増える。

魔法：科学を以てして再現できない現代に残る神秘を実現させる術。魔力を魔道回路に通して発動する点は魔術と変わらないが、使用魔力が多い、発現する現象が科学的には解析できないといった特徴を持つ。

多くの魔術師はこれに至ろうとしているが、事故により大惨事を引き起こさないために協会が監視している。

主な物として『並行次元への移動』『空間接続・切断』『魔力物質化』など

基本的に魔法に至るには『人間であることを捨てて魔術を極める』必要がある。

魔術：魔力を魔道回路に流し、術式を付加していくことで現実には何らかの現象を引き起こす術。化学でも再現可能な現象を指す。

代表的な物で『ルーン魔術』『五大元素魔術』などがあり、  
廃れつつあるものが『投影魔術』

ルーンなどと組み合わせて魔力を流す事で現象を発生させる『プログラム』とも言えるタイプの魔術系統も存在する。

符術：魔術とは別系統（神道・陰陽道系）の術だが基本的には人の持つエネルギーを使用して発動させる術。主に札を用いて行うもの。

異能者：魔術では説明がつかないが魔法ではない能力を持つ人間の

こと。一族に代々伝わる力などのこと。主なもので高槻一族の『焔』、柏木一族の『封絶』など。（但し柏木一族の場合は神道系であるため一概に異能とは言えない）。

魔術師：魔術を使える人の事。判断基準は魔術が使用可能な魔道回路を持つていること。

魔法使い：魔法を使える人。ぶつちやけ人外存在。

並行世界：『あり得たかもしれない世界』の姿

並行次元：いくつかの世界の集まった物。基本的に同じ次元に所属する世界は根本的部分で同一である場合が多い。

さらに上位の次元が複数集まった物が存在しそれは『次界』と呼ばれる。

ちなみに次界の上には宇宙が存在し、更にその上には…と延々と大型化してゆく。終点はあるのか、それは最高位の世界の管理者ですら判らない。

世界の管理者：複数の世界が消滅、もしくは干渉し合う事が無いように監視する『概念存在』。

基本的には輪廻転生から外れている。複数人で担当する場合もある。

精霊：魔術における五大元素系魔術に近い力を持つ精神エネルギー生命体。一部のもの好きな精霊が人間との交流を選んだ事から『契約』という制度が生まれた。

契約とは精霊が力を行使する代償として契約者から魔力や精神力といった精霊の体を構成するエネルギーを補充させてもらう、一種のギブアンドテイクの関係。

精神エネルギー生命体であるため、体を構成するエネルギーを使い果たせば当然『消滅』する。

使い魔：魔術師が使役する『お手伝いさん』的な存在。

動物をベースにしたもの、自身の魔力のみで編み上げた物などさまざま。

特殊な例としては消滅しかけた精霊をベースに魔力を補充して使い魔とするという事も不可能ではないが、精霊の方の好みに合わない限り、精霊は自身の消滅を選んでしまうため殆ど見る事はない。

幻魔<sup>デモン</sup>：いわゆる鬼だとか悪魔だとか吸血鬼だとかの姿をした化け物。

一体限りの個体は次元内に存在した別世界原産の概念が世界によって形を与えられた物、大量生産品は次元や世界に溜まった淀みが形を得た物。

基本的に生命体として存在しえないので生命活動を停止させられると塵と消える。また、幻魔による被害はその幻魔を消滅させた時点で『根本からなかったこと』に操作され、魔力を持つ者以外にとっては『無かったこと』となる。

ゴブリン：体長1mほどの一つ目の人型。大量生産品その一方で対魔刻印弾の掃射で消されてゆく雑魚。

（イメージ：GPMのゴブリン）

インプ：体長1.8mほどの人型。（イメージ：GPMのミノタウルス）

ガーゴイル：翼と鞭のような尾羽を持つ鳥人間。1・8 mほど。  
(イメージ：遊戯王のウィップテイルガーゴイル)

イーター：体長2 mほどで蜘蛛から人間の上半身が生えたような格好の異形。頭の大きさがSD化したかのように頭の大半が口。

名前の通り、喰らい付いてくる(イメージ：マヴラヴのガキ)

人物(年齢は物語開始時) 4月15日)

### 【主人公】

藤谷 誠

4月4日生まれ 16歳 魔力【有】適正【投影】異能【同調】  
男 男/女 女 身長：173? 体重：72? 女性時：  
身長 165? 体重：52? 3S：一応女と判る程度の凹凸 -  
< 85 - 56 - 88

基本的に前半の主人公。

ごく普通の家庭に生まれ、不幸体質の父親を亡くし、母親に女装を強要され写真は雑誌に使われるという中々にハードな幼少期を過ごしてきた。

成績は上の上。幼いころから母子家庭であったため、親に負担をかかけまいと奨学生になるべく勉強はしていた為基本的に学年で上から数人に入り続けていた。(のちに同調が出来るようになってからは一位から転落することはなくなった)

女装させられ、モデル業を営まされている間の芸名(?)は『橘高統夜』。

仕事人な母に代わり藤谷家の家事を一手に担当する為家事技能は並の主婦より上。現在一人暮らし中。

聖奏学園に入学して一週間が経つ頃に幻魔に襲われて魔力が覚醒、魔術使いとして生徒会にスカウトされた。わりと几帳面なので事務仕事や渉外の仕事に向いていたらしい。

当初は膨大な魔力を持つが魔力をただ放出することしかできなかったが、ピンチごとに火事場の馬鹿力を発揮し『魔力の物質化』という奇跡に近い術式を使えるようになる。

儀式魔法を阻止し大量の魔力が体に流れ込んだ為に起こった性転換後は魔法レベルの各種魔術を使用できるようになる。

魔道回路の閉鎖という荒技で戻れるようになったが、魔術協会日本支部の支部長に目をつけられ女性体の時に『魔法使いからの遺伝』のデータを取るためという名目で強姦され、『藤谷誠』としての人格は修復不可能に近いほどのダメージを受ける。

一矢報いるべく、自身のコピー（自分の魂のうちの女性的部分）異能者であり魔法使いである自分）を切り離して脱出させた後、精神崩壊を起こし以後ゆっくりと『女性としての人格』の構築が始まる。

なお、魔力覚醒前も微弱ながら魔力を垂れ流し状態にしていたらしく消滅寸前の精霊（自我も殆ど残っていない）が数体背後霊よろしく張り付いていた。それらは後に使い魔となる。

当初は元々と大差ないショートカットだったが、伸びてからはポニーテール一本結いになっている。

女子としてはやや長身。美少女でありながらも漢気あふれる『姐さん気質』だったため男子以上に同性のファンが凄いいことになっている。

『同調開始』<sup>アクセス</sup>をキーワードとして、『世界の根源』からのデータ収集が行える。

なお、属性も与えずに放出した魔力は銀色をしている。

一時的に素性を隠す為に魔術にラテン語の詠唱をつけた事もある。

射撃攻撃用 『liberation』 (放出) , 『persolve

(発射)』

防御障壁用 『shut sicc』 (遮断)』

魔力物質化用 『fashion』 (形成)』

御剣<sup>ミツルキ</sup> 唯奈<sup>ユイナ</sup> 女

藤谷誠の『異能者』としての部分を分離して生み出された。後半の主人公。

元が純粋な魔力で出来ていた為精霊に近いが、世界との接続がある為、殆ど弊害なく実体化可能、また消滅する事はない。

また、つきつめた実体が『魔力の塊』である為世界との同調がより深く行える。その為ほぼ『世界の理』根源』そのもの。その為、その世界であり得る事という範囲の中ではなんでもあり。

後に次元世界同士の衝突による出身世界の消滅を防ぐために次元世界と契約し『次元世界の管理者となる』ことで融合を強制的に阻止した。

その後は交代を望む管理者によってより上位の世界の管理者に据えられてしまい、各世界にコピーが配置されるようになる。 要は不本意ながらも最高神になった。

管理者の系統を整理し、元の世界に顔を出せた頃には十年の月日が経っており、同級生の大半が親になっていた。

協会日本支部脱出の際に小柄な子供サイズ(身長:115? 体重:

21?の6歳児くらい)に安定してしまつた為、素で『見た目は幼女、頭脳は大人以上』を行く。

また、『怪我を負う』『汗をかく』などの人間としては当たり前の事が出来ない為、『人間とまったく同じ機能を持つ人形』を使用している。その際は魂と精神の融合体みたいな存在扱い。

その人形の身長が124?と本体よりも少し大きめなのは単なる意地。

命名者は佐伯遥。苗字は遥のハマつていたゲームやアニメなどから、名前はなんとなくピンと来たらしい。

愛称『ゆうな』。その為『ゆうな』が本名だと思つる人間も居ない訳ではない。

偽名として『月代<sup>ツキシロ</sup> 未柚<sup>ミユ</sup>』、『神野 鈴音』など、遥が名前の案として上げた物がいくつか(訂正 いくつか『も』)ある。

御剣<sup>ミツルギ</sup> 琴音<sup>コトネ</sup>

女 身長165? 体重:52? 85 - 56 - 88

協会に捕縛されていた『藤谷誠』に再生された女性的な人格。体の方は協会による度重なる実験によつてボロボロだったため、唯奈の作り上げた『人形』を肉体として蘇生された。

名前は唯奈に頼まれた和葉がつけた物。『誠』から『こと』という音をもらつて考えた。唯奈は基本的に『お姉ちゃん』と呼ぶ。

なお、『唯奈』がこの姿であつたころは『琴音が妹の通う学校を調査する為に妹の名前を名乗つて通つていた』という事になっている。

その為学年も一つ上とされている。

マナ

誠の魔力により使い魔として復活を遂げた精霊・身長150センチ前後、やや小柄な中学生程度。精霊だった時の名前は『マナリアミュネサリル』だが、誠によって大胆に省略されてマナとなった。黒猫の姿と人の姿の両方を取ることが出来る。

ツバキ

唯奈が新たに作りだした使い魔。純粋な魔力から生み出された『擬似精霊』とも呼べる存在。

性格的にはおっとりとしていてちよつと天然。イメージは大型犬。実際に姿を変えると犬になる。ゴルトンレトリバー

犬と猫でマナとは仲悪そうだが、実際は割と良好。人の姿の時は身長170近く、見た感じではマナと唯奈の姉。

戦闘目的よりは補助・支援が目的で自衛程度に攻撃魔術が使える程度で探知・結界系などの補助系魔術が得意。

時々、犬のたれ耳が出てしまう事もあるが、妙に似合っているので大抵の人が突っ込まない。

(Fateのメデューサ：ライダー辺りをイメージするとイイかも) 睦斗市内の監視網の構築をする。後に管制機能を持たせた使い魔(毛玉)に監視網を一任する。

藤谷誠(二人目)

特務隊の鎮圧した週明けに唯奈たちの目前に斬殺一步手前の状態で現れた別世界の誠。

とある目的の為に世界を渡ろうとしたが途中で『管理者』に撃墜さ

れ、漂流して流れ着いた結果である。  
何度か極小の歪みが発生したのも、世界に近づいては離れを繰り返していた頃。

魂レベルで欠損が合った為、唯奈、琴音の二人が持っていた『誠としての要素』を利用して復元した結果、元の人格ではなく、この世界の誠に近い存在として復活を遂げた。

### 【生徒会関係者】

タカツキ  
高槻 楓 カエテ

6月12日生まれ 15歳 魔力【無】異能【焰】 女 身長：  
163? 体重：52? 83 - 61 - 70

一応前半のヒロイン。誠とは幼馴染。

異能の一族『高槻』一族の直系の子孫。能力の事は隠していた。広域殲滅型として数の多い雑魚掃討に特に力を発揮するが、どちらかと言えば大技系が多いので細かい制御が必要な場面や物理攻撃以外の手段が必須な場合は牽制役や戦闘以外に廻る事になる。

わりと活動的で幼馴染の誠に淡い恋心を抱きながらも『異性の友達』ポジションに甘んじている。（実情は好意に鈍い誠の外堀をガリガリと埋める作業を行っている。）

誠が生徒会に加入すると同時に生徒会に加入した。裏方仕事やサブリーダー的な仕事を多く受け持つ為、それほど存在感は強くない。髪型はやや長めのショートカット（夏休み後に伸ばし始め二年に上がるころには肩口くらいまで）、どちらかと言えば『かわいい』系。

復活後の誠（其の式）相手だと違和感がどうしても先行してしまい『幼馴染』を演じる以上はしなかった。

それ故、争奪戦（遙、里桜ら）には参加せず『自分が恋心を抱いた誠』が認めるであろう相手探しを始めた。

最悪、唯奈の『義体作り』と『擬似精霊創成』を頼りにして相手の居ないシングルマザーでもいいかとか思っていたりもする。

佐伯 遥 サエキ ハルカ

8月15日生まれ 15歳 魔力【有】適正【五大元素】異能【無】 女 身長161? 体重51? 78.7 - 59 - 67

生徒会長の妹にして楓のクラスメイト兼友人。

当初はそれほど魔力が強い訳ではなく希望者でもなかった為生徒会役員ではなかったが、誠の女性化の一件から生徒会に関わるようになり夏休みごろ、誠に魔術の指導を受けて魔術師として生徒会役員となった。

なお、その頃から楓とは『恋敵』と書いて『しんゆう』と読む関係となる。中々にアニメだとかゲームだとかを幅広く趣味に組みこんでいる。

誠との初エンカウントは五月のゴールデンウィーク。髪型は伸ばしっぱなしのロング。

佐伯 奈緒 サエキ ナオ

17歳 魔力【有】適正【ルーン】異能【完全催眠】 女 身長：165? 体重：53? 85 - 63 - 74

聖奏学園生徒会会長、誠たちの二年上の先輩。魔術師としての戦闘力は戦闘特化ではないためそれほど高い物ではないが、事後処理担当としては戦える方。

人望も篤く、生徒会連合所属高校の生徒会長からも全幅の信頼を持つて『司令』として遇されている。

家は睦斗市有数の佐伯グループ。夏休み後世代変えの際に唯奈を生徒会長に指名し以後、完全に裏方に回る。

霧島<sup>キリシマ</sup> 梨紗<sup>リサ</sup>

16歳 魔力【有】適正【】異能【物質変換『剣製』】 女  
身長：159? 体重：49? 80 - 60 - 70

生徒会副会長、誠達の一年上の先輩。魔力は持っているが魔術師ではない。『剣製』はコンクリートなどを『剣』に変化させる能力、錬金術的なもの。

家は佐伯グループ系列の霧島製菓、化学部部长兼生徒会連合技術顧問の紗枝は双子の妹。同級生で生徒会会計の氷室啓作とは幼馴染で本人いわく婚約者。

当初は切り込み隊長であったが、体格、腕力、技術、全てを上に行く能力を持った誠の生徒会加入から前線を一年に譲り遊撃戦力として動く事が多くなった。

霧島<sup>キリシマ</sup> 紗枝<sup>サエ</sup>

16歳 魔力【有】異能【解析】 女 身長：162? 体重：  
51? 83 - 59 - 67

化学部部长兼生徒会連合技術顧問。生徒会副会長の梨紗は双子の姉。能力として『魔力を対象に流すこと』で対象を『理解』できる『』という力を持つが戦闘能力は皆無。

化学部で生徒会連合用の装備の開発などを行っている。

氷室 ヒムロ 啓作 ケイサク

16歳 魔力【無】異能【無】 男 身長：177? 体重：  
78?

生徒会会計担当。梨紗、紗枝の霧島姉妹とは幼馴染で梨紗とは親  
公認の仲。

自身は能力を持たないが、精霊と契約しており主に移動手段として  
精霊を行使するのが役割。普段は気のいい先輩だがそこそこちゃっ  
かりとしていたりもする。

コン

啓作の契約精霊。まんまキツネ。普段は省エネモードとして子  
狐の姿を取ることが多いが、移動時は背中に十人近い人数を乗せて  
も大丈夫な大きさまで体を巨大化させる。

矢吹 ヤブキ 凜 リン

16歳 魔力【有】適正【】異能【結界展開『封絶』】 女  
身長：157? 体重：53? - -

生徒会渉外。やや快樂主義的な方面を持ち可愛い物に目が無い、  
ちよつとダメな子的な部分も持つが強力な結界を張る能力を持つ、  
キーパーソンの一人。

結界『封絶』は高位の結界魔術『位相変異結界』と同様に、関係の

無い人を巻き込まず中で発生した破壊などを『無かったこと』にすることが出来る（但し生物はダメ）。

誠に渉外の仕事を引き継いでからは書記担当となる。

夏元 ナツモト ひかり  
陽

17歳 魔力【有】異能【時間回帰】女 身長：137? 体重：37?

生徒会書記。幼児体型で低身長だが生徒会で最年長。

戦闘能力は持たないが回復・修復系能力としては最高位の『時間回帰』の能力を持ち、会長の奈緒と並んで事後処理のスペシャリスト。また、『医術系魔術』（回復、呪いのレジストなど）に関してのスペシャリストでもある。

全ての事象を『無かったこと』に出来、蘇生も可能だが体力を大量消費する為あまりに大掛かりな事や蘇生などはそのまま寝てしまふほどに消耗する。

見た目に反比例して性格は大人びており、戦場での軍医に近い思考をすることもある。また、相談役にもなることがある。

赤城 アカギ アキラ  
晶

15歳 魔力【有】適性【ルーン】異能【無】女 身長：162? 体重：59?

女子部一年四組。生徒会に五月の連休明けに加わった誠らと同級。

魔力量は比較的多めだが戦闘向きな魔術系はほとんど使えず、支援、援護、探査など後方・事後処理型に特化している。奈緒に師事し貴重な支援特化型へ成長する予定。

篠田 シノダ マサト  
雅人

15歳 魔力【有】適性【五大元素・水】 男 身長：169？  
体重：65？

男子部一年一組。生徒会に五月の連休明けに加わった誠らと同級。五大元素の水の属性を持ち、基本的に使う魔術は水の属性を持つ。その為、楓の天敵になるかと思っただが、楓の能力の方が出力が上だったため逆になっているが。

#### 【生徒会連関係者】

白澄 シラズミ 里桜 リオ

15歳 魔力【有】適正【五大元素】異能【無】 女 身長：154cm 体重：55？

睦斗市立第六高校の生徒会に所属する生徒。誠らと同級。契約精霊『リズ』が居り精霊行使をしての戦闘をすることになるが、リズは後方支援型で有る為に窮地に立たされ聖奏所属の生徒（主に誠）に助けられることが多い。

後に自身にも魔力があり、魔術が使える事が判明した。適正は五大元素だが女子としては『瞬間放出魔力量上限』が半端なく高い為、『膨大な魔力』を『瞬間的にただ魔力をぶつけるだけでもかなりの破壊力を持つ。』

二年に上がった際、生徒会長に抜擢される。

結城 ユウキ 愛衣 アイ

第四高校の魔術師。魔力保有量そのものはそれほど大きくないが繊細な運用が出来る。

技量型。戦闘向きが多数派の第四では数少ない支援型だったため、修行を兼ねて抜擢された。

七瀬 ナナセ 純 ジュン

第三高校の魔術師。愛衣と里桜の中間くらいな標準的な魔術師。

一番クセが無かったので汎用型に育てるべく預けられた。

吉川 信乃

第六高校の生徒会長。三年女子。魔術師だが戦闘向きではない。有能な医師。

有沢 佐織

第四高校の生徒会長。三年女子。やや戦闘向き。威力よりも手数が多い魔力弾の速射が主要武器。

藤堂 誠一

第三高校の生徒会長。二年男子。非魔術師・非異能者・非精霊契約者であるが、事務処理能力と人脈形成に長け、人望が篤い為に抜擢された。

現在は契約こそしていないが協力してくれる精霊が何体か居る。ガタイのいい少々こわもての男子生徒だが好青年。

### 【執行部関係者】

フジサワ ソウイチ  
藤澤 惣一

睦斗学院生徒会会長、執行部の総長を務める。自身も前線に立つて戦うタイプの指揮官で、精霊『ヒスイ』と契約している。

家が佐伯グループとはあまり仲の宜しくないグループの家である為、佐伯奈緒とは仲が宜しくないが幼稚園からの腐れ縁であり互いに気になる人物では有る様子。

ヒスイ

惣一の契約精霊。風の属性を持つ。睦斗学院が幻魔に襲撃された際、力を使い果たして消滅の危機に瀕するが誠が放出した魔力をかき集めて消滅を免れ使い魔として復活。

のちに再び惣一の元に戻った。（その際は世界からサポートを受ける使い魔として）

飯島

睦斗学院生徒会役員。執行部に所属し、惣一に次期総長候補として育てられている。

工藤

執行部の一員で睦斗学院の生徒。中学時代の誠、景山のクラスメイト。

### 【その他】

カゲヤマ アキタカ  
景山 明孝

誠の中学時代からの友人。ぱつと見はサッカー少年っぽいが写真部に所属し常にデジカメを持ち歩いている。

撮影対象は自身が『美少女』と認めた女性のみ。写真はそこそこの値段で流通することから厳しい採点基準があるらしい。

要は、美少女好きの盗撮趣味。聖奏学園男子部発足時から存在する『美少女研究会』なる裏組織の幹部でもある。

ゴトウ ユウミ  
後藤 裕美

遙らのクラスメイトにして新聞部の部員。

トミサカ シオン  
富坂 紫音

中等部三年、幻魔に襲われたところを唯奈（＝誠）に助けられ、以後唯奈を探すことになる。

高等部進級後は生徒会に所属、五大元素系魔術と『魔力結晶化』という特異技能を用いた戦闘技術を学ぶこととなる。

アキヤマ ススム  
秋山 進

中等部三年、クリスマスに外部の魔術師によって精神操作され唯奈を殺しかけた。

記憶は処理されているが完全に記憶から抹消出来たわけではなかった為生徒会へ押しかけた。

適性は五大元素『風』

フジハラ コウヘイ  
藤村 浩平

中等部三年、クリスマスに外部の魔術師によって精神操作され唯奈を殺しかけた。

記憶は処理されているが完全に記憶から抹消出来たわけではなかった為生徒会へ押しかけた。

適性は『魔力放出』であった為、魔力を押し固めて弾丸として発射する特別製の銃を製作してもらった事となる。

秋山とは一年からの親友。

銃はリボルバー式で込められている弾頭は魔術触媒、実際に弾を打ちだす訳ではない。

トオノ カズハ  
遠野 和葉

旧姓結城、再婚前の姓は藤谷。 誠の母でファッションデザイナー

『ゆづきかずは』その人。

学生時代は聖奏学園生徒会の会長を務めていた魔術師。 『我が道を征く』タイプの人で大抵苦労は誠に行く。

結城家は柏木一族とも、高槻一族とも婚姻関係が有る、ある意味『異能者が生まれて当然』の一族である。

楓の母 咲月、遙の母 陽菜とは高校時代生徒会の三役として活躍していた親友。

遠野 純一 トオノ ジュンイチ

和葉の再婚相手。 こちらも妻がいたが死別している。

藤谷成悟の高校時代の後輩（和葉と同級）であった。

高校卒業後カメラマンになり、駆け出しの頃に成悟の紹介で和葉の所の専属となった。

遠野 裕未 トオノ ユミ

純一の連れ子、誠の血のつながらない妹。 現在小学五年生。

藤谷 成悟 トウマ セイゴ

誠の実の父。故人。亡くなったのは誠が小学一年生の頃。

警察官で元睦斗学院生徒会長兼執行部総長。和葉の一歳年上。

死因は職務中、赤信号で停止していたところ、突っ込んできた車の運転手を道路交通法違反で逮捕した翌日に何者かに刺された為の失血死。

昔から運に恵まれず、何かと貧乏くじを引いていたがその代わり破滅的な不運には見舞われなかった。

最大の幸運は『この人の不幸体質は私が何とかするんだ』と和葉がアタックをかけてくるようになったこと。

執行部所属だったが魔力はあり、近接武器を『強化』使っていた。

ばあちゃん

誠の祖母、成悟の母。誠の家事の師匠であり思考の大半はこの人の影響を受けている。

高槻 咲月

高槻楓の母。かつての聖奏学園生徒会副会長。

会長だった和葉の良き増燃剤。

佐伯 陽菜

佐伯奈緒・遙姉妹の母。かつての聖奏学園生徒会会計担当。実家が大手グループだったため経営系の知識はばっちりで『無駄削減』の天才だった。

また、『複合位相変位結界（複数枚の同時展開）』が可能な凄腕の結界術師だった

#### 【自衛隊 特殊災害対応隊】

村井一尉

特殊災害対応隊 睦斗支隊の最高責任者。第一小隊の小隊長と支隊長を兼任している。

佐官でなく尉官である彼が支隊長に据えられているのは『顧問』からの提言が原因で合って、自衛隊が望んで設立した部隊では無いため。

現地組織への協力要請を出すべきという至極まっとうな（むしろ一任すべき）提言を上層部にした為一度本部へ召喚されるが、後に二佐として再度支隊長へ就任。

以後、現地組織（生徒会連合及びOB会）とは協力姿勢を取る。

実は睦斗市出身で元執行部員なので『自衛隊が手を出す事自体が無意味』と知っているので端から消極的な立場に居たりする。

柿沼二尉

特殊災害対応隊 第二小隊の小隊長。

野心家ではあるが、扱いづらさからこの職に回された。

オカルト系に抵抗力が無い為思考停止に陥り易い。



## 番外編（前書き）

これは、ちょっととした思い付きの産物です。  
クオリティとか時系列設定とか、キャラ崩壊とか気にしないでね

## 番外編

それはとある春の日…

「はあ!？」

「頼む。こればかりは我々だけでは出来ないんだ」

「そりゃそうでしょうけど…」

聖奏学園の生徒会室横の応接室で唯奈は睦斗学院の藤澤会長  
今は退任したから前会長に詰め寄られていた。

頼み込むその様子からは切羽詰まった様子がうかがえるが、唯奈の  
困惑の顔が事態の大きさを窺いにくくしている。

その要件とは……………

「行き成り『全国大会に出れる事になったからチアガールを応援に  
派遣して欲しい』って言われても…」

そう、『男子高である睦斗学院に女子の応援を…チアガールを!』  
というものであった。

確かに、睦斗学院単体でやろうとしたら無難そうな処を数人見つ

るって女装させるしなくなる。

それで全国大会の会場に晒すなど、なんて酷い仕打ちだろうか。

みんながみんな、某聖奏生徒会の男子役員みたいな精神構造の持ち主ではないのだから。

だからと言って、元女子高で女子率が高い…というか綺麗どころの多い聖奏と言えどそうすぐに『ハイどうぞ』と出せるものでも無い。

「まあ、学校間交流イベントってことで公欠の申請は出来ますけど…いつなんですか？」

普通、高校の生徒会に公欠とかを申請する権利は無い。

だが、『裏』に携わる生徒会連合加盟校の生徒会長にはその権利があるのである。

「三週間後だ。月曜日に開会、その後の第一試合が最初の出番だ」

「…一発殴っていいですか？」

聖奏学園にチアリーディングを出来る人間がどれだけいるのか。

そして明日から聖奏学園は年度初めの実力テストがある。

それはつまり、実質的に二週間しかないという意味でもある。

そんな突然と言っても過言じゃない猶予で話を持ってきた惣一に対して唯奈は軽く殺意を覚える。

ただでさえ新入生イベントが有ると言うのに、これ以上厄介事を増やすなんて…

「一発殴られて、後輩たちに応援団をつけてやれるならそれでいい」  
だが、そんな事言われてしまったら唯奈としても譲歩をするしかない  
くなってしまふ。

もうとつくの昔に忘れ去られているだろうが、唯奈の根本にあるの  
は『藤谷誠』という少年である。  
つまり、ちよつとばかり『情』とか『浪漫』とかを追い求めたい気  
持ちもわからないでも無い、という事。

「…はあ。判りました。こちらで学校側と折衝してみます。大した  
規模にはならないと思いますが、出来る限りはやってみますよ」

「助かる。」

それから、必要事項というか必要な情報はまとまり次第メールで送  
るとか、そういった取り決めの後に惣一は帰ってゆく。

「…それじゃ、まずは職員室に行く準備をしますかね」

それから唯奈は色々な折衝の為にとりあえず職員室と学長室に提出  
する書類の雛型作りを始めるのだった。

\* \* \*

「… てな訳で、公欠扱いで応援団…主にチアガールを募集する  
事になりました」

それから数日後、学校側に無茶を押し通した（というか、主に男子部の男性教員の後押しを貰った）結果、無事に行事として認められた事が生徒会内に報告されたのだった。

ついでに『生徒会連合』の名義での募集なので他の各校…男子高である睦斗学院を除く全校からの募集だ。

その連絡は既に各校に送られており今はそれぞれの学校で検討中だろう。

「まあ、事情はわかったけど……大丈夫なの？」

楓の疑問は『チアガールとして仕立て上げられるのか？』と『授業を休ませて大丈夫なのか』の二点だった。

「指導に関しては私が頑張つて三日で覚えてくる。で、募集の条件だけど今度のテストで五十番以上の人のみ」

つまり、成績がそれなりに無ければ応援団の一員として公欠で応援に行く事はできないシステムだ。

「ふーん……」

「ついでに言えば生徒会はほぼ強制参加ね。」

一応言っておくと生徒会に居る面々は基本的に成績優秀者である。

唯奈は万年一位だし、楓と遙は普段十位圏ギリギリ、悪くて三十番

代。晶はもう少し下がって五十番前後だ。

それならば問題は殆どない、筈である。

「今の所、出る予定なのは私と楓と遥と誠。三年生を駆りだすのは正直心苦しいから無しの方針」

「ちょっと待て。何故に素で俺がそこに入る」

「まあ、希望者は受け入れるけどね」

「無視かよ」

「まあ、妥当じゃない？」

「そつだね」

「おい」

誠のツッコミというか文句は全員が聞き流していた。

「で、ついでに各学校の吹奏楽・ブラスバンド部にダミーの演奏会の情報を流して、応援用の吹奏楽団も編成してるから。」

『どうせやるなら徹底艇に。』

正に地域の統一である。

「『事を知らぬは出場する選手だけ』って状況になるように各校に

注意は呼び掛けているからけっこういいサプライズになると思うよ」

一般人に魔術だとかの事を隠し続けてきた生徒会連合だ。隠蔽と情報操作に関しては一日の長がある。

おそらくだが、魔術師や精霊使いたちが本気でしたらその存在すら直前まで隠し通せてしまっただろう。

睦斗学院の生徒たちは腕ききの対魔士として成長しつつあるが、装備に支えられている一般人に変わりはないのだ。

「それじゃ、予定の調整とかしとくよ」

「体育館と教室の利用申請もお願い」

「りょーかい」

そして、選手たちの知らぬ場で事は進んでゆく。

\* \* \*

睦斗学院野球部の面々は試合開始を間際に相手チームの応援席を見てだれともなく溜め息をついていた。

何故か、それは相手チームが共学校故に女子の応援もそれなりに居るからである。

対して自分たちは男子高。良くて親兄弟…親類関係の女性しかいない。

それに、応援席にばかりと巨大な空き席の塊もあり、レギュラー以外のメンバーと応援にきてくれる吹奏楽部がぼつんと居るだけに等しい。

これは、応援の段で負けるな。

そう、どこかで諦めに近い物を抱いていた。

女子の応援がなくとも、せめて応戦席は埋まって欲しかった。

と、寂寥感を漂わせながらいざエール交換の段になったときそれは現れた。

応援席に用意されている壇上に駆けあがって来た一団。

その姿に野球部の面々は思わずざわめき立つ。

「あれって…藤澤先輩？」

まさに『応援団の王道』をいくような服装の元生徒会長に率いられた一団がいままで空白だった場所になだれ込んできたのだ。みるみるうちに空き席は埋まり、壇上には詰襟姿の八人が立っている。

「おい、あれ聖奏の生徒会長じゃないのか？」  
ふと、誰かが気がついた。

同地区の学校とはいえ他校には変わりない。

なのに、何故に生徒会長が居る？

「……っていつか、藤澤先輩と一緒にいるのってみんな生徒会長じゃ、」

そういった生徒は執行部にも所属していた為に気付く事が出来た。

生徒会長が勢揃い。

それはつまり、同市内にある学校総ての代表が応援に来ているという意味である。

これは、負けられない。

そんな思いが野球部員の中に芽生えつつあった。

そして、それが熱狂的な『勝つ気』に変わる出来事が一回の裏後攻だった睦斗学院の攻撃の時……

立ち上がった応援団。

そのうちの半分ほどが詰襟を脱ぎ棄てた。

中から出てきたのは、見た目眩しいチアリーダーたち。

いつもなら制服に隠れている筈の腕やら足やらが選手たちにはまぶしく映る。

いつも聴く吹奏楽部の数倍の人数による演奏と、先輩や他校の生徒たち、特に女子の応援を背中に受けて野球部の面々のバットを握る手に力が入る。

「ストライク！バッターアウト！スリーアウト、チェンジ！」

但し、最初は力が入り過ぎて三者凡退になったけど。

\* \* \*

「ふーん」

和葉は興味津々と言わんばかりに楓の話に相づちをうっていた。

「まあ、試合の方は最後の最後で逆転されて負けちゃったんですけど…あ、そつだ。これ」

楓が和葉に差し出したのは一冊の本。

本と言っても出版社による製本が為されたモノではなくどちらかと言えば冊子に近い。

「何？これ」

「ウチの写真部が出した特集本だそうです。同行して応援してる様子を撮影した写真集」

但し、撮影者の好みから大半が女子のチア姿（一部が詰襟応援団姿）

という代物ではあるが。

ぺら、ぺらとめくる和葉。

「そういえばさ、生徒会連合で応援団を共同設置するって話、あったわよね」

「はい。今回の例に倣って、いつでも出せるように」  
顔は冊子にむけられたままの和葉の言葉に楓は答える

「チアの衣装、私が作るから」

顔を挙げた和葉の目は…獲物を見つけた猛禽類のようだった。

この数日後、共同設置された応援団宛に三人ほどの着用例付きの発注書が届く事になる。

着用例に使用された二人の少女と一人の少女(?)はそれを見て

『せっかく黙ってたのに』

『何故にバレたし』

『やっぱりやりやがった』

という、感想を残している。

## 番外編（後書き）

この間、ウチの大学の野球部が全国大会に出たんですよ。

で、学校側から命じられて応援に行つたは良いんですが、対戦相手のほぼすべてがチアリーダーを持ってて、ウチの大学だけ無くて（男：女 $\parallel$ 9：1 応援団・チアなし）『いいよなあ…』なんて声が…

なんで、その思いを代弁し、なつて欲しかった状況をつい書いてしまいました。

ぶつちやけオマケにもならないものですが…まあ、登場キャラたちの応援団姿とかチア姿を想像して燃えでも萌えでも好きに盛り上がってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8581p/>

---

Magius!

2011年11月13日10時52分発行